

(通卷第百十四號)

ニキビ吹出物を根治し
色白く美しくする内服藥



本誌讀者の如き敎育あり新智識に富める若き人々に對し誇大陳腐なる賣藥的口調を以て効能を吹聽するは愚劣の極にして却て讀者の爲に其無智を冷笑せらるゝに至るべし故に吾人は滿腔の赤誠を吐露し事實を事實として報告し以て賢明なる讀者の鑑識に訴へんと欲す元來ニキビ吹き出物又は瘙痒性の皮膚諸病其他皮膚ドス黒く色澤惡き等は概ね體内胃腸の變化より生ずる一種の毒素に原因し之を治療するには必ず内服藥を以て體内より行ふを要す是れ近世皮膚病學上の定論なり吾人は此病理に基き皮膚病内服藥として『ラスター』を慫慂す抑も本劑の主藥は既に内外大家の實驗證明に富み殊に斯界のオーソリチーに依て推奨せられたるに係らず吾人は容易に之を信用せず社會一般に提供するには社會一般の實驗に訴ふるを至當なりと信じ本年一月二十三日先づ報知新聞に於て社會的試驗の計畫を發表したるに熱烈なる讀者の同情を得て實驗員數忽ち三千六百餘名に達したり此大々的盛況に興奮したる吾人は更に大阪毎日、福岡日々、北海タイムス、新愛知、小樽、九州日々、河北、山陽、信濃毎日等有力なる地方新聞に同一計畫を發表し累計一萬餘の患者に實驗し何れも意外の好報告を得て最早本劑が學術的にも亦實際的にも一點疑ふの餘地なき完全無缺の製劑たる事を確信し今般發賣するに至れり

『ラスター』の主治効能はニキビ、吹き出物、赤鼻、瘙痒性皮膚諸病の根治的特効藥にして體内の毒を去り皮膚のドス黒き惡色を去り艶麗ならしむ其他慢性胃腸病の根治藥なり實驗者の報告によれば輕症は一週間普通は十五日乃至一箇月にして必ず全治の効を奏す患者は唯三錢切手十枚封入申込ある時は速に送藥すべし

藥價 四日分金三十錢 半月分金一圓 七日分金五十錢 一月分一圓八十錢

東京帝國大學 醫科大學專攻 藥學得業士 **金澤巖**

東京市下谷區上根岸町百十一番地

電話下谷二貳五九。 振替東京四六七

お待ち兼の第一巻第二號　五月一日發行

淑女畫報

四六倍判口繪光澤紙寫眞版四十頁石版三色版數頁本文百頁

正價廿五錢　郵税二錢

六册壹圓五十錢　十二册二圓六拾錢　税外要

◀畫報▶

■二八姿（原色版）諸岡清園女史畫――◉長春花◉姫百合◉大弦小弦◉排牡丹◉五月晴

◉北白川宮房子内親王殿下……◉伯爵大木遠吉氏の家庭……◉阿部子爵令孃……◉德川伯爵令孃……◉品川子爵令孃……◉佐々木侯爵令孃……◉新婚の肝付男爵令孃

■雨細かにして燕脂流る（彩色石版）北野恒富畫

■國粹の花 謠曲蟬丸と羽衣

◎英國大使館の假裝會◎阪正臣氏の歌會◎天の岩戸の曙光…

◎竹柏會大會◎小笠原伯夫人の海外出發◎女子大學卒業式…

◎棚橋刀自の叙勳祝賀會◎女子職業學校台覽の造花…

◎貯金局競技會◎女子美術學校展覽會◎樣々の女の職業…

■淑女かゞみ　いづれも名聲ある家庭の研鑽にして品位ある夫人令孃の最近の撮影にかゝるもの數十葉玉の如く花の如く眞に美し

◀讀物▶

▽小説形見の梅　半井桃水

▽俠巷雜話　尾崎恒子

▽新時代の婦人の貞操　伯爵　大木遠吉

■智慧物語……深見草　■京都婦人氣質……川村文芽

■四季袋……野の花　■惜春譜……菫すみれ　■茶毘の花……[illegible]炎

▽浮世眼鏡（世間の裏 人情の表）

▽下層社會の婦人　磯村[illegible]

▽仙臺侯へ送りし遊君高尾の手紙　桑田春風

■現代婦人評論――山脇房子女史と嘉悦孝子女史　■軍港繁昌記……くれ竹

■新緑にふさはしき衣裳流行子　■料理の出來よう佐野由子　■話の種

▽衣裳の着こなし　佐々木羽雪

▽昔のお産と今のお産　西尾京子

▽實録――三十年前の娘の秘録……

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　振替貯金口座東京二四〇番　博文館

女子文壇五月號 （第八年第五號） 目次

●自由過ぎる女學生の行ひ……菊池幽芳
●桂公爵夫人の平生……男爵夫人 福原鶴子
●くま大……阪東太郎
●牡丹……水野葉舟
●原町の家……文學士 澤村胡夷
●謙倉よ……磯萍水
●西鶴の作に表はれたる女性……外島浪之介
●實競外題見立相撲……番附
●春や昔……夢殿守
●はつ夏……竹久夢二
●破談……佐藤ますゑ子
●眺望……江森美子
●曉の第一歩……長曾我部菊子

◉女優の情操……森律子
●人間の體内に生きてゐる蟲……澤田順次郎
◉耳袋（五）……猿丸太夫
◉巡禮のうた……はやぶさ
◉戀すれば……原田琴子
◉くらがりに……三ヶ島葭子
◉化粧問答……藤波芙容
◉誌友欄……

口繪

▲原色版（萬疊の波）……西洋名畫
▲寫眞版（北白川宮拡子女王殿下△名妹　故西郷侯爵未亡人、村公爵夫人△見たけ（小澤男爵令嬢）△村鵑（近藤法學士夫人、三井物産本大友支店長江藤氏夫人△下谷ツネ子夫人内員△留別會紀念撮影（長崎驛問官夫人、小笠原伯爵夫人其他）△撫やなぎ（山本、吉田、渡邊、武澤四令孃）△新婚の面影　山口氏と新夫人、高信氏と新夫人、沖山氏と新夫人）

萬疊の波



以下九種の書は百年後でも三重縣桑名矢田磧弘報舘で販賣す

萬物 製法秘術寶典

代價郵税共廿二錢 郵便切手又は振替貯金なれば廿四錢

目錄 輕便電氣燈●輕便時計●輕便電話機●煙火●燭龍玉●齒磨●石鹸●洗粉●白粉●香水●紙石盤●のみ取粉●萬年草紙●メツキ法●朱肉●空氣銃●萬年手帳●墨●朱墨●蠅取藥●無刀彫刻術●酢●豆腐●甘露水●果實酒●屠蘇酒●燐寸●稻荷鮨●煎餅●鑵詰●ラムネ●リモナーデ●ジンジヤエール●蜜柑水●甘酒●味噌●醤油●水彩繪具等の製法其外大發明 器械いらず早取寫眞術 器械不用早印刷法等百餘種記載してあるが皆あり合せの道具で出來る樣にしてある、殊に早取寫眞術は名の如し器械を用ひず僅かの藥品を以て器械にて寫せし者と少しも異ならぬやうに人物風景其他如何なる者にても大小の差別なく何枚にても、鮮明に寫し得る愉快なる寫眞法である、藥品の無き地方は弊店より送る、又器械にて寫せし通りに寫らぬは何時にても返金す、又早印刷法は道具を使はず繪でも文字でも大小の論なく即座に數百枚印刷する事が出來るから名刺ハガキ書籍廣告其他如何なる者にても安價で奇麗に印刷する事が出來る、一つ覺えても優に五十錢以上の價値がある。

奇々妙々 手品種あかし

郵税共廿二錢郵券代用又は振替は廿四錢

本書を讀んで酒席又は多人數集會の折り手品をして見せたならば拍手大喝采疑ひなし、目錄 鬼火の妖術●口中より火焔を吐く術●不思議な水の魔術●月世界の術●針を呑む法●皿廻しの術●かるた逆立術●銀貨をふやす術●水上に文字を書く術●三尺の棒を丸呑みにする法●豆腐の上にて烟草を廻す術●盃に水を入れる術●火を喰ふ大奇術●熱湯中に手を入れる術●空の帽子より色々物品を出す法●水上に木製船を自由に動かす術●黒いんきを金魚にする法●紙製の蝶を自然に飛ばす術●黒水を清水にする法●水を燃す法●清水を牛乳にする法●銅貨を水に溶す術●ステッキを帽子の中に隠す術●水中又は机上にて鶏卵を踊らせる法 附錄 驚神的大魔術 其他面白き手品が澤山記載してあるが皆子供にも出來るやうにしてある。

學理應用 世界奇術大全

一週間に思ふ儘に白色となる法●人間百歳迄生きる法●人の生死を前知する法●必ず子を姙む法●必ず子供の出來ぬ法●胎内の兒の男女を知る法●他人の年齢を當る法●顔を櫻色にする法●日に燒けぬ法●髪の毛を多くする法●毛を生す法●書き損ひの字を拔く法●物覺悪き人を忘れさせぬ法●習字速成法●催眠術●歌がるた只々に必ずまけぬ法●百日百夜眠らずとも氣の衰へぬ法●老人でも白髪とならぬ法●其外斯の如き奇法を百餘種集めたる書物は廿三錢(郵券代用は廿五錢)

破天荒の快書 破格の大安賣 最新大奇術

郵税共二十三錢郵便切手は二十五錢

目次 天に文字を顯す術●白晝を闇黒にする術●夢に天國に遊ぶ術●百鬼夜行術●風を吹す術●吹き居る風を止る術●妖光幻術●水の流を止める術●天空に怪人の姿を顯す術●人を空中に眠す術●十字架殺人術●忍術●仙術●切支丹バテレンの妖術●モルモット術●金錢自由取集の妖術●縄拔の妖術●火渡の奇術●武道竹折術 隱身術 人の力を取り我身を重くし上げられぬ術●七八歳の小兒を重くして上げられぬ術●三人を掌につけ押しても取れぬ術●片手にて數人の力を防ぐ法●讀心術●三人にて持つ子を指二本にて取る術●不動金縛の妖術●二本の指にて大人を自由に揚ける奇術●敵人にて一人を倒せぬ術其他奇術妖術山の如し實行し得る術書なれば早く求めて朋人を驚かすも亦愉快ならん、奇術師天一も跣足で逃げ出す術ばかり。(ウラより見よ)

禮法 及 婚姻法

日本の禮法は最大漏らさず婚姻部には婚禮●見合●結納の受渡●婚姻の前支度●嫁の荷物を送る事●三三九度盃の仕方●嫁と舅姑と親子盃の仕方●寢室に入る時の心得●フトンの敷方●其他婚姻に關する事柄は最大漏らさず附錄には婚姻出產死亡屆其他澤山。郵税共廿三錢

男女 無上の快樂

本書の内容は風紀に付掲載する事は出來ないから本書を讀んで初めて愉快なる事が出來る者と思へばよい。(一般人に見えぬやう密封にて送ります)定價郵税共二十四錢

一讀千笑 滑稽頓智笑話

面白くてアゴのはづれぬ用心して讀み給へ本書を讀んで居れば退屈する時がない郵税共廿二錢

道具不要 輕便 食パン和洋菓子製造書

有り合せの道具で素より費用少くて美味で一度に廿日分も拵へて置ける食パンや洋菓子が手輕に製造出來る樣にしてある書物は郵税共廿四錢

簡易 素人治療法

●感冒●胃病●痔●淋病●子宮病●眼病●夜小便●男女陰部諸病●頭痛●凍傷●肺病●ニキビ●ワキガ●サメハダ●耳ダレ●齒痛等の療法●毛を生す法●白髪を黒くする法●其他萬病を高價な醫藥でなく手輕に治療し得る書は廿二錢郵券代用は廿四錢

◎振替 東京一六九二八番 大阪一四五一七番 三重縣桑名矢田磧 弘報館

◎割引上段下段ヨリドリ五冊一圓、十冊一圓七十錢、郵券代用一割增

特製最上コロタイプ版

皇族畫報

婦人畫報編輯局編　齋藤松洲畫伯装幀

四六倍判總クーロス金文字綠金函入

定價壹金圓八拾錢

五千部限

特價　金壹圓四拾錢

送料　市内四錢　内地十二錢　清韓臺樺十六錢

弊社曩に婦人畫報増刊として皇族畫報を發行するや江湖の大歓迎を受け版を重ぬる十八度に及びぬ而も本年は畏くも天皇陛下御還暦に當らせ給ふを以て弊社はそを深く記念し奉つらんがために各皇族家に御眞影御貸下げを請ひ奉つり謹で本書を刊行し忠良なる國民に提供し與に以て聖壽の無疆を祈り奉らんとす日本臣民たる者は須らく一部を藏し、日夕貴き御面影を拜しまつると共に永く子孫のために此未曾有の御盛事を傳へざる可からず。本書收むる所は兩陛下を初め奉り各殿下御七十方の御眞影を五十二頁の最上畫紙に印刷したれば眞の御寫眞と毫もかはる事なく、記事亦御日常の御模様を謹記したれば御眞影と相俟て御盛德の一端を窺ひ奉るを得べし

●國民教育の寶典●●●出版界空前の偉觀●

麹町區飯田町四丁目四番地　**東京社**　電話番町二三三九　振替東京一八一八

各地の　在書店

北白川宮擴子女王殿下



（最近御撮影）

名珠



故侯爵西郷従道氏未亡人清子



公爵桂太郎氏夫人かな子

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

夏かけ

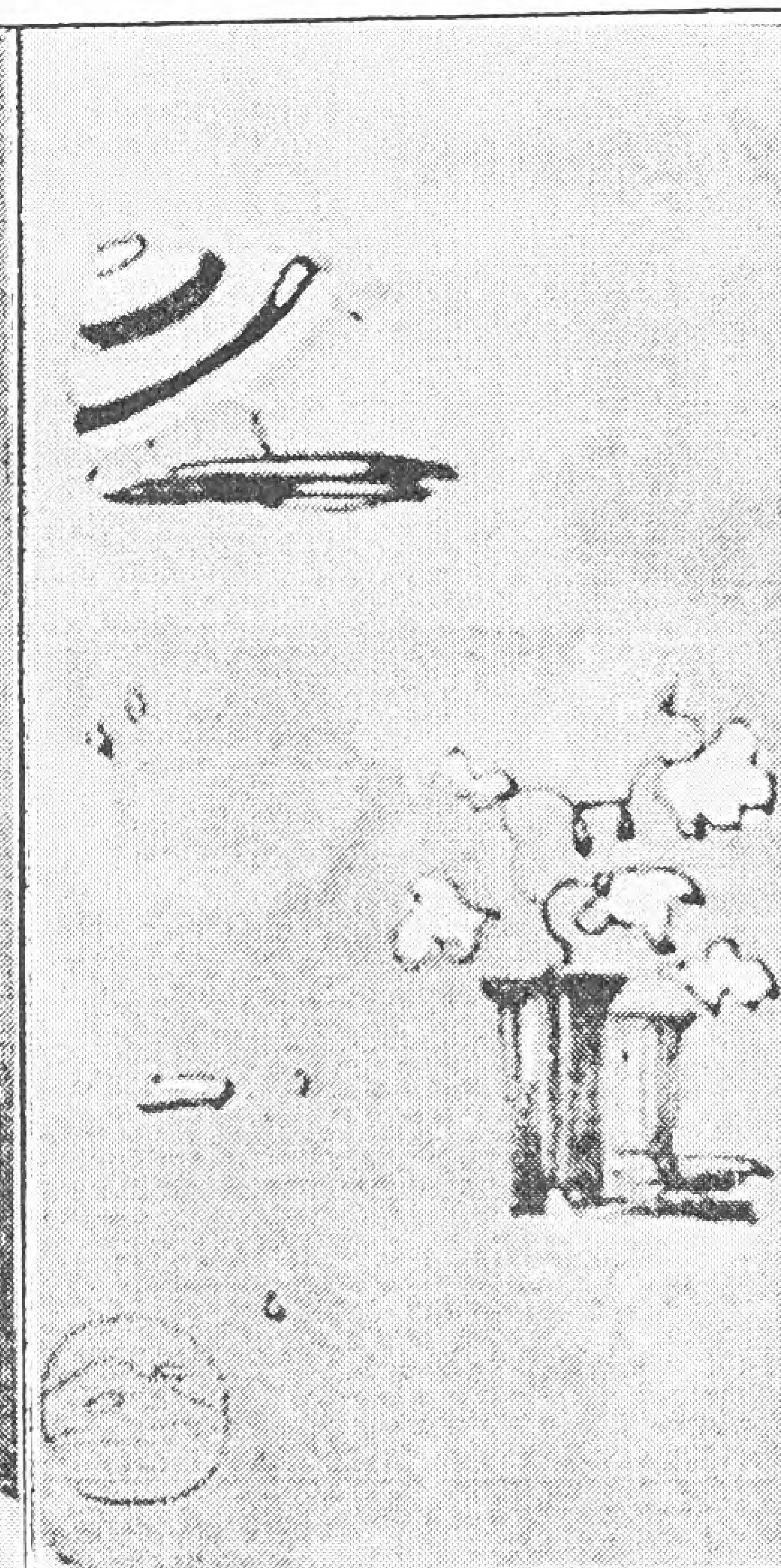


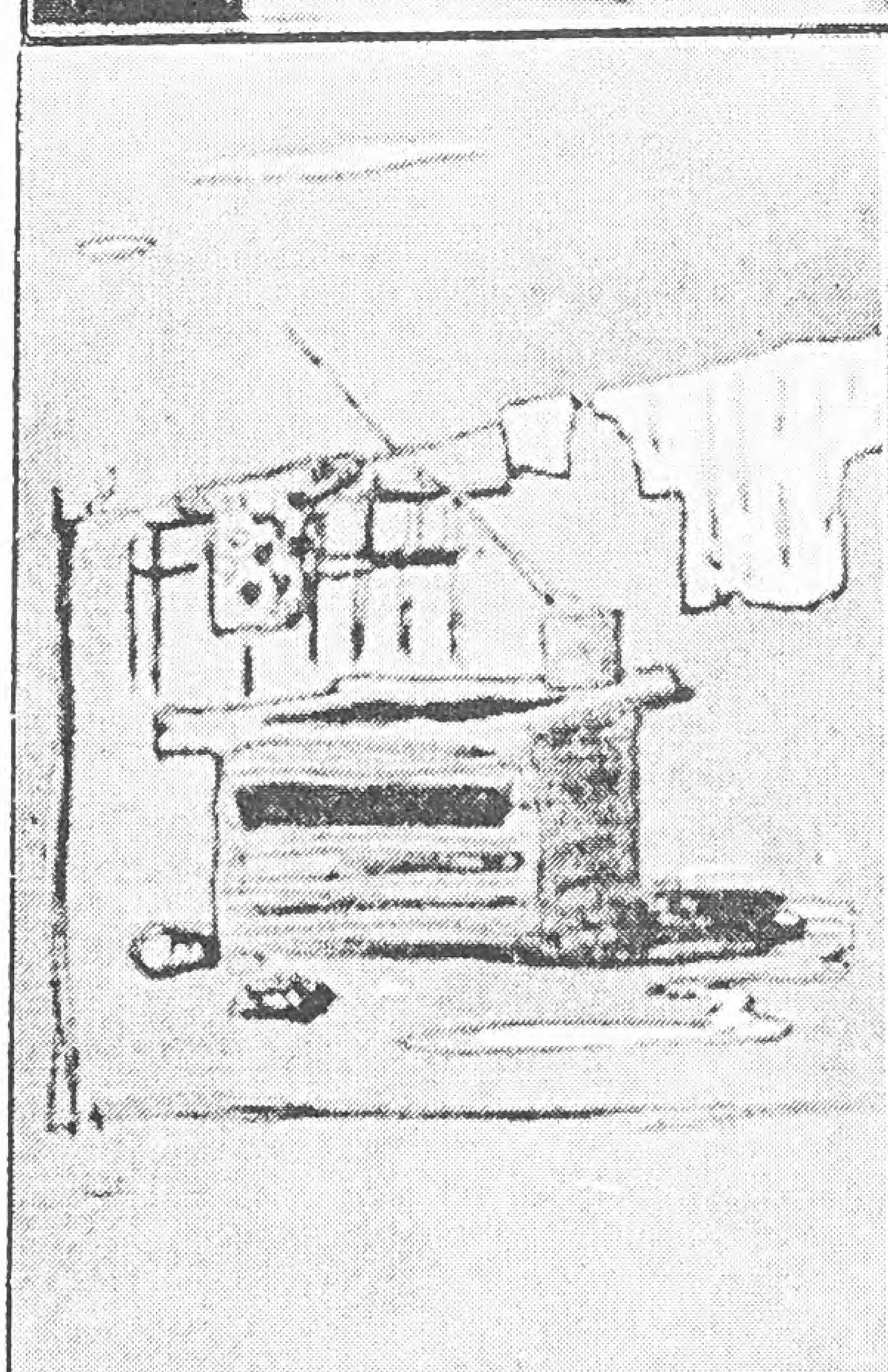
男爵小澤武雄氏令孃綾子　學習院卒業

杜鵑



法學士近藤繁氏夫人和子







奉天三井物産會社支店長江藤豊二氏夫人豊子

入院
往診
隨時
應需

○日本橋病院

日本橋區青物町
電話本局四四八

内科。小兒科。外科。耳鼻咽喉科。
皮膚病。黴毒。泌尿。生殖器病科。
各科專門の博士、學士擔任診療す

院長　醫學士　岡本武次

第十四回新學期 開講

目的　本會は家事忙がしくして學校に入る事の出來ない人や邊僻な地方に在つて專門家の敎に接する事の出來ない人々の爲めに自宅獨習で產婆學及看護學を學ばしめ一人前の產婆及看護婦を養成するを目的とす

產婆 看護 會員募集

產婆科六ヶ月卒業
看護科四ヶ月

規則要郵券三錢

東京市四谷區內藤町ホノ七

東京 產婆 看護 講習會

ぢ

●イボ痔　●脫肛痔　●裂痔　●痒痔
●痔核　●痔出血　●痔瘻　●痔一切

にて御困難の方は二錢郵券を添へ御照會あらば病原埋出全癒說明書を送附す

●東京市京橋區疊町

小松盛林堂



本法は
女髮結師安部歌子女史
の多年實地研究したる秘法にて是迄の使用者を悉く滿足せしめたる一大奇法なり照會者は往復はがきにて申込あれ

東京麴町區三番町六十七

小林濟世園

下野ヴイナス會員



（毛塚葉泉子）



（林玉露子）



（望月マートル子）（小玉紅露子）（石川翠閣子）
（エドワード、ベルナード）



（大和作子）



（津久井梅溪子）

留別會紀念撮影

わが篤志看護婦人會を代表して米國ワシントンに開かるゝ萬國赤十字大會へ出席さるゝ長崎宮中顧問官夫人多惠子、小笠原伯爵夫人貞子の兩令夫人の爲に去月麹町富士見軒に開きし留別會の紀念撮影なり



前列右より二人目小笠原夫人、その次は長崎夫人、次いで赤十字社副社長小澤男爵

第二卷第五號

青鞜

五月一日發行

（定價貳拾五錢）

◀ 内容 ▶

習作戯曲の二…………岡田八千代
桃色の灯……歌…………三ヶ島葭
赤い扉の家より…………尾竹紅谷
肖像畫……詩…………ポオ
習作の二……小説…………杉本正生
題未定……劇曲…………上田君
あきらめし戀……歌…………原田琴
ねむり……小説…………三島きぬ
叔父ワーンヤ……劇曲…………瀬沼夏葉
日記…………岩野清
…………田澤みさを
円窓より……四月の評論…………らいてう

發行所 青鞜社 振替東京一一三七六 電話下谷〇六六
發賣所 東京堂 電話本局{二三四八

横瀬夜雨先生新著



全一冊中判三百卅頁
舶來ラフ紙印刷鮮明
色クロス金縁頗雅裝
定價八拾錢送料六錢

諸新聞

▼報知新聞評

著者は月波根詩人として知られ詩壇唯一の眞摯なる研究者として十年一日の如く常陸大寶湖畔より自然の竪を窺らせる第一人者なり、痛ましき病軀を撫して興到れば筆を採り詩によつて活き文によつて慰むもの總てこれ名利の他にあり即ち著者が多くの知己を有する所以たらずんばあらず、本篇收むる處の散文十九篇は一面著者の人生觀を語るものにして哀艷の詩を讀むが如く又常陸平野の大自然を叙しては鄙歌淋しき田園の旦暮を詳かにせり、徒らに動搖し易き文壇の一劃に著者を得たるは大に歎ぶべく茲に純化せられたる自然の啓示をこの一本に盡せるは更に〳〵愛すべき也

▼國民新聞評

夜雨は天成の詩人也自己を飽までも其煩惱の出發點とする處は夜雨の先天的境遇已むを得ざるに出づる處夫だけ狭けれど深し陰鬱にて且つ沈痛也殊に此集には徹に對する執著の影に人間としての詩人の現世に對する苦悶を描いて多恨胸を挨つて痛恨せしむ文藻の豐麗と相俟つて彼の詩に醉ふものに無限の感銘を與ふ新調と否とは早や問題に非らず。

評判記

▼大阪毎日新聞評

筑波山下の病詩人夜雨が清寂なる境界に居つて筑波根の自然を歌ひ其感想をありの儘に發露せる新詩と文と十九篇を集めて一冊としたものである「いつとせの日記」「蛙より蟲まで」「秋啼く野より」の三篇は著者の詩才の凡ならざるを窺ふに足るべき名篇で就中最も吾人の感興を惹いた清新の味に富む好著

▼萬朝報評

著者は今筑波山麓に不斷の坐禪にあらざるべからざる薄倖の青年詩人にして坐禪の夢と想との凝つて成れるもの即ち此集なり詩、小品、紀行、日記、隨筆、手紙等集むる所凡て十九篇．新しいロマンチツクな幻影は獨特の筆致と相集つて自ら一種の色彩をなし紀行日記最も見るべし裝釘又瀟洒なり。

出版元 東京市京橋區大鋸町十一番地 **女子文壇社** （振替口座東京壹七貳九） 全國書店取次販賣

令孃の方の座右の玉手筥

三輪田眞佐子先生序文
下田次郎先生序文
巖谷小波先生
沼田笠峰先生共編

最新日本少女寶典

三六版總布上製
頗優美裝全一冊
總紙數約七百頁
定價壹圓五拾錢

内容見本並に圖書目錄進呈

口繪　極彩色石版畫四葉、寫眞版等數葉
挿畫　木版刷刻密畫、寫眞版等數百個挿入
裝釘　總クロース金文字入、頗優美上製箱入

▲五千部限り●製本既成即時送本●
▲▲特價金壹圓貳拾錢　郵税金拾貳錢

巖谷小波先生作　少女對話選　美裝全一冊　定價金八拾錢　郵税金八錢

沼田笠峰先生著　少女家庭物語　美裝全一冊　定價金五拾錢　郵税金六錢

沼田笠峰先生著　少女十二物語　美裝全一冊　定價金五拾錢　郵税金六錢

西川芳溪先生作　少年少女お伽花たば　美裝全一冊　定價金四拾錢　郵税金六錢

小野小峽先生著　お伽物語少女フラワー　美裝全一冊　定價金三拾五錢　郵税金四錢

溝口白羊先生編　少女模範文集　美裝全一冊　定價金三拾五錢　郵税金六錢

發兌元　東京市神田區南乘物町　振替口座東京六九九番　誠文館

關西發賣元　大阪市東區備後町四丁目　神戸市元町通五丁目　振替大阪四三　振替大阪九五三　吉岡寶文館

葉やなぎ


山本米子孃


吉田ゆき子孃


渡邊やす子孃


武次初子孃

新婚の面影

山口正造氏と夫人孝子





冲山氏と夫人さく子



高信孝次氏と夫人吟子

THE GIRL'S GRAPHIC.

少女畫報

第一年第五號　定價十五錢　郵稅一錢五厘　六冊稅共九十錢　十二冊一圓七十五錢

編輯顧問

高島平三郎　倉橋惣三　兩先生

讀物

■あぶない〳〵……高島平三郎
■三輪田 倉橋 兩先生の少女時代……
■小說 達战さん……長谷川時雨
■女學生お化粧法……宮田修
■小說 露子の夢……生田葵
■柏餅と摘草料理……手塚かね子
■同情すべき秀子さん……谷江風
■少女小說 養女……尾島菊子
■小說 雪枝さん……佐々木邦
■探偵小說 二人少女……松山泰一
■校長先生と記者との問答……
■小說 長い顔の花嫁……黒田湖山

□新ばなし……夢二
□紫式部と國依姫……
□面白い狂歌のお話……
□藤花と鯉の自慢競……
□お伽唱歌……春風
□多美子さんの便り……
□新案瓜袋の作り方……
□少女ノートブック……
□郊外散歩は如何？……
□ポンチ繪ばなし……
□一口噺……
□繪手本……跡見玉枝
□字手本……多田令子
□文學遊戲……
□頓智問答……
□繪探しと判じ繪……
□懸賞 和歌 作文 其他いろ〳〵

畫報

▼口繪 新綠　平福百穗
五月の朝　竹久夢二

▼つみ草　▼白き傘　▼遠足　▼花あやめ　▼鏡
▼行春のある夕　▼合のり　▼汐干　▼その花頂戴！
▼修業式と卒業式　▼動物園　▼飯事　▼上った〳〵
▼上から見れば　▼理髮室　▼門前　▼面白い懸賞寫眞

三十有餘の美しい寫眞は悉く少女の活動ぶりを載せてあります

東京麹町區飯田町四丁目四番地　東京社　電話番町二三三九　振替貯金口座東京一一八一八

ちゞれくせ毛

根治法



本院は世上毛髪に就て完全なる療法なきをなげき天眞堂先生が幾多の研究により て始めて完成したる根治的療法に短時日に全治の實を擧ぐ試用望みの方に右療法を授く切手二錢要す

東京市牛込區赤城神社横

好生藥院

●肥滿病者の福音

やせる新藥

●多血症●脂肪過多●便秘●中氣●酒ぶとり●凡てふとりすぎた人やせて中肉美容となる新藥あり郵券三錢封入御申越あれ自宅療法説明書進呈す

東京市牛込區赤城元町三十三

池田製藥部

●有効保險 前代未發 秘傳奇術

全壹冊正價郵税共金四拾五錢▲郵券代用は四拾五錢封送の事

(目録大要)神經衰弱の新療法●淋疾を必治する新法●痔○の爛れを治する法●脚氣を必治する法●脚氣ノ必治法●人造麝香の製法●上等香水製する法●香水製法●美顔クリーム製造法●音聲を清良にする法●歯痛即治●製法●毛の脱落するを止むる法●化粧石鹸製法●西洋白粉製法●歯磨毛髪メッキ法●臭汗治法●白髪を染る法●毛髪の光澤を美にする新法●歯磨粉製法●西洋梳油製造新法●にきび即治法●はくろを落す法●ビットル酒製法●夏日室内を爽涼にする法●綿紗類を汚せるインキ斑を除く法●百白瓜を一年新鮮に貯ふ法●蚤を驅除する良法●氷を即時製造する法●船中よ年長壽の奇法●生涯病に罹らざる奇法●人の生死を豫知する法●入る者り海の底を見る法●禿頭病百日限必治法●醜婦を美人にする法●男女の心中を知る法●白なる者に答へしむる法●五十の婦を二八の娘に見する法●脚氣の神病必治法●妖怪を見る法まず即治法●人體不死の奇法●千里一足飛行の神術●人を惑はす法●醜顔化を見顯はす神術●女に○れる氣を硬き毛髪を柔長大にする法●女を見はかす神藥法●女の○○法●○○法●毛陰毛を長大にする法●ふ○かす必治法●女を○○○にて泣す神藥●一中陰人と評る秘術●見染めしを女に手に入れる神術●持人に男精を増す法●房中の秘術●盗人をたる時す藥●避食の秘術●神速に精力を強む法●即座に陰身の術●人を眠らす秘法即ち避眠術●顔赤く吹出物生ずるを治す法●淫房を治す法●多秘法を抑制する秘法●顔色を恐る女に情を○せしむる法●房記の聽力を増進する情法●女孕みの術●仙人の婦女を知る法●淫婦の秘術を治す法●妙法の暗記の○光法の奇術●老人の奇術●有識を見破る法●色を白くする秘術●字を見る法新法●丹の男女の取り奇病を治す法●黴色を白く殿の秘密内服夜間送る法●實を服す療法●黄疸治療の法●生き方を直す術●路の暗道へじたる法●服す法を治す●月經不順を治す法●生きたるを直す法●の自由に動かす痛を治す法●新の肌を白くする法●まの法味をる新法●頭部を治す法●毛生の法●最新婦人の隱部を●惱を去る法●治の新法●下を長く治する法●男の病の新法●百日咳の必治法●新法の便を必最新藥●中風を防ぐ法●奇法●男の病の新法●百日咳の必治する妙法●法●は治の必て落す法●火傷を即治の秘法●淋病の妙法●衣服に酒のしみたる●新法●は必ず●白し頭を治する法●耳だれを治す法●再び明けぬ法●小便を治する秘法●頭痛を治する法●陰部の諸病を治する法●虎列拉病を取る法●あざを拔く新法●乳の出る妙藥●思ふ時目を覺ます法●年齢により房事の度數●病氣易法●知の奇術●防の男女奇法●眼の色を白くし且つ醜美ならしむる法●秘法●一時に數拾匹の蟲を捕獲する秘法●夏鯛子洗濯新法●富を造るの汚染落す法●新しき鍋釜の臭氣を止むる法●簡易美顔術新法●衣服に油の付たるを落す良法▲以下數拾法略す(合計壹百四十法あり)至急即刻送本す

専賣元 東京神田區五軒町拾九番地

日新館商店

女子文壇化粧問答顧問
藤波芙蓉先生
實驗發明

コールドクリーム

コールドクリームの美顔料として最も有効なことは、世人の夙に認めて居る所、現に女子文壇の化粧問答欄に於いても、藤波芙蓉先生も屢々これが有効なることと且つ其調製方並に原料までも御紹介になつて居らるゝ程の化粧料ですけれど、歐洲に於いて賞がれて居るコールドクリームは至つて高價なために、日本にはまだ輸入發賣されて居りません、偶々同名のものがあつても、似つかぬ粗製の贋造品で、そんなものを用ゐても何の益にもなりません。從來藤波先生は皆樣方の中の御希望者の御依頼によつて調製して差上げて居られたのでしたが僅かづゝ何度にも原料を買ふと自然高價になり、矢張一度に澤山調製した方が雙方の便宜ですから、これも本社に於いて同好の皆樣方に御わけすることにしたのです。コールドクリームの効用は既に御承知のことゝ存じますが、第一はこれをお化粧なさる上によく御顏なり御手なりに擂込み紙か軟かい絹で拭き取りますと、アブラ性の方は、アブラの出るのを防ぎアレ性の人はアレを直し、皮膚を艶麗ならしめ光澤を出し、おしろいを翌日までも剝げずに落付かせ殊にシワを延ばし、色を白くさせる力を持つて居ります。

但し「コールドクリーム」は美顏劑で、世のクリーム類の如くお化粧下の用には立ちませんお化粧下用としては「艶肌劑」が適當で「艶肌劑」と「コールドクリーム」とは艶肌美顏の姉妹劑です。

定價
五十瓦入 金壹圓
送費 市内四錢 地方八錢 沖繩臺灣三十錢

女子文壇化粧問答顧問
藤波芙蓉先生
實驗發明

艶肌劑（つやはだざい）

文明とは時間を儉約することです。「何か一品で、顏のシミやオデキの痕を取り、キメを細かにし、皮膚のツヤを綺麗にし、化粧下にもオシロイの下にもなり、而してオシロイのノリをよくし、お化粧を落付かせる、有効にして簡便な化粧料を考へて下さい」との某侯爵夫人よりの御依頼で藤波芙蓉先生が永らくの苦心と實驗とを費して、見事に御創出されたのが此艶肌劑であります、右の某侯爵夫人の御望みは夫人御一人の御望みでなくあらゆる文明婦人の等しく御希望なさる所と存じ本社は特に先生に請うて、皆樣方に水劑を御わけして差上げることにしたのです。

定價
五十瓦入 金六拾錢
送費 市内四錢 地方八錢 沖繩臺灣三十錢

專賣元 東京京橋區大鋸町十二番地 振替東京第壹七貳九番（電話京橋六〇七番） 女子文壇社代理部

東京京橋區大鋸町十一　女子文壇社發行　（振替口座）東京壹七貳九

◉時世の進歩は、凡ての事物をいつ迄も靜止させては置きません。少女雜誌も最早子供らしい赤い着物を着る事ばかりを唯一の誇とする時代ではなくなりました。『少女』は虚飾のない、內容の充實した、新しい時代の代表的少女雜誌です。

少女

面白い五月號

毎月一日發刊
口繪原色名畫
及び寫眞數葉
挿畫澤山美装

定價
一冊金十錢
郵税壹錢
半年六拾參錢

◉今の高等小學以上の女學生で『少女』を見ない人は少いさうです。『少女』は作文練習の爲になる上に、女らしい美しい感情を養はしめる高尚な雜誌です。尚幼い人達の爲には初等部の設があつて、毎號懸賞で文章や詩歌の外、面白い新案の考へ物の題を出して、當選者に美しい賞品を呈してゐます。

女子文壇



第八年第五號

（明治四十五年五月一日發行）

第八年第五號

自由過ぎる女學生の行ひ

菊池幽芳

◎葉舟氏の『羊』を讀みて

私はこの月の新小說を讀んで、水野葉舟氏の『羊』に目を通した。それは素より一篇の小說で事實ではないから、これを基礎にして彼是云ふことは間違つてゐるかも知れぬが、併しこの小說に書かれた事は、今日の男女學生間、また家庭の間には普通に有得る、また見得る現象であるから、それを一寸問題にして見たいと思ふ。併し私は『羊』を批評するのでは素より無い。また特に『羊』が私の問題に適すると思つて擇んだ譯でもない。丁度『女子文壇』に何か書く約束があつて、筆を取らうとしてゐるところへ、この小說を讀んだので引合に捕へたまでゝある。

この小說に描かれた事實は、今日の男女學生間また家庭の間によく見るまたよく不問に附せられてある事柄である。併し私はそれを讀んで、男女學生間の驚くべき自由を社會が少しも怪まずに居る事、多くの家庭が子女の取締に關して何の定見もなく、餘りに子女を放縱ならしむる事を奇怪に感ぜずには居られない。これは私共の如き子女を持つて居るものゝ身に取つては、輕々視することの出來ぬ重大の問題であるから、愼重に考へて見たいのである。

◎意外な事實

いづれ深く論じて見る機會は別にあらうと思ふが、大體に於ては西洋を生噛りにした思想が累をなしたのと、新時代の男女は舊道德の羈絆に甘んじないといふやうな叫びが、今日の如き放縱な有樣を馴致したのであらうと思ふ。私が此雜誌の讀者諸孃にお話をしたいのは、歐羅巴のどこの國にも日本のやうに子女に自由を與へて置くところはないと云ふ事である。これは諸孃が或は意外の感を起されるところであるかも知れぬが、事實は全くその通りである。或一定の時期迄は娘に對し、思想の自由、行動の自由を束縛する事は皆先濟國の認めて少しも怪しまぬところである。皮相の知識ほど世の中を誤るものは無いが、假へば人權思想の非常に發達した英國、親が子を撲るといふ事さへも人道上の大問題視される英國で、小學教師が兒童を鞭つ事が默認されてあるといへば、人は如何に驚くだらう。それは思想の充分に發育せぬものに對しては、成人同樣に取扱ふことが出來ぬからである。かういふ點は教育家幷に父兄が充分に念頭に置いて、子女の取扱ひ上大いに手加減を要すべき點であらねばならぬと思ふ。時代の矛盾と云ふこともあらうが、此間に處してゆく今の親達の考は、甚だ無標準なものである。



◎佛國の娘に自由はない

私は一々『羊』の中の事實は擧げぬが、お末といふ女學生は、自由に手紙も受取れば、自由に人の家も尋ねて居る、それを家庭が許して居る。また友の女學生の行動もその通りである。男學生の手紙も受取れば、男學生の訪問さへ家庭は認めて居る。若し日本の若い娘はかういふ自由を受て居るといふ事を、歐羅巴に發表すれば、歐羅巴人はどれほど不思議がる事であらうかと思ふ。現に私は日本の女學生や若い娘が、單獨で出歩くといふ話を佛蘭西でして度々驚かれたことがある

私は佛蘭西に二年餘り居る間に、若い娘がどういふ空氣を吸つて育つて居るか、また家庭が娘をどう取扱つてゐるか、さういふ點をいろ〱調べもし、また娘を持てる中流佛人の家庭に同棲もして、多少の知識を得て來たが、若い女などの天國でもあるかのやうに思はれる巴里の娘や、家庭から通ふ高等女學校程度の女學生は、殆ど社會と家庭から絶對の束縛を受けて居る婦人の解放といふやうな事も(もう時勢後れであるが)議論せられぬではないが、さういふ議論に若い娘や右いふ如き女學生は決して與つて居ない。また若い娘に對して、絶對の束縛を解けといふやうな事はあまり議論されない、乃ち娘に絶對の束縛を與へて、誰も怪しとはしないのである。私等には寧ろかくまでの束縛を與ふるの無意味を感ずる位であるが、實際は然うで、一例をいふと若い娘は決して單獨の外出は許されない。讀書の自由を有しない。兩親(重に母親)が一々その書籍を檢閱する。若い男に手紙を出す如き事は、絶對に禁止されてある。また手紙を自由に受取る事は出來ぬ。母親は娘への如何なる手紙も披見する權利を持つて居る。また娘の手函や机などは、母親が勝手に捜索することが出來る。

◎規律ある男女交際

日本では若い男女自由交際といふやうな事は、西洋を本場と心得てゐるやうであるが、佛蘭西の例を云へ

ば、若い男女の自由交際などといふ事は、これまた絶對に行はれない。若い娘は母親若くは監督者の立合が無ければ、決して若い男と會見する事が出來ない。若し單獨で若い男と逢ふ事が知れゝば、その娘の社會的地位は失はれる。よく巴里には日本ならカルタ會といふやうな娛樂的會合があつて、人を呼んだり呼ばれたりし、その席で若い男女の知り合ふ機會が作られるがかういふ席に若い娘が監督者の附添なしに一人で來たら、それこそ忽ち惡評の種になつて、眞面目な結婚は出來なくなるほど、社會はそれに制裁を與へる。所謂男女交際なるものは、只監督者の面前でのみ行はれるのである。



娘を持つてゐる兩親は、娘の結婚の機會を作るために、屢々此種の會合、(重に舞踏若くはモノローグ、音樂、遊戲の類を)催ほすので、私も度々そんな會合に招かれて行つたが、若い娘には必ず母親か伯母さんがついて來て居る。かういふ會合で知己になつた男女で雙方に意があると見た時、若くはこれなら娘の婿に適當だと思ふ男を見立てた時兩親は初めて口實を設けてその男を茶に招き晩餐に招き、娘と握手させる機會を作るので、これ以外に男女交際の機會は全く無い。で、佛蘭西では男女交際とい

ふやうな事は、寧ろ日本の男女より、その機會が少ないくらゐである。

◎若き女の一人歩きは出來ぬ

ところが西洋の女に比較すると、意志も弱し、プライドも少く、罪惡の淵に誘はれ易い日本の少女を取扱つて居る家庭が、一向無定見で子女を打ちやりばなしにして置く事は、寧ろ驚くべき事と云はねばならぬ。假へば『羊』によると、お末といふ娘は自由に男の手紙を受取り、母親がそれを見ても少しも咎めない。また若い男學生を友に持つ事を許して居る。また友の許に招かれて、「茶」に行つた時には、そこに七八人の男女學生が自由に會合して居て、佛蘭西語の先生のマリーといふ佛國婦人までも來て居るといふ。もし實際からいふ席に佛蘭西婦人が來合したとすれば、日本の男女間の不規律なのに呆れ果てであらうと思はれる。

併し日本では、これを現代式と稱して世人は餘り怪まぬやうになりつゝあるのである。かういふ現代がつた人達が、佛蘭西の實際の有樣を見たら何といふであらう（私は必ずしも佛蘭西の女子教育に謳歌するものでない事はこゝに斷つて置く）また英吉利あたりでは佛蘭西に比すれば、モ少し解放的であるが、これは英吉利人の意志の強い事、プライドの高い事を考へねばならぬ。それでも娘の監督などは決して日本の比ではない。私は倫敦から十九歳の娘にピアノと佛語を習はせるため、母親が自ら娘に附添つて巴里に來て居る母子の美人と六七ヶ月間同棲して居たが、その間母親は嘗て一度も單獨に娘を外出さした事は無かつた。どこへ行くのでも必ずついて行く。一寸一町先に花一つ買ひに行くのでも、娘は一人では出さなかつた。私は能く然うまでせずともと思つた事があるが、いや若し巴里の町を娘が一人歩いてるところを、同國人に見られでもしたら、惡評の種になるのであらうといふやうな事を考へ〳〵した。

また私は四ヶ月許り、倫敦の一家族の中に同居して居たが、その娘さんは如何なる手紙でも、自分へ來

たものは、必ずお母さんに讀んで聞かせるか、見せるのを例にして居た事を思ひ出さずには居られない。

◎斯る傾向は宜しくない

で私の感じたのは、外國の娘には秘密といふものがない、少しも暗黒面がない、無邪氣で最も露骨である若い男を戀すれば人の前で公然と戀する。決して忌むべき醜面を形作らないといふ點だ。

何だか尻切蜻蛉の感があるが、あまり長くなるから今回はこれで止めて置く。つまり今日の女學生――若い娘を勝手に外出させる事、勝手に手紙を贈答させる事、勝手に讀書させる事、勝手に男子を近づかせる事からいふ事は社會の方面から見ても、家庭の側から見ても、また當人自身から見ても、今日の墮落的傾向を助長する外に、百弊あつて一利なき事を私は信ずるものであるから、それを一寸問題にしたのである。若しそれ男女交際の機會を如何にして與ふべきかといふやうな事は、これは自ら別問題に屬する。

散るさくら

ほろり〳〵と櫻が散る
散るのに何を想はふぞ
咲いたまゝに
覺めず
おとろへず
しほれずに
ほろり〳〵と
花が花に別れてゆく
うすらさむい春の空
長い間咲いて居たやうに
昨日の盛りを
遠い思ひ出にふりかへり
ふりかへりつゝ
ゆつくりと
舞ふやうに散つて行く
春のさくらよ

―醉　君―



桂公爵夫人の平生

男爵夫人　福原鶴子

昔から婦人問題と云へば、悉く男子の手で研究せられ、婦人自身が研究したものは殆とございません。而して男子の眼から觀た婦人問題は、往々身勝手な論斷をしてゐます。釋尊ですら、女は罪の化身なりと説いてございます、恐らく釋尊も初め男子の見地から斯く説いたものかと思はれます。

古來婦女を虐待した民族は、凡て早く衰亡して居ります、其尤も烈しかつたのはマホメット教徒、それに次で印度、支那の民族です。支那も一種の婦人虐待國ですが、昨今の國運に就いては申すまでもありません

家庭を治めることは日本の婦人の長所で、歐米の婦人に劣らぬばかりでなく、寧ろ勝つて居るだらうと思ひます。經驗のある老成な婦人にお目にかゝつてお話を承りますと、成程と感心するやうなことが澤山でございます。

就中私の敬服して居るのは、桂公爵夫人でございます。公爵家の家庭が萬事萬端整頓してゐるのは、實に溫良貞淑な夫人の力が與つて功あるものと思ひます。公爵と共に半世の辛酸を嘗められた夫人は、政治家の妻として、立派な修養を積まれたのでございます。

公爵家には日夜來訪の政客が絶えません、時には公爵と感情の衝突などもございませうし、鄕里の青年なとが訪ねて來て甚く公爵に叱責されるやうなこともございます。そんな場合に夫人は能く融和を計られるのでございます、公爵に對して憤る情を持つてゐるも



のも、夫人のとりなしに感じて心服するやうになります其親切な心持は、車夫馬丁の下輩にまで及んでゐるのでございます。

公爵には先妻のお子様が六人と、夫人との間に三人と、合せて九人のお子様がございます。公爵は殆ど家事に無頓着なお方でございますから、此等お子様達の教育も一に夫人の手でなされるのでそれ〴〵適當にお育てになつて居ります。

夫人は躬行實踐主義で今日のやうな立派な地位に居られましても、夫人自身が一切の家政をお執りになり、三食の世話、衣服の洗濯、凡て自ら先に立つて實行せられると云ふ方針でございます。



大抵の上流夫人は、その主人の地位の進むにつれて昔の質素な生活を忘れ、何時となく贅澤な生活をするやうになり、人にも誇り、羨まれるが得意とするやうになるのでございますが、公爵夫人はまるで其反對でございます。

參政權運動とか何とか社會の表面に立つことは、我邦婦人の問題ではありません、それよりか世界の婦人に誇るに足るのは、桂公爵夫人のやうに家庭を治めると云ふ美德の在ることでございます。時代は何う變化しても、此美德だけは是非保存せねばなりません。



くま大

坂東太郎

張儀已に學びて諸侯に游説す。嘗て楚の相に從ひて飲す。已にして楚の相璧を亡ふ。門下張儀を意ひて曰く儀貧くして行無し、必此れ璧を盜みしならんと、共に張儀を執へ、掠笞數百すれど服せず。これを釋す。其妻曰く。嘻子、書を讀み游説する毋くば安ぞ此辱を得んやと、張儀其妻に謂て曰く、吾舌を視よ。尚在りや不やと、其妻笑ひて曰く、舌在りと。儀曰く足矣。

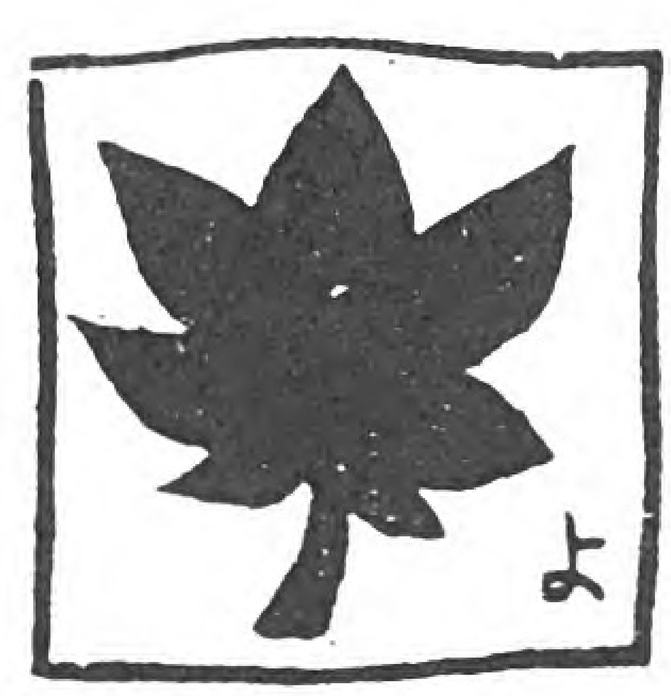
嗚吁、吾舌尚在らば足れり。嘲罵と讃嘆と、揶揄と飜弄と、笑ふと譏すと、抑ふると、揚ぐると、熱しては火を煽り、冷めては氷を截す、三寸たゝれざる舌をふるひて無智の木偶人に對す。こゝろよき哉この命また有りてまた彌生の春にかへれる。

一月十八日、郵便法違反に問はれ、○○B氏を病床に延くに至りしが、二月つひに罰金二圓を課せらる。すなはちこれを作る。三月七日夜

『……奥様がお出來なさいましたさうで厶いますのね、誠にくおめでたう御座います、定めし膝を突いたり手を抓つたりお樂みでせう。一生の思出には是非一度其お姿が拜みたくてね、ダイヤモンドをお手の物になすつたのですもの、どんなにかお嬉しいでせう、ではひねもす…………たんとお樂みなさいませ。たまには寢言の一つ位はお聞かせなすつて……』

これは貴下が書いたのにしてはをかしい、尻尾を斷られた血だらけのとかげが紙の上をねざつて歩いたといふやうな字ですね。

私のではありませんとも、まだそんな愚劣な文章を綴るまでには墮落しません、畋野たけ子つて大阪の女がよこしたのを裂いたなりラッかりあの本の間へ挾ん



で忘れてゐたのです。

『もし奥様がきまつたとすると、恐れながら私も一つうでをまくりますよ。

これも女らしい手だ・・・・

『けれど奥さんは「夜語」を讀んだ方とすれば、いかに甘言をおつしやつても首を横にふらねばならぬすると太郎先生甘言のありつたけを盡して、やうやつとハンドを握つたといふ筋書ですが、あらいやですよ。私ね一つ奥様にお願が御座います、今まで女といへば優しい言葉一つ仰有らなんだ先生が奥様にはどんな甘い言をおつしやつたか「坂東太郎先生甘言集」として公にして頂きたい』

隨分手きびしい文句ですな。夜語といふはあなたの文集でゝもあるのですか。

いえ。地方の異聞珍說を蒐めて、jといふ雜誌へ發表したものです。ところ〴〵に女を馬鹿にした文句があるので、そんなことを言つたのでせう。何を聞き噛つたか寢耳に水のおめでたうには苦笑しました。前のと一しよに來たのです。

わかりました、やはり讀み殼ですね。こゝに「花守を拜して」と題して絹糸で綴ぢたのがある、これも押收したのですからお訊ねしますが。

『その一卷を讀了つた時、十三弦の餘韻のやうな靜かな悲みが低く心を立繞つて止みませんでした、初から終までおほかた夕霧の立渡つた野の茫漠としたなつかしみと寂しさに被はれて居ります。閃く如き強い言葉も、あこがれの夢のひゞきも、其ほの白い黄昏の明るみと、赤々ともゆる野火の光のやうに、音のみして流れ行く川水のやうに思はれてなりません。廣漠たる大野をなめつくさんとゆらぐ炎も、わたつ海かけて行く水も、薄霧を一重へだてたたそがれの景物とすれば、寂しいものでございます。しかし〳〵其うたの寂しみは暗い冷たいものではございませんでした。美しいうた人の御心は痛める形骸に盛られてあるにも拘はらず、いたます荒ます御園の花と共に守られて花

守の一巻は柔かい涙のつゆにうるほうてをりました。おうたを拜し行く〳〵蒼白い夕暮の我心に映る畫のやうに展開せられた月波根よ、力弱き落日の光を吸へる鳥羽の淡海よ、すべて曲線を連ねたやうな常陸の國の自然はおんうたにしつくり調和してゐると存じます、あたへられた印象ははかない……』

これも尻が切れてゐる、やはり手紙のよみ殻でせうさうです、日本女學校の生徒で望月といふ女の書いたのです。

も一つ有る、これも偶然に入つた反古でせうか。

……それは私の手紙です。

確に！

確に！

どうしてはひつたんですか。

忙しかつたから。

年末にさし迫つて、三百何枚か有つた雜誌の原稿を急ぎに調べた時でしたからあれやこれやを本に挾んだまゝ忘れて郵便に出して了つたのです。

原稿といふのは雜誌の投書で、j社から一纏めにして毎月小包にして送つて來る、それを病間こゝろもちのいゝ日を擇つて一氣呵成に見て社へ返します。十二月二十五日の晩も丁度さうでした。明日はこれと一しよにKSにも本を出してやらうなどと、勞れた頭で考へながら、朱を引いてはね退けた原稿の端を剪り取つて其手紙を書いたのでした。二十六日の朝、町へ行くといふ人にせつかれて本へ挾んだ手紙はすつかり忘れて持たしてやつて、あわてゝ紐すら懸けなんだ。だから封が破けたのでせう。

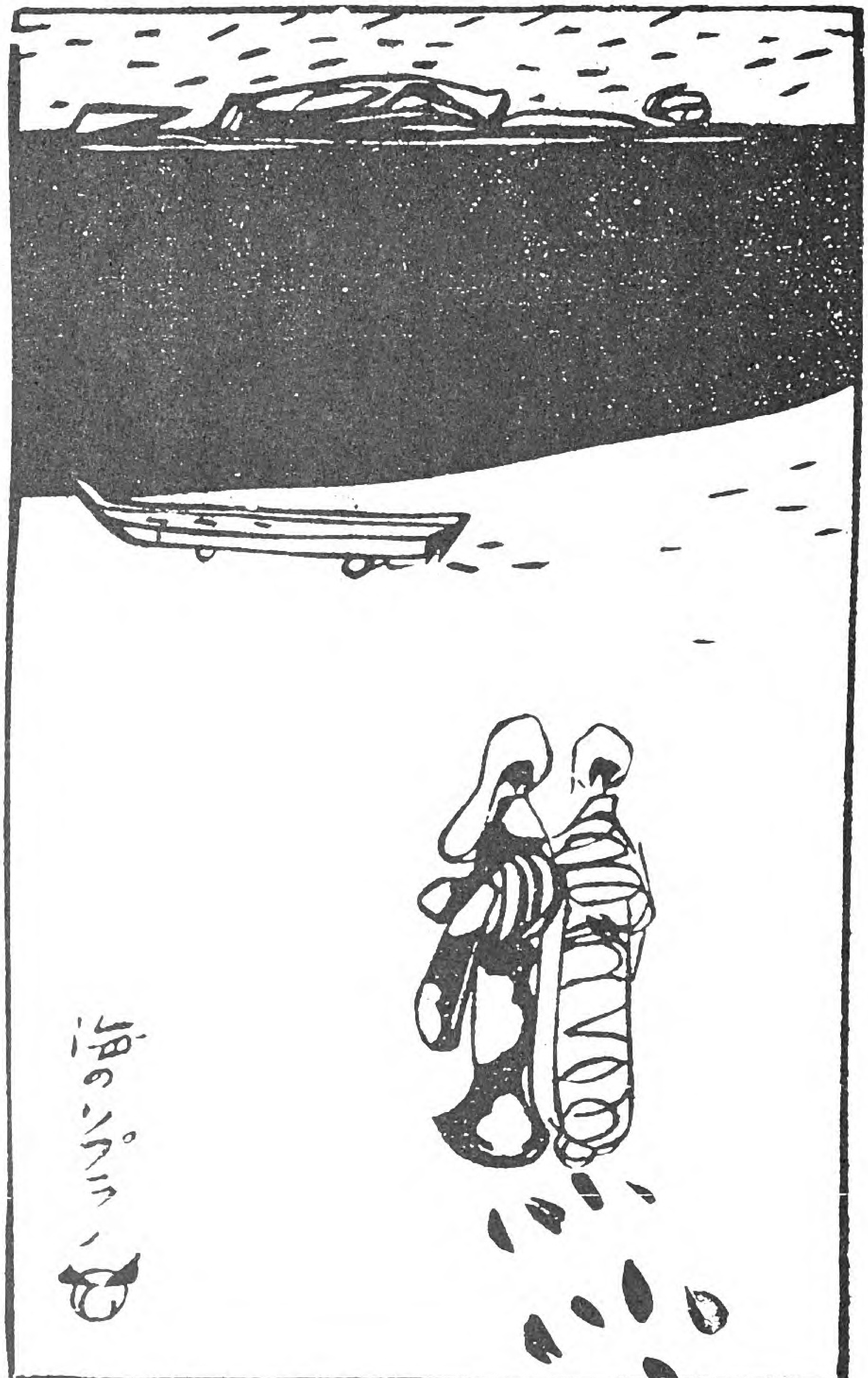
それぢや朱線が引いてあつたのは、沒書とでもいふやうな不用の紙を使つたせいなのですね。實は今までかうして一見反古に擬して官憲を欺罔する不正の手段ぢやないかと考へて居りました。お話でよくわかりました。

この手紙は蚯蚓ののたくつたのと違ひ、雲煙飛動の態あるばかりか、縦にも横にも筋交にも書散してある

ので、ちよつと見には、果して手紙か、本の書入れか、それともらく書かわかりにくいから、一々お訊ねしますよ。

(――氏は敷島を火鉢へ突さして、自分の顏に近く漂ひ來る煙を手で拂ひのけ膝の上に展べた紙――半紙半截の皺だらけの紙を取つて讀み初めた。同行の書記T君は傍から一字一字書きとるのである)

『君は體が半分利かないのかと思ふてゐたら、座敷を掃くようだし、十になる妹しか手元の用を足す者が無いなんて言つたくせに、二十になる大きな妹も有るぢやないか、それで「寂しい」はケシカラヌ』



これは先づどうした人ですかレウマチか何かで子供の時から足の起たぬ人ださうです。言ふことが時々矛盾するから一寸たしなめたのですがかうした人の前で自分の手紙を解剖される心もちは惡いものだ、まるで俎に乘つて庖丁と小刀とで料られるやうな氣がする。

（××ですからといふやうに——氏は微笑してそれには答へず。）

『死ぬ時は一しよに死なうつて、眞平也。野郎同士の心中では詩にも文にもならない。第一おれには未來の細君が有る……』

串談です。ソコだけは讀まぬことにして頂きたいものですが。

いや、中々面白さうな手紙だ。がKSはなぜあなたと一しよに死なうといふのでせう。眞面目なんでせうか。

さあ、多分命が二つ有るんだらう。

『第一おれには未來の細君が有る。第二におつ母さんが有る。君なんかと死んでは二人に濟むまいぢやないか。ゴウキと安つぽくするやうだけれど。失敬、『夜語』は惡罵暮嘲に過ぎる、人格が下落するから止めろとの御訓誡、恐入候。孔子樣ぢやあるまいし年中衣冠束帶でもゐられまい。そんなノタマクは止めてこれはと思はせるやうな材料をめつけて報告してくれ』

夜語つて？あゝさつきの、あれですな。

『いつか、眠つてる中に顏へ墨をぬられた藝者が汽車に乘つてまで知らずにゐたことを書いて吳たが、都新聞なら、有難がるかも知れないが、駄目だ。鏡花の『白羽箭』に書いたやうな話が君の地方にはうんと有るだらう、故老の亡くならぬうちに聞いておきたい。』

鏡花の『白羽箭』つて何ですか。

鏡花の小說です。若松落城後の事を書いたのです、KSは若松在の人だから……

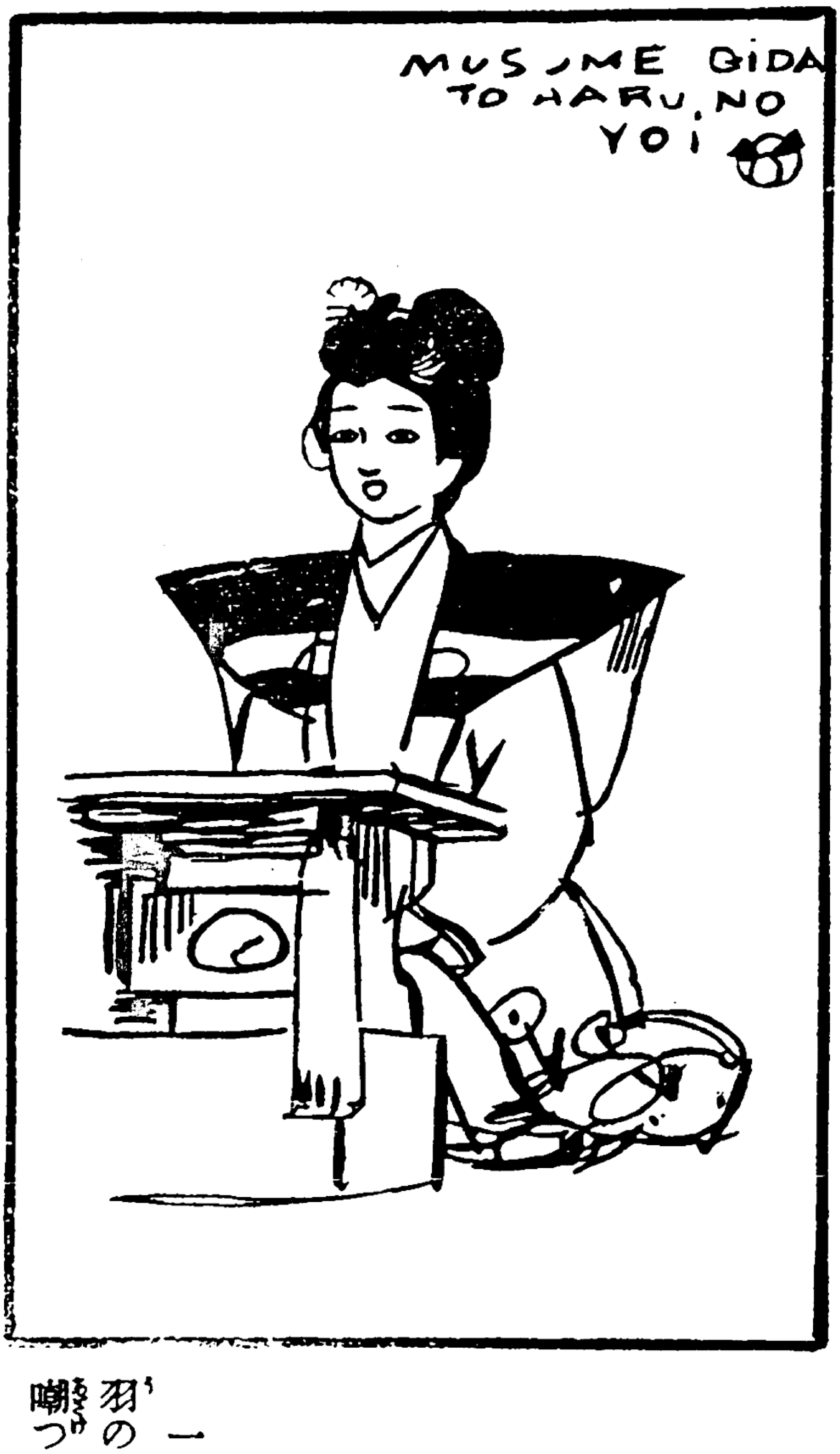
鏡花といふのは小說家でもあるのですか。

えゝ著名な作家です。泉鏡花、白水の泉です、鏡花は鏡の花。若松城の落る時、姑に迫られて自刄した女の事や、落城後薩藩士と結婚した爲に全市の人に憎み疎まれてあらゆる迫害を受けながら、なほ城下を去らぬ可憐の女の事や、保科家の令孃が單身草を分けて月皎々たる天主の跡に立つた事など傳へてあるのです

『衆生濟のおしんはよし。ぎざ〱の十文錢はヒドすぎる』

おしんつて實在の女ですか。

さうなんでせう、醉つぱらうと裸踊をやるんだつてKSが知らせて來たのです。十文錢つちうのは、此邊ではでき物がうむと柚のとげで穴を明けます、それを齒車のやうに磨つたぎざぎざの十文錢で明けたといふから、そんな信じられさうもないことは採れぬ、痛くて手がつけられぬ筈だと注意したのです。



『褌一本で道を歩いて罰金三十錢とられたなどは天竺からでも來やしめえし、珍らしがることはねえ。

くまだいでは無いが少しは尻が來たつて我慢するとして一山百文といふ君の周圍を書いて見ないかい一山百文は奥羽の凡山凡水を嘲つた成語でせう、くまだいは？

それは面白い話なのです。兵庫縣「播磨國佐用郡西庄村上月」の事で

すが、くまだいで名の通つてゐる佐太郎といふ大工の家の表柱へ「くまだいのけつの穴とかけて何と解く蜂の巣と解く、心は穴だらけ」とらく書をして、懲役一年を喰つた男、大阪控訴院へ出て「一體佐太郎のしりはばい毒で穴だらけになつて居るのです、私や嘘は書きまへん、こんな落書で一年喰ふなら、當裁判所の便所に仰山書いた人は無期だすやろ」と大氣焔を吐いたのです。

くまだいでは無いが、戯言、讖を爲してあべこべに私が遞信省から告發された。

『KYを何だか君はほしいやうな口振だが、知らずや

わが君に妻取れといふは誰人ぞ其口裂かむ劍持て來む

この思ひこの我れ外に中うとの出入するてふ、死なば死ねとか

彼は今火山の絶頂に在るなり。

止せ、止せ、つまらない。

逝く年の一夜。

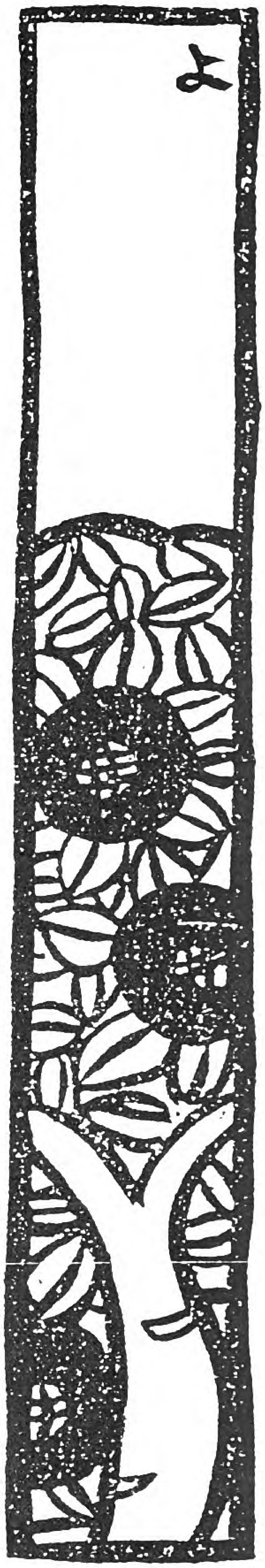
夜雨集、卷頭に題して曰く、われは不斷の坐禪に在りと、不斷の坐禪に在るもの、豈彼此氏のみならんやだ、ちと鼻をへし折つてやるさ。しかしあのほとゝぎすの歌には恐れた』

これでおしまひですね。時鳥の歌は。

それは先生の手紙にあつたのです。八千八たびなかでやまれぬほとゝぎす、下の句は忘れました、いゝ年をして（丸二十九ですが）今どき血に啼くもをかしいぢやありませんか。

一茶の句

江戸までもたゞ一息かほとゝぎす
下闇やまりのやうなる花の咲く
行くな螢都は夜もやかましき
閑居して夢番をしたりけり
わか竹と云へるも一夜二夜かな
短夜や妹がかひこの喰ざかり
わか葉して又もにくまれ榎かな
しんぼしたどてらの縞よひまやるぞ
二尺ほど月のさし入る蚊やりかな
うしろから見れば若いぞ更衣



牡丹

(「花の小品」の一)

水野葉舟

☆

花が……溫室の渦を卷いて居る蒸發の中で、樣々の草や木の葉が綠の色を廣げて居る中で、深紅の牡丹の花が呼吸をして居る。燃えるやうな呼吸をして居る。脈搏の高い、激しい昂奮の爲めに、絕間なく戰慄して居る、息苦しさうな……花は、その瓣の燃えて居る力の爲めにあえいで居る……。

恐ろしく猛烈に漲つて來る生の力が、陽炎を立てゝ燃えて居るのである。花はその燃える力の爲めに、間斷なしに慄えながら惑亂して居る。或ゆる情慾に對して、我を意識する餘裕が無く、たゞ燃えながら時が移つて行く

神經が燃え立つて、たゞ自らの生きて居る力を思ふより外に、その花瓣の上に宇宙の何の力の影も映らないのである。日光が照らして、來ると、共鳴して花の

燃える力が益々昻つて行く。闇がこのグラス屋根の上を包むと、花はその耳に我と自分の燃える響を聞く……苦しい。息苦しい。息苦しい。

☆

痛ましく、痛さでせめられるやうな瞬間が移つて行くのである。

花瓣が重い。重く水を含んで、この溫室の內の、絕えず水分が蒸發して居る中で、ゆら〳〵ゆら〳〵として居る。グラスを透してさし込んで來る日の光は、ぼいやりとその花の上に生暖い息を吹きかけるのである。

この燃え立つて居る花の周圍には、虹の立つたやうな夢の影もない。少し霞んだ……あの初夏の種々な色彩が入り亂れた美しい暗色を帶びて居る空氣が見せる幻の影もない。たゞ乾いた灰白色の冬空が、このグラスの屋根でとぎられて高く見えるばかりである。

その下でこの深紅の花は我知らず目を開けて、燃える呼吸をして居るのである。

その燃えながら我を忘れて居る花の狂人染みた美しさ！

☆

夜は恐しい。次第に夜が恐ろしく花の肌を刺して來る。

この屋根を包む暗の中には、乾いた刺すやうな寒さがある。その痛さが……花の暑い呼吸をして居た瓣の上に縮み上らせるやうな。針を刺す痛さが、何時となしにこの花を襲ひはじめた。その寒さの針にさゝれて折ふしに、全身が支へられないやうに痙攣をし始めた。

この時には一秒毎に移つて行く時の姿が明かに見える事！……いや、一秒を百にも千にも割つた時の脈を打つ姿までが花には感じられる。

牡丹は死ぬ……深紅の牡丹はもうすぐ死ぬだらう……たゞ燃えて居る力だけで生きて居た花は死ぬだらう……

原町の家

澤村胡夷

その一日。

書つけて置くことを忘れてゐたが、隣の家と僕の家との境に太い桐の樹が二本屹立つてゐる。通路から眺めると、ちやうど僕の家の垣根から生えてるやうに見えるものだから、賣つて呉れないかといふやうな事を申込む者が幾人もあつた。飛でもない、隣家の主人の自慢の樹だ！

冬枯の朝などはその桐の實が甲高い音を乾いた樹葉に響かして、啄谷と胸先とを引掻るやうであつた。大きな葉がぼたり〳〵と雨に濡れて、僕の家の屋根に落ちる夕暮もあつた。風の烈しい白晝などには隨分この桐の落葉が廣くもない花園を荒すのである。けれども桐の持主は隣のお老爺さんに違ひはない。早く賣つて了へと云ふわけにはゆくまい。但此の頃のやうに總ての木が芽を出し初めた時、此二株の桐のみが默然として寂れた二軒の家の境につき立つてゐる事は、痛々しき謎ではなからうか。

春が來た！……と云ふ低く太い聲が、南の柔な風から傳へられる。それよりも此默々たる樹が冬の裝束の儘うなだれてゐる傍に、溫かな花の氣倦い太陽の光を吸ふてゐる方が、『春！』と云ふ氣分を、冬枯に疲れた胸の一隅からいくら強く喚覺すか知れない。冬の桐は、その固く結んだ口を開いて鋭い聲を灰色の空に震はせる事を惜まない。けれども春の桐は悠な眠を冬枯の姿の儘貪つてゐるのである。吹くだけ吹け！南の風僅に輝くはこの銀灰色の幹のみ。わが夢は溫かき光

の底に愈深く沈むのだ。
　桐の幹は實際銀色の輝きを此頃增して來た。
けふも午前に買手がぶらりと家へやつて來て、而して隣家の樹だと聞くと、あたふた門を出て行つた。お定まりだが、戸口は一尺ばかり開捨の儘だ。けれども隣家の主人が賣ることは無論拒むに相異ないと思つてゐたから、格別氣にも止めなかつた。すると今來たばかりの買手がまたやつて來て、あの樹をお宅の方から何卒見させていたゞきたいと云ふ。奇らしい事だと思つた。何卒御隨意にと家の者が云ふのを聞流して彼は桐の樹の方へ行つた。後に聞けば餘程丁寧に見てゐた相で、皮の卷尺で幹の周圍などを計つて往つたと云ふことだ。
　最一つ書きつけておきたい事がある。僕の家の周圍には櫻の樹が幾本も植つてゐる事だ。門のところにあるのが、一番丈が高い。この頃その梢が和らかな蕾を持つて來た。この家へ引越して來てから初めての花だが、櫻の老木は赤味を帶びた若葉に溫かな雨のかゝつた白晝の方が心持がいゝやうだ。この樹を買つて呉れないかと云ふ者はまだ舞込まない。が、何時やつて來るかも知れぬ。
　次の日。
　こんな事を想つた。明るい室の方が暗い室よりも一層春の和かな空氣を感ぜしめるものだと。僕の室の窓は北を向いてゐる。朝などはこの暗い寒さに震へたてとが幾度あるか知れない。今朝もそれであつた。
　I君が出て來ると、君の家は空家のやうだと僕に云ふ。家だけではない僕の生活が一體ならば空家と云ふべきものだ。僕は時計の針に刻まれて行く時間と云ふものから脫れたいと思つてゐる。希望の通り時間を僕の心から奪ひとれば僕のすべては大きな空家だ。では、北向の窓の押並んだ空家だねとI君は云ふ。無論の事だ。こんな事を云つて彼はいつもの如くぶらりと歸つて往つた。春の光が室の中ではまだ寒さうである。
　午頃に昨日の男が人夫を二人連れてやつて來た。氣

の蔭だが、お宅の方から桐をきらせて呉れろとの事である。是にはちよと驚いた。愈桐の樹を彼が買取つたらしい。僕は暗い室へ入つて、窓から空を眺めてゐた。ゆるく流るゝ雲が櫻の梢に透けて見える……白き光の中にはあざやかな黄が沈んでゐた。桐の樹を鋸にかける音が初まると、人夫の力ぬけのした鼻唄がきこえた。僕は桐の樹が無くなつて了つたあとの隣家と僕の家との境目を考へながら、I君の空家だねと云つた事をふと想出した。

人夫は日暮までせつせと働いてゐた。家のものが時時見廻りに行つて新しい材屑が内庭に擴げられてゐると云ふ。かの男は暫らく何處へか行つてゐたが、ひよろりと日暮にやつて來て、取亂して申譯がないと家の者に云つてゐた。

日暮前から僕はK君を訪ねた。

歸つて來たのは夜深であつた。空には眠さうな月が出てゐた。門前の路は土がふみ固められてゐたので、濕つた土に足の運びは心持がよい。門を入つて、桐はと思ひながら眺めた。立ちはだかつた二株の桐の大きな方はもう姿が見えない。唯一株だけは依然として隣家の境目を劃してゐた。一株殘つてゐるのは一體不思議だと思つて僕は家へ入るや否や家の者に聞いた。聞けばあの男が買つたのは大きな樹ばかりだつた。

僕は默つて暗い室へ來た。

殘つた桐の幹はずつしりと月の光に濡れてゐるであらう、溫かい晩だ。

五月の森

—泣　華—

空には雲も薄らいでそろ〳〵日直りが爲はじめたらしい、初夏の氣力に滿ちた白光が一線さつと黒ずんだ竹柏の木叢を洩れて花やかに樹々の幹に落ちる、すると鳶色がゝつた樅やら白味の勝つた櫟やら、干割れた竹柏の樹の肌合が陰鬱な森の空氣にくつきりと浮上つて宛ら古寺の内陣で手燭の火影に名匠の刻んだ十二神將の胛腹でも見るやうに、引き緊つた健かな氣持で眺められる。



鎌倉より

磯萍水

友への日記

二月八日、　隣の別莊の夫人亡くなられしとか、昨夜よりして枕鐘の音、身に泌み入るやうなり。

終日砂山の上に跪座す。

片帆いつしか眞帆となりぬ。大島はやゝこのあたり、それと見給へ、澎湃たる驕濤、雷の如し、寂びたる眺めかな。羽音しめやかなる磯邊の千鳥、さら／＼とする涙や、きけば、さながら、夜の雨とも。

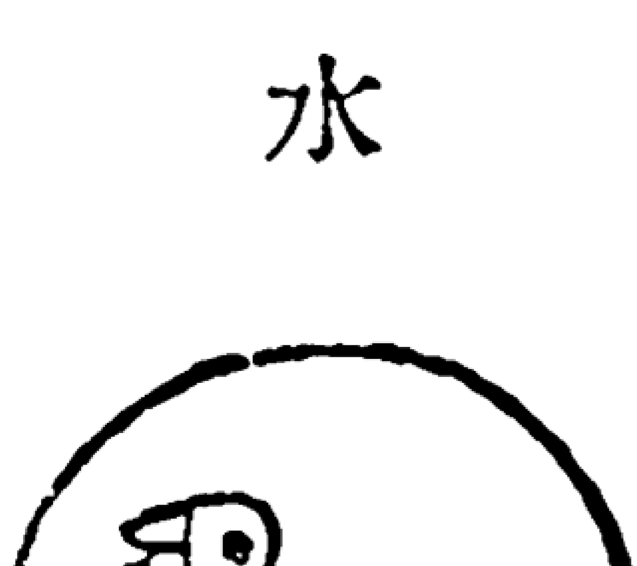
二月九日、　偶々の晴なり、嬉しきはこのお夏清十郎日和なるかな、けふは長谷寺に詣り、西行が二日物語の昔を偲びつゝ、またしても濱をそゞろ歩く、八重の汐路を遮るものなし、相模灘、暮の煙低く、松原を包みて、夕日を洗ふ沖つ白浪、水の色心ゆくばかり美し、地引網にて鯛とすゞきを求めて歸る。

二月十日、　晴れず、敢て降らず、濱にも出ず、終日淨瑠璃を讀みふける。

いま歌念佛を讀み、何時見ても好きはこれなり、無垢なるお夏、それは緋鹿子の町娘にて、戀には意氣地の伊達者なりき、清十郎また町人には惜しき男なりき、近松をはなれて、西鶴のお夏を一幕かりて見たくなる勿論獅子舞見物のくだりなり。

夜さつま汁ことに旨し、水滸傳を讀む。

二月十一日、　花和尚とラヰスカレーを喰ふと夢見て正氣にかへれば十時なり、いつもながらの朝寢寒心の外なし、夢に喰べしものをその日に喰べずは病氣になる由母の教らる。即ちそれを利用して晩にはラヰスカレーを拵へて貰ふ約束す。



海邊の逍遙例の如し、大島は煙にかくれて見えず。夜、ラヰスカレーを飽くまで喰ふ、鼻血が出さうなり、活動が頻りに見たくて堪なくなる。

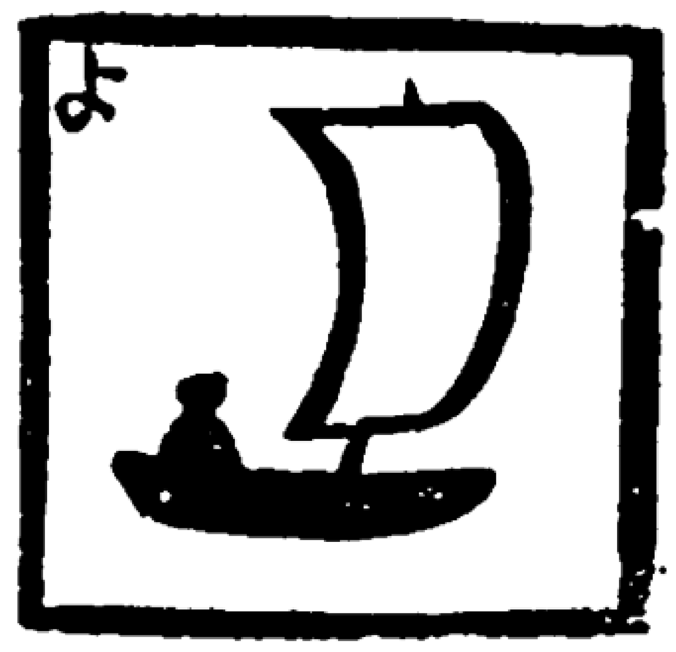
二月十二日、　浪うち際を美しき人、……されどやつれたる、……二十ばかりなるべきか、看護婦と連れ立つて行く、何となく死の影を見るやうにて哀れなり。彼の人恐らくは肺を病めるか、郎を思ふの心深げなるうるみたる彼の黒目勝の瞳、忘れ難し、この日一日、心たのしまず。

二月十三日、　六日ばかりの海月、あるか、無きかの光り、殊に憂愁の色深し、土地に慣れたる故か、追追寂しくなれり、友達なつかしく、人戀しく、女さらに戀し。

何と謂ふ事もなく亂抽して讀む。終日出です、浪の聲、松の聲、さびし、さびし。

二月十四日、　七年まへの今宵はいかなりし、今は午後七時なり、七年前の今頃は、胸のとゞろきに得堪ざりけるものを、ヘレオトロップの香りよ、然り、永劫の香りのヘレオトロップよ、あゝ我が胸をどる、遮莫、夢の扉はとこしへに遮るものなし、その姿、その聲、なほ眼にあり、なほ耳にあるを、しかす今宵、月かげ暗き眞砂路の、浪の行方を辿りつ有りし世の様を忍ばんかな。

鎌倉は東武通行の人の見る所にして、珍らしからねど、又したしく其地に遊べば、昔のおもかげ、山川別して神社佛閣に殘りて、懷古の情に堪へず、先鶴ヶ岡の八幡宮に詣づ、其壯麗男山につぐべし、佛寺には建長寺など最も大刹なり。鶴ヶ岡南面のきざはしを登れば、大なるいてふの木あり、昔、此の宮の別當公曉將軍實朝を弑したる所なりと云ふ。八幡宮の正面通り一の鳥居、二の鳥居、三の鳥居あり、其鳥居筋をまつすぐに下れば、由比が濱に出づるなり、一の鳥居より由比が濱まで十八町なり。凡て鎌倉は皆山にて、地面甚だ狹し、纔に谷の間々に屋敷々々を構へ、住居せし事と見ゆ。（橘南谿の『東遊記』より）



西鶴の作に表はれたる女性

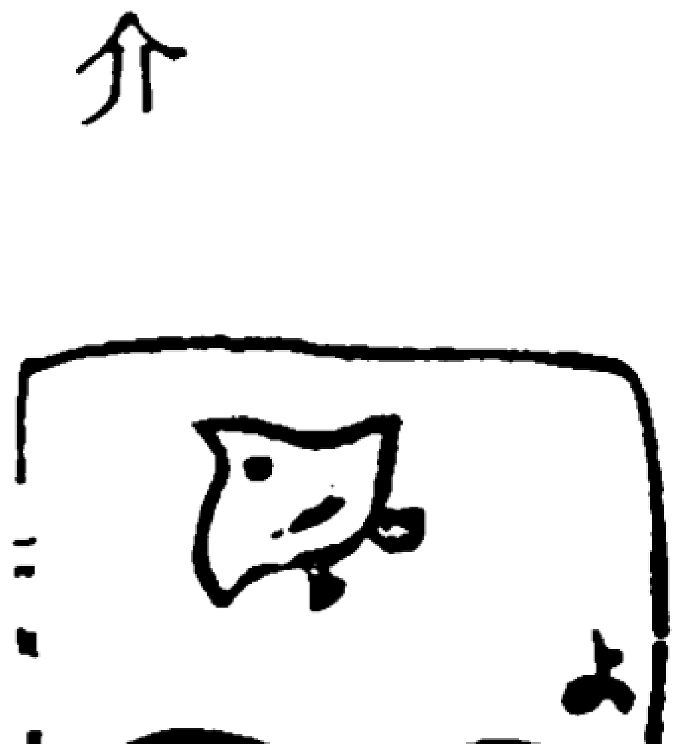
外島浪之介

我邦の文學史上、德川時代を代表する者は、近松と西鶴である、平安朝時代を代表する者は、紫式部と、清少納言である。而して、紫式部と近松、清少納言と西鶴とが、何處か類似點がある、私は此事に多大の興味を持つてゐるが、今は本題以外だから此處に其事は言はないことゝする。

偖て西鶴の女性と云ふことは、甚だ廣い問題で、また深い問題である、通常、西鶴の描いた女性と云へば『五人女』や『一代女』を引いて論ずることになつてゐる。如何にも『五人女』などに現れて居る女性は、わが國の小說中でも、珍しいほど生氣がある、此は多くの先輩が論じてゐることだから、敢て贅言を費すまでもない。

然し『五人女』や『一代女』以外に、西鶴の作中に表はれたる女性は何うであるか、兎に角西鶴は人間を觀る眼を持つてゐたから、所謂好色本以外、西鶴の諸作中にも、彼の觀た女性が能く表はれてゐる、私は其事を少しばかり言つてみたいと思ふ。

西鶴は『武家義理物語』の中に於て、「人見られたき風情」と云ふことを女の上に言つて居る。之は女と云ふものは、凡て人に見られたいが爲に、容姿もつくろし、行ひも氣をつけると云ふ意味で、つまり虛榮と云ふことにもなる、それを女を說明する根本のやうにしてゐる。それから『世間胸算用』にも「惣じて女は鼻のさきにして身代たゝまる」と云ふ「宵まで乘物に二つ提灯、月夜に無用の外聞、闇に錦の上着、湯沸



して水へ入れたる如く……」と、凡て無用な外見を張るのも女の性としてゐる。

『懐硯』に、亭主が頓死したので、兄弟が財産を争ふ條に「女房此有樣を見て奥に走り込み、衣類手道具何やかや、心に掛る欲しい物、とさくさ紛れに取集め嫁入の時の長持に押込み錠ぴんとおろし何の氣もない貌して姑の見る前にて髮くる〳〵と束ねて切りかくるを、老母押止め其方が心底尤なれとも、未だ若き身なれば我分別あり、待ち給へといふを振り放し、最早私の髮のいる御分別は弗々嫌で御座りますと……」とある。如何にも考の無い三十前後の女房が自己の安全を謀るのにやりさうなことである。此等も女は思慮が淺くて、慾が深いと云ふ説明になつてゐる。



「總じての女、世にある時は夫が心にしたがひ姑に恐れて、孝をつくし、永く縁ある事を祈り萬の始末も心から大事にかけ人にもよきといはれたき嗜、しもべにも惡しく當らず、世の業に油斷もさせず、朝疾く起きて髮結ふ形を見せず、夜の行水暗きを恐れ、夫の疑を休めぬ。女斯く身を持つからは自然其家を調ひける……」是は『新可笑記』の

一節であるが、當時の理想的女性とも見られる、普通の道德から見れば、姑に孝を盡すのは當然であるが、西鶴は殊更に姑には「恐れて孝を盡し」と云ふ一面から見れば、暗に敬遠主義を取れと云ふやうに描いてゐる。其邊が西鶴の皮肉でもあれば、彼の鋭い處でもある。

女の道と云ふやうなことも、彼は當時の道德と合致するやうに、努めて穩健に描いてゐる。例へば「女の愼むべきは言葉」とか「其形美しく、しかも利發者にて母に孝を盡す」とか「男の氣をとり御隱居におそれ下人下女が身の上もよしなに云ひなし」とか云ふ極めて世間並な事を書いてゐる。『本朝二十不孝』の中にも絹問屋の小鶴と云ふ娘が、十四から二十五まで、十八箇所に嫁入して遂に下男に通じて五十餘になつてのたれ死をした事を書いて、其終りに「惣じて女の一生に、男と云ふもの一人の事なるに、其身持惡しく去られて、後夫を求むるなど末々の女の事なり。人たる人の息女は嗜むべき第一なり、緣結びて再び歸るは女の不孝これより外なし。もし又夫緣無くて死後には比尼丘になるべき本意なるに、今時の世上勝手づくなればとて、心のさもしさ云々」とある、此等は好色本をのみ透して見た西鶴とは殆ど別人の觀があるけれど、彼の理性は決して盲ひてゐないと云ふ一面の好材料であらう。

今一つ『武家義理物語』の一節を摘出しよう、是は上述のすべてを總括した樣な筋である。或る武士がある人の娘の姉妹共美人であるのを聞いて、姉を妻に申受くる事になつたが、其姉娘が疱瘡にかゝつて、醜貌くなつたので妹を嫁る事になつた時、姉が、妹は自分の昔と同じ樣に美しく賢いから、と述懷やら痩我慢やらを云ひ「それ故兩親の名は下さじ」と孝心にかこつけ、終りは「自分は兼て出家の願諸佛をかけて僞なし」と美人であつた時は考へて居なかつた事を兼てと利口らしい事を云つて、手馴れた鏡を碎く、如何にも武士の娘らしい、それから妹が嫁入つて後、姉が來べきを疱瘡の爲自分になつた事がおかつたので、妹が自害しや

うとする、そこでまた武士の義理をたて、醜くとも姉を貰ふ事になる、兩親も喜ぶ。鏡を碎いたり比尼丘になるべき筈の姉は心機一轉して嫁入て來た「女はひとしほ男の情を忘れもやらずよろず心に從ひぬ」と。西鶴は次に「此妻美女ならば心のひかるゝ處もあるに……」と書いた。美人は必ず道德堅固でないと云ふのは、西鶴の女性觀中一貫した思想である。

西鶴に描かれたる女子の側面觀を見てみよう『新可笑記』に自暴自棄になつた女の事を「身代薄くなりては男



西鶴の作に表はれたる女性

に殿もつけず、世の稼を休めて下女と爭ひ、長寢の爲病を作り、五節句にも髮頭を亂し、揃へる皿を九枚になし、諸道具を手荒く、大黒柱にはやくろ吹き掛け、敷居に押しあて灸はしを削り、接木の初咲を用捨なく手折り、書院の軒端は洗濯物の竿もたせとなし迚も人の物となる實家を住み荒し、肴掛のするめも煎じ、茶の茶菓子に引き裂き、佛棚も書き出しの置き處となし云々」と如何にも自棄になつた女は恐しいものだと云ふ事を能く表はして居る。又「織留」にも「女の心其

時々に移り替り恐しき物ぞかし」と豹變する女の性質を云つてゐる。又子供が生れた後の女の心持は自墮落になると云ふことは、『織留』の一節に「其後は鼠の喰物も取り置かず、亭主の麻袴の皺の寄次第、亭主の留守には夜食好みして、大かた是のたわけが歸る時分ぢやと油火の燈心を細め、御所柿の皮を知れぬ處へ捨てさせ……」と何でもないことだが觀かたが細かい。

次に西鶴の美人の性質觀破法がある「道ありかせて其身振をあらため、顏は日のうつりに向はせて陰より見透し、ぶき鬢の沈み樣にして、地髮の少きは知れるものぞかし、口の開き過ぎたる女必ずものごし宜しからず。足首しまりて裏空きて指先反らぬは惡女なり美女は手の指自ら外へ反りて胴間常の女に勝れて長くそなはつて、腰据りて押立曲まず、上の女は少し俯くものなり、中の女仰くもの、下の女は道急ぐものなり……」と。

最後に元祿時代の娘の風俗を拔いて見よう。「下には藤色に碁盤の紅縞つけ、中には瑠璃紺に同じ紅縞の裏附け、上に薄玉子色に同じ紅縞つけ、肩より一尺程靑青と御簾の模樣、唐織の緣、紅の房をさげ、裾は亂萩帶は黑き天鵞絨に大紋の石疊、後に廻して御所結びの端に銀にて鶴菱の四紋、返褄、衽先を少し揚げて帶の下に挾み、抱帶なしに細き忍帶を締め、素き合湯具の裾に鉛のしづを掛け、惣淺黃金剛をはき摺足に歩み、しめつけ島田髮、前も後も長さ同じ事にして、中程に平髻を懸け、挿櫛白檀の木地に珊瑚樹の切入、前髮に鯨の鰭の曲りたるを入れ、髮の狂はぬやうに仕懸けわづか俯向き、首筋あり〳〵と見せて、突肱に左の手先に袖口を揚げ、右の肩より袖ゆき、しとやかに流し……」（俗つれ〴〵）之を讀めば當時の美人風俗は讀者の眼前に髣髴するであらう。

要するに西鶴物と云へば、一概に淫靡な女性ばかり描いてあるかの如く想像するのは大間違ひで、彼の描く戀愛は必ず純潔、また彼の描く一般の女性は道德的で、また當時の理想的である、戀愛以外に彼の女性觀を語る人が少いやうであるから、此處に其一端を書いてみた。

實競外題見立相撲

大關 おはん長右衛門
關脇 おちよ半兵衛
小結 若草伊之助
前頭 おそめ久松
前頭 小はる治兵衛
前頭 浦里時次郎
前頭 おはつ德兵衛
前頭 菊のへ小七
前頭 おなつ清十郎
前頭 あづま與五郎
前頭 小紫權八

前頭 時姫三浦之介
同 おこま才三郎
同 櫻ひめ清はる
同 山崎文七
同 まとめさいた
同 松山わん久
同 こいぎぬ伊駒之介
同 清川文七
同 小浪力彌
同 おさと彌助
同 おかる勘平
同 くづのは保名

前頭 三勝半七
同 小梅よし兵衛
同 おこう染五郎
同 おせん吉郎
同 おその六三郎
同 小きく半兵衛
同 しら糸金三郎
同 おしつとう吉
同 おせい卯之介
同 かのこ清兵衛
同 おとき德代
同 花のへ文三郎
同 おちよ太兵衛

爲御覽

行司 梅川忠兵衛
夕霧伊左衛門

世話人 梅がへ源太
あげ卷助六

勸進 あこや景清
差添 小女郎新兵衛

和田信次郎氏 所藏

大關 おしゅん傳兵衛
關脇 おつま八郎兵衛
小結 花崎綱五郎
前頭 この糸蘭蝶
前頭 おはな半七
前頭 尾上伊大八
前頭 歌浪儀助
前頭 おとわ七兵衛
前頭 おきく幸助
前頭 お七吉三郎
前頭 松かせゆきひら

前頭 おさめ新七
同 お梅粂之介
同 高尾重三郎
同 おその平三
同 おみわたんかい
同 はや絹吾之介
同 ひな鳥久我之介
同 小まん與作
同 市川半二郎
同 おみなへしより風
同 小町少將
同 おさん茂兵衛

前頭 花のへ清七
同 あや糸又の助
同 きよ姫あんちん
同 おやゑ櫻丸
同 小いな半兵衛
同 おこん平兵衛
同 かさね與右衛門
同 しづか忠信
同 おきた平治
同 若松仙太郎
同 おつた利之助
同 千代つるせん吉
同 小きん彥三



春や昔

夢殿守

乳の様な感じのする春の日の光を知覺やうになると山脈の青いところ〲が、ぼうと淡紅色にぼかされる其山の裾にバラ〲と撒かれた石ころの様な小さい町其町の黒い屋根にたゞよふ春の日光に、白い土藏の壁と美しい花の色とがところ〲匂つた。其うちの一軒に私は十六の少女と成つたのであつた。

三月學校を卒業て、規則的の生活が全く一變した、止め度ない、ゆるい、長い、おそい、濶い、社會の生活につながれた若い心は、うやむやとしてよく病んだ。

四月の二十四日は町のお寺の鐵燒地藏樣のお開帳日とで、朝から明るい日光の流れて居る長閑な町に鉦の音がチヤーン〲と響いた。櫻は其頃が眞盛り、夜に入つてからは鉦の音にまぢつて、とよめいてゆく男女の足音や艶めかしい口笛の音なぞが美しい花の樣な渦に成つて病んで居る枕元に崩れる樣に聞えて來る。

「おかげんは如何です、まア今夜は大層な人出、お寺の庭は足ゆるぎもならない程ですよ、お土産にやつと一枝盜んで來ました」

裏の叔母さんが障子を開けて白い花の枝を出した、私はほんとに嬉しかつた。まめな妹はいち早く、藥瓶や金文字の本や封の切られた手紙などのちらばつて居る枕元に瓶に挿して其花を置いてくれた。かうして其夜が更けて行つた、外のとよめきもおひ〲と鎭まつて來て、やがては鉦の音ばかり、それも暫くで止んで了ふ。小さい町は全く鎭まつて目の前のランプが油吸ふ音ばかり、冴えた耳にジー〲と聞えるのであつた。祖母も妹もよく眠つて居た、ジツとランプの赤い灯を

見つめて居たが、やがて何んだかたまらなく成つて、そつと頭をあげると枕元の花がすぐ目についた、ほの赤いランプの光は詩集や、手紙や、藥瓶と一緒に靜かなく〳〵白い花をいつまでも〳〵無言で射して居た、凡べて無言——やがて私の手はそつと花の一つを引いた——と、白い花びらが二つバラリとこぼれて、他の花がゆら〳〵とゆれた——それつきり、——私の頰には熱い〳〵涙がつたつて居た、——時計が重くるしく二時を報じた。……。

「……おかげ樣、今朝は氣分が好いと、見えてぐつすり寢こんで居りますわエ……エヽ、そつと目を醒さない樣に……」

夢の樣にかういふ聲を聞いてだん〳〵心が醒めて來た、パツと目を開くと濃い日光が半ば射した障子のかげに、高い鳥の聲がふと聞えてた。勞れ切つた目は枕元にこぼれて居る二片の花を見た、そして又とぢた、心の中に、今年の花は散つてもいゝ、といふ樣な思ひがぽつと浮んで居た。

北海道に住むやうに成つたのは十八の末からであつた。

燒けあとの、バラツク見た樣な家ばかりまばらに建てられた町に、黑い烏が群をなして居た。冷いガラス窓によつて、眞白い雪の間に、かうした景色を凍つた樣な心で眺めて、信濃と、そこに少女心を其まゝ傷つけられず育ぐんで居た十六七八の明るい甘い空氣を思つて冷い涙をよく流した。

五月に這入つてから櫻の花が咲いたといふ、末の妹を抱いて、母や妹等の中にまぢつて、すまぬ樣な顏をした私は始めて土地の公園に、北海道の花を見た、——色の薄い、……それは信濃の櫻の二雨位もすぎた程の色であつた……花のかげからもう青い葉が目に立つて居る——「マア之が櫻？」「何故」母がふりむいた「だつて、薄い色」「これでもよつぽどよく成つたんだよ」……。北海道の春、櫻……、私の心は淋しく荒んだ。

麥の青い丘の家――東京の郊外に友達と二人、小さい家を借りて住むやうに成つたのは二十一の年であつた。松林を切り開いて、形ばかりの竹垣をゆつた裏庭には井戸ばかりが大きく目にたつてゐた、そして其そばに唯一本、牡丹櫻が植ゑられてあつた。私は此家を出て丘をこえては、毎日〳〵京橋の新聞社に通つた。塵と埃とすさまじい物音との中を一日中歩きまはつて歸つて來ると勞れ切つて、口をきくのもいやに成つて了ふ。友はだまつて私の方を見ない樣にした。

「あなたはいそがしく出て行つて了ふ唯一人きりのあの家に明るい日が射して、あの井戸ばたの櫻がホロリ――ホロリ――と散るんでせう、ほんたうにたまらなかつたわ」………

其家を去つて麴町に住んだ二十二の春は、戰ひ勞れた痛い心に、電車の響と風と埃と櫻の花とがかすつて過ぎて行つた。淋しい心、やるせない心、誰れか自分に眞心から、此心の底の底まで投げかけて少しも心ふきなく安息はせてくれる人はなからうか……男でもいい、女でもいゝ……かうした心に成つて友を何かにつけては尋ねて行つた、そして其友がしみ〴〵と言つた其言葉に其頃の友の心が痛い程分つた。友は私より二つ年上であつた。

櫻の花はいまでも私に美しい花であるけれど、信濃で見た櫻程、美しい櫻はどこでも見られなかつた。もう見られない。此頃しみ〴〵かういふ事を思ふ。

うらわかきうたびとのきみ
よひやみのうれひきみにも
ほの泌むや、青みやつれて
木のもとに、みればをみなも
な怨みそ、われはもくせい
ほのかなる花のさだめに
目見しろみ、うすらなやめば
あまき香もつゆにしめりぬ
さあれ、きみ、こひのうれひは
よひのくち、それもひとゝき
かなしみてあらばありなむ
われもまた――月はのぼれり

よひやみ――白秋



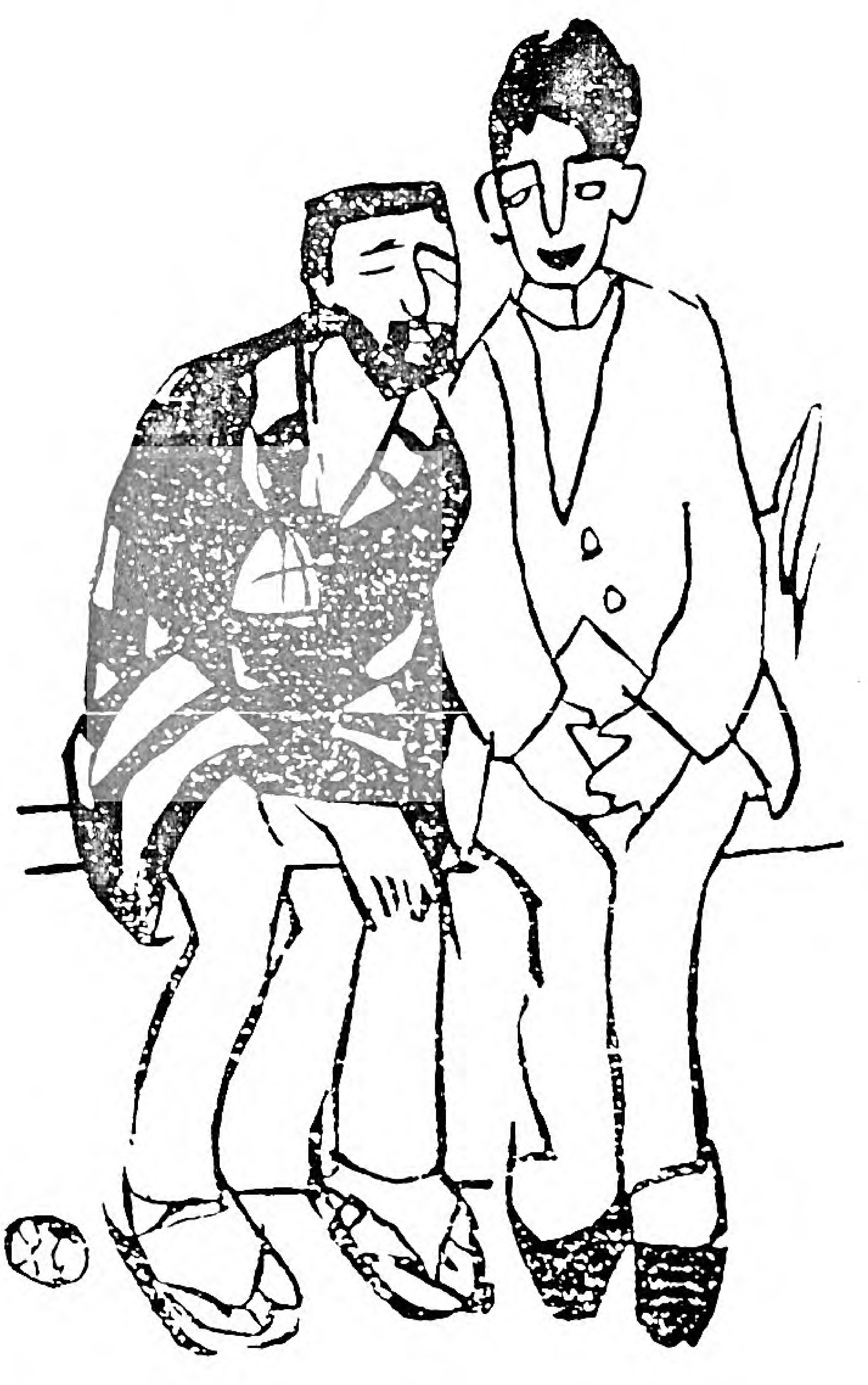
はつ夏

くすぐつたいそよ風が
うわきにちらつくネルの裾を
朱羅宇でおさへたおもはせぶり。
青い眉のはつ夏。

三味線草作

相乘り

ふけし電車も、春の宵
ならびてのればあぢなもの。
丸花あたりでひつかけた
どぶろくの酔が、久松町のまはり角。
しんとろ　とろりとでるほどに
てくり／＼としなだれかゝる。
「おまへさんも小指にゝげられましたかい。
げ‥‥これなくて‥‥げ‥‥な‥‥なんのおのれが‥‥さくらかなつてな‥‥はゝは」





くわんのんさまへ

淺草の
くわんのんさまも、あいそがつきませう。
——ひとになさけはかけまいもの。
願のすぢも今はいやでざんせぬ、
一錢なげますほどに
一錢がほど、おかげをおくんなさい。
ぶらりとさがつた大提燈か
——わたしのこゝろか。
（鳩に豆なんかやるのはおよし。）
わたしの鳩は
まめをたべるとすぐかへりました。

新富町にて



「あんまりおやぞえ」治兵衛さん
朱塗のアンドのまへに日本の鳥と花模樣を染めたフトンに治兵衛は顔を埋めた。月見草のやうに淚ぐんだ黃い光がそこはかとなく舞臺に漂ふた。
「そんなに未練が殘るなら、何故に誓紙を書んした」

はなれた男心のうらめしさを、はなれともない女ごころのやるせなさを、おさんは袖にかさねて身を悶へた。

チチ、チンチン、チンチンチンチン……と泣き入るサミセンにつまされて、高土間なる若き岡惚連も白いキレを眼にあてゝ泣いた。

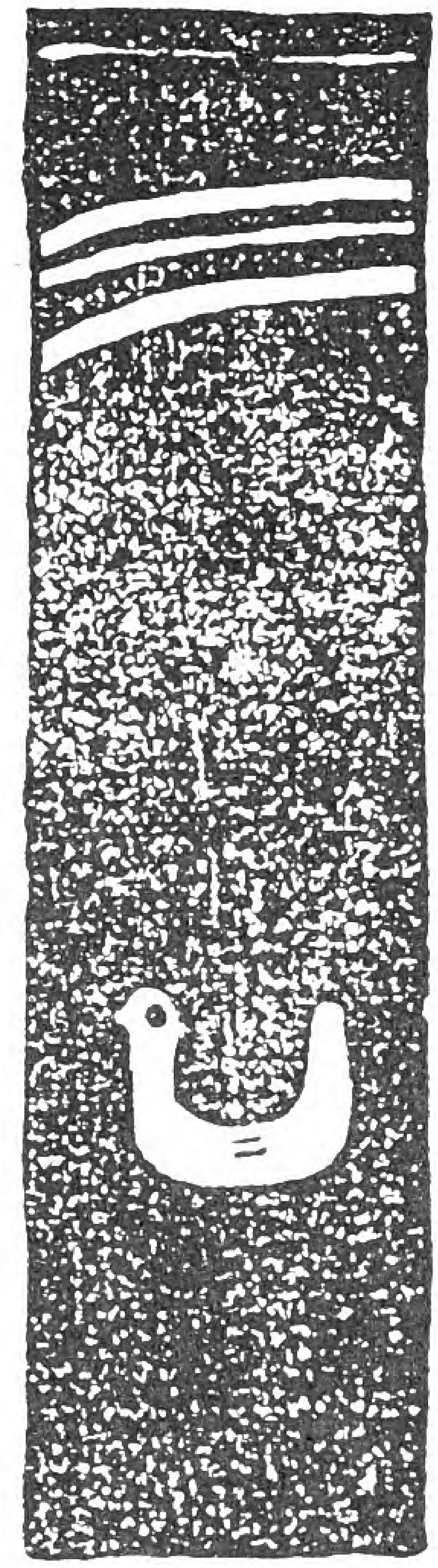
ひとり大向のお君さん——行年六十九歳——は、それをきつかけに待構へた鐵砲壽司をこゝぞとばかり口へ投込んだ。

さもあらばあれ、おきみさんにも五代目に引幕を贈つた昔はあつたものを。



八ツ山下にて

品川の
お臺場こそは悲しけれ。
千年萬年
待つたとて
とう黒船が來るものぞ。



破談

萬壽子

「やあ——それは困りましたね、では何うしても破談には出來ないんですか？。」醫師は考へるやうな眼でお露を見ながら言つた。

「えゝ、何しろ明後日式をあげる筈だつたのですけれと向ふの兄さんが昨日急に亡なつたので今度は幾日になりますか存じませんけれど……とても破談には出來ないでせう？、いえそれは今日にも仕様と思へば直打破す事は出來るんですけれとね……」

「そんなら破しちやつたら宜じやあありませんか。」

醫師は事もなげに言つた。

「あんな事を仰有つて……」お露は眼だけ笑つて

「少しは兄さんの心にも成つて上げないぢやあ——もし私だつたら……私が男でしたら屹度其女と、誰が何と言つても、忌な病氣があつても、年が上でも、顔が醜くつても一旦此の人は、と思つたらその人が死んで了つても屹度夫婦になつて見せますけれどね……」

「ハヽヽヽヽお差合がありましたか。醫師は面白さうに笑つた。

「ま、」お露はあとの言が塞つたやうに眞赤になつて俯向たがすぐ眩しさうに顔を上げて、

「兄さんは親孝行ですから父さんが不可と言へば屹度破談にするかも知れませんけれど……又父さんは兄さんに其麼事を言やしませんわ、——あゝどちらにしても困りましたわ私……」お露は醫師に話したを悔たやうな色を見せた。

午後の柔かい光線が硝子戸越に室内へ流れ込で片隅に備へ付られた寢臺のシーツやカーテン等の白い色に反射した明るい色が、室内を鮮かに色彩して居る。

あたりの靜かな此處らは山の手の屋敷町のやうな淸らかな空氣が流れて居るやうに思へる。やうやく靑葉の多くなつた狹いながら小じんまりした庭には奇麗に箒の目がついて居た。

そよ〳〵した風が快よい程ボカ〳〵と暖い花見日和

で、お露はかうして此室に既一時間も話し込で居るが醫師は倦だ顔も見せず、お露がもじくしても頓着のない顔をしてそれからそれへと話しかける。

「だけどそりやあ何ですよ、貴女も父さんも一所に居ちやあ危ないねえ、肺病は始終側に居る人にはさうでもないんですが突然に一緒になつた人とか何とかさういつた人には直感染するんでね……」醫師はそれからむづかしい醫學の話を始めた。

「ぢやあの、兄さんの體には既黴菌が這入つて居るんぢやあないんでせうか？。」

「それなんです——どうもあの病氣計りは出てからでなけりや斷言が出來ないんでね……お絹さんはどうか知りませんがお母さんは確に？ですよ、あの白い顔を御覧なさい、青い、濁つた、何處となく暗い色が潜んで居るぢやありませんか、然し怪しいねえ、一年は兄さんより十も上でせう？顔もよくないしね……何ぢやあ有りませんか、もう關係が出來て居るんでせう？」醫師はニヤく爲乍らお露の心を讀むやうに凝と其顔を見た。



「そんな！」お露は叱るやうに強く言つて相手の言を卑むやうに其眼を見たがすぐ逸して

「私はあの兄さんを深く信じて居りますから其麼事は決してないと思ひますの、たゞ彼人等に同情しての事

としか思へませんけれど……」

「或はさうかも知れませんね、」醫師は眞面目な顔になつて逆はぬやうに言つた。

「けれど同情は同情として、何も妻にしないからッたつてねえ、春次さんが又怜悧な人に似合ない、三人まで肺病で死んで了つたのを知り乍ら……あのお母さんはナカ〳〵者と云ふ事ですから甘く瞞されて押付られたに違ひないんでせう？、私は屹度さうだと思ひますよ。」

「誰方でもそんな事を仰有いますの、けれど私は兄さんを知つてますから――」お露はかう言つて居る内に何だか自分を辯護して居るやうな氣がした。

「眞箇にそりやあ不可ねえ、」暫らくすると醫師は又かう言つて考へるやうな顔をしたが、

「かうしたら何うでせう？、貴女御歸りになつたら、私が藥をかへるのに御體を拜見したいと言つて居たと仰有つて下さい、そして被入つたらそれとなく肺病の怖ろしい事や、御自分の御體の弱い事をすつかり御話し致しませう？、兄さんは屹度顫え上つて了ひますから」醫師は安心したやうに笑つて

「それがいゝ、それがいゝ。」と繰返して言つた。

お露は兄の藥を受取らずに醫師の家を出た。五六軒行つてから些時其の高い洋館建の醫師の家を振返つて何となしに微笑んだ。しかし彼は誰かゞ自分の顔を見て居るやうな氣がしてすぐその唇を嚙んで笑を消した。そして殊更に眉を寄せて「困つたな……」と低く口の内で呟いて見たが、自分の心の何處かで面白さうに笑つて居るやうな氣がしてならなかつた。

何故かお露には死と云ふ言が快よく響いた。肺病と云ふものに對して一種の好奇心は動いたが、そこに起つて來る悲哀や恐怖はどうしても感じる事が出來なかつた。――兄さんがお父さんや自分を捨て十も年上のお絹さんと駈落して、肺病になつて血を吐て兩人とも泣て死んぢやつたら――お露は他事のやうにこんな事を考へていろ〳〵な幻しを描き乍ら恍然した眼をして歩いて居た。

その夜お露は床に就と一ッ室に寢て居る父に晝間醫師から聞せられた事を話した。

「己も人からそんな話を聞たよ、其女が三十何歳まで嫁入しないのもさういふ遺傳の病氣がある爲だとさ、厭だなあ……どうも困つたものだね。」と父親は嘆息した。

「でね、岡田さんが言ふにやあお父さんはあんな弱い體だから直ぐ感染するツて、皆な死ぢやへば一番世話がなくつていゝわホツホツホツ。」お露は面白がつて居る自分の心を隱すやうに態と嘲笑して居るやうな調子で笑つた。

「あゝ忌だ、忌だ、御免を蒙らう？、己だつて未だ死にたかないからなハヽヽヽヽヽ

「死ぬのはいゝけれどさ、同じ死ぬなら人に嫌がられる病氣でなんか死にたかないわね。」お露は妙に探るやうな言方をして寢返りをした。

「出來る事なら何かして破したいものだな。」父親は獨言のやうに呟いて仰向に天井を見た。

暫らく沈默が續いた。

蚊でも泣くやうな沈默の息が耳につひて、お露は引込れるやうに好奇心から抜出た眞面目な考へがその心を取りまいて行つた。そして眞面目が産んだ悲哀がいろいろな想に廣がつて居る心をひし〳〵と締付て行くとお露は急に頼りない淋しさを感じた。



「夫婦になるとしたらお母も一緒に來るんだッてえから、己とお前は別に家でも持たなくッちやあな、」父親は娘の方へ振返つて沈んだ聲で言つた。

「さう――ね、」娘は不快な返事をした。

「春ちやんが歸つたらよく話して見なくつちやあな、それでも一緒になりたいと云ふものか、それとも又、何んて云ふものか、」暫時してから既眠つたと思つて居た父親が振返つて大きな瞳にどこか望のありさうな輝きを見せて聲をかけたので

娘は慌て顏を外向ながら、「だけど、何にも言はない方がよかなくつて？、兄さんは三年も前から京橋の家へ毎日〳〵遊びに行つてるんでせう、要さんが死ぬ時なんて皆なが冷々する程よく看病してやつたんですつてね、今度の兄さんが死ぬ時も矢張りさうなんでせう、だからもう屹度あの病氣が這入つて居るに違ひないだらうと思ふの。」お露は濕んだ瞳を瞭然させるやうに交睫爲乍ら思の深さうな聲で言つた。

「フーン。」父親は氣の拔た呻吟をして彼方へ首を向て了つた。

格子戸の開く音がすると父も娘も眠つた風を裝つて暗い方へ寢返りした。

力のない足音をさせて室へ這入て來た春次は父親と妹との間に敷れてある自分の床の上へどたりと體を投出してホッと溜息をした。

お露は其聲を聞くと罪を犯したやうな氣がして自分が恐ろしく思へた。

「仕様がねえ……」春次は頹然と投げ出した細い足を一寸撫て聞取ぬ程の聲で呟いた。

青い瓦斯の光を正面に受けたその額から兩腕から足までが透明るやうに白く見えた。彼は脈を見たり肺のあたりを押へたり頭を撫つたりしてなか〳〵寢ようとしなかつた。

何日も何時に歸つてもお露は大抵眼を醒して聲をかけるので、息を殺して居るのが苦しくてならなかつた。偶によく眠つて居ると春次は其の額を輕く打つか頰を突つくかして起しては

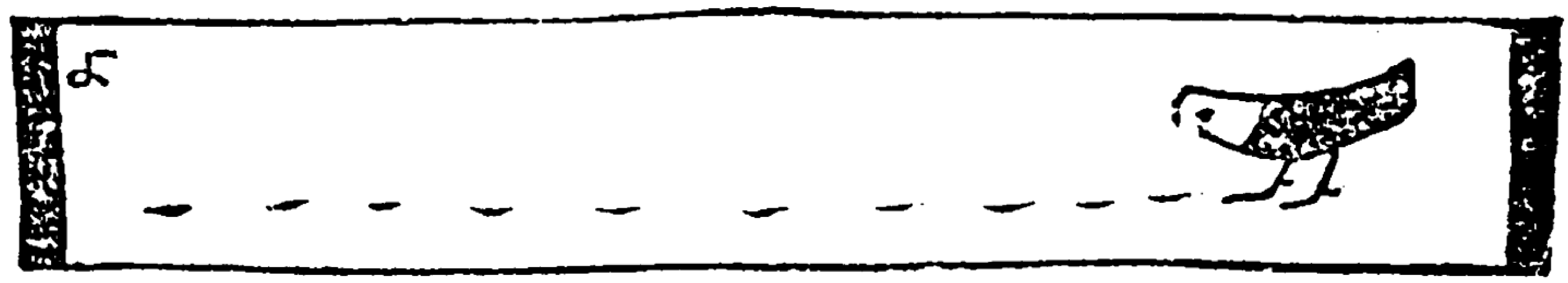
「今歸つたよ。」と言つて笑ふのが常だつた。

今夜は妹の顏を覗かうともしない、側に居るのさへ忘れて居るやうな自我の強い顏をして兩手に長くのばした足を押へて脊を丸くしたまゝ、凝と考へに沈んで居る。お露はとり殘されたやうな淋しい氣がした。

十分、二十分、三十分、父親はやつと眠に落ちたらしい、お露は聲を呑んで泣いて居た。

文壇似たものづくし ●●●●●●●●

▲北原白秋氏の顏と、若山牧水氏の顏▲島崎藤村氏の文章と、窪田空穗氏の文章▲スバルと、青鞜▲德田秋聲氏と、德田（今は近松となりたれど）秋江氏▲一葉女史の短篇と、森田草平氏の短篇▲與謝野寛氏の筆蹟と與謝野晶子夫人の筆蹟▲岡田八千代女史と、長谷川時雨女史▲後はおひ〳〵。



眺望

江森美子

小鳥等の聲をきゝつゝ安らかに冬を眺むる日向ぼこかな

たぐひなき誇りの宮に住ひつゝ神のやうなる夢を結べる

甚奥の惱みに捧ぐ君が子の貧しき胸を憂ひ給へな

母よ笑めり我が形のみ前にして安らかなりやみ心のうち

不可能の夢をしぞ追ふ若き子ははるけき島に王たらんなど

神よいかに眺め給ふや恐れつゝそむける子等のこのうたがひを

仰ぎみる若葉姿のきよらさを涼しき眼してよろこべるかな

あらいつか夢の一つは殘骸と冷えてしりへに横たはり居ぬ

白駒よわれ指揮すべく銀の杖にぎりて立たばわが前に來よ

ことごとくひほんに生ける少女なればすべてをあげて爭はんまで

ひなのごと家作らせて眺めたき親の願の哀なるかな

何ゆゑぞ妻てふものを眺むれば偶像のごとく力なきかな

少女子は死すよりてはき悲みの人妻の上にありと思へる

甘きもの胸にひろごり微笑めばあとかたもなき春の室かな

春の夜や甘きうれひにはく息はうす紫にかをりゆくかな

髮結ふ手の力なく白うしてしきりに香ふ沈丁花かな



曉の第一步

長曾我部菊

▲此の日のはじめに

今日は何をしようと私はノートに心の向つた時、先づ自分の曉の一步を如何に踏み出すべきかと手を胸に置いた。今日は何をしよう。私はかう思つて眞面目に熱心に、ひたと「時」の響と速さとに耳を任しきつて、自分の生活の貴重な一小區劃に對して、いつもの通りに考へる事の出來ぬのが限りも無い喜びであつた。

何を今日私は爲ようか‥‥戶外はいつもの朝の爽和した透明な雲の色とは事かへてミルクでも絞り掛つた樣に曇つてぼんやりと霞んで居る、今日は曇りである。曇つて居る日と晴れて居る日とで、私は可成自分の心持が違つて來る。晴れて居る日は身體を努めて勞する事の出來る、積極的な、外へ外へと渦卷き立てる樣に發展させ、膨脹させる樣な氣持で仕事に當りたいと思ふ。曇つて居る日には保守する樣に心を落付けて、凝乎と事と物との焦點に感情も意志も熾烈に集中させて、而も靜物畫の樣に平穩に暮して居たいと思ふのである。――そして今日は曇つて居る。曇つて居る日は畫室で勞作に從ふ心持の樣に讀書の三昧に入るに極めてふさはしい。肘をそつと机にかけて瞑想するにも、空想の羽根を伸して廣い精神の世界を逍遙ふにもふさはしい。周圍には沈思するに頃合の軟らかい刺戟の小小な、光を氣持よく調節した空氣が私を取り卷いて居る。此の空氣の中に居ると云ふ事が恰度自分の持物である安樂椅子の上にそつと寢て溫感を味はつて居る樣な一種の快感を感じる。

雨の降る日も私に取つては徒費しやすい無意味な日ではないのである。雨の彼のどう〱した音、ざあざあと襲ひ掛かる音、がら〱と亞鉛屋根を叩く音等を聞いて居ると、私の身體は曇り日の樣に靜座して居つても、私の感情は掩ふ術もなく上騰していつて、胸の中に日頃沈澱つて居る青い心、赤い心、黃色い感情や

灰色の心持、若しくは白く燃える樣にいら立つ情感を有る限りはなげ出して了ひたい樣な調子の女子になつて了ふ……。

そんな時、私はペンの先の一點に、自分に精力の出る丈はさらさら〱と走り書きをして行つて、手が勞れ切つた樣になつて「完了」と二字を認めて淡く微笑を頰に作る時の快味を沁々と味ふ事が出來るのである。

雨が降つた日には私は眞に精神が自由にかけめぐる時である。それで地球が乾燥くまい乾燥くまいとして雨露を待ち望む樣に、私の心も自分の硬く剛ばらうとする感を溶き、落ちて行く記憶を地平線に呼ばう、歸らさうとする希望から、雨の降る日の都合正しく自分の生涯に觸接れて來る樣に願つて居る。



然し今日は曇つて居る。失戀の果のし―んとした寂しい情の霧の中を彳る思出の樣に靜に―然れど爽和な―平穩かな曇り日である。私の心は靜物畫とならざるを得ない。私の指は赤い表紙のページを觸接らなくては堪へられない。而して75のノートにペンがせくにせかれず走らずには居られない。假令纏まるにしろ纏まらないにしろ、何かしら懷つて見、考へて見、數行をし、省略をし、自

己に對する、歡迎の念を起したり、懺悔の情を起したりする一日の計畫が、殆ど衝動的に湧いて來る。……そこで私は今日一日の生活主義を理解する事が出來た!!私の心は閃きかへる。

私は書物を讀まう!!

私は反省をしよう。

私は『瞑想』と『今日』とを引きまとめよう。

絕對の――無垢な滿足は其の結果に附隨する事も確信する事が出來る。（三月二十九日）

△寫生した五月。――

△檜や櫻の新緑の中に吹き流しと鯉幟とが三本立つて居る。飾の矢車に日がくわつと照り、きち〳〵〳〵と風に廻轉れる矢車の音響が空から地の方に落ちる。今日は眞實に完きてと璧玉の樣な新緑の美しさを吐く日である。

△昨日一日の空風が今朝はしめやかな新緑の雨となつた。寢て居てガラス戸ごしに眺めると麥畑の中の亞鉛屋根の家がぞく〳〵する程雨に濡れて居るのが茫乎と浮く樣に見える。庭木の松の傍に見える紅い色は躑躅らしい。

△正面の子爵の家をいつもの樣に私は眺めた。日はいつぱいに子爵の家を溫めて居る。門に並んで生えて居る若楓が僅かの風にもまれてざわ〳〵して日の光を反射して居る。水から飛び上つた小犬がぶる〳〵と胴顫をして雫を拂つて居る樣だ。

△三人の可愛い子達に匙で西洋皿をかち〳〵と鳴らしながら、苺をすりつぶし〳〵て食べて居る。牛乳と砂糖とがざつくり掛つて居る。其の汁が苺の赤い汁とまざつて濁つた桃色に見える。甘い強い苺の匂が漂ふて居る。

△白い晝顏の花が二つかなめ垣からぽつかりと咲いて顏を出した。湯上りの女の肌を思はせた。

△花壇は草と花とで賑かである。昨夜の五月雨に土が甜められた樣にべつたりして居る。一尺程の薔薇の木の頭に紅い芽が萠いた。少し開いた嫩葉の上に露がたまつて居る。赤い牛肉の塊の上に白い砂糖がかゝつた樣である。きりん草の葉も水々と大きくなつた。

△隣の大家さんの垣根にある梅の木に七つ程の青い果實が膨れる丈ふくれてそれに紅味がぽつと上つた。其の一つが我家の方にどうしたか落ちた。くろばあの葉の上にころがつて居るのを氣持よく眺めた。



女優の情操

森律子

女優となりまして、何が尤も辛いかと申ますと、節操を守るといふことでございます。

能く新聞や何かで、あらぬ噂を立てられますと、私は口惜くて仕方がございませんけれど、それでも私は決して反感を抱きません。昔の譬にも人を見たら盗賊と思へと申ますが、私は然うは思はず、凡ての人を善人だと思ひたいのでございます。狭量では世間が渡れません、女優の節操云々のことなどが、新聞や噂に聞きましても、彼はあゝいふ標本を作つて、警戒してゐるのだと思ふばかりでございます。

斯う云ふ職業をして居りますと、さま〴〵な人が、さま〴〵な方面から、手をかへ品をかへて誘惑しよう誘惑しようと試みるのでございます。親戚の者や、友人の良人などゝ歩いてゐても、をかしく思はれるのでございますもの、迂濶に他人と話も出來ないやうな譯でございます。

誘惑にかゝらぬやうにするには、誘惑と云ふものゝ性質を知つてゐなければなりません。女子が脆く誘惑にかゝるのは、男子の用ゆる巧妙な手段を看破るだけの智力がないため、知らず識らず其陥穽に罹るのでございます、素より本心には強固な意志がなければなりません。而して物を判断する智力がなければなりません。可成意志の強いものでも、誘惑に罹るのは、智力が足らないからで、其様子を見て判断する丈けの自覺が出來てゐないからでございませう。此方面に於て今までの婦人は、其智力、判斷力の眼を閉されてゐたの



でございます、これからの婦人はそんな事では危いと思ひます。

私は親の名を辱めないやう、自分を卑しめないやうそれを一つの理想として、あらゆる誘惑に克つと同時に、また豫め誘惑を避け、誘惑を遠ざけることを考へて居るのでございます。ですから危險だと思はれる場所へはなるたけ近寄らぬ方針を取つて居ります。

萬一誘惑がましいことを男から言出された時には、早くその話が先方の心を納得させて、其誘惑を消滅させるやうにいたします。それほど私の事を思つて居て下さるならば、何うか私を可憐だと思召して、汚らはしい關係だけは斷然謝絶いたしますと云ふやうに、能く理解して再びそんなことを言はないやうに、男子を遠ざけるやうにして居るのでございます。

女優だからとて節操を疑はれる理由はございません舞臺の上では何の役をいたしましても、それは模倣でありまして、模倣則演技でございます、演技の巧拙は私共の生命でございますから、改めて兎や角申すこともございませんし、女優だからとておてんばだと速斷される理由もないやうに存じます。

久保田萬太郎氏よりの來書

「女子文壇」たしかにおうけとりいたしました。實は今日まだあれを頂かないうちに、わきの雜誌を見て、これは手紙をさしあげなければならないと思つて今歸つてまゐりましたら、丁度家へ屆いて居たのでご座います。

讀んで見ると、たいへん私がお話した事と違つて居りました。要するに、私のお話の仕樣がわるかつたからなんですが、私が信州へ行つたといふ事は間違ひでご座います。私は小田原と申したつもりでご座います。私はまだ信州といふ所へは一度も行つた事はありませんが何んだか邊鄙な嫌な所のやうな氣がして大嫌ひな所でご座います。一生行くまいと思つてゐる所でご座います。それから玉子と野菜とで暮したなんて云ふと、たいへんしほらしく聞こえますが、決してそんな殊勝なことぢやあないので。この春小田原へいつた時なんかは三度〳〵のお膳の中へ、玉子燒とオムレツとを代り〳〵に缺かさなかつたと云ふお話と肴を食べないといふ事の序に鳥渡したばかりなんでご座います。

それから紅茶は大好きでご座いますが、珈琲は嫌ひでご座います。殊にパウリスタの珈琲なんかのやうなのは見たゞけで澤山になつてしまひます。日本のお茶は飲む事は隨分日に何度となく飲みますけれど、別に好きといふのではご座いません。勿論これは當り前のお茶の事で、薄茶のなんのといふ種類のもの丶事ぢやあご座いません。時々意地の惡いひとにつかまるので、それらの種類のもの丶味だけは知つて居りますが修業をつみませんからやつぱり紅茶の方がうまうご座います。

菓子類を食べないといふのも間違ひです。私は一日も甘いもの丶氣がなくつては居られない人間でいくら齒が痛くなつても、懲りずに甘いものを食べます、餅菓子なら何でも手を出します。餡氣のないもんでは切山椒がばかに好きでご座います。——實は今芝居から歸つて來て、甘いものでお茶をのんだところでご座います。

右、なんだかちがつてゐて、氣になつて仕樣がご座いませんから鳥渡訂正申し上げます。

三月三十一日夜十一時

人間の體內に生きてゐる蟲



澤田順次郎

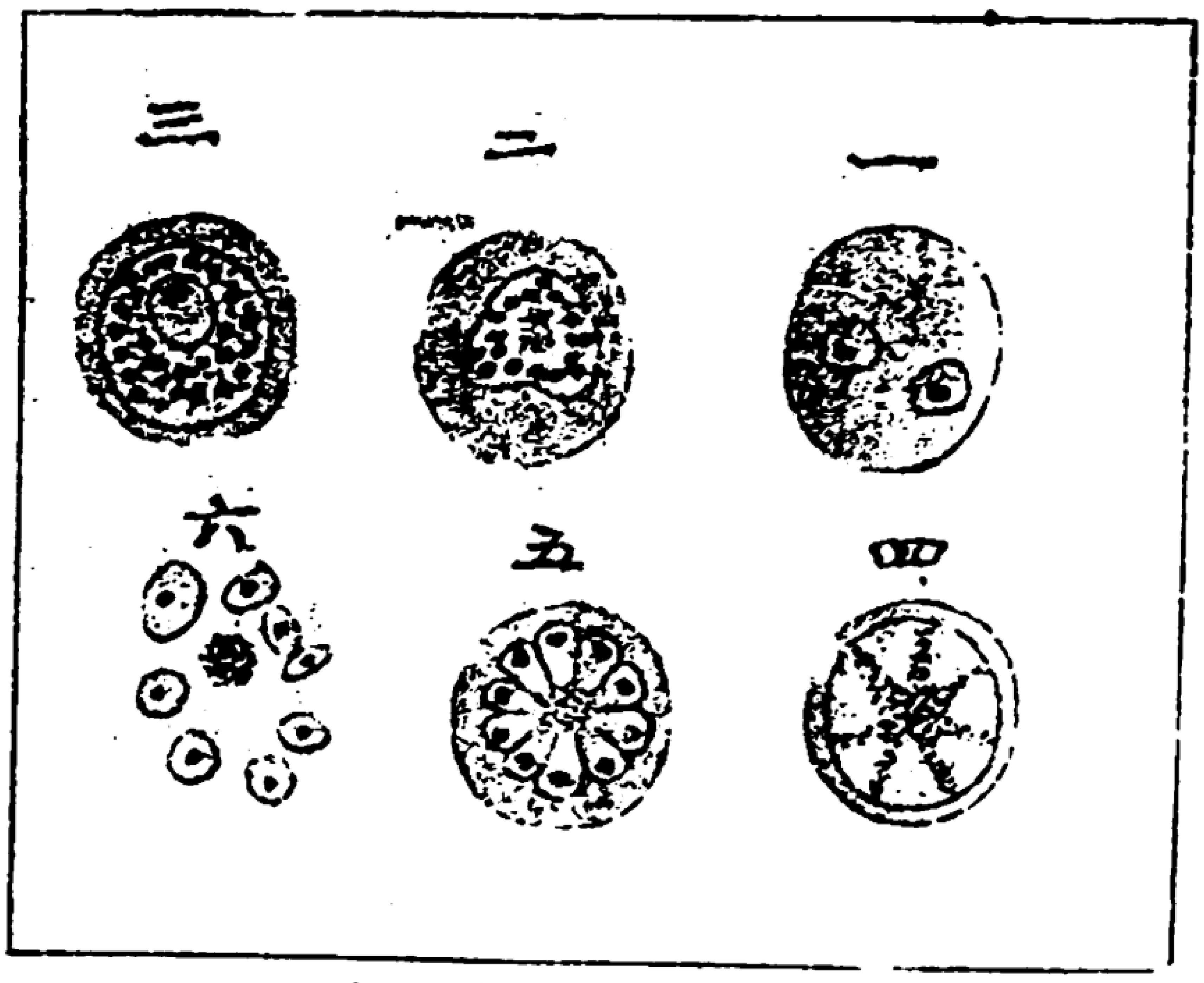
(一) 恐るべき寄生蟲

人の體內に棲息して其の養分を吸ひ、或は其の血液を吸收して生活する動物は、總べて之れを寄生蟲と申しまして、其の種類は甚だ多くあります。其の內極めて下等で、且微細にして肉眼にて見ることの出來ぬものはプラスモジウム、トリパノソーマ、大腸アミーバなと稱する原始動物です。

プラスモジウムは血球に寄生するもので、それが多く繁殖すると、彼の痲剌利亞と名づくる病氣を起します。痲剌利亞は間歇熱とも言ひまして、殆んど時間を定めて、發作するものですが、それはプラスモジウムに關するのです。此の病氣は日本の內地にも有りますが、臺灣其の他の熱帶地方に多くありまして、アノフリスと稱する蚊が、病毒を傳搬するのです。之れを詳しく申しますと、アノフリス蚊が、痲剌利亞に罹つて居る人の皮膚を螫して其の血を吸ひますと、蚊の嘴にプラスモジウムが附着します。それからアノフリスは

他の健康な人の血を吸ひますと、プラスモジウムは蚊の嘴から其の人の血管に入つて血球に寄生するものです。

第一圖　プラスモジウムの血球に寄生せる狀　數字は發育の順序

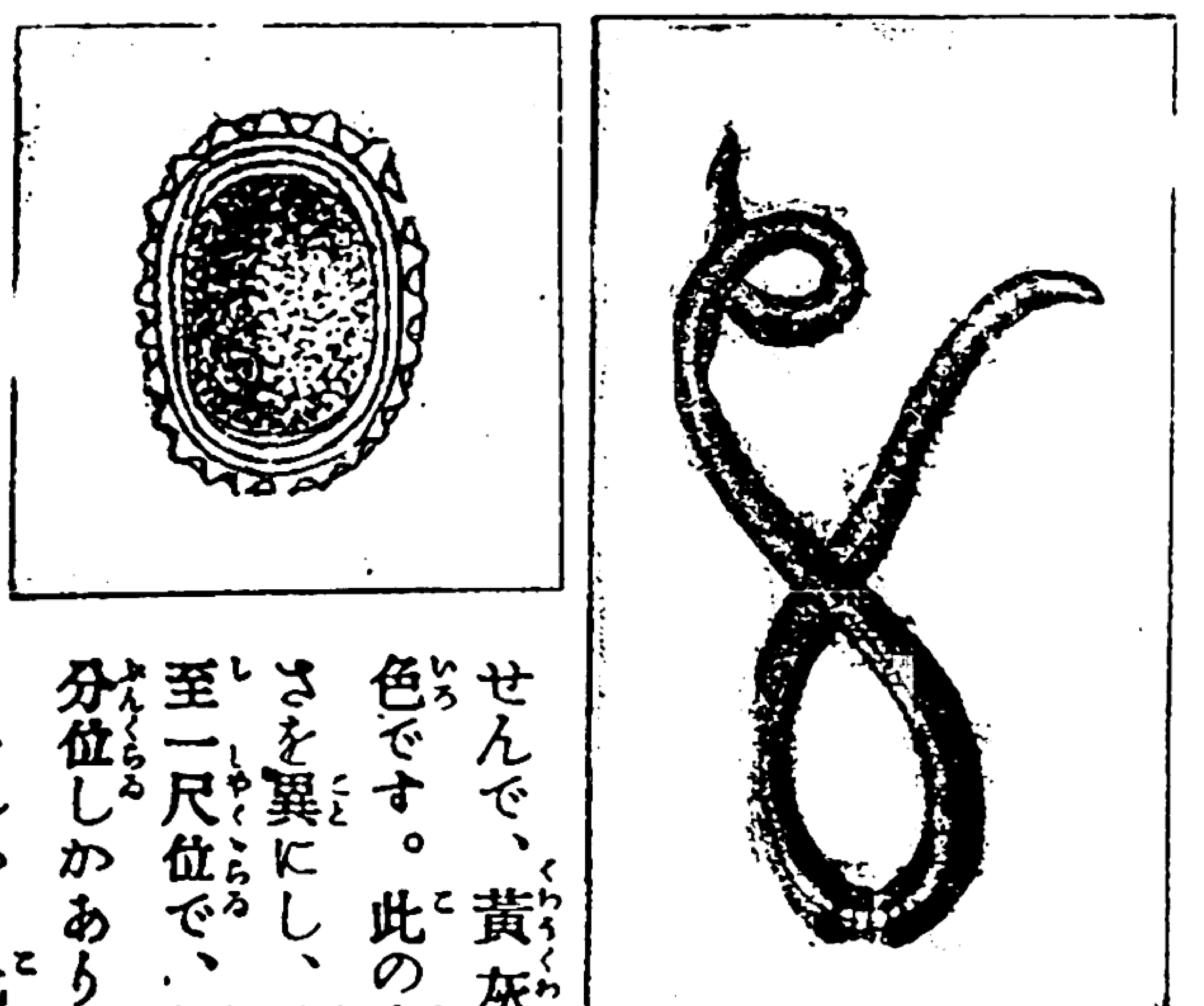


トリパノゾーマは亞弗利加の熱帶地方に流行する睡眠病の病原で、是れが爲に死する者が多くあります。大腸アミーバは人の大腸に寄生して下痢を起すことがあります。此の他人體に寄生して害を釀す原始動物は澤山あります。

（二）種々の圓蟲

前の寄生蟲に比すれば體も大きく、構造も複雜にして尚且寄生々活を爲すものに圓蟲といふ種類があります。今、此の中の主なるものに就いてお咄を致しませう。

第二圖　蛔蟲と其の卵子



蛔蟲。俗にはらのむしと稱するもので、多く小兒の腸内に寄生して居ります。體は圓柱形にして兩端は尖り、一寸蚯蚓に似て居りますが、あんなに赤くありませんで、黄灰色或は肉色です。此の蟲は雌雄大さを異にし、雌は八寸乃至一尺位で、雄は其の半分位しかありません。

それから此の蛔蟲を能く檢べて見ますと、外面に硝子膜と云つて硬い膜を被

ひり、其の下に表皮と筋層とあります。筋層とは筋肉より成れる組織で、其の層が縱に走れるものと、横に取巻いて居るものと二種あります。蛔蟲が腸の內で蠕動するのは、此の筋層の収縮に依るのです。

蛔蟲の體壁を剖きて見ると、口から連續して肛門に達する一本の消化管があります。其の外に生殖器もありますが、肝臓や心臓や肺臓はありません。それで呼吸するには何うするかといふに、體の皮面を以て、人の腸内にある酸素を吸收するのです。

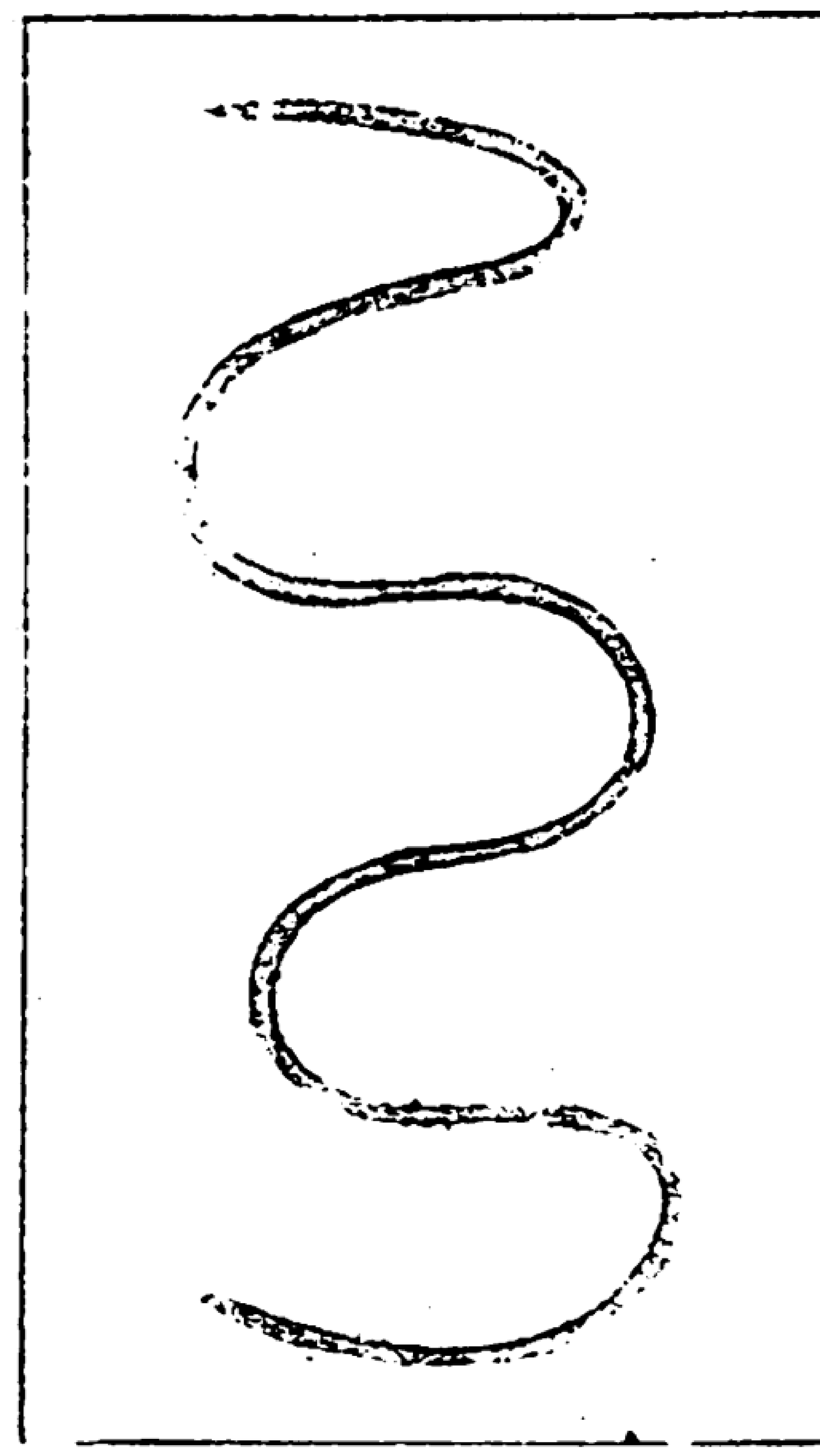
此の蟲の雌は、夥多の卵を產しますが、其の數はザット六千四百萬粒です。其の形は稍々楕圓で、外殻の上に、無數の粒狀突起があります。此の卵は糞便に混じて體外に出ますが、水中に於いて發生して幼蟲となります。之れを人が知らずに水と共に飲みますると、腸に至り玆に成長して蛔蟲となるのです。

蛔蟲は通常小腸に棲んで居りますけれども、屢々胃に到り、或は食道を經て口に出で、或は輸膽管に入つて膽汁の分泌を止め、或は腸壁を穿つて腹腔に出で又は氣管支に入り來ることもあります。斯ういふ害を爲すものは蛔蟲が多數腸内に生じた場合で、多い時は三百匹も生ずることがあります。蛔蟲は大人にもありますが、多くは小兒で、その爲に激烈なる腹痛を起し或は痙攣を發し往々悶絶することがあります。之れを驅除するにはサントニネーを耳掻きで一つを內服すると効驗があります。

蛔蟲に近い十二指腸蟲は長さ六分許りで、雌蟲は雄蟲よりも大きくあります。此の蟲は人の十二指腸に多く、常に血液を吸收して生活して居ります。十二指腸とは胃の幽門に連續せる小腸の一部で、消化作用の最も盛んに行はるゝところです。上記の如く十二指腸蟲は頗る小形なれども、無數に生ずるときは貧血を起して甚だしく衰弱せしむることが多くあります。これに罹るものは老少男女の別なく、誰でも其の卵を含める生水を飲むと生じますから、不潔な水は勿論此の蟲の流行する地方の水は、生で飲まん様にしなくてはなりません。

人血フヒラリアと稱する寄生蟲は恐るべきもので、血管或は淋巴管の中に寄生して、血乳尿或は乳糜尿と稱する病氣を釀すことがあります。蟲體は甚だ細く長さ三四寸あります。其の中間宿主は蚊で、水の媒介により人體に來るものと知られます。

第三圖　人血ビラリア

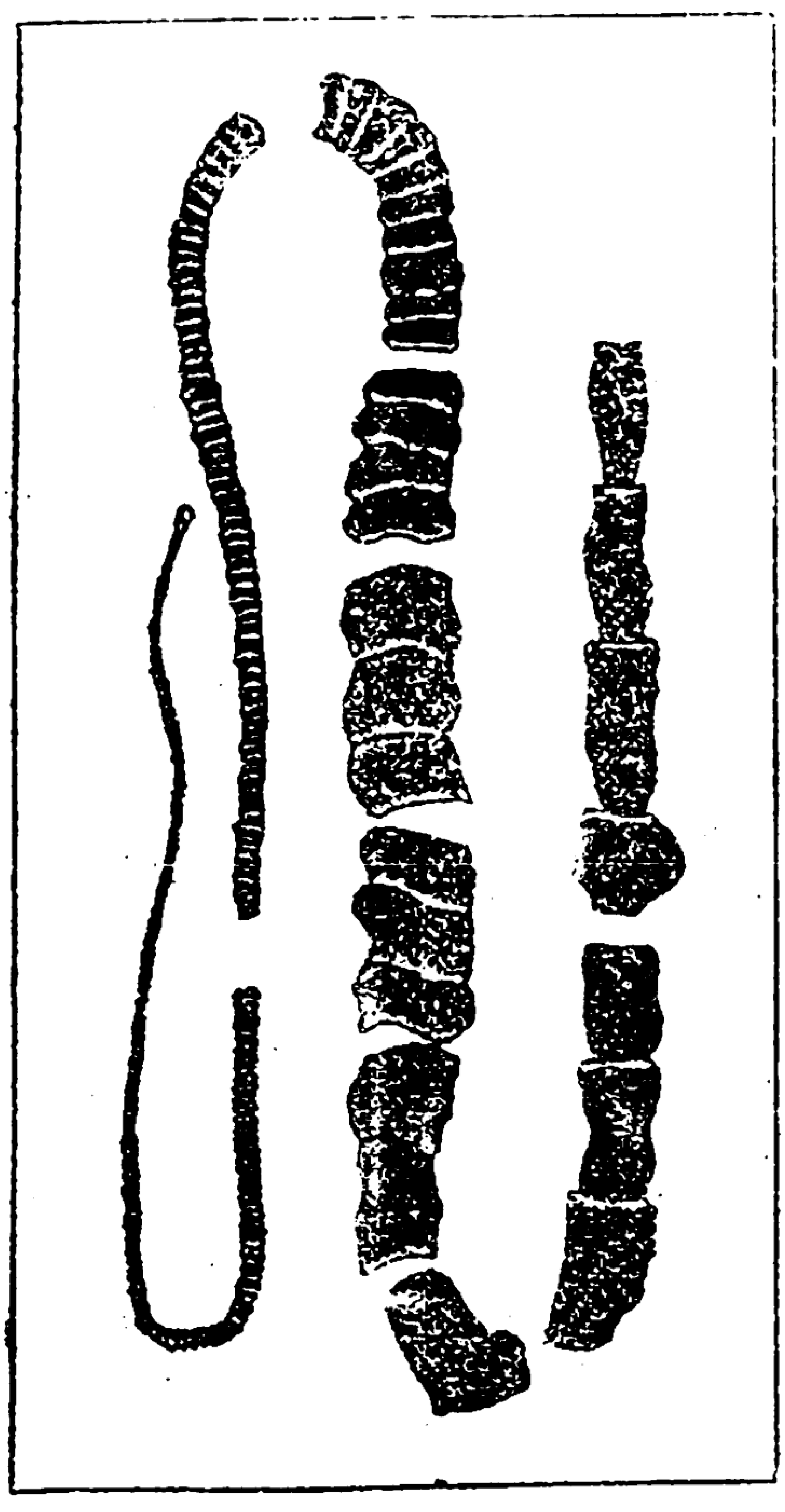


又旋毛蟲と稱する寄生蟲は極めて微少にして、人の腸中に寄生します。其の中間宿主は豚にして、幼蟲は其の筋肉に寄生して居ります。人が誤りて其の肉を生食するときは、腸に於いて成長し無數の卵を産しますが、其の卵は腸の内に於いて孵化して幼蟲となれば腸壁を穿ち遂に胸腹四肢等の筋肉に行き、筋纖維の間に卷旋して其の中に住むのです。是れが爲に筋は激痛を發して、リウマチスの様な病狀を呈し、遂に衰弱して死することがあります。

（三）厭ふべき絛蟲

前の寄生蟲は蛔蟲を除く外は皆微少ですが、玆に述べんとする絛蟲のみは甚だ長くして人の腸に寄生して

第四圖　絛蟲

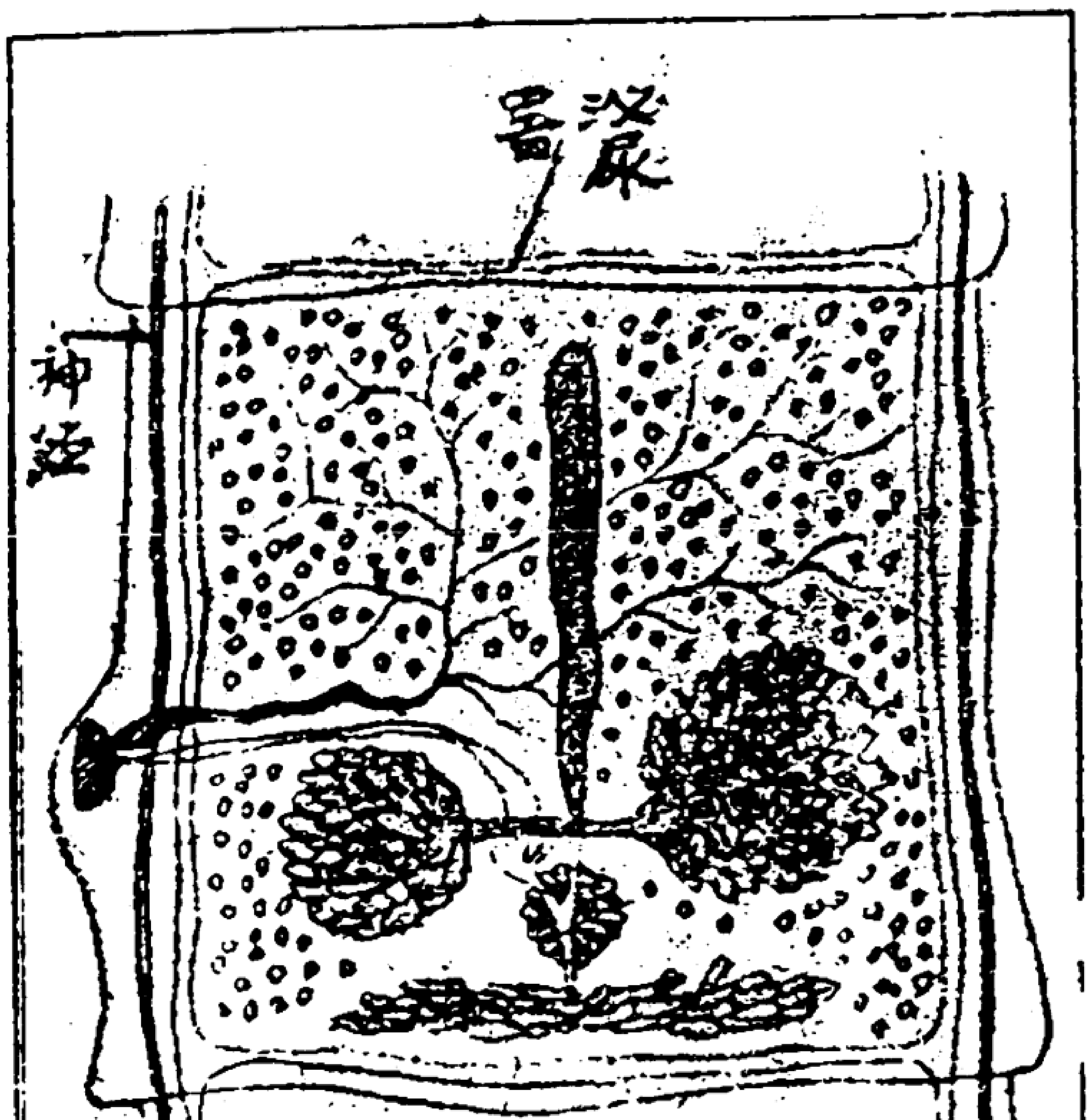


居ります。是れに三種の別がありますが、何れも數多の扁たき片節から成りて、恰も眞田紐に似て居ります體の一端は極めて細くして絲の如く、其の末端は少しく脹れて、針頭の如くであります。是れは絛蟲の頭でこれに吸盤を具へ、或は鉤を並有して寄主の腸壁に吸着する用を爲します。

絛蟲の最も長いものは三丈に達し、片節は頭を去るに從ひ次第に擴大して其の內に各々完全なる雄雌の生殖器を具へて居ります。神經は頭から左右に分れて片節の兩側を走り、泌尿器と云つて、尿を分泌する器管も各々片節に通じてあります。斯ういふ工合に各片節の構造は同一で、半ば獨立の生活を爲すことを得るのみならず、初め頭から芽生して出來たものであるから絛蟲は一匹の動物でなくして、群體即ち數多の絛蟲が前後に繫つて一體になつたものであるとロイカルトと云ふ獨逸の動物學者が一度言ひ出してから、他の動物學者も成る程と合點して一時は絛蟲を群體とする樣になりました。ところが近今亦此の反對說が起りまして絛蟲は矢張これまで人の信じて居た樣に一匹のものであつて、群體でないといふことになりました。

第五圖　絛蟲の構造

（一片節を擴大したるもの）



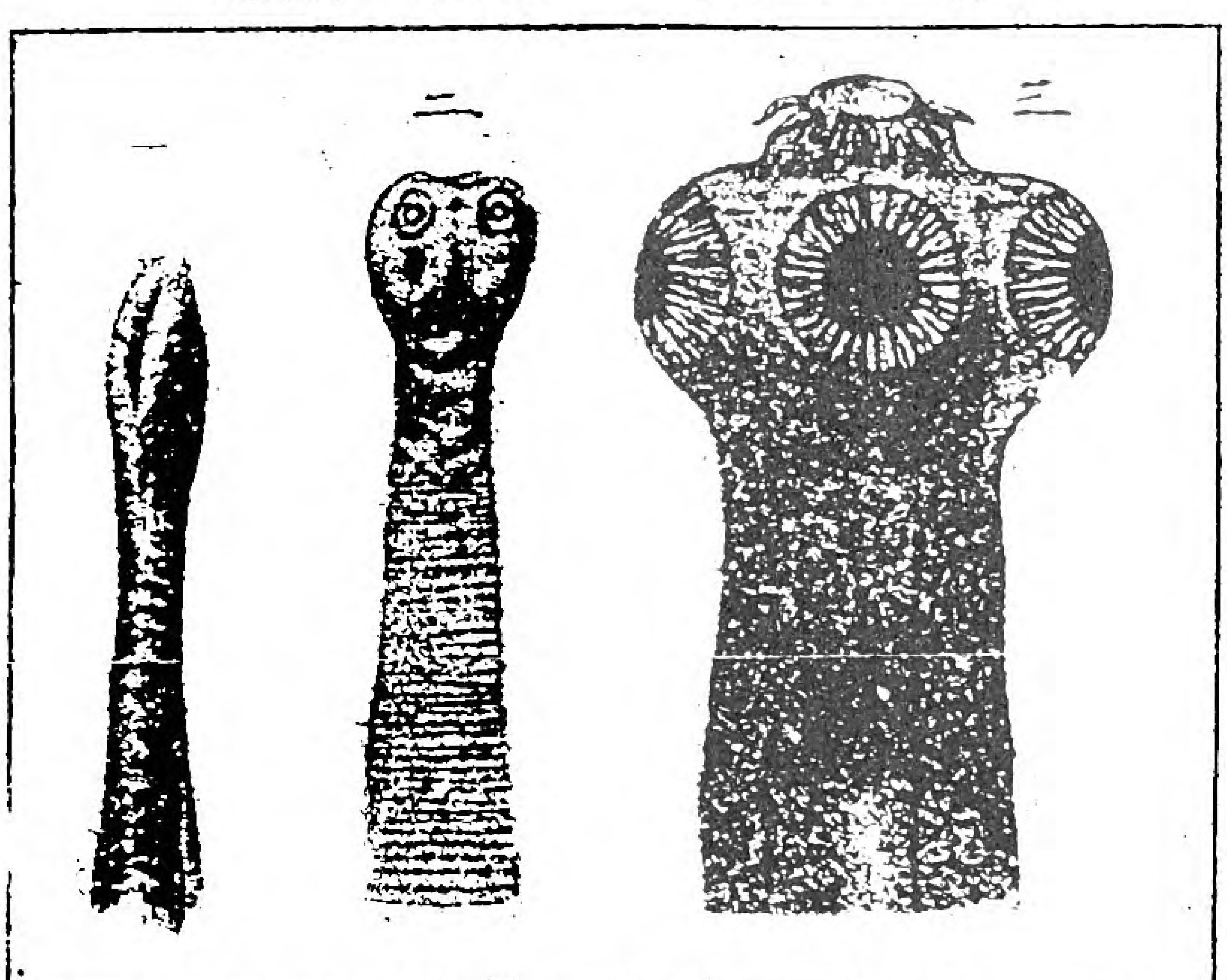
斯んな大きな絛蟲が、何うして人の腸內に生ずるでせうか。昔の人は腹の中に自然に生ずるもので、蛔蟲の如きものも、惡食の爲に自ら腹中に湧き出づるものと信じて居りました。然し今日の學術上から言ふと生物が自然に湧いた例は、未だ曾つてありません。これは人の眼に着かない幼蟲なり、或は卵なりが、飲食

物と共に外部から、體内に入つて來たもので、決して自生するものでありません。然らば絛蟲は何ういふ狀態で人體に入つて來るか。今、其の徑路をお咄し致しませう。

體内に於いて絛蟲が成長しますと、其の片節中にある卵は成熟して、腸内に排出するものもありますが、種類に依つては卵の出る孔の無いものもあります。さういふものは片節が離れなければ、内の卵を出す譯に行きませんから、片節は自ら離れて體外に出でます。然し此の片節の分離するのは、卵の排出孔の有無に拘はらぬから、何れの絛蟲も成熟すると、分離して出ます。此の一個の片節中に存する卵の數は數千萬であるから、全體の片節に含まるゝ卵は數億の多きに達する譯です。動物中卵の最も多いものは絛蟲と謂つて宜しい。

此の無數の卵は片節と共に體外に出でゝ、暫時糞便を混じて居りますが、早晩田畠に持ち運ばれて、肥料に供せられます。此の際卵は植物の葉に附着し、或は水中に入りなどして、四方に散亂するのですが、暫くすると孵化して幼蟲となります。然し幼蟲は堅固なる外殼を被むつて居るので、寒暑乾濕共に堪へて永く生きて居ります。其の間に偶々豚或は魚等の食物に混じて其の胃腸に入れば、外殼は胃液の爲に消化して中から幼蟲が出て參ります。此の幼蟲は三對の針を有し、之れを以て腸壁を穿ち、筋肉に達して、そこに潜居するのです。之れを嚢蟲と申しまして、牛豚等の體内にては、是れ以上成長することは出來ませんが、其の肉

第六圖　三種の絛蟲



一、裂頭絛蟲　二、無鉤絛蟲　三、有鉤絛蟲

が人に食せらるゝと嚢蟲は得たり賢こしと人の腸中に入り込みます。そして嚢は消失し、頭のみとなつて腸壁に附着しますが、其の頭の下端から續々片節を芽出して、長き絛蟲となるのです。故に絛蟲を驅除しても頭が腸内に殘つて居れば、それから再び芽生して成長するのですから、之れを根治するには其の頭を全く爲くして仕舞はなければなりません。

絛蟲は體の皮面から滋養液を吸收するので、口及び消化管を缺き、又血管及び呼吸器を有つて居りません其の幼蟲が人體に入つて全く成長するまでには、約一ケ月を要します。

人體に寄生する絛蟲の種類を左に記しませう。

みぞさなだ（裂頭絛蟲）は頭の前端に二個の縦溝を爲せる吸盤があります。長さは一丈六尺乃至三丈位で、各片節は短く幅は廣くあります。其の中間宿主は鮭、鱒其の他の魚類で、本邦人に多くあります。鱒の刺身を食する人は注意しなくてはなりません。かぎなしさなだ（無鉤絛蟲）は前種より稍々短く頭に四個の吸盤があります。其の幼蟲は牛の筋肉中に住みて人體に入つて參ります。かぎさなだ（有鉤絛蟲）は一丈内外にして頭に四個の吸盤と其の頂上に輪生せる鉤とがあります中間宿主は豚で、西洋人に多くあります。此の外狗へ寄生する狗絛蟲と稱するものがありますが、茲へは略します。

（四）危險なるヂストマ

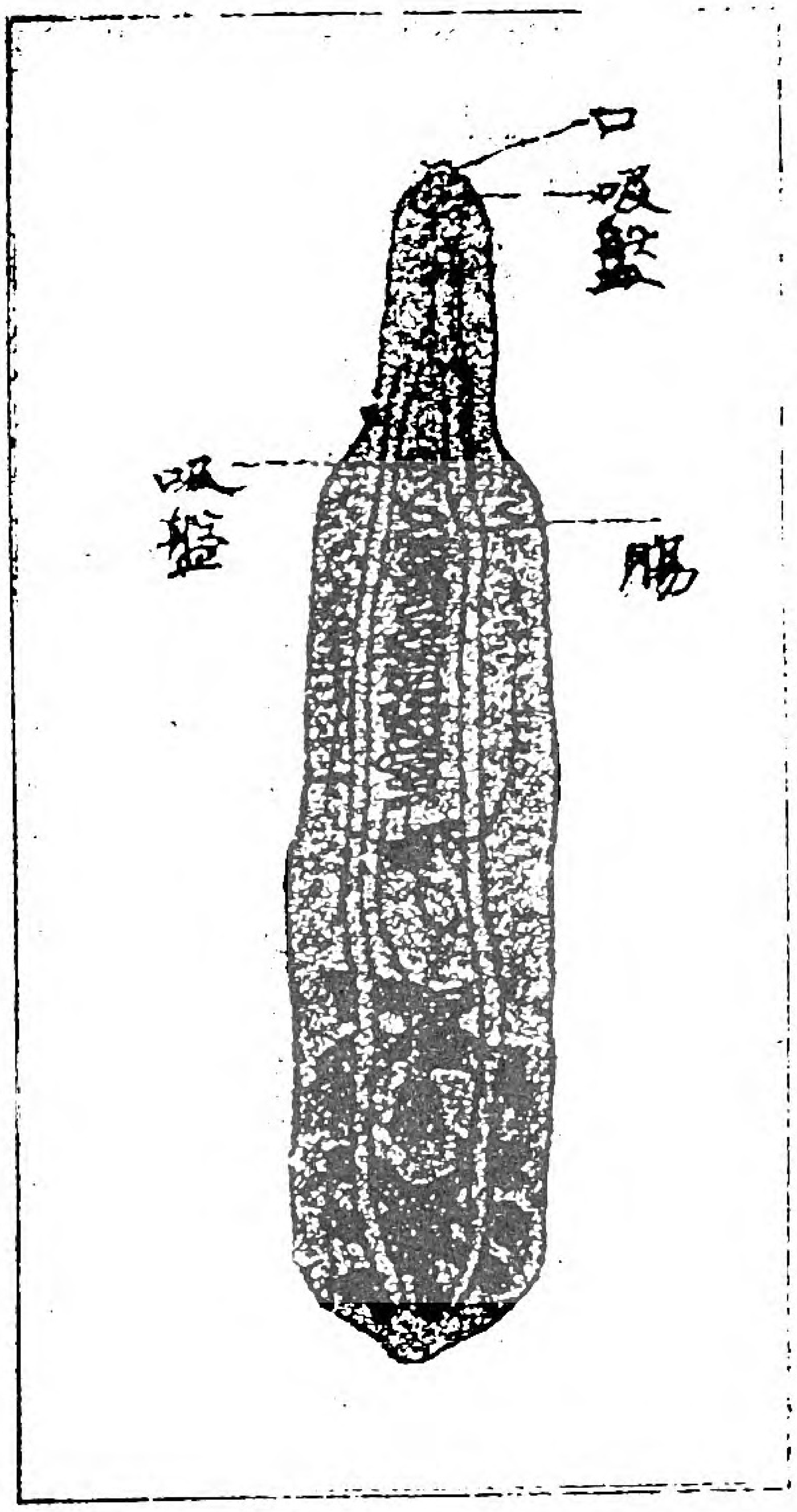
ヂストマと云へる動物は、絛蟲に近い寄生蟲で、人の外家畜の體内に生活して居ります。體は扁平にして長楕圓形となり、絛蟲の如く片節がありません。又、口が腸もありて、口は前端に位し、其の周邊と腹面とに吸盤があります。腸は食道から岐れて體の兩側を走り、其の末端は閉塞して肛門はありません。

ヂストマの中に肝蛭と稱するものがあります。これは主に牛や羊の肝臓に寄生するもので、體の長さは一丈内外に過ぎませんけれども、其の害を爲すことは夥しく流行するとなると、一時に數百頭の牛羊を斃

すことがあります。牧業家に取つては、ゆゝしき大敵です。

ヂストマが縧蟲と同じ様に體中に雌雄の生殖器を具

第七圖　ヂストマ



へて、多數の卵を產します。そこで成熟した卵は、宿主の輸膽管を經て腸に下り、それから體外に出るのですが、水中に入れば孵化して幼蟲となります。此の幼蟲は全身に纎毛を被むりて水を游いで居りますが、蝸牛の種類でものあらがひと稱する貝に逢へば、直ちに其の體内に入つて寄生します。此の際纎毛を脫して體は嚢の樣な形となります。之れはスポロシストと稱するもので、其の體内に數多のレヂアと稱する子蟲を生じます。各レヂアは體の前端に口とこれに連接せる短き食道とを有し、後其の體内に第二の子蟲を生じます是れセルカリと稱するもので、形は蝌蚪の如く長い尾があります。茲に於いてセルカリは初めてものあらがひの體を辭し去つて、暫時水を游いで居りますが、水邊の草葉に附着して尾を失ひ、體面へは殼を生じて靜止して居ります。其の間に葉と共に牛羊に食せらるゝと、幼蟲は殼から出て、輸膽管に沿ふて肝臓に入り、成長して肝蛭となるのです。

斯くの如く肝蛭の生活は頗る複雜で、其の發生經過を概括すると、次ぎの如くであります。

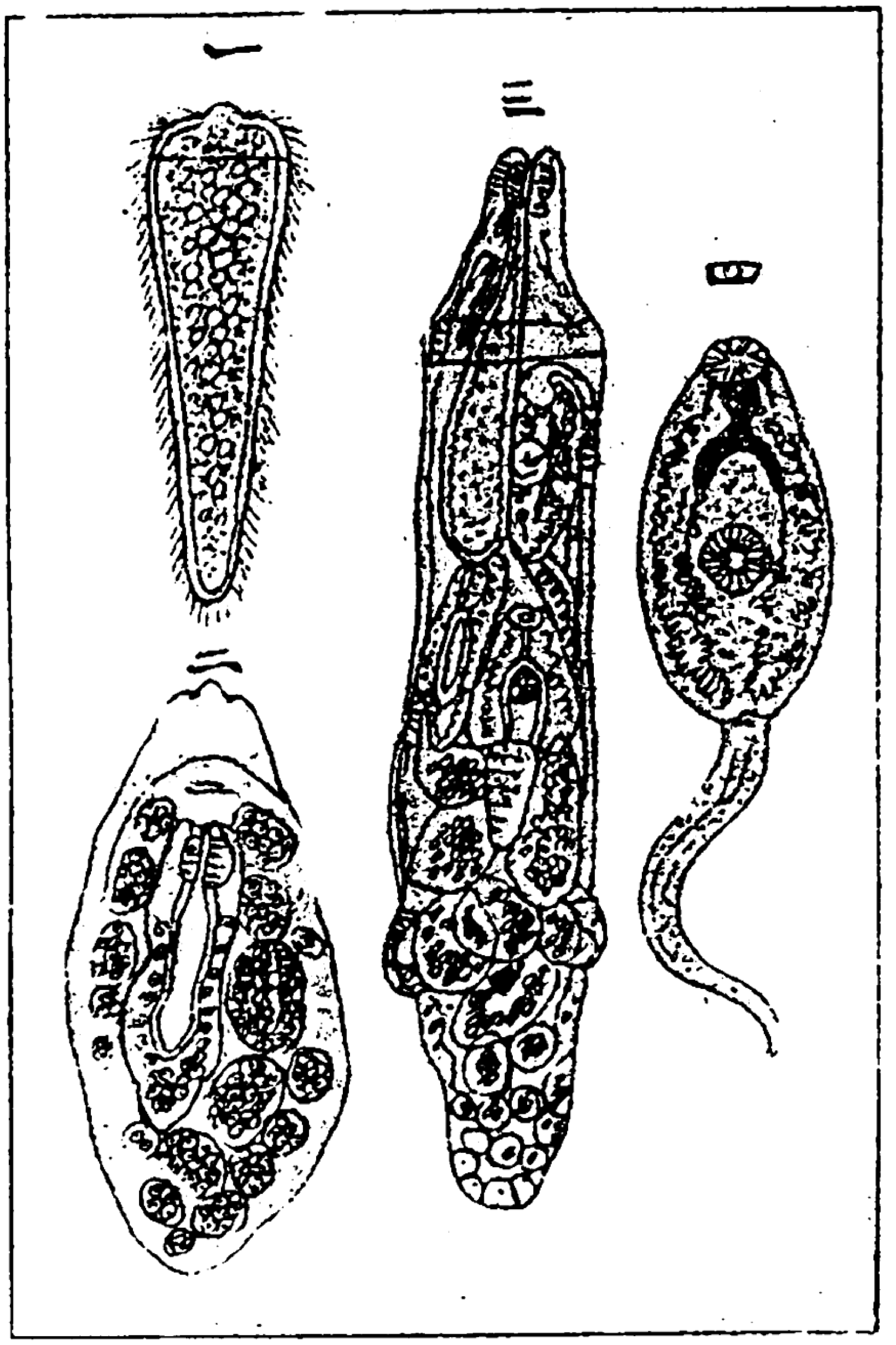
一卵。宿主の腸を經て體外に出づ。

二幼蟲。纎毛を被むり、水中を游泳す。

三スポロシスト。中間宿主の體に入りて嚢狀となれるもの。

四レヂア。スポロシストの體中に生じたる子蟲。

第八圖　ヂストマの發生



一、幼蟲　二、スボワラスン　三、レヂア　四、セルカリア

五セルカリア。レヂアの體中に生じたる子蟲にして中間宿主の體を出で水を游泳す。

六嚢蟲。セルカリアの殼を分泌したるものにして運動せず。

七ヂストマ。宿主の肝臟に入り成長したるものにして、卵を產す。

ヂストマに又肝臟ヂストマ、肺臟ヂストマの二種があります。前者は本邦人及び支那人に多く肝臟に寄生して一種の肝臟病を起します。岡山、宮城其の他の地方に流行する肝臟病はこれです。後者は肺臟に寄生して喀血を起し、爲に肺病となることがあります。此の病氣は熊本、岡山其の他の地方に多くありまして、其の幼蟲が腦に至るときは一種の癲癇を生ずることがあります。

(五) 人と寄生蟲との競爭

ヂストマと云ひ、絛蟲と云ひ、プラスモジウムと云ひ、總べて寄生蟲は人體に害を加ふるもので、人間から見ると甚だ憎むべき動物ですが、然し寄生蟲の方から見ると、別段人を害しようと故意に人體に入つた譯でなく、生存上の必要から自然餘儀なくされたのです。何故といふに斯う云ふ寄生蟲は人や他の動物體に入らなければ、生活することが出來ぬ

からです。人間の生存の爲には、あらゆる生物を害して居るではありませんか。米や麥や野菜や其の他の植物には感覺が無いから、挽かれても煮られても別に苦しいと思はんでせうか、獸や鳥や魚や其の他の動物は何んな苦しい目をして人に食はれるか知れません。此等の動物に若しも人の樣な精神があるとすれば、彼等は屹度人間を以て憎むべき大惡魔と恐れて居るに違ひありません。

然しこれも仕方がない運命とすれば、人間に寄生する害蟲も自然に定まる運命と諦むるより外にありません。斯樣にして人と寄生蟲とは常に競爭して居ることは、戰場で火花を散らして死生を爭ふよりも激しいのです。流行病で夥しく人の死亡することあるのは、戰爭に大敗した樣なもので、敗北が續くと、遂には其の國が亡ぶ樣に、社會も寄生物の爲に亡ぼされることが無いとも限りません。

何うしたならば此の外敵なる寄生物を征伏して吾人の健康を保つべきかといふに、第一に衞生を守ることです。寄生蟲は多く飲食物から入つて來ますから、食物や飲物に注意して、何でも一度熱を通したものでなければ、口に入れない樣にしなくてはなりません。それから淸潔を保つことで、特に手は食事前に必ず洗ふ樣にすることが肝心です。小兒に蛔蟲の多いのは、小兒は何でも口に入れて遊ぶ習慣があるからです。（完）

配偶選擇の變化

社會の進步と、經濟的關係とが、女子の位置を高めて前に權力の無かつた女が男を支配する樣になれば、再び女が男を選擇すること動物の如くになるであらう。さうなれば男はお化粧をするやうになるであらう、現に米國あたりには女が男を頤で使つてゐる、我が邦ではまだ其處までは行かぬが、女の御機嫌を取る者が昔から見ると著しく殖へて來たことは事實である、ハイカラは此初步と見て可なりである。然し今日の所ではやはり女は男の下風に立つ以上、選擇力は男にあると言はねばならぬ。（澤田順次郎）

耳袋(五) 猿丸太夫

▲文界に於ける長野縣が人才淵叢の地たることはよく人の言ふ所である。敎育界にもそれが多いのだから驚く、松本市の三村壽太郎といふ小學校長は、いかなる宴席にも市長の次に座を占めて、商業學校長、中學校長等を眼下に見下し助役にも市參事會員にも三ッ指を突かせて居る聞けば市政の大部分にまで容喙して猛威を振ふ準市長殿ぢやとやら、長野女學校長の渡邊敏翁は日本一といふ篤行家、或時女學生の辨當を溫める器械を買入れて、事後承諾を市會に求めたするとそんなものは無用だとの議論續出、アワヤ否決せられんとする形勢、番外席に在つた渡邊翁は泫然として涕淚の下るを覺えずアー〱こんな人達の子供等は可愛想だと獨り言した、其眞情に動かされて遂に全會の贊成を得て仕舞つたとは同市の一つ話、それよりも尙隱れたる偉人は、岩垂今朝吉といふ上諏訪尋常小學校長一郡誰も先生々々と敬ひ其名をいはず、新任の郡長は必ず先づ此人に禮すといふ勢。諏訪女學校長を兼ね、諏訪中學校の敎諭を兼ねて居るが此人だにあらば一校半靜、門下より出でたる學士幾百人、博士十幾人、今も尙ほ陰に舌を捲いて先生は學者だと敬服して居る。先生而も尋常師範を出でたるのみ、其後三十幾年ツイぞ先生の勉強せるを見たものもないとか。松本の女子師範學校には河野齡藏といふ高山植物學の專門家あり、堂々たる王侯の如き邸宅を構へ、庭内に各樣の模型高山を造つて、幾千種の珍植物を培養して居る。

▲『福島新聞』縣下の名木を擧げて都々逸つきの説明をやつたのはどういふ量見か知らねど、石城郡窪田村の妹脊の杉ヒモドキの杉の條に、「私とお前はイモセの中よヒモをトクのは無理かいな」とある、記者先生一生の智惠をふるつたのであらう。

▲一生の智惠といへば大阪北區權現町の青年會の連中、十二月の歌といふを作つて町歌にするからと添削を警察へ願ひ出た、四月「人々や月に一度の會がある、聞いてドナタも感心をせよ」五月「でけど(御苦勞にの意か)に署長樣やら警部樣出張下さる會のため也」八月「腹立や喧嘩も賭博も打消えた青年會のお蔭故なり」十一月

「下々も憐みまします會長樣幹事樣やら役員樣やら」

▲山形縣上の山町の或小學校の生徒で、十二歲なる女の子が、近頃非常に衰へて、日に〳〵窶行く狀を見た受持の女教師が、密と理由を尋ねたが、始めの程は何でもありませんと隱し立てたが、賺しつ宥めつ問ひ訊すと、生徒は泣く〳〵お母さんが死んでから、怖いお母さんが來て、晝間は晝間と色々辛いことばかり、夫れにお父さんが家に居ない晩だと必らず怖い〳〵幽靈が現て赤い大きい舌でヌラ〳〵と顏中を甜め廻し、悲し――い聲を立てゝ身體を爪ります……と果てはワナワナ慄えて泣き出した、女教師も堪り兼ね目縁を拭きながら、夫れではお父さんの居ない晩を教へて下さい、私はキット其の變化を退治て上げるからと慰めて返した。二三日過ぎて其の父は遠方へ出掛けたと言ふので女教師は時刻を圖つて戸外に樣子を覗ふと、紛ひもない少女の聲で、怖い、痛いと泣き出した、女教師は障子を蹴破つて變化の首筋を取押へると、南瓜へ燒麩の目を付け、人參の角を生し、蒟蒻を赤く染めて溫めて舌に付けたものを被つての繼子虐めと判つた。

▲沼倉ふく子の話に、畠を堀つた日には鍬を、米を搗いた日には臼を、土を運んだ日は畚を書いて心覺えにする男があつた。日雇取だといふ、しかしての男半日米を搗いた時は臼を半分書くにしても、東の家へ行つたか西の家へ雇はれたか、それとも權兵衛に賴まれたか、太五作に呼ばれたかをどうして其日其日に書き分けたらう。北八が伊勢の宿屋でお產をした時くすりを盛つた醫者樣ぢやあるまいし。

▲岡山生れの今年十四になる女、芝居が見たくて堪らず、大阪迄逃げて來て、さる理髮店の一面識もない職人を見るなり「兄さん、私は妹で御座んす」と芝居の眞似して泣きつき、無理矢理妹になつて、ある處へ子守奉公に住み込まして貰ひ、男に兄さん〳〵と附き添ふので、遂々警察へ引出された。

▲馬來半島一帶に住んで、尤も生活程度の低い土人の妻となつて居る日本婦人が目下五百人程あるさうだ。何故そんな汚ない貧乏世帶に滿足して、國も父母も兄弟も忘れ果て、檳榔樹の實を嚙つて、平氣に熱帶生活を送つて居られるかと云ふと、第一、馬來人は一般に婦人の肉體的慾望を滿足せしむべく巧妙の人種であるといふ事、第二、馬來人種は巧みに媚藥を使つて、終世忘る可らざる戀愛心を起さしめるといふ事、第三は九州邊の無教育の女が、捨鉢で止つて居るのだと云ふ。

▲人の金を使ひこんで拘引された京男、女房に會ふて監獄へ行くのに寒いから宅から衣物と外套と首巻とを持來てくれと言ふと「ヘン惡いことをすれば當り前だ、物見遊山ぢやあるまいし、體裁なんかいるものか十年なりと二十年なりと悠くり行て來るがよい」と言ひ放ち、折から召喚されて來合せた待合の女將を捉へて「ようまア、うちの人を世話しておくれた、難有う禮をいひますぜ」と毒ついて立去つた。



▲娘夫婦は毎日牛肉で飯を食ふが、自分には菜を與れぬので、鹽ばかり舐めてゐる、コレでは生甲斐がないから乞食に出たい、乞食の鑑札が欲しいと願ひ出た爺さんがある。警部補持て餘して『おッさん何ぼ警察でも乞食の鑑札は下げられない』と斷ると『ヘエ新刑法から其樣ことになりましたか』と心得た顔をすると、年寄の癖に新刑法なんぞを振廻すから聟夫婦に憎まれるのだと叱られ、結局警察から夫婦の者へ爺さんにも牛肉を食はすやうに諭して

やる事とし、漸とのことで引退らせた大阪の事。

▲徳島縣那賀郡板野吉見重義といふ男、家さへ拵へれば貰はれる筈の女が、他へ奉公に出たのを恨んで、殺傷した揚句、自殺をやりかけたが、二人共死なず、男は殺人未遂罪に問はれて懲役二年の宣告を受けた、女―後藤かのは男の切なる情に動かされて裁判の定まらぬ前に公然結婚した。三月二日大阪控訴院に公判有り、かのは田舍女の扮裝取つくろはねど、小柄にて愛嬌あり、昔を思出の顏の疵も全く癒えて、其下手人なる夫重義と並んで法廷に立つ、伏見裁判長は「お前は誰かに脅迫されて心にもなく夫婦になつたのではあるまいね、又今後いつ〳〵までも添ふて行く氣があるか」と問へば「誰にもおどかされたのではありません」と伏目勝に答ふ「併し鏡でも見て其顏の疵が映つた時、今の夫が恨めしいといふやうな氣は起りはせぬか、眞底から夫は可愛いと思ふて居るか」と念を入れられて「恨みとは思ひません」と袖を顏に當てゝ嬌羞む。斯くて鈴木檢事の論告に移り「重義がかのを殺さんとしたるも、要するに可愛さが嵩じたものに過ぎず、若氣の戀に心が狂ふて、刄を擬するに至りたる行爲は法の許さぬ處なるも、被告の衷心は可愛い女と添はれぬほどならば、寧そ女も殺し自分も死なうと覺悟した理かな戀が動機である、斯て女は蘇生後男の熱烈な情に絆されて眞心からの愛を捧ぐるに至つた相思の情交、而も兩親まで容した公然の夫婦となつたのである。此の如く當の被害者なる女さへ露ほども男を恨みず、却つて之を庇うて居るこれこそ眞に人情の然らしむる處で、法律は斯る被告人に對して、其情狀を酌むべく、或仁惠處分を規定してあるので、之をしも尚ほ強いて監獄に送るは法の精神に悖り、且被害者たる女の堪へ得べき處でないから、宜しく前判決を取消して、二ヶ年の懲役に處し五ヶ年間刑の執行を猶豫せられたし」と粹に捌けた論告をなし、裁判長は又將來行ひを愼み仲善く添ひ遂ぐべしと訓戒した、重義夫婦は嬉しさうに相携へて退廷した、本件の如き一度絶息するまでに至れる加被害者が其後間もなく夫婦となり仲睦じく暮せる事例は未だ曾て無しといふ。涙のこぼれるやうな話だ

▲先ごろ來れる大觀光團中に、ラックと云へる米國陸軍大佐あり、肥滿長軀、雪白の口髯自ら永ぎ歷史を語り顏に、今は非職の身なるも、態度森嚴なるより團中にても重きを爲せるが、五日一行と共に神戸に上陸し、市中を見物しての歸るさ、米利堅波止場よりラ

ンチに移らんとして過つてポケットに挿みし時計を海中に取落せりコノ時計はニッケル製の片硝子にして、見るからお粗末なるものなるも、其には頭文字にてシー、ビー、アールの三字を金字にて組合はせたる記號を附しありて是ぞ同大佐が寢ても醒めても肌身離さぬ寶なり。謂を聞けば同大佐が、未だ青春の情に其血を燃やせし頃現に連れ添ふ夫人に思はれ末を契りし縁の印にソノ夫人より贈られしものとの事、然れば大佐の驚き一方ならず、早速潜水夫を入れて海底



を捜索せしめしも、日沒時の事とて、つひに在所を發見せず、已むなく翌る日を期し再び捜索すべし、若しコノ時計の出でざる時は、故國に歸りて我を待てる夫人に申譯なしとて太く心配の氣味にて、歸船したるが、六日朝は京都に赴く豫定なるを以て、同大佐の慌て加減一方ならず、一同上陸する約一時間程前より、米利堅波止場に上陸し、血眼になりて心當りを捜索せしめたるも、生憎此日は雨天なる上滿潮の際なれば水嵩高きのみか、海底濁りて暗く、詮方盡き

て見えたる折柄、ニッケル商會の水夫にて木村直太郎と云ふが、傍より其の話を聞き、深く大佐に同情し、其れでは俺がと直ちに眞裸體となりて海中に飛び込み暗き海底を其處此處と潜りて探り廻り、ヤヽ暫く出で來らざりしが、軈てヌッと頭を水面に現はしたり。と見れば有つた、有つたと左手に高く、戀のおくり物は老いたる大佐に捧げられた。ニッケルの時計がニッケル商會の男によつて見つかつたなどもお目出たきなぞなるべし。

▲これも、戀に東西なく上下無しの例に引けるかどうか、常陸に十ほど年の違ふ嫂と逆縁しなくてはならなくなつた男あり。何が嫌といつて、ねえさんが嫁に來た時、おらア尋常二年で、まるで子供のやうに世話になつたんだせ、それを、今になつて一しよになれなんて、嫌なてッたとチヤチヤ張る。家の爲だ、子供等の爲だ(嫂はすでに二人の子を生んだのである)と一家親類が口を酸ぱくしてもどうしてもいやだといふ。さうしてる中に嫂の實家に不幸があつたので、息子殿、嫂と連立つて悔みに行つたら母家の混雜を避けて庫へと案内された。葬式が濟んで後歸らうとすると、皆が泊れといふ。いや歸りますといふのをきかずに、ねえさんなる人と二人を土藏へ押し込んで戸を締めて終つたのである。一夜の監禁はどんなにかおそろしく悲しくつらく且つてはかつたらう?息子殿はたうとう逆縁を肯じた。

▲シカゴのドクトルコットン氏曰く、戀愛が猩紅熱或はインフルエンザのやうに、一種のバチルスに依つて發作するのは最早疑ひもなき事實で、其バチルスが腦を犯して發狂と同一の結果を來たすのだ、其中に醫學が進んで件のバチルスを發見し、之を撲滅する事が出來たなら、男女の結婚は新たなる根柢の下に成立するであらうと。世人は果して氏の所謂戀のバチルスを撲滅し得る時期の來るのを希ふであらうか。

▲岩野泡鳴君が此前女學世界へ屁の詩をやつて記者を仰天さしたとは友人間の笑柄になつてゐるが、私の此話もどうやら抹殺されさうだ。茨城縣稻敷に稻屋の金さんなる者あり、風來山人の書いた屁ひり男ではないが事實屁の名人で、兩手を帶の上臍の脇へ當て加減して押すとぷつと鳴るぷいと鳴る、雄鳴六雌鳴六律呂音に諧ひて、燕のとんでん返し虻の笹渡抔其はお手の物である、言ふ迄もなく病的だから音こそすれ臭くはない。興に乘ると三味線に合て岡崎女郎衆を行るともある

すぐ試みよ

○眉毛口ひげ髪の毛うすき人○御婦人はえぎわのあしき人○やけど切きづの跡毛なき人○皮膚病でき物の跡毛なき人○梅毒其他病氣にてぬけ毛した人○御婦人出産後に髪の毛ぬけたる人○ぬけ毛を止め毛を多くしたき人○其他あるべき所に毛無人薄き人

毛はえ藥の大王 ドンリ

本劑は毛髪專門家**醫學博士リンド先生**の苦心發明せし新藥にして未だ我國に廣く行はれずと雖世界に於ける毛生藥中の大王にして他藥を用ゐて無効失望せる者にもよく偉効を奏す。本劑を患部に塗布する時は忽ち峻烈なる効能を表はし皮下に至りて毛根を刺戟し以て毛髪の發育を旺盛にす。婦人のはえぎわの惡しきを直し毛髪眉毛の薄きを濃くし、ぬけ毛を止め新毛を發するには並瓶を用ゐ、ハゲ無毛等には特瓶を使用せよ、完全なる毛髪を發生し其苦惱を去り幸福の身となるべし。此の如く藥効峻烈なるも劇毒藥を含まず、皮膚を損ぜず、毛の發生すべき所なれば本藥を用ゐて發毛せずといふ事なし。御安心の上一日も早く此新藥を用ゐて蘇生の喜びを得よ●藥價送料共並瓶一圓十錢●特瓶二圓十錢●注意藥價の高きは世にありふれたる無効の藥品と相違し原料高價なればなり。



御婦人方の御顔を汚くする一ツの病氣

其れは第一がソバカスにして顔一面に小さき黒ずみたる點々が何も出來るものである。之をあとをも殘さず奇麗に拭ふが如く治する妙藥あり、其れから又顔一面に小さき吹出物ブツブツと出で、指で摘むと中から白い脂肪の固り出づるもの之をニキビと云ひ治療せずに打捨て置けば慢性となり自然に治しても顔に穴が殘り見苦しくなる　ソバカスもニキビも下記の妙藥にて全治する事は數千人の實驗禮狀等によりて明かなり。

ソバカス取藥 一藥價送料共一圓九十錢

ニキビ取り藥 全藥價送料共七十四錢

東京神田錦町三丁目
電話本局四五六七番
振替東京八六四二番

東雲堂藥房

男にても女にてもでぶでぶと肥りたる者は肥胖病といひ**甚危險**なる病症にて時に**生命**をも**失**ふ事あり　まして婦人の肥滿せるは殊に見苦しきもの故速に全治せしめざる可らず

肥滿病者 やせる藥

郵券二錢封入申込の方には**醫學博士筒井先生**の學説肥滿病自宅療法及其良藥を詳報すこれによりて療養せば速に美容強壯の身とならるゝ事を確證す

東京神田錦町三丁目
電話本局四五六七番
振替東京八六四二番

東雲堂藥房

わきが 根治新藥

わきがを持てる人自分には其程とも思はざれども他人には其惡臭甚だしく同室に坐する事すら出來ざる程なり故に甚だしく人に嫌はれ交際も圓滑を缺き立身出世の妨げともなる。然れども此根治新藥を用ゆれば如何程ノ頑固慢性の者にても必ず根本的に全治し又再發する心配もなく他病に變ずる恐れもなし。他藥にて無効の方も失望落膽する事なく速に本劑を試みて全快の幸福を得よ藥價送料共一圓十錢慢性用二圓十錢

東京神田鍛冶町五番地　**東京藥院**

あざ ほくろ

にきび そばかす ふき出物

色々の藥はあれど完全に治する良藥は無かりし處私は不思議にもふとした所より痕跡を殘さず綺麗に全治する新藥を發見し皆樣に實驗を願ひました處續々根治の禮状が參りました不幸の方は返信料を添へ申込めば御教示いたします●東京神田鍛冶町五　大塚とよ

▶文字に現れた娘時代の表情◀

女子文壇
増刊

娘時代

二百頁美裝
執筆者寫眞入
特價拾錢
郵稅壹錢五厘

—(小說六篇)—
●本郷の兄……前島優梨子
●お奈津……さかえ
●伯母……加藤筆子
●海水浴場の女……千鶴子
●最後の日……月草
●初舞臺……若葉

●あらしの夜……神近市子
●夢二式の眼……初雁子
●火影……若杉濱子
●義太夫を聽く夜……珠野すゞ子
●破れたる友情……初鹿野道子
●月の出るまで……かうほね
●現實から離れたい……ふさ子
●薄明……港の女

●白き手の謀叛者……望月野薔薇
●たゝかひの跡……小宅てふ子

●若きやすらい……ひざくら
●男の手紙……梨花
●面白い月日……胡蝶

●生きた人形……波の花
●十六の娘心……藤田きく
●誘惑に勝つ……しうん子

●娘時代の純潔無邪氣なる日記……拾三篇
●生氣潑溂たる女の和歌……數百首
●課題　わが故郷……わが親友……わが手文庫(散文)……

發行所　東京市京橋大鋸町　女子文壇社

【振替東京壹七貳九番】　賣捌全國各書店

若き婦人の誇

女子文壇増刊 好評

新文章

特價拾錢 紙數二百頁美裝 送料壹錢五厘

◎一呼吸

▲生の斷片
▲覺め際の淋しみ
▲自ら警める記
▲學生の都會
▲初夏の人々
▲寝息

◎轉宅（小説）

◎淋しい道（小説）

◎溫泉宿（小説）

◎七色の虹

○男子の手紙に迷ふ
○不標緻な私の哀愁
○父と娘が別れの涙
○尼になつた若い女の記
○楊子江畔の新婚生活
○落日のかなた
○私の心は破れてゐる
○更衣室

▲梅雨日記
▲姉の家
▲心の離散
▲黒き洋傘
▲別れてゐる間

◎呪ふべき時代
◎年のあらはひ
◎生立のつらさ
◎解けし謎
◎五月の水邊
◎繪筆

◎課題

△顔△髪△浴場△山△海△劇場

◎和歌、俳句

執筆婦人

服部貞子　早川花子　長曾我部菊子　小川夢の女　小笠原ゆり子　太田喜志子　若杉はま子　河野楨子　加藤筆子　高橋りう子　田中港の女　内藤千代子　野村きやう子　山田邦枝子　八代やゑ子　松田梅子　松田妙子　前島偶梨子　松村らく子　月[illegible]子　江森美子　佐藤滿喜子　佐分蒂影　木村あやの　夕はし　三宅やす子　三島よし子　平塚白合子　ひなげし　鈴木春子

●發行所　東京市京橋區南大鋸町十一番地　女子文壇社（振替口座第壹貳七九番）賣捌全國書店●



巡禮のうた

はやぶさ

大方の強い人たちは病氣になると人が戀しいと申しますけれど、自ら森の奥に入つて姿をかくすといふ、傷つける獸よ、おまへは私の心をよく知つてくれる。今の時期を思つて見れば、K様は一歩新しい光を眉にしてゐらつしやるのだし、自分は、木の實が雪に埋れてそつと呼吸して居るやうなものだから、それに此の弛んだ心の絃が、あの緊張した絃に共鳴し得るのは奇蹟でなければならぬことだもの……その悲しさ故にあゝあひゞきの歩みも重くあとに引かれがちでした。あの日もです、小暗い日を此のまゝ床に眼をとぢてしまはふとした暮れがた、お端書を拜見して、刹那「もう時がない」と衝かれるやうに血管がひゞきはじめました。

あゝ新宿、白日の光のもとには、云ひやうのない荒んだ情調の漂ふてゐるのにくらべて、活氣づいた遊廓の灯影は、いつも二つの心をしつくりと抱擁させてくれますのね。何となく今日もさうしてくれるのだらうと信じられて、はじめてくゞる淺黃の暖簾かゝげる手も顫へることなんかでざいませんでした。

張見世の格子に倚つて待つてゐた間、天鵞絨の座蒲團がずらりと前に並んでゐる正面の姿見の間に不調和に大きいボン／＼時計の針が四時四十分から五時を指すまでの間、いかに長い、そして退屈でない二十分間でございましたでせう「今お風呂ですから、もう直です。まあ上つていらつしやい」思ひがけなく馴々しい言葉をかけた妓夫は、上り口の硝子戸の蔭に小机をすゑて、火鉢を股にはさんで、新聞を折かへしたりはては眠さうに頭をかゝえこんでしまひました。

中庭の植木を越して遠見になつてる奥の部屋、あそこはお湯殿の次の間なのでせうね、しどけない卷帶の女が白粉光りのする額を、稍俯きに電燈に照されて、水の流れるやうな廊下を音もなくゆきゝする。——途骨の障子にうつるひようでの影がつと消えると、赤い

標袢の扱帯姿が、立つて居る私の眼のまへをおびやかすやうにすぎて、重ね草履の放縦な音が階段の上に遠ざかつて行つた。昔見臺のまへで、そらに聞き流したくるわの唄の數々を、ふとしみ〴〵と胸によみがへらせたその音よ。

　ぬれ色の髪と。あの裾にからまる素足の淡赤く染まつてゐるのとは、私に氷のやうな自分の手を固く握りしめさせました。

　そして、次の瞬間には暖簾をゆすつて今自分の柔い袂をふくらませる此の風は、曉近く、客待ちあぐんだ遊女の紅塗つた頬を凍らせるのであらうにと胸まで冷くなりました。

　しかし、K様、ほんたうに、夜なればこそ夜なればこそ、斯く女等は美しく、斯くまで私は大膽であり得たのでございませう。奥座敷には、代る〴〵湯上りの人があらはれては、湯氣の立つ肩にかろく衣をまとふてゆく、それをもその快ささうな皮膚の感觸を懐ひつゝ、じつと見守つて居りましたの。そのうちに、しつかりした束髪姿がちらと見えたので。私ははつとしました、髱の丸く出たのがいつもと異つていらしつたけれど。やがて廊下を歩いてゐらつしやるあなたと眼を合した時、私は早くも甘へた幼な子の涙がにじみ出てをりました。

　原にまできた時には、私の手は稍あたゝかにK様の熱を吸つて同ぬくみになつてしまひましたわね。彼方の家の家根も立樹の輪廓も黒々と、原の小徑もそれと知られる、空は底に光をふくんでふしぎに明るい柔かな姿の夜であつたのに、歌うたふ氣分が脣に浮からともしなかつたのは、あゝやつぱりあわたゞしい或るものに心吹かれてゐたからでございませう。

　しかし、あれからまもなく降り出した時雨に、各々の室に歸つたひとり〳〵の胸に斷たれぬおなじひゞきをつたへたことを信じます。

　その雨にぬれて私のところへは小さいクリスマスの贈り物がたつた一つ届きました。一枚の蒲團に白い夏のシーツを敷いたばかりの臥床は、此の夜花をもつて飾られたよりもあたゝかでございました。――さつきKさまに手をひかれて、身をちゞめて歩いてきた自分の姿は、まあ、虚弱な風船玉のやうだつたわ――常は血を見ないでは止まぬ、此の白刃もたゞ一度ひらめいたばかり、ランプを枕元によせて、透明なセルロイドのカードに刻まれた葡萄の象が可愛らしく紙にうつる

のをなつかしみながら眠つてしまひました。

翌日の快晴、ほんとに蟲が穴から羽を伸すやうな、青空の光を浴びて、進むまゝにひらけて限りなき野の面を、K樣のお瞳はほしひまゝに翔り、飽くまで接吻をなすつたでせう、初旅なるうちの子の紺色の眼もそのお傍でまたゝきして居りましたが、わづかな洗濯にすりむいた手がいつか白くなつて、疲れた指からお琴の爪をぬきすてた時、家の中にはしづかな黄昏の光が漂つて居りました。星の光の澄んでゐる信濃の山、あの「靈鏡」や「暮れがた」の詩の故里へK樣は蘇りにいらしつた。今宵は、もう用もない近き遊廓の灯影。大きい赤ちやんは、少し淋しくなつた唇に、日本橋のお土産など思ひながら緣側に立つて垣根の外に母の足音を待ち佗びました。しかしそれから數時の後、机のまへに坐つたその顏は、別人のやうな表情をして居たことでございませう。去る日の夕、下すつたあなたのお手紙、私がかうした氣分で讀んだことを、せめて御滿足下さいませ。

「あそこで別れて、ひとり夕日のきらくする道を土手に沿つて歩きました。そして自分は今、王國へ入るのだとのやうな充ちた心になつて、自由な境涯を喜びました。がそれもしばらくでした。私は眼をとぢて、此のほてらしい心と。獨りを喜ぶ心とを一つにしようとしましたけれど、それは駄目に終りました私は死ぬまで此の不調和をつゞけるのだと思ふと、生きてるのがどの位賴まれますか、實に生きむ、われは生きむ、といふ念がたゞ殘つてゐます。M樣二人は同じ心で遠いところからだんく近づけられました。その或るものゝ力に感謝せねばなりません、此の心のつながりを思ふ時、二人は幸福に生きられます。私共は悲しい巡禮の子だから、たゞ一歩でも向ふへ進めばいゝと思つて、あの巡禮の子の打つ鉦の音を思ひつゝ、神か天かわが求むるものに向つてすゝみませう」

よみつゝ私の心はしみくとK樣の歌つて下さる巡禮の唄にしづかな涙を吸ひ出されるのでした。……

* * * * *

さうして、十八の暮は、世のいとし子なる處女の幸が玉のやうに守られて過ぎたと思つてをります。

終りに近い園の小徑を一歩々々浮足なく踏みしめてきたその後の三ヶ月、今はたゞ櫛に殘りし落毛を見まもる秋の女のまなざしもて永き告別となさしめよ、これで悔はないのでございます。しかし此のとゝのはぬ

心は依然として芽を延しかけてゐるばかりですのに。
私はしばらく、み空を仰ぎ、神に向つて、もの訴へやうとする純な心を失つてきました、只今だつてさうですし、また人々にむかつて呼びかけるほどの値もございません。おなじ伴侶なるK樣、私も巡禮のうたを歌はうと致します。底知れぬ秘密と魅力との棲家なる、未來といふ大きいスフィンクスのまへに。

私がK樣のまへに恥しいと思ふのは「都會に生れたもの丶悲しさ」でございます。「汝自らの價尊からすば、汝の誇る王冠の輝き失はゞ生くる甲斐なし」と嘗て常に幼い胸にさゝやいたのは、其の濁つた空氣が養つた虚榮心の仕業であつたと思ひたうございます。

Kさま、あなたは一度だつてこんな空しい祈禱のために神をおよびになつたことはないでせう。今スフィンクスのまへに。路邊の雪の白いものに等しい單なる處女の純潔、それはかりを唯一の掌の玉として、たよりない首途に立たうとする私の姿を見たらば、その昔の驕慢な心の貴族はきつと死ぬと云ふでせう。羞恥に堪へず自滅を祈るにちがひございません。

仄暗き壺の中の無知の天地、其の中の靜安の幸は永久につゞくものではなく、又つゞけと願ふべきものではございませんでした、私は自分の心を通はせる星の光より何も知りませんでした。うたうたへばとて、藝術といふものにまだ遠き光なのでございます。

くゞつまはしの箱のやうな、地平の彼方のやうな、未來と自分の心をたのしみに生きればよい。獨斷と空想との惡霧がいつまでも私共の瞳を掩ふやうに。

生活といふこと、家といふことは、どんなにその柔い心をしぶれさせますか。いつ大人らしくとゝのふをりもないやうな此の心がふとお母さんのやうになる時がございます。家内の人々のほんの指先の傷、小さなためいき、にもそのひゞきが自分の心臓にうつやうで涙ぐまれるのです。それが女の天職なのだと思つてみますけれどもあの學校の歸りにひとりで監獄の原を歩く時のやうな、自由な放心の瞳を俯させたくない……しかしそれは想像にとゞまる自由でした。「眞の自由は努めずして自由な時だ」昨日新聞で此言葉を見出したことを感謝致します。

私がこれから、彼の準備をしやうときめきますのについては、一歩ためらふことも致しませんでした。行き得る唯一の道だつたのですもの。

又巡禮の唄を合す日を待つて居ります。

戀すれば

原田琴子

戀すればうらはづかしさうら寒さ貝はだかとなりあるごときかな

男をばよその世界に住む人となほもおもへるわれならなくに

彼の君は袖の中にもいれてましなほ此の君は胸に抱かまし

明日といふはかなきものをたのみたるそれより戀はおとろへにけん

少女子は戀の香爐に身を投げておのれよりこそかをらんとすれ

男にていませることを珍らしきもの丶やうにもめでたかりしかな

わが涙ゆたかなる日はいとうれし戀のこ丶ろにまじるものなし

くらがりに

三ケ嶋葭

くらがりに小さきものをさぐるごとわがなす戀のもどかしきかな

母となり子にもよき戀教へんと思ひしものを一人あるかな

捧げんと君にちかひしその日よりわれの心はゆたかになりぬ

うとまる丶わが寂しさはかにかくにめでよと祈るみこ丶ろのため

つねはよし怪我にも幸を知る日こそ男の世にもあらまほしけれ

戀といふいみじき波に洗はれし清きこ丶ろかももいろの貝

君が世にとられしことを我もまた君とひとしく誇とぞする



化粧問答

化粧研究會
婦人修容會　顧問　藤波芙蓉



再び化粧品店主へ

先般某化粧品商店より、店員が一種の廣告原稿を持つて來て、一應これを御一閲の上、それに私の署名をして呉れ、御禮として數百金を送るとの申込を受け又或人より某化粧品に私の發明云々の名を冠さして呉れ、御禮は御希望に應ずるといふ相談を受けたが、私が平生の事業を蹂躙して、一身を斯道の研究に委ぬるに至つた發心點は、不幸にして、壟斷これ私する此種化粧品店主諸君と、聊か目のつけ處が一致しない、遠慮なく申せば、鹿を馬ちやといふて、世の女性方を欺き、自分の懐中を肥やす爲めに、この至難な化粧道の研究に先驅の纓を舉げた譯ではなく、私が高等中學時代に、美人プラオン孃が化粧の精妙なる技術に感じ、己が同胞姉妹の如何にも斯道に拙劣なるを氣の毒に思ひ、且つ獨逸の如き武斷一片の國柄にあつてすら、化粧品一ケ年の消費金額は、優に同國陸海軍一ケ年の總豫算を計上するとの統計學者の說を聞き、これ正に國家經濟に關係する問題であると考へ、高が百金や千金の袖の下で、盜賊に鍵を貸す爲めに、これが研究に趨向したのではありません、曾て東伏見宮邸で、同宮殿下の師範役杉山令吉先生から、「君子は人の美をなすといふが、貴君は正に婦人方の美をなす好個の君子ぢや」との讃辭を受けたことがあるが、不肖もとより當らずと雖も、心密かに所期する考はないでもない、乃ち眞正の化粧美を我國士に花咲かしたいの希望からして、今尚これが研究の蘊底に歩武を進めつゝあるのですから、意想の解らない粗惡な化粧品なんかの提灯を持たさうとの御好意は、今後とも必ずく下し置かれぬやう、かたく御斷りを致します。

○ヒドイ縮れ毛の御方へ

現在に於いて縮毛を直すといふ化粧品は一つもありません本社から御わけして居る美髮劑も、これを直す力を持つて居らず、何とかして、これを直して見たいものと種々苦心の結果、一種の油液を調製し二三の縮毛に試みて見ましたが、いづれも好成績を得ましたけれど、この油液が果して他の猛烈なヒドイ縮毛をも、それと同樣直し得るかドウか、自分にもシカと解りませんので、若し誰方にでもヒドイ縮毛の御方がありましたら、試驗のためと申しては甚だ失禮でうけれど、世間縮毛のために思を惱ましてござる多數の御婦人方のためと思召し、拙宅まで御出下されてこの油液の効否を確定する實驗臺となつて頂くわけには參らんでせうか。

問　適當の運動も致し、間食は一切取らず水分も控目にして居りますが、それでも肥滿して困ります何分瘦せる法を、尚過酸化水素水はその儘つけましても宜しいのでせうか。（大阪、辛き女）

答　精しくは田村化三郎氏著、「肥える法痩せる法」を御覽なさい、過酸化水素水は四プロのなれば差支ありません。

問　一年程前から顏に小さい吹出物がして種々の化粧品を使つて見ましたが少しも効ありません、これを癒すには、又五十倍のホーサンアルコールとはどういふ割合で調べるのでせうか。（苦惱女）

答　只小さい吹出物とだけでは解りませんが、兎に角脂肪性でしたり、緑石鹸二十匁を十匁のアルコールに十四時間溶かし置き、それを濾してラベンダー精一匁を加へたものを顏にすり込み、その儘塗つて置いて一二時間したら洗ひ落すこと日に一回づゝ度々試みて御覽なさい硼酸一匁を五十匁の酒精に混和させるのです、併しその硼酸アルコールは何に御使ひなさるのですか。

問　（一）私はアブラ性で、二三年前から赤い小さなオデキのやうなものが絶えず出て、時としては先が白くなり、殊に湯上りの時など赤く目立ち、や〻痛みさへ覺える事があります、どうすれば治りませうか、（二）當地は海岸の爲めか非常にコハクて困りますが、どうすればよく

なるでせうか。（徳島、愛讀少女）

答　（一）は前の（苦學女）さんへの答を御覽下さい、（二）の御尋ねは、意味がわかりませんので御答申しかねます、恐らく何か脱字なされたのでせう、改めて御問ひ下さいまし。

問　美顔劑を御わけして頂きたいのですが、送金の方法がわかりませんのです。（小樽、田舍娘）

答　規定の代金を小爲替で女子文壇社代理部に御送りになればよいでせう。

問　過酸化水素水の使用法と發賣品を。（兵庫、愛讀女）

答　たゞ顔にぬればよいのです、三共合資會社で賣つて居るのがよいでせう。

問　（一）白粉をつけますと、直ぐに粉がふき出して剝げて了ひます、どうしたらよく長くつきませうか。（二）顔が至つてきたなく又キメの荒いのはどうしたら直りませうか。（本所、田舍人女）

答　（一）精しくは拙著「新式化粧法」及び「合せ鏡」に述べて置きましたから、それを御參考願ひます、（二）姉妹劑を御使ひなさいまし。

問　（一）鼻の先や頰の邊に黑いニキビが出ます、それを押して取ると、あとに穴があきます、それの出ない法を、（二）顔に針の先でついた位の穴が澤山ありまして、白粉をつけますと其所に白粉が這入つて化粧致しません、どうしてたら奇麗にお御化粧が出來ますでせうか、‥白粉下には常に先生御發明の艶肌劑を用ひて居りますが、これをつける樣になつてから顔の荒れがすつかり直りましたのは誠に嬉しう御座います。（岡山、みどり）

答　（一）秀才文壇の文光堂からニキビ劑をわけて貰つて、御使ひなさつて御覽なさい、（二）コールドクリームを摺込んで後、よくそれを拭き去つたら、その上にキセロルクリームを平らに塗り、粉白粉を御打ちになれば綺麗にお化粧が出來ます、尙は長く姉妹劑を御つかひになつて居られると、キメが段々と細かくなります。

問　（一）白色劑として使用する過酸化水素水は何れの店で賣つて居りますか、（二）頭髮の短かいのは如何すれば長くのびませうか。（離れ小島の一少女）

答　（一）三共合資會社にあります、（二）椿油とアルニカ油とオルモンド油を等分に合せ、これに光薄丁幾を五百分の一の割合に入れて氣長く、毎日頭皮にすり込みなさい。

問　私はまだ二十歳に足らぬ年頃ですのに手の上に皺がよります、それを直しますには、又カメリンといふ水白粉は眞品でせうか。（ハワイ島子）

答　コールドクリームを氣長くすり込みますと皮膚の彈力が強くなり從つて皺が消え去ります、カメリンは衞生的には差支ありませんが、扮飾上には矢張り駄目です。

問　（一）顴骨の高いのを低くする法はないものでせうか、また低く見える化粧の仕方は如何いたしたらよいでせうか。（二）鼻の先のチョイと凹んだのを高くする法及び高く見する化粧法を。（名無草）

答　（一）生來高い顴骨を低くするには、外科手術の進歩をまつより外、化粧道には出來ぬ相談です、但しそれを低く見するは化粧の仕方次第で立派に出來ます、精しくは拙著「新式化粧法」を御覽下さい、（二）隆鼻術の應用によつて高くされませうが、術者の手腕が拙いと取返しのつかぬことになりますから、寧ろ扮飾してそれを高く見するやうになさつた方が安全でせう、この方式も、例の「新式化粧法」中に述べてあります。

問　私は如何したものか、直ぐと鼻水が出て、誠に化粧の妨げとなりますが、出なくなる法を。（三重女）

答　化粧學上の問題ではありません、宜しく鼻科專門醫の治療を御受けなさいまし。

問　純植物性洗粉で洗顔して、コールドクリームをつけて摩擦しても、その殘りかすが灰色になりません、又それをよく拭いて艶肌劑をつけますと非常にシミますが差支ないでせうか（初音）

答　その人の肌理の組織によつて必ずしもそれが灰色にならなくても差支ありません、艶肌劑をつけてシミるのは皮膚が充分にとゝのつて居ないからで、馴れてシミなくなります。

問　オデキの痕や、キズの跡を少しもわからないやうに化粧する仕方を。（下野愛讀女）

答　本號の（岡山、みどり）さんへの（二）の

答を以て御答と致します。

問　（一）椿油は何の印のが良いでせうか、（二）コールドクリームをつけますと却つて黒くなるやうですが如何なわけでせう、（三）近頃顔に赤いものがブツ〳〵と出來ました、その療法を。（中國、十八女）

答　（一）現在世上に賣られつゝある椿油に一つとして純粋のものはありません、先日伊豆の七島廻りをやつた因みに、知人からの依賴で純粋のを一斗程買つて參りましたが、今度場合によつては、製造元とよく相談して文原社から御わけさせることに致さうかとも考へて居る處です、（二）その黒くなつた樣に見ゆるのがコールドクリームが毛穴の中まで偉力を逞しうせる證據で、斯く度を重ねるにつれ、皮膚の彈力を強め肌理を細緻に致しますので、先の皮膚の色素より黒くなる譯ではありませんから、決して御心配なく今暫らく御つけなさつて御覽なさい、（三）コールドクリームをすり込んで、それをよく拭き去つたら、今度はカリ石鹸液で洗顔して、その上に艶肌劑を御つけなさつたら大抵發生を防げるだらうと存じます。

問　（一）日に焦けたのを直す良法、（二）日に焦けぬ方法を御敎へ下さい。（因幡の女）

答　共に「合せ鏡」（實業之日本社發行）に書いてありますから、それを御一讀願ひます。

問　（一）新式化粧法とは一冊の本になつて居るのでせうか、價はいか程ですか、（二）ワキガを根本的に直す法はないものでせうか。（コスモス）

答　（一）左樣です、一部四十五錢の定價です。（二）外科醫の切開手術を御受けなさい。

問　新に三筋程の皺が刻まれて居りますが先生御發明のコールドクリームを使ひましたら延びることが出來ませうか、（二）夏季になりますと手足に汗が澤山出て困ります、これを防ぐ藥を。（筑紫の乙女）

答　（一）コールドクリームで延ばすことが出來ますけれど、其皺狀によつて摩擦の方法が違ひますから、一應、「合せ鏡」中の美容マッサージ法と題する章を御參考下さい、（二）ヴエストゲールを御つけになれば、六週間位は止汗することが出來ます。

問　私は女のくせに胸や腕に黒々とした毛が生えますので、人に肌を見せるのが恥かしく、何とかして手輕に脱けさせます方法を。（百合子）

答　硫化バリーム五匁に酸化亞鉛、澱粉各二匁五分の割合で合せ、水でドロ〳〵にして刃物の厚さ位に二三十分間塗つて置き、後水で洗ひ落しなさい。

問　私は多汗性で、殊に腋の下と陰部の周圍はダラ〳〵と滴る程出ます、これを止める方法を。（富山、月の花）

答　この御尋ねは寧ろ化粧法の範圍に屬しませんけれど、枉げて御答致します、先づ三十倍の醋酸水で局部を御洗ひになり、アトロピン〇、〇〇〇五を内服すると三四時間の發汗を制止するとが出來ると申して居ります、併しこのアトロピンは毒藥中の猛毒藥で、醫師の監督の許に御用ひにならぬと危險ですから、むしろ服用後、息がいやな臭がしても、テリユリウム酸ナトリウム〇・〇五を夜間就眠前に服用なさるの確實にして安全なるに如かずと存じます。このテリユリウム酸ナトリウムは單に御尋ねの局所多汗にのみと限らず、一切の多汗症に有効の最新藥です。

問　近年頭髮が拔け又は切れ、その上クセまで生じましたが、これを直す方劑を御調製願はれますまいか。（熊本、いくの）

答　誂らへて差上げませうが、それには原因があるに違ひありませんから、その原因をしらべた上でないと確實に有効なものを調製する譯に參りません故、直接私の宅の方へ御申越し下さい。

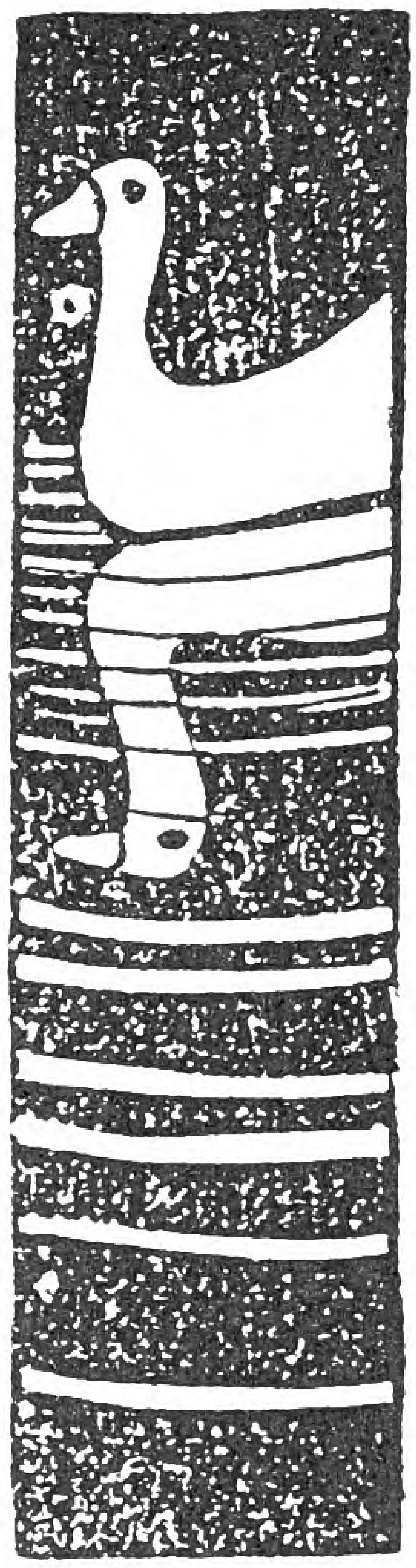
問　鼻の上に雀斑があつて、色々の藥や化粧品も使つて見ましたが無効に終りました、これを少しでも薄くする輕便な方法を。（麴町、愛讀女）

答　カムフル五匁、昇汞二匁、硼砂一匁、卵の白味十匁、薔薇水三匁を合して御つけなさい、すると皮が剝げますから、剝げたら澱粉と滑石を等分に合した粉を其上にふり掛け、新皮の發生するまで洗顔せぬやうになさるのです、斯く度々繰返すと、大抵の雀斑は除き去られます。



誌友欄

◎夜の影（小説）……小林たか子
◎三内義（小説）……千鶴子
◎長屋の人々（小説）……葵の花
◎哀愁のをどり（詩）……吉田夕草
◎夕暮（詩）……白鳥正江
◎夜（詩）……足立春子
◎あかるい朝（散文）……平塚白百合
◎春徂く頃（散文）……廣江曉子
◎高原（自然）……百瀨美水
◎和歌（足立春子、中野ふみ子、みつ枝）
◎剃刀（散文）……みね子
◎寫眞（人事）……小野三枝
◎あさみどり……法師
◎誌友評論（七名古屋）……一記者
◎事務員（評論）……さみだれ
◎俳句（伊藤ちゑ子、新井靜江、横谷ゆき子）
◎絲買ひに（初作）……うら野
◎大間違ひ（初作）……和子
◎暖かき午後（初作）……石山ふみ子
◎誌友くらぶ（交際、書籍交換、其他）



小說

○夜の影

水野葉舟選

向島　小林たか子

單調な色のない日が藤枝の此頃にて隨分長い間續いた。夜になると今日も事なき日を送つたなと思ひ、朝になると今日も事なき日を暮すのかと思ふ。此頃では藤枝は事なき日を迎へ事なき夜を夢みるのが苦痛になつて來た、學校に居た頃は、毎日〳〵同じ色の日を物足らなく思ひつゝも休みとか卒業とか云ふかすかな淡い刺戟にどうか、かうか日を消して居た。今では——平和なぢみな家庭の人となつた今は——何かの刺戟も望みらしいものも見あたらぬ。

　何か非常な變化がほしい、刺戟が望ましい、此の無趣味な毎日から私を救ひ出してくれるものならば何でもいゝと藤枝は思ふ。

　こんな氣分になつた此頃の藤枝は人の寢靜まつた夜自分で、いろ〳〵な境遇を作つて其中に自分を入れて動く自分を姿見にうつした、姿に眺め入る樣に眺めるのが一つのなぐさめになつて來たのである。

　かうして藤枝は毎日夜を待つた、こんな事を考へるのにふさはしい黒い靜かな夜を待つた。

　自分は餘儀ない事情で世に入れられぬ罪を犯した、人からも、世からも憎まれ、呪はれて心弱い自分は立つ瀬を失なつた、自分の行く世界は、あざけりの聲で滿ち〳〵て居る、自分は行き所がないから隱れた、何所に隱れても安息がない、安心がない、大勢の人たちは神妙に物影にひそんで居る自分をさがし出してあらゆる呪をはきかける、親しい友だちも、これのみはと思つた母まで姉まで自分を捨てた、捨てた上に他人のすると同じ樣な呪とあざけりと憎しみとを遠慮なくあびせかける、かうして凡ての暖かみからのけられた自分は、人を疑ひ世にすねつゝ、暗い冷かな日を迎へ夜を眠る。

　眞白なベッドに弱つた身體を横たへた自分は不治の病にかゝつて居る。

病は日に日に重つて今は頼み少なに見える。夜明けぎはの露の様に、行く春の花の様に自分は死の姿を前に置いて物悲しい日々を消すのである。



（地賞）まひるの海女　青森縣　稻葉たから子

ベッドの側には母も兄も姉も居る、來るべき悲劇を豫期しながらしかも其豫期を打消しつゝ。靜かに重いドアーが開て白い上衣にまとはれた醫師がはひつて來る。

醫師はやせ細つた自分の胸に手を置いて「だめだ、だめだ、今夜があぶない」と云ふ。
皆は知りつゝも、はつと思ふ。
「何か云ふ事はないか」と兄がきく、母と姉は泣いて居る、自分はうつとりとして來た、我もなく人もなく夢と現との境に迷ふ人の様に。
此のまゝ死ぬのだなと氣が付いた時に、今を限りに自分と云ふ者が存在から消えてしまふのが急に悲しくなつた、自分はしく／＼泣く。
「悲しいのか、苦しいのか」と母がきく。
自分は只泣く。
こんなシーンを想像して見るときは藤枝はこれがほんとの自分の姿であるかの様に悲しくなる。
さうして胸にしみ入る、やる瀬ない悲しさを抱いて暗い眠に入る、此の深い暗が、此の黒い夜が永劫に——少なくとも自分の上にだけは——明けなければいゝと思ひつゝ藤枝は眠に入る。（天岱）

○三　内義

横瀬　千鶴子

「亦いらつしやい、きつとよ」此店に來る客人の、誰れにでも云ふ言葉を、習慣的にお秋はから繰返した、さうして甘える様に一人々々耳元に口をおつつ付さして「きつとよ」を事更に云つた客の姿が戸口に出て仕舞ふと、お秋は荒々しく、とんとんと二階に馳上つた。諸ての客は歸りつくした。
お秋は取散した皿や丼やをまめ／＼しく階下に運んだ、黒い玉の算盤を彈いてた、辮髪を切りたてゞ、後方に美麗に梳いてある支那人は、時々調戯ふ様な話しかけた、お秋は浮調子に惡口半分に返答した、そして面白さうに聲高に笑つた。明るい室を出て淡暗い勝手に、幾度も／＼運んだ、汚れた皿やを雜然と不規則に積重ねた、そして最後の一盆を殊更に大きく、ガチヤンと音響をさして下に置いた、強烈な脂肪に暗がつた奥をのぞく様にして「之れで終ひだよ」と聲を掛けた、「さう」と音律の惡い日本語で、幽に答へた、其言葉を聞き流して、亦大きな梯子を登つて、何物も置かれて無い、只置いたまゝの、テーブルの前の籐椅子に身體を投げる様に、どつかと腰をおろした。
時計は淋びしくチインと周圍の空氣を破つて響いた其時計の音をお秋は珍らしく、しみ／＼と聞いた、獨りになつて淋しみは、火氣のない室に居る其の寒さより

より以上お秋は苦痛だつた、先程迄の賑やかさは思ふまいとしても、思はずには居られなかつた。

お秋はぼーつとした氣分になつて、足をテーブルの下に伸ばすつたけ伸した、そして手を懷中に突込むで頭を後方に寄りかけた、食べるつたけ食べて滿腹になつた大きな猫は、歸りつくしたお客の氣配に、のそのそとテーブルの下から出て來た。

此樣にして靜止として居ると彼女は、今迄の疲勞が一時に出てきた、身體全體に倦怠く感じて、寂寥も寒氣も忘れて、只いつまでも〳〵此樣じつとして居たい氣分である。室内に掲げてある黃興と孫逸仙の肖像や赤い紙に大きく書いてある字や、革命旗がだん〳〵淡く、遠くなる樣に思へた。

「秋ちやんいやに考へ込むでるね」、何時の間に來たお光に、此樣聲を掛けられて、はつとしてお光を見上げた、お光は心持醉つて居た、眼の周圍も、顏も赤くぼーつとしてゐた、片手で椅子をずる〳〵引摺つて來て、お秋の側に腰をかけた、そして袂からバットの箱を出して一本を無言てお秋に手渡した、お光は吸口を前齒で嚙みつぶして、口にくはへたまゝにマッチを擦つた、マッチは燃えずに消えてしまつた、最一度自暴に擦つた、やつと火點いた、が其時は最うお秋は半分程吸つてしまつた、一寸間でも無言で居るとお秋は寢むくなつてしまつた、お光が居る、自分は煙草を吸つてる、其事が淡く意識される計、其程お秋はねむかつた。

「ね秋ちやん初ちやんが三内義になるんだつてね、」思出した樣にお光は急に此樣云つた、三内義になる、其言葉が鋭くお秋の耳に響いた。

「誰れが其樣な事云つたい、えゝ、光ちやん」

「誰れも彼れも無いやね、御本人樣の支那人からさ、お秋ちやんも餘程人が良いね、」と、お光はとろんとした眼差しで嘲る樣にじつと見た、お秋は不意の驚きに疲勞れた頭はます〳〵亂れ　睡眠不足の爲めに赤筋の入つた眼を大きく見張つて、今更にお光の顏を見た、が亦考へる樣に頭を垂れた、畜生、畜生、人を馬鹿にしてゐやがら、興奮した聲音で罵倒した、今が今迄お秋は自分が三内義になる、そうした慾望にかられてた其事は本人から度々聞された、亦其言葉によつてお秋も彼れがするまゝになつてた、お秋は自分の身を、悲ますにはゐられなかつた、が其悲みは、最初お秋が矢張南京町の或家で、初めて經驗つた樣な、其樣な

初々しい物では無かつた、四度五度、重なるに連れて其れは自分に遭遇る當然の事としか思はれなかつた。然し口惜しさは一倍だつた、「秋ちやん、八々に行くんだから少し貸しておくれな」「駄目だよ、昨日全部負けてしまつたから」と懐中から財布を引出して、ぽんとテーブルの上に投出した、幽に貨幣の音がした、「明日迄待てお居でよ、どうせ此家に居ないから、澤山借りてやろうよ」

「取るつたけ取つてやらなくつちやあ」とお秋は云つた。お光は不滿らしい顔付で室を出ていつた、獨になつたお秋は赤淋しさと、寒氣に捕はれた、ともするとお秋は先程のお光の言葉を思出さずにはゐられなかつた、三內義——八々——金——お秋の心に思ひ浮べる諸てゞあつた。

隣室で花札きる音がぱち〳〵と手に取る樣に聞える其れに連れて、男女混合つてがや〳〵と、お秋の心をそゝる樣に聞える、お秋は見捨た彼を憎いとは思はなかつた、其れは男の共有性だ位にしか考へ無かつた、只若いお初が妬かつた、十年も若かつたらとお秋はしみじみ思つた。（地賞）

○長屋の人々

廣島縣　葵の花

相生橋の西詰で二三の友と別れた須磨子は狹隘い穢いそして周圍の淫猥な長屋の家を思ふと急に嫌あな想が胸一杯になつて淡い苦悶に押されて心は絕えず後へ後へと引き戻される樣なのに夫れでも步調はかへず快濶に步んで居た。未だ新らしい匂も失せぬ杉や松や檜の無慘に皮を剝ぎ取られた生々しい肉の形骸が兩側にぎつしり立て掛けられてほの暗い樣な材木屋の幾軒も立並ぶ堤の通りを遡つて二丁もゆくと左りに折れて薄汚ない小路を××町に出た角の白梅湯と云ふ瓦斯燈のかゝつた風呂屋からグワンと手荒く桶を置く響が聞えたとパチ〳〵手がなる、左右に垂れたる淺黃の小暖簾に黑く染め出された「男」や「女」の字が風に吹かれて二つになつては又くつ付いて居る、「左樣なら」と優しい聲がしてギイと重想な戶が開くと其處からお白粉べつたての女があらい縞絣の袷を思ひ切り拔きえもんにして黑繻子の半襟のかゝつた絆纏を引つかけただらしのない振で出て來た、夫れはお春と云つて須磨子と同じ長屋に居る淫奔娘である、お春は莞爾と口元に笑を浮

べてお叩頭をした須磨子も餘義なく歩み乍ら會釋した
下宿屋の二階からチユウチユウと鼠泣の聲がして紙屑の丸めたのがお春の肩からも須磨子の廂からも同時に足元へ落ちて來た須磨子大なる侮辱を蒙つた様に勃然としてあの風姿のお春と同一視された不平やら又少くとも知己だと云ふ事を語られた恥しさに心持面を赤らめて歩を急いだ嘲語に交つて後からハッハハハと浴びせかける様な笑聲が起つた軈て小一丁も來た頃ソーッと偸む様にして振向いて見た、お春はその理髪屋の前で若い男とキヤツ〱と騒いで居た。



（入賞）雨の日　青山　中村弘子

旅人御宿、と茶褐色に煤けた板に記された看板を目標に露路を這入つて汚ない箱にしきりを付けた樣な殆んど自他の識別も付兼ぬる幾つもの家を通りこして一番奧まつた宅に入ると須磨子はほつとした樣に息を吐いた一室をしきつて表裏座敷を區別した怪しげな襖のかげから顏丈出して「お歸りなさい」とお金はニッコりした田舍のかなり大きい家でのんびり起臥して居た須磨子は急に此狹隘くるしい家に來てから充分息も吐きかぬる獄屋へ打込まれた樣で窮屈な思ひに幾日かを送つて居た、前は鼻付合せに隣家の横壁で裏と片方に續く大きな藪があつて一人で居たら薄氣味の惡い樣な處夫れでも藪の中には大きな梅の古木に盛りの頃は眞白く花が咲いて眺めるには都合のいゝ樣に枝をのぞけて居るけれども高い板壁に圍まれてあるから一步も踏み入る事は出來ない、須磨子が此來へ來たての事である。

「まあ此んな藪が有つては夏分蚊が多くて困るでせうね」と云ふお金はあの鈍い瞳を益々細くして。

「でもねもつと暖うなれば坐板を上げりやあ筍が幾本も頭を上げて居りますよ」と云ふ、「オヤ〳〵有繫の須磨子も是れには呆れて了つた、隣々其隣が車屋の家で先の分の車屋は酒を飮過てはよく警察の厄介になる事や三家目がお春の宅で其娘の不身持や此方が反古買其次が賣卜者とお金は此の長屋中の事は一から十迄皆知つて居て暇さへあれば夫れ等の內幕を面白想に須磨子に話してきかせた、中には二三度繰り返された事もある。

「あの須磨子樣お梅ちやんは遂々近い內に賣られて行く想ですよ」、お金は須磨子が片隅の机に憑つて復習して居る後の方へ火鉢を持ち出して炭をつぎたし乍らかう云つた、「え、梅ちやんが……何處へ？」「丸龜へじや想でがあんす親方の云ふ丈お金を出さんでまだしつかりは分らんが九分九厘迄はきまつて居る想でがんす」

「マア可愛想にネ……」、須磨子は衷心から沁々から云つて吐息した、お梅は賣卜者の養子で兼ねてより賣る覺悟で三味線や踊りの稽古を手酷くさせられて居た、色の白い輪廓の正しい娘で此家のお靜とは一の仲好でよく遊びに來るのです、すま子も是れには面白半分種んな事を訊いたり又リボンなんか遣つた事もある。

「昨日もあんた二人連れで來て夕方迄居て今日もはあとうから來て居りますよ今隣りの小母さんの話じや何でも好い話になつて、二三日內に連れてゆくと云ひを

る想でがんす」、何が好い話なんであろう生れ落ちる時から運命の神の囚となつて其先又何處迄弄ばれる事やら…哀れなる賣られてゆく娘よ今にもお梅が遊びに來たら、すゞ子は出來得る丈慰藉めてやる程にも思つた、が當のお梅はどんな氣持で居るだろう?、氷よりも冷たい家庭にあきはてて表面のみにても華かな藝妓の境遇を秘かに羨望んで居るかも知れない年は十四である、六時頃豐吉は社から歸つた打見た處少なくとも六七度は七つ屋の暖簾を潜つた樣な古ぼけた洋服に生活に疲勞れた身體を丸く包んで…お金は例のお梅の話をさもさも仰山らしく話した、須磨子は明日にも賣られてゆく娘のさだめを思ひ乍ら何時迄も何時迄もくれゆく空を眺めて居た。

何處でか十時を打つた、何んだかけんかでもする樣な聲がするとお金は又ア…と云つた樣な表情をして豐吉を見たそしてソッと倫む樣にして庭へ下りた。

「コラ行んじやないぞ」、と豐吉は叱る樣に云つた、お金は夫には答へず默つて出た、聲は益々高く荒くなつて一己樣がお歸りになつたのに知らんのかコリヤお民ッ——お多福ッ…呂れつも廻らぬ聲乍ら坐つて居てもよく聞き取れる樣になつた、すゞ子も例のだなと氣が付いてそして好奇心にかられて是れもそつと出た、二月の空は



逝く春　本郷村山こと

寒く晴れて瞬きしげき星あかりに黒い影が幾つも立つて耳をすまして居る、「喃吉樣どうしたんだへどう」とお民の泣く樣な聲吉公の怒號る聲人々は一歩〳〵近よつて居るけれどもまだ誰も家に入る者はない。

「え丶吉樣何處へ連れて行つたんだへ芳坊をどこへ？」、「芳ちやん芳ちやんが居ない樣になつたんですつテ」「誰かが云つたへ芳ちやんが？」、人々はどつと浪の樣に彼家の入口迄おしよせた。髮ふり亂したお民は倘も聲をからして、「よう吉樣芳坊を何處へ連て行つたんだへよう芳坊を」身を藻掻き今にも泣き出し想な顏をして云ふ「芳坊——芳坊は己れの子だい乃公樣が勝手にすらい」。

崩れる樣な身體をかろうじて柱に支へられたる吉公は苦し相に目をつぶつては又時々分らぬ事を口走つてる「え？お前の子かい芳坊はお前一人で出來た子かいこれ吉樣：：テ」、群集の後の方からクス〳〵笑ふ聲が起る「御免なさい」、と押される樣にお春の母のお六は入つた、「お神さん今晩は——聞きましや芳ちやんが居られない想で一體如何した事でがんすの」、お六は故意とらしく落着いた口調で云ふ、「え丶此の人が三時頃に抱いて出たきり分らないので——自分はあゝして醉つぱらつて歸つて居るんですもの——」、お民は口惜想に云ふ。

「吉樣今晩は——、」とお六は何處迄も仔細らしく構へて

「吉樣お前は彼可愛い芳ちやんを何處へ置て居るの？え丶から私に程數へてお呉れ」お六は物優しう子供をすかす樣にして問ふ、「小母さん芳坊はな芳坊はな」、と吉公は急に泣き出したお六の後には五六人の子供が立つて居た夫には可愛い顏のお梅も居た、「芳ちやんは如何したの？」、「あ丶芳坊は可哀相だつたけんど乃公の酒を呑む邪魔になつたから明治橋の上からドボンと投たんだよ」、お民はワッと泣き出す吉公も泣ま〳〵可哀相に可哀相にのと人々は口々に云ふお六は益々落着いて「吉樣そりや冗談だらう何處の世界に自分の可愛子をオホ丶丶、眞實の處を聞かせてお呉れ喃吉樣芳ちやんは今どこに居るの」、「小母さん眞實に可哀相で可哀相でどうぞ死んで呉れと云つて投げ樣にしたら兩手で確固乃公の肩んとこへかじり付いて居たのを己れや心を鬼にして投げたんだよあ丶惡い事した芳坊堪へて呉れ恨んで呉れるなよ：：」、吉公は女の樣に俯伏して欷歔泣くさあからうなつては打ちやて置けぬので最後迄

家に居た主人株迄飛出して夫れ派出所へ明治橋へと隘い長屋中は俄に一大波動を來した。

たわいなげな身を巡査に引き立てられて行く吉公の後より人々は不安と淡い恐怖にをのゝく足を引きずつて行く、のこつた者も口々に種んな噂をして居る。

「まあ可愛想にの——芳ちやん今頃どんなになつて居るだろうかの」、と一人が云へば「何あに狂言だよ幾ら何んだつて自分の眞實の子を……夫れについて皆で相役をつとめて居るんだから白痴なこつたハ、、、」、隣のお神はかう云つて不遠慮に笑つた、「然かも分りやしないよ」、此度はお春が全く然思つたらしく云つた。

先の度やお神さんを殺すて出刄庖丁を持て追かけ廻したが此次は誰だらうお春さんなんか餘つ程氣を付て居なくつちやいつお鉢が參るか知れないよ「おゝ怖は……」お春は其癖なんともないらしく云つた、「滿更他人じやないけんの」、誰か他の方から口をはさんだ。

「おあい憎樣……」、お春は、いゝをした。

初めて吉公の今日の樣を目擊した須磨子には冗談にあんな事が云へるものかと思はれたそうした内にも水に溺れた芳坊がかつがれて歸りはすまいかと絕えず怖怖した心に一寸した人聲にもゾッとする樣な臆病らしい面付して居た十二時が打つても芳坊を連れた人は歸らないで尋ね倦んだ人々は一人〳〵消える樣に皆寢て了つた「まあの小母さん吉樣は芳ちやんを柳町の心安い家へ預けて置いたんですつて其家じや吉樣の住所が分らんもんじやけん昨夜徹宵泣く子を抱へて困つて居たんでがんすげなあまげつたらしいのう「人馬鹿にして居るよ、さんざ騷動を掛て今朝見りや阿呆面して居まさあ眞個にクソ忌々しいの……」、お六は騙された剛腹にこんな惡口をついては隣家をあるき廻つて居た。

（入賞）

階上の書齋より

葉舟

一

△今日自分は「羊」と言ふ長篇の第一部を漸く書き終つた。それで非常に重い疲勞を感じながら、机の前で茫然として座つて居る。町に行つて見たいと思ふが、それも今日はまだ一つせねばならぬ爲事があるので思ふやうには行かぬ。その間に、今朝着いた諸君の小說を、少しづつ讀み始めた。今日の頭の疲勞は、意外に氣を沈ませて、諸君の作を親切に見るやうにさせた。

△自分はこの選評と感想とを書く時には、何となく諸君に向つて私信を書く心持がされる。自分は今日課として讀賣新聞に載つて居る「謀反人ユダ」と言ふ小說を、一日一回づつ書いて居る。その外に、もう終りに近づいて來て居る「婦人論」を書く事が爲事の大部分である。「婦人論」と

言ふと少し大げさであるが、「妹に送る手紙」と言ふ題で、婦人に送るアドバイスを書いて居るのである。それとも一つは、小品集「森」の姉妹篇として「森」と言ふのを近々に公にする爲めに、新しく四五篇の小品を書いて居る事である。自分は斯うして、殆んど書齋を出る事の出來ない人に成つて暮して居る。自分は、その爲めに甚しく疲勞したやうに感じる。

△今朝、讀賣新聞の五面で高村光太郎氏の「熊野と公衆」と言ふ感想を讀んだので、自分も二三日中に帝國劇場に「熊野」を聽に行つて見たくなつた。自分も此頃、痛切にこの無智な公衆の爲に向つて憤慨して居る一人である。

△で、今日讀んだ諸君の作の中から、先づ批評を書く事にしよう。ゆみの「あの女」は座談と藝術とを混同した作であつた。座談は時として藝術の一樣式になる事もあるが座談と藝術とは一緒のものではない。小說は決して、たゞ何の考察もなく口から出て來る座談ではないと思つてほしい。しかも、普通人の皮層な考その儘では、敎へられる値のあるものでない。青柳夏子の「暗流」は、この作を中心としてでも、自分は百千の言葉を現在の若い婦人達に送る事が出來るが、それは折を見てにしたい。何しろつまらぬ座興の樣な作だ。長谷川英の「歸つてから」は一寸面白く書けて居る。客觀的に描かれた分量が足りぬと言ふ人があるかもしれぬが自分にはこれでこのヒロインの生活が、かなり立體的に見えもした。その生々しい感情の光も見えた。しかし、斯う言つただけで、それより深いものは何にも無い。村上咲子の「そら似」は、氣のきいた手法で書かれた。話も一寸面白い終の感情的の一節が中々いゝ。瀬里田靜江の「夕月」は孝行小說である。上手であるが生きては居なかつた。この作者はひどくコクメイな人らしい。K子の「襦袢の袖から」は、妙に人の心を刺激する作であつた。が、それは決して藝術的の力から來たものではない。或る不快な不純な分子が含まれて居るのを思つた。かすみの「義理」にはまたこんな昔の作を書かうと思ふ人があるかと思つた。しかし之などは、意外に感じる讀者が多いかもしれぬと思つた。さう言ふ作であつた。

しづなの作は二篇あつた。「妻」と「手紙」とである。兩方とも相當にいゝ處がある。自分は「妻」の方をとる。以前にも自分はこの人の作を讀んで粗雜だとよく批評したが、それは、斯う言ふ點にある。この人はやはり女でなければ持てぬ、こまやかな目を持つて居るが、しかし大體の生活に對する――この作者自身の生活の內容に、必ず男性的な一つの張つた感じが強いだろう。その力が作に出て來て居ると思はれる。しかし、作者は恐らく從來の人々の習慣的な生活と近い生活をしては居ないかと思ふ。如何であろう?。で、今回は其「妻」の方をとる事とする。「手紙」は次の號にゆづる。世良田優子の「嫌ひな人」今回の作も不出來であつた。この人は惡くすると、近頃の或る種類の女の輕薄な潮流に入りはせぬかと危まれる。抒情詩をも少し一心になつて書かれたら面白かろう。小說の方も、もつと抒情詩的ものをお書きなさい。それをやつて行くと、意外によく其心が展開して來るかもしれぬ。そして眞面目になつて自分の事、人間の事をお考へなさい。あなたは聖書を讀んだ事のある人らしいが、あれを所謂今の無智な、理解力の無い基督敎信者のやうでなく、去紙になつて味はれたら、それも心を強く爲めに大變よい機會と作るだらう。今度の作はとにかくまづい。が、如何してかこの人の作を見て居ると、實に無邪氣なすく〳〵と伸びて居る若芽のやうな單純さを感じる。白妙女の「おゆき」妙な因緣話のやうな淋しさがある作であつた。この人は新しい藝術をまだ知らぬ人だ。自分はそれを覺えると言ふ事から、出發されんことを希望する。蘭香の「ある夜」このやうな一寸氣のきいた風に書かうとする態度としても、作者の頭が低すぎる。月草女の「疲れ」は書き方が大層進んで來た。樂しんでその周圍を描かうとして居る處が非常に面白く冴えて來たと思はれる。しかし、まだ洞察が足りぬ。目がコンエンションを少しも離れぬ。人に迫つて來る生命の觀が無いではないか。茶山花の「隣の女」これが又座談と藝術とをまちがへた作であつた。斯う言ふ人が皆一轉してほしいもんだ。わかばの「母親と娘」一度何處かで讀んだやうな氣持がした。それ程面白くなかつた。優香子の「古道具や」これも氣のきいた書き方だ。しかしその力の鋭さが足りぬ。洞察が

足りぬ。感銘がやれた。それの爲めに深い影が無い。前島俊梨子の「お浪」はこの作者の三四ヶ月以來の佳作である。この人は實に巧な手法を持つて居るやうになつた。たゞものを映す心の力が足りぬ爲めに、たゞ器用になつて行くばかりなのは惜しむ可き事だ。も少し思ふさまのものを書かうと思はれたい。久世の「ある女」たゞすらすらと書いたゞけのもの。背景も何にも無いおしやべりに近い。（以上二月二十日）

△伊東さく子の「悶の身」は型の如きもの。抒情の文章に中々面白いと思ふ處があつた。みづ枝の「或夜のこと」は或る人々を包んだ空氣が書いてなかつたのでばらばらになつて見えた。矢澤菊子の「すねもの」は概念だけが書いてあつた。山崎都鳥の「指」は面白い材料であつたが、必然にそこまで行くだけの人の心が書いてなかつたので、遊戯に成つて見えた。古田よし子の「或日の午後」は迷者と言ふばかり。あたさかの「子守女」は骨ばかりが書けて居る。村山咲子の「近況」この人の作が又一篇入つて居た。この作は前のよりもはるかに劣つて居る。葛の葉の「彼の女」違雜なガサツな筆付きであつた。ほゝづきの「かすかな物音」は一寸よく描けて居た。惜しい事にはシムプリシティを缺いて居た。葵の花の「情死」はあまり小刻みに書けて居て、味がないやうであつたが、一篇の情緒はかなりよく書けて居ると思つた。花陽女の「迷ひ」はかなり強い刺激を持つて居ると思はれた。

以上の中に、自分は以下の九篇をとる事とする。「お浪」「妻」「疲れ」「古道具や」「そら似」「情死」「指」「かすかな物音」「歸つてから」（二月二十一日）

△自分は近頃、兼ねてから宿題にしてあつた「自叙傳」を讀んだ。これは森田草平氏の作である。今私はそれを讀んだ後の感想を書き度いと思つて居る。

△諸君の中で。武者小路實篤と言ふ名を知つて居られる人があるか。又その人の作品を讀まれた事のある人があるだろうか。恐らく一人も無い



仕事の後　無名女

事であろうと思ふ。この武者小路氏は「白樺」の同人の一人であつて、たしか著書が二冊ある人であると覺えて居る。一冊は古く出た「荒野」と言ふ文集、第二冊目は「おめでたき人」と言ふ長篇小說、この二つである その他は折ふし、「白樺」で公にされる短篇がある。さう言ふ人である。

△で、自分は何故斯う突然と斯う言ふ人の噂をし始めたかと言ふと、自分はこの「自叙傳」を讀んだ後に、或る聯想の順序から、この「おめでたき人」を思ひ出したからである。聯想といふものは、時に意外に走るものと思つた。自分はこの「自叙傳」を讀んだ後に、不思議に感じた一點がある。卽ち、あれ程眞面目らしく書いてあつたに拘らず、その當の主人公の顏が少しも、讀者の面前に出て來ない事である。主人公は黑い幕の陰に居て、たゞその周圍に表はれて來る現象が巧みに書いてあつた事である。直截である可くして、技巧のみが目に立つて來る。集中せねばならぬものが放漫であると感じた。

△自分はこの歸着點を考へた。幾度も繰り返して考へた。その時に、自分は「おめでたき人」を思ひ出したのである。自分が昨年その書を始めて見た後に、自分はふと或る人が今自分と對座して、この話のもとする者を非常な熱心な調子で話して歸つた跡のやうであつた。その人と面を接して居たやうに思つたのである。しかも、自分はその作が、單純で、幼稚な戀の物語であり、且つ極めて幼い技巧で書かれて居た事を否みはしない。

△自分はこの二冊を並べて思ひ浮べた事を、不思議な緣だと思つて居る。（二月二十二日）

△次に自分は又小笠原貞子の「悟」を紹介する光榮を有する事を言つて置き度い。

二

△三月二十三日夜――今日久し振りで、市街の賑かな中を遊んで廻つた。珍らしく遊就館に入つて見た。夜は親しい友と淺草の燈火を浴びるやうに思ひながら歩いて居た。夜更けてから歸つて來て、諸君の投書を見始める。

△今回は小笠原貞子の「悟」、前島優梨子の「見立祝ひ」遠子の「惡者」の三篇を特別に受け取つた。この特別に受取つた三篇を見るのに、自分にとつて深い興味のある事である。この中の「悟」を六月號の本欄に推薦し、「見立祝ひ」を七月號に推薦する事とする。この二篇に對する所感はたへ子の三月號の作と併せていづれ次の場合に書く。「惡者」はこの二篇に對して少し見劣りがされた。材料の掴み方も、書き方もこの作者特有の力があつたが、全體をして散漫であつた。も少し的確に書かる可きであると思ふ。この人の作として、もつと勝れたものゝ出來る事を豫想されるから、それを受取るのを待たうと思ふ。但し終の母と叔母とを書いた處は生きて居ると思つた。

△それから、更らに諸君の作を見る前に斷つて置き度い事は多くの投書の中に題も書かず名も書かぬものが折ふし交つて居る。何れにしても自分はそれを見た時には、禮を知らぬやり方だと思ふ。自分はさう言ふ原稿に對した時には、不快な感じに襲はれて、讀む氣になれぬ事がある。以後さう言ふ人は、さう言ふ事の無いやうに願ふ。おぼろ月の「淋しい女」はヒステリツクに沈鬱な女を書いたもの。但し、あまり無雜作で、妙な風にをさまり返つてものを言つて居る、拙劣であつた。浪香の「花時分」には多少眞實の心の斷片が見えた。その點が面白かつたが、その分量が餘り少かつたのには失望した。ゆみの「大阪行」は全く散漫であつたもつと心にひらめく力があつたらよかろう。長谷川赤女子の「斷現」は心持が惡い程習慣的であつた。矢澤英子の「遊廓の女」は面白い題材だと思つて讀みかゝつたが、書いてある事は極く何でも無い事にすぎなかつた。明子の「別れ」は流れるやうな言葉で書いてあつた。それだけで印象の[illegible]氣な、肉の薄い作であつた。山茶花の「別れ際」は、筋書よりもひどいものであつた。も少し考へて書いたら如何だらう。磯千鳥の「娘」は乾いた枯草のやうな感のする作。全體としては整つて居るが、面白味の乏しいものであつた。月草女の「うつり氣」にはその胸の底に搖さしこ居ると思はれる力が無い。その爲めに本體が見えないで、昂奮した聲ばかり聞えて來るものになつてしまつた。千鶴子の「三内裁」は面白い空氣が書いて

あつた。尤もこの作も一月號に出たこの作者のものと同様に、その根本は極めて習慣の心でものを言つて居るが、全體に漂つて居る空氣が珍らしく面白いと思つた。すゑ子の「其日」は、極めて我儘な、勝手な目で人間を見て居るものと思つた。しかし、才走つた書き方に、少しばかり面白いと思はれた處がある。同人の「女」と言ふ方は一層拙劣で、淺薄で、いやみであつた。世良田優子の「賣られた子」、これも、近頃この小說壇での流行の藝者を書いたもの、そして幼稚で、呑氣なセンチメンタルなものこの作者はたしかに考へ違ひをしたらしい。自分がこの人に向つて迯つた前からの言葉を少し忠實に考へなほしてほしいものだ。番田順子の「娘」も、藝者小說だ。どれもまあ同じやうなものだ。いやな氣持の惡い模倣だ。それでもこの作にはまだ一應讀ませる力がある。藤田美夜子の「上京」には全體に作者の息が籠つて居た。勿論極く甘い感情ではあるが、この人が極めて正直に私信を書いて居るやうな處が嫌味がなくつて面白かつた。村山咲子の「人の命」は何の力も無い作。ほゝづきの「わびしい人」には平坦の裏に弱い暗さがあつた。勝れた作とは思はぬが、聞いて不快な物語ではない。山崎都鳥の「蒲團」これもそのくろうと小說の一つだが至つてつまらぬものだ。一體こんな流行は何から始まつたのか、自分はそれを知るに苦しむ。朱い花の「黄昏」この作者は恐らく都鳥と同人と思ふ。こんな事はつまらぬ駄じやれをされたやうでいやだ。

　この二篇は同じ位に何でもない斷片だつた。つまり作者の智識が足りぬからの事だらう。その中でも「黄昏」の方がいゝ。葵の花の「長屋の人々」は小器用に書いてあるが、ひどい言葉が平氣で使つてあるのが第一に嫌であつた。全體が淺薄で、粗雜だ。つゆくさの「君代」これも一種の因念小說だ。幼稚なもの哀れな小說だつた。貞枝の「淋し心」これも拙劣幼稚、自甘。のり枝の「島田」には平凡であるが、よく書いてあると思ふ點がある。小林たか子の「夜の影」は面白い作だ。人間らしい不平を聞かされたと思つた。勿論これを讀み憎いとは思はなかつたが、多くの作のやうに自分の心と無關係の事を聞くやうでなくつて嬉しかつた。わかばの「見合ひ」女らしく細かに書かけて居る。その人の手腕が大分大丈夫になつて來た。

△以上で選評は終つた。さてこれから、自分の感想を書いて見たいと思ふ。三月の雜誌で是非諸君に讀んで欲しいのは、「新潮」の卷頭にある高村光太郎氏の「純一の藝術が欲しい」と言ふ談話である。これは或る意味に於て、谷崎潤一郎論であつた。尤も徹底した同氏の批評であつた。次には太陽の卷頭にある浮田和民博士の「公娼私娼の利害に就て」と言ふ文。これについてはともかく吾々が一讀して再考せねばならぬ事であると思つた。吾々の前には實に恐ろしい問題が無數に横はつて居る。自分はこんな事を思つて來る時に、日本の婦人で所謂覺醒したと稱する部類の人の上をも併せて思つた。一種の深い苦笑が浮んで來るのを覺えた。

△自分は又田山花袋氏の「死の方へ」を讀む光榮を得た。この作のみならず、以前から、氏の作を中心として、それに對して一つ精細に自分の生活を考へて見ようと思つた事である。自分には花袋氏の書かれたものを見て居ると、或る人々の生活を、その人と同じレエルに居る人が正直に話して居られるのを感じる。さう言ふ點に於て、殆んど間違が無い。メートルグラスで計つた藥の量と同様である。であるから、それを一つの標準にして、自己の生活を感じて見たいと思ふ慾望が自分にはある。この言ひ草は、頗るエゴイスチックなものだが、ノンセンスではないと思ふ。で、氏の作は、どれでも大抵同列にあると思はれる位の出來ばえである。この「死の方へ」を見ても、縱横に所謂客觀描寫がしてあるのを見る。一人の人が不治の病にかゝつて、死んで行く處が精細に書いてある。しかし、自分のこの作に對して考へる題目は、これから一歩先きの事である。併し、この小冊子は多くの人が必ず心に打たれるものがあるだろうと思ふ。これを讀んだ諸君は必ず種々と自分の身邊を見廻はされる事であらうと思ふ。

△次に自分は今月の初めに中澤臨川氏譯の「露西亞印象記」を受取つた。それを樂んで讀んで居る。これに對しては次號に書かう。

△諸君は又、日本の從來の小唄の書を讀まれたであらうか？……もし讀まれないならば、或る時にそれを味つて見られたら面白からう。書となつて居るのでは、「歌謠類聚」（二卷、博文館）「俗曲大全」（一冊同上

「童謠全集」（春陽堂）などがある。その外にも「松の葉」と言ふのが一冊ある。これ等の書を讀んで見て、自分は小唄の持つて居るリズムに少からず心を奪はれた。細密に渉つては又折を見て書く事とする。尤も自分は昨年の「新潮」に二回「隆達の戀の唄」「小唄を讀んだ後の聯想」と言ふ題で解釋と、感想との間のやうなものを書いて公にした。

○うつり氣

横濱市　つきぐさ

「右の手を御出しなさい、エヽ一白でしたな、水星とはゝあ」黒い法衣に白いけさを掛けた高建寺の坊さんはじろ〳〵と面を見ながら云つた、美枝子は例の好奇心から手は出したものゝ胸の中を探られる樣で辛かつた。此充滿秘めた塊を人に破かれるのが情なかつた。

今にも引込めたいのを兄の半次も居る手前、まさかに左樣もならず、うつむいて居ると、坊さんは圓い眼鏡をかけて凝然掌を眺めたり、擦つたりしたが、ニヤニヤと笑ひだした、彼女は何がなしゾッとした。

「貴女は見掛けより大變苦勞をして居ますね、コリヤ如何だ、其圓滿な御顏は何の苦も無さ相だが」此「圓滿な御顏……」が半次を笑はせた、美枝子もとう〳〵噴出して終つた。が此方は一向頓着なしに首を心持傾げて。

「大分千軍萬馬の中をくゞつて來ましたな、ア緣談がある、いや是は屹度まとまります、もう出來て居ると云つてもいゝ位だ、ハヽヽヽ」と磊落な笑ひ方をするかと思ふと、もう眼鏡を終ひかけて片手に冷え切つた茶碗の酒をグッと呑み干した。

不安相に眉をひそめて居た兄のかほは段々和らいで行つた。裏ではゴン〳〵と新家の立增しをする大工の鋸の音がきこえて來る、松の枝を挾んで居る庭師の鋏の音も長閑に響いて來た。立切つた障子の硝子を通して四五輪蕾を破りかけた白梅の下に飯事をして居る兄の子の六つになるのと、隣のおうたちやんの踞んだ後姿が見えた。其方を時々見ながら。

「ぢや宜しいんですね、直ぐに定めて終ひませうか」氣の少さい半次はオッ〳〵した調子で聞いた。

坊さんは相變らず卒とつがした土瓶の口から酒を注いではグビリ〳〵と飮つて居た。

「左樣さ、まあ善は急げですな、一體云ふと此女は移り氣な性ですね、此處に櫻があるとする、あゝ好い花だと思ふ、と又一方に柳がある、あゝ之も又サッパリしていゝと云ふ、何でも意志は强固に一方に貫かねば不可ません」

云はれる度に美枝子のかほは赤くなつた、全く自分程心の弱い者がありさうにも思へぬ。今迄醫學をやつても中途で止し、造花や刺繡を習つても長くは續かず人を思つたのも幾度だか知れない。それも一寸の拍子で嫌になつたり、手を握られなどすると直ぐもう氷の様になつて終ふ事もあつた。其意氣地のない事は自分でもよく知つて居た。雖、是許りは持つて生れた性質で自分では如何する事も爲らなかつたのである。此坊さんの云ふ通りなら自分は矢張り嫁かなくつちやならないのか、三荷とか五荷とかで嫁入して姑に仕へて子を持つてそれでお仕舞ひ……。思ふと堪へられなかつた。もう若い此燃えたつ樣な血の漲つた



お客さま　たけ

胸は黒いもので濁らされて終ふ樣な氣がした。兄はと見ると例の單純な妹思ひから滿足想に笑ひ傾けて坊さんと雜談して居る。

美枝子は押される樣な氣地でソッと障子を開けて緣に出た、碧の空は淡いけれどももう何處か春らしい空氣が漂つて吹く風さへ冷たくはない。

熱い頰を押へて柱に凭り掛り乍ら低い杉の生垣を越して外に眼をやると、其處に脊を圓くして板を削つて居るのは新弟子の桂さんだつた。彼の京なまりは厭だけれども、どこかサッパリした氣性なら、姿なら、惡くはないと思つて、うつとりして居ると、向ふでは何も氣付かぬらしいヒョイと此方を振向いた眼が美枝子の眼とパッタリ合ふと白い面が眞赤になつて輕く頭を下げたなり固くなつた。彼の仕事に熱中して充血した眼は一寸忘られないなど〻思つて居ると、

「先方ですか、エ〻來年大學を出るのださうです」

「そりや結構ですね、今時の人間は學問がなくつちや駄目ですからな、拙者の樣に軍學許りではちと……」

ふつと障子の中から這麽話がきこえると美枝子は頭から水を浴せられる樣な氣がした、あゝもう自分は嫁く身だつたのだとつく〴〵自分の移り氣を耻た。

默つて座敷に入るなり傍の盃を取て二三杯立續けに酒を呑みほしたが心はやつぱり落付かなかつた。半次は不思議想な顏をしてジッと見詰めたが坊さんは相變らず「ハ〻〻〻」と笑つて居た。

○原稿の書き方に就いて

▲數多き投書の中には、字體を叮嚀に書いてあるのもあるが、また亂雜な書き方をしてあるのも決して少くはない。嘗て選者葉舟氏は『諸君に御注意をねがひたいのは、原稿の亂雜なのには全く苦しめられる。諸君は自分の顏を美しくし、姿を美しくされる事を忘れはなさるまい、と同樣に、自分を發表する凡ての事に注意ありたいものだ。醜い字の女は醜く思はれる、と言つたら少し酷いかもしれないが、亂暴な書き方をして居る人を想像すると、その人の心がなげやりなものに見えてならない』と言はれた。記者も同感だ、小說には殊に、句頭や、字の使ひ方や、振假名の細い處に注意しないと、其作の價値にまで及ぼす影響は少くない美しく書けと云ふより、正しく書けと言ひたい、上手下手より叮嚀に書いてほしい。（一記者）

詩

河井醉茗選

○哀愁のをどり

豊後　吉田　夕草

海には「哀」を積みたる白帆浮びて
わが魂をおびやかし
山にはとげある木の葉の「愁」を咀や
きて吾が胸をいたく刺す
……げに悲境の極みなる……
仰ぎ見れば恐ろしくも
爛れたる落日のみだれに
悲哀の斑點露出れ
次第に濃くなり大きくなりて
――何事か私語く――その
絶望の皺がれし聲よ？
朱の唇はいたくしびれて
殘されたる寂寞の中にからくも呼吸
つく――
夢見る怪獸の如き温順しき沈默
闇き恐怖
…………
仄かににほふ薄暮
美くしくほゝ笑む大地
自然の充實
人は爭ひてゆく歡樂の巷に――
あはれならずや……吾れひとり
何を捉へんとて來し……（天賞）

一躍進境を示す、賀すべし、昂奮せる精神狀態は其まゝに表はれてゐる、此調子で、たゆまず進めば申分はない。（評）

○夕暮

東京　白鳥　正江

いづこよりかさしまねく暮の色――
今し方までさゞめきあひし小鳥
ものあはき嗟嘆の羽音
噴水に迫り來るあめつちのふるひ
色とられたる花園は
――接吻に衰へ行く……
ヒステリカルの大空に
さつと過ぎ行く痙攣のわなゝき
遠き彼方に子守唄の
心よき夢のしたゝりしづくと來る
――

怪しき心

斑なる我が心
いとあやなし、うち顫ふさす
やゝ疲れて幽なるひらめき
狂人の駈り行くごと――
照り返へす日光の痛み
古沼の水草も腐れ
滅びんとする冬は音なく光りもなし
わびしげにかいつまぐりつゝ沈みゆ
く（地賞）

夕暮の方が緊縮して、まとまつてゐる、怪しき心の方は只の一斷片にすぎない。（評）

○夜

神戸市　足立　春子

薄暗れて……
霧にうるめる瓦斯見れば
都の街の戀ひしくも
また怖ろしき思ひして……
夜櫻の夜店にならぶ蒼褪めし人の哀
れさ
カンテラのむせかへる
油煙の下の人波に——
綠、赤、紫色の華かな雪洞の影に—
傷々しく疲れたる瞳は
驚愕の光りいと強く
物凄きまでに注がれてありぬ
見よ
玩具賣る女の頰を
瞳を
とがれる口を——
聲たてゝ客を呼べども
かすれ〳〵て苦しげに
吸ふいきのみはたかゝりき
あゝ、都の夜のこひしくも
また怖ろしき思ひして
われは
顫ひぬ、悲しみぬ。(人哉)

次第に整って來るのはたのもしいが、まだまだ人の開いてくれた道を探して、好い方へ進まねばならぬ。(評)

○二月の歌

信濃　二葉

二月は
硬く閉ざされし池の氷
音立てゝ岸邊を離れ
薄く細りたる影をわづか水面に止む
閉ざされし幾月を
苦しき悶えになやめども
白く閉ぢたる氷には青葉の若き微笑
は浮かず
あゝ今氷解けて蘇生たる透明な水は
うれしさに小波立てゝよろこべど
汀に赤き花咲かず
綠の草の葉影失せて
立つは
痛ましき北風に
心も枝も破れはてゝ石灰色に死した
る
寂しき葦の殘るのみ

○

二月は
憂鬱なる北庭の
うすら寒き片隅に
泥にまみれてのこされし暗黒色のき
たなげな雪も
いつしか解けてみにくき影を失へと
冷い北風は去りがてに
生存に疲れてなやましく
樹々の心は破れ
暗褐色の枝をふるはす裸木を
痛ましくも苦しめ苦しめて
小氣味よきせゝら笑ひ
激しき音立てゝは
愉快げに
枝から枝を渡りゆく。

また散文の領域なり、詩とは云ひ難い。(評)

○悲しきなみだ

富山　村山　咲子

雪ふる日のさびしさ
もの思ふ日の胸のかなしさ
われは悩の中に生れ
憂愁の庭にわが影を知りて
かくてなほ、淡き溫みの昔の夢をなつかしむ
悲哀のかげと嘆息のこゑと
醜き姿とをもちて
人かげに隠るゝわが身なるを
あゝされど――
おそろしき
かのおそろしき、われに仇なす人を思へば、
わが心なほ、いかりにふるへ
悲しき涙の中にたゞよふ

しつかりと歌ってあるが、餘りに力み返ってゐるやうで心持が硬い。(評)

○夜と壁

大阪市　杉山はなえ

黒き夜のむくろの聲もせぬ悲哀・・・・
あさましや――
白壁は冷笑てあり。
夜の白壁の冷たき色よ。
追憶よ――。
汝に宿かる濃き影、淡き影、
いづれかとく消ぬべき運命ぞ持てる



春雨のたえ間　長野縣　細田草子

夜の白壁のつめたき色よ。
おもひでもなく、なげきもなく。
冷かにひや丶かに白壁は……。
夜を…わらひて立てり……。

タ　オ　ル

過去よ……夢か……。
追憶よ……幻か……。
夢まぼろしに過去を追ひ、
やはらかき絹ハンカチを破りても、
濡れしタオルを頬にあて丶。
沁み入るばかりおもひても、
泣けぬはつらきさだめかなし。

タオルは面白いと思つたが、た丶それだけだから大いに物足らぬ。(評)

○光線の遊泳　筑紫　饒子

水の汚い大濠のた丶中に、何處より
ともなく流れ行く小波の上に白日の
斷片が群れ遊んで居る。
眞晝中漂へるちり芥の血の氣もなく
白くさらされし姿は、見る目も慘き
に氣付ないのか、あの嬉しい姿、――
が―見て居ると面白い〳〵、――
まあかけつてでもするのか、あれ、あれ、
速い事、あれ〳〵、チカ〳〵チカツ
とすべる樣にとぶ樣に、千も萬もい
つしよにあの輝き、あのひらめき、
白銀色に黄金色にチカ、チカ、と小
く鋭き、――ほんとふしぎな光體、
何と云ふものだろ――、光線の遊泳
――ほんたうにふしぎ――

感じは受取れるが、如何にも表はし方が弱い。(評)

○皿の苺子の液　東京　ふすみ

水晶の皿に盛る――
紅き苺子の液見れば
美少女の
初戀の
胸の樣にも思ふかな。
美くしや
苺子液の
紅き色……

水晶の皿に盛る
紅き液をば
「誰か思はむ」――恐ろしと。
そは、妬み人なれ。

燃ゆる胸
少女が血汐
聖なる戀よ。
美くしや
皿の――
紅き苺子の液こそ。

單純だ。(評)

○曉の花　城南の里　鈴枝

星の光や丶にうすれ
神代めく曉の空は沈默せり
霧深くたちこめて、未だ
萬象は夢見つ丶ある中に
一つ――た丶一つ

眼覺めたる白き冷き花の
淋しげになやましき

遠方の鐘のひゞきにも
嬰兒の息の如き——
あるかなきかの風にも
物怖して不安らしくふるふ
ほろ／＼と露はこぼれ
やるせなき萌の吐息は
かはたれの地を這ひ廻る
——感動きやすきわが心は
誘はれてすゝりなく——。

眠れる世を
活動に呼びさます
美しき朝燒の色彩、太陽は今
彼方の山の端に昇らんとす
白き淋しき花は
そが温き接吻を
待ちわびてまた吐息しぬ。

○黙せる海

大阪市　磯千鳥

海よ々々
懐かしき眞蒼の青き海よ
お前の身體は薄青き綾緞で蔽はれてゐる様に
——
千尋の底まで見え透いてゐるよ。
お前は何故沈黙を保つてゐるのか
死んでゐるだろう——お前は
黒い魚はお前の底に沈んでゐるじやないか——
レベルなるお前の上を蜜柑船が——憂鬱な灰色
の沈黙を破つてぎつし／＼と動いて行くのがお
前には懐かしいのか——悲しいのか
お前は屹度それに酔されてゐるのだなぜ一音で
も白い波を見せて呉れないのか。
妾は唯だお前の白い波を見たばかりでうら若い
妾の胸の悲しみはそれで消えて行くのに——
眞にお前は同情のない——



寫の行方　大阪　大関照葉

○絲の色

牛込　渡邊しのぶ子

若い女が糸を紡いでゐる、
きれいな糸だ、
降つてくる雨の様な色だ、
松葉の様にも見ゆる、
糸はせん／＼紡がれて行く、
若い女は無心になつて紡いでゐる、
きれいな糸を、赤、青、白、

黄くも見ゆる糸を、
私の心も紡がれて行く、
赤い時にはうれしさが、
青い時には悲しさが、
私の心が紡がれる、
赤い糸の美しき笑ひ、ほゝゑみ、
私も笑はれて、
若い女は無心になつて紡いである、

○黄昏のわびしさ

ことり

血の吸はれ行くたそがれ……
靜かなるうすくらがりに
煙るが如き雨のさゝやき……
泣きつかれたる女の頬の如くに
うつとりと涙ぐむ
うすもゝ色の西洋花は
只一人うちふるふ。
思ふともなく沈み行くひと筋の愁――
消えては浮ぶ一人子の悲しさ、
兄さんのやうなKさんよ
思はいつしか汝の上に漂う。
暮れ行く春のほのぐらき
汝のない室の深き沈默……
灯ともす力もなく
只雨の歌をきく心わびしさ

○少女小曲

仙臺　藤村京子

A

白い小指を灯のもとに
透して見れば桃色の
血が躍る血が躍る……。
赤城つゝじが夢のように
春雨の夜を赤く咲く。

B

美しき雛妓を思ふ春の窓
若き心のもの疲れ――
泣いた瞳にやゝいたむ
三味線草の白き花

C

ひるの光の揺れる
林の奥に鳥が鳴く
お酒が死んだ栗の木に
鳥が鳴く明るくぞ鳴く。
薄青くふくらみてゆくわが愁。

D

春の灯が
つやつや光るわが髪に
匂へば籠に鳴きいづる
カナリヤの黄なる胸毛もなつかしや。

○暗の迫り來る時

愛子

夕べの鐘
あたりの空氣をふるはして
暗き闇の迫り來る時
運命に泣く
若き女の
ひとり窓に佇れば
はかなき想出の湧け
今宵空は
白き霧につゝまれて
星の影もあはく
孤獨の寂しき魂は
顔をふせて
何をか思ふ
青春の血汐は
世のうきに
枯れ果てゝ
疲れたる胸には
響もなく
疲れたる眸には
光りもつひにあらず
昔の笑みの
絶えてなかりし
我白き唇
冷き心は
暗より暗にさまよふ
いつかは安き日の來るべき
目をとづれば
時は靜かに逝く
我かなしき情緒を流して
永遠より永遠に

はるのことりは、あとなきはなを
またひてなきぬ
なつはきたれり、やまよりのより
みどりにさめて

S M



自然（散文）　編輯局選

○あかるい朝

本郷　平塚白百合

劇しい女の執着を思はせる椿の花は、青閑の小ゆるぎもせぬ葉の間に、ボツ／＼さいてゐる。三月初旬にしては氣味の惡い程暖かい日で、筋肉は何となしに甘い勞れを覺える。

裏の物干場にはメリヤスのシャツや、股引肌着などが白く輝いて、光つた露をふり落してゐる。

有たけの障子をあけはなして、四月頃のやうな明るい光線を引入れた。掃き出した後の室には上に下に金色の塵が、輝きに舞踊して、それが程なく皆下にしづしづ下りて來た。

疊、柱、廊、皆何かの匂ひをふくめたやうに綠色の光澤がまつはつて、窓際に据ゑたテーブルの上までさしたやはらかな日ざしは、はなやかなテーブルクロスを燃え立たせてゐる。卓上にはラフ紙に印刷された新らしい書物が開いてあつた。その白い匂ひの紙の上に、一輪ざしと半身石膏の間にはさまつたブルーのインキ壺を透して、單純な日光は、青、紅、紫のつよい色彩となつて映射してゐる。幼なき昔、私はこんなグラスを透してくる色彩の世界に、そゝられやすい好奇心はどんなにもえた事であつたろう。

紙の上に手を置いた。小指から人指し指にわたつて、斜に色光線の映つた指は、一層細く美しく見られた。恰度、色電氣に浴する舞臺の女のやうに――私はそのまゝ手を置いた。指先きに出た活字が紫の輪廓を覆輪して『光つた雲。銀の匂ひ。鉛色の。うとましさ。めた心。』こんなちぎれ／＼の文字が讀まれる。

次第にガラスにくるはげしい光線が、額に熱をかんじるやうな氣がしだした。顏を上げると、大やうな柳の細い枝が、青絹のやうにフーワリした曲線をしなやかに畫がいて、地には乾いた石ころさへ丸味を帶びて見られる。

私はこんな日よく、京のくらい宮寺の內陣を、夢語

かゝりのやうなローマンチックな説明をきゝながら、うつとりと足をはこばせて、ふと重い扉から見た外光の強い刺戟に、しづかに目をとぢてゐた、そんな心持がなつかしく思ひ出される。

空を見ると、あやうく日に消えさうな淡い雲が動いてゆく――さし込んでゐた日も一寸ほど退いて、彩光は左に強く動いてしまつた。この間にも時間がふくまれてゐるのだ。こんな觀念が浮んだとき、あわてゝ裁板と、細かい大島と裏地をとり出した。(天賞)

婦人通有の室内描寫としたは大いに振つた方だ、元來白百合さんは、此方面に於て斷片的に閃く才を持つてゐる、長くつゞける根氣は何うかしらぬが、短いものにおては色調鮮明、いつも勝れたお手際を發揮する、短いものでも積れば侮り難いそれで其人の個性の厳存を意味するのだから、吾等は飽くまで此方面に進まれんことを熱望する、讀書と觀察、此二つさへ忘れなかつたら題材は無盡藏だ、結婚と同時に筆執ることを忘れて了ふ感情家の列から離れて、細くても小さくても、別に一個の藝術に遊ぶのは好いことだ。(評)

○春徂く頃

京都　廣江曉子

幾日か銀の雨がそゝいで、
晴れた日の朝風にほろ／＼と花が散る。

忘れて居た物のひゞきに自然と逢ふ心地、しばしは眉も動かさず、私はじつと地上に敷ける水晶の破片の樣な花片を見つめた。

その日より、あでやかな織物の帶の、美しい、衣の上をほどける樣に、凡ての花は枝をはなれ初めた、若き旅人の驚も、憧憬にふるふつばさに熱い涙や落ち初むる、何となふ美しい聲を物哀れに聞き初めて、熱い熱い胸の血を靜に／＼さまさるゝ心持、さまされて我が魂は深き／＼憂愁の底へと誘はれ行く。

歡樂の春の日つきて、終りのしばしを夢の樣なうす曇りの日がつゞく、梅さく頃より花に數へし日はかなり長かつた、けれと今かへり見れば飽き足らぬ。

見果てぬ中に消えゆく夢の悲しさよ、さながら番へられた矢の射られずに地に落ちしにも似て、遣瀬なく、快い彈力を失ふて身も心も重く、髮をすくのさへものうい、みだれた儘を幾日も／＼も撫でつけておくと、心は猶更沈むのみである、五尺の髮のみだれの物狂ほしさ。

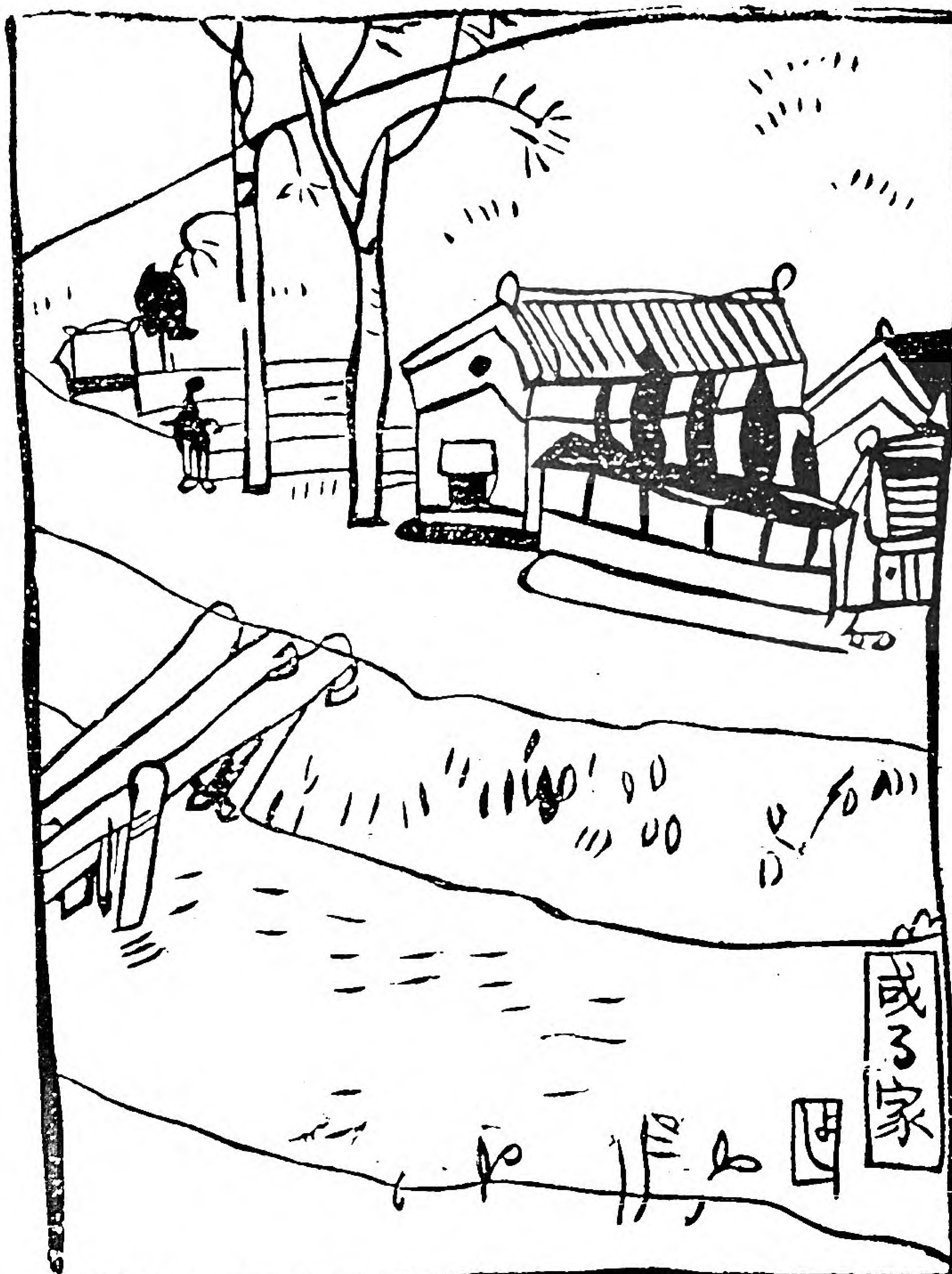
秋の日はよく我が心に和して、快い涙を誘ふた隣家のビオロンの音は堪へ難い胸の裡を、いとゞ掻きみだす樣におぼえて、沈み果てた心は、現世に生くる術な

き人の樣に、闇をいでて闇に消えゆく追憶の、影に親しむ。

昔忍ばしい黒門も交る生垣多き小路を行きつつ、ふと幽な琴の音に逢ふ、白い指先の遣瀬なさに、掻きならすらしいものうい調べのなつかしき、さながら其處に同じ思ひの人を見る心地がする。

散る花の香ひ籠もる薄月夜、耳に落ちくるかすかな、ひゞきもない外面に、何となう誘ふ物あるらしゆう、灯の陰に身はありながら、思ひは定めなく、ほろぶる夢くづるゝひゞきの、美しくも哀に傷ましい戶の外をさ迷ふ、かゝる時ふと眼—い—人の心のうちなど思ひやらるゝ一つの物をいつ迄も見るに堪へぬ不思議な眼よ。

絶え〲な樂の音と、淡い追憶の夢をよろこぶされぎれな我が心はつなぐよしもない、堪へ難い幾日の後に私はどうなるのだろう、物すべて緑の息によみがへ



或る家　麴町　安西よし子

る初夏のかゞやかしさを、思ひやるだに眩しい樣な感じがする。

雲雀の聲の消えゆく空に、光ぬけた白雲は重々しい倦怠の色に流れて、地は次第に白う、梢は瞬一瞬にさびれゆく、晝となく夜となく、雨は折々忍ぶ樣な音を立てる、重い鐘の音の山からまちへと鳴り亘る夕暮などさながら相思の人に別るゝ思ひ、面やせて私はじつと柱にもたれたまゝ、失神の人の樣に茫然と立ちつくす事があつた。（地當）

美くして書いてある、文章も疵の無い好い文章だが、聊か綺麗にすぎて生色を缺く、例へば蒔繪のお重か何かの美術品でも見るやう、結構は結構だが甘味が乏しい、此作者は何うしても主觀的のものより、純客觀の描寫風のものが好い。（評）

○高原

百瀬美水

畑の間々に、開墾され殘つた芝原がある。それが自然に道となつて、うねり〳〵てどこまでも、細くなり廣くなつてつゞいてゐる。私は、それを、辿り〳〵隣村へ横ぎつて行つたことがあつた。隣村へ行くには、北の方に立派な道があるから、こんなところを歩くものはめつたにない、で、疊のやうに綺麗である。下駄をぬいで歩いてみても、足袋は少しもよごれない、私は、うたを歌ひながら、足袋はだしになつて枯芝の上を行つた。足が輕くて本當に面白い。そこらをみると、いばらに去年の赤い實が殘つてゐる位で、なんにも見るやうなものはない。唯、枯た草ばかりである。日あたりのよささうな土手の、枯草の間に黃るいトテコッコーの芽が出てゐた、もう二十日ばかりたつとこの芝原へちご〳〵の花が咲く、幼い時、トテコッコーの若芽で、笛をこしらへるのと、ちご〳〵の花をとるのが何よりの樂であつた、私は、だん〳〵芝原のへつて行くのが、何よりも悲しかつた。

みどりの色美しく、ふさ〳〵とのびた麥の畑は、たまにあるばかりで、小高い丘へ上つてみると、一面、茫々とした桑畑である。ふりかへつてわが村の方をみた、松林の間にちらほらみえてゐる。隣村ははるかに遠く、はづれの家々がみえてゐるばかりだ。大野の眞中である。私は、今更のやうに四方の山々を眺め廻してゐた。その時、ちやうど日は靜に西山へ沈むところであつた。眞赤なまぶしい夕日が、あたりの雲を染て、靜に〳〵畝山のうちに沒する。高原の落日は、實に靜なものである。遠くかすかに、石に碎くる木曾川の音が

聞えてゐるばかりで、他には、何の音もしない、たゞ、遠くかすかな、流の音がするばかりで……日は落ちてしまつて、東山の峰の赤い餘光も、刻々にかげつて行く、空は目覺るばかりに美しい、靜に／＼四方の山々から暮れてゆく――――。（入賞）

此人ほど能く周圍の自然に同化し得るものは少い、文字には乏しいのはこれからの修養次第で豐かになれる、最初から持つてゐるものは失はないやうにしたいものだ。（評）

○山より

長野市　三根知佐子

薄明な光線が淡く物の影を作つて、不安な灰色に濁つた雲の隙間から折々漏るゝ日であつた。『奉納岩屋神社』と褪朱色に化つた赤地の布の文字が微かに讀まれる奉納旗が二本、何やら刻んであるにと眼を凝らしても見分難い程苔付いて黒う錆びた鳥居の前にハタ／＼と力無うあふられてゐる山と宮との登り目に着たい時私の足はもう疲れてゐた。

　山懐のまばらな藁家を圍んだくさ／＼の枯木の隙から覗く白梅の花が、色彩に乏しい二月の山にあきた私の眼にはどれ程嬉しく映つたろう。懐に思ふ樣の擴でりを見せた、八ツ手の葉や、霜枯れた穂薄の丈長つはびこつてパサ／＼と葉ずれの音鳴らす尺餘の道は、重なり複なつた幾つかの山裾をゆるやかに繞つて、無言に縫ひ行く私等の爪先にくねつた一筋の白線が展開されて行く。七色の紙で花の形や小判の形に刻んだ短冊を一面に吊した樫の枝をかついで、味噌漬の香を包んだ藁づとを下げ乍ら、此の白線の中に、草履の跡を印してふり來る人は一樣に屈托した如な眼を私等に向けて去つて行く。黄に緑に濁り帶びた草木の間を十八丁も登つた頃、細い路は消えたが、幽玄に靜まつた眞晝の山氣を顫動さして陶器のカチ合ふ音と、激しく物言ふ人聲の耳近く響いて來た。

　一かたまりの黒う茂つた木立を繞ると、麓に見た樣な五六本の旗の蔭に、新らしい白木の堂が低く建てられてある。赤い毛布を掛けた廣い番臺を堂の前に、四ツ許りすゑて、疲れた登山者に茶を賣る女が二人『お掛けますせ『お寄んなはりますせ』と口々に呼ぶ、久春の町に聞く女の艶な口ぶりと、飾らぬ聲が嬉しかつた。大樹に光線をさけた二ッの番臺には辨當開いた人が一ぱい集まつて、騷がしく語り合つて居たが、私等を見返つて唇閉ぢる人もあつた。さつきの物音はこゝから

響いて來たのであろう、此の山の土産と見えて下る人の肩に見た樫の枝を賣てゐる、空の氣遣はれぬ限り麓の家から水と道具を運んで此所にこの茶店を出すときく。

み堂の扉は開かれてあつた、半ばを白い幣にくゝり上げられた白帷の前に額伏して、小聲に祈つてゐる女の細つた手にともされた二ツのみあかりは、傍に立昇る幾條の香の煙の白う亂るゝ中に半開の帷の陰に奉られた御像の黒い半身をまもつてゐる。足なやみて胸迫ると云ふ幾百の男女が杖に縋つて參堂し、心さま〴〵に祈りの聲はたえぬであろう。

一ッ一ッに念じ終つた病者は、こゝに病を癒やされた人々の喜び滿ちて、けんじたといふ女竹の杖を受けて山を下り足の痛みの取れた時新に一本を奉納するとか。

祈りの心、祈りの聲籠もる此の御堂をかるく拜し『頂迄十八丁』と刻まれた立石に眼を遣つて嶮しい路を登り出した、頂は眺めがよいと友の一人はいふ、私には人の聲も物の色も眼に映らなかつた、烈しい胸の皷動許りを知覺して『それ程疲れません』と平氣でゐる友に一時間もおくれて川柳と枯草の一面生えてゐる頂に着いた。

私は友の歌を遠くの聲に聞き乍ら、草にすわつて油を注いだ樣に薄白う濁つた港外の水へ往來の汽船がはつきりと横に縱に斜に幾條かの線を印し去つた舟路の跡のいつ迄も消えようとしないのを目が痛くなる程見つめてゐた。

心も細かく働いてゐるし、習慣から囚はれないやうにしてゐる態度も能く察しられるが、自ずと出て來る文字でなくて、苦んで產出した文字だと云ふことが分つていけない、もう少しらくに書いて欲しい。（評）

○まひる

土佐　磐田順子

ガタン〳〵と、車の輪の石に觸れる音が地の底からでも起る樣にひゞく。私はふと目がさめた。新しい障子へいつぱいふりかゝつた光に、狹い室内は雪が反映するやうにパッと明るい。ねぼけた瞳に痛いものが沁みる。昨夜中うづき通した胸から腹の邊りが、ゲッソりしなへてはおるが、痛はチロリとしてもう一度痛さを味ふても面白いがなあ、とさへ思ふ。何處からともなく一體に騷々しい物の響が押しよせてくる。それでも聞き分ける程近い音は無い、かう思ふてゐると、ふ

とヂッとした明い靜けさにさはらぬだけに緣先に積んだ乾葉がサラ〳〵と幽かに輕い響をたてゝゐる。小鳥の聲が聞えだす、小山の彼方の一宮橋を馬車が亂雜にかけ渡る。私は枕元にあつた物尺を障子の破穴にさし入れてガタ〳〵引き開けたとひを洩れた雨滴が茶色に這ふた跡の汚れてゐる檜の小口から何物の上にも圓く廣く擴がつてゐる、甘い光にけぶつた



火事　京都府　竹村樹子

樣な空の、一ところがみえる。私はふと、かうして見てゐるのは餘りをとけてゐる樣な氣がして、起き上つた。無花果のもとの久しく轉がしてあつた大きい檜の根をのけた後の泥の樣な土がまだ雨に濡れた時のまゝにねず色の絹でも敷いた樣にユブ〳〵してゐる。それをはね上げて青い針の芽が簡きでてゐる細い先にも一勢に空に向つて伸びようとする一直線の

犯し難い精力が張つてゐる。灰色に木枯れてゐた桑畑も何となく油ぎつた滑かな濕が流れて芽ぐまうとする新しい力にひきしまつてゐた。今朝打ち返したと思はれる土が柔かに乾いて瀬戸物のかけらと、根元に置いた麥がらとがおとなしく光つてゐる、庭の隅の樅の下の芝草に少し舌を出して親犬が横はつてゐる、細い葉間に篩ひ起された煙つたい光が、サッと斜に葉蔭に浮いてゐる、風が吹く度に梢がざわ／＼と搖れて白い犬の背のそこゝに斑な影が、模樣の樣に亂れる、若い樣なよもぎの香がするかと思ふと痛い山椒の芽が流れてきた。粒、粒の蕾を持つた李の木間を透して外野の田は一面れんげの青と麥のふくらみと甘い菜種にパッとまぶしいうすぐさに色づいた堤の下で白い男が麥の手入をしてゐる。溝の土を上げてゐるらしい後にすさる度に體の蔭を洩れて鍬の柄がチラと佗びしく光る。堤の彼方の杉の多い林の先が氣の付かぬ間に茫と赤らんできた。あゝもう花が咲いたんだな、痛くなつた瞳をかへすと額にこぼれた髮が一筋、一すぢ光つて黒光る緣につかれた手の甲にモジャ／＼した影が淡くうつつてゐた

これこそはんたうに自然の描寫だ、あなたは何も彼も書かうとして取捨する術に通じてゐない。（評）

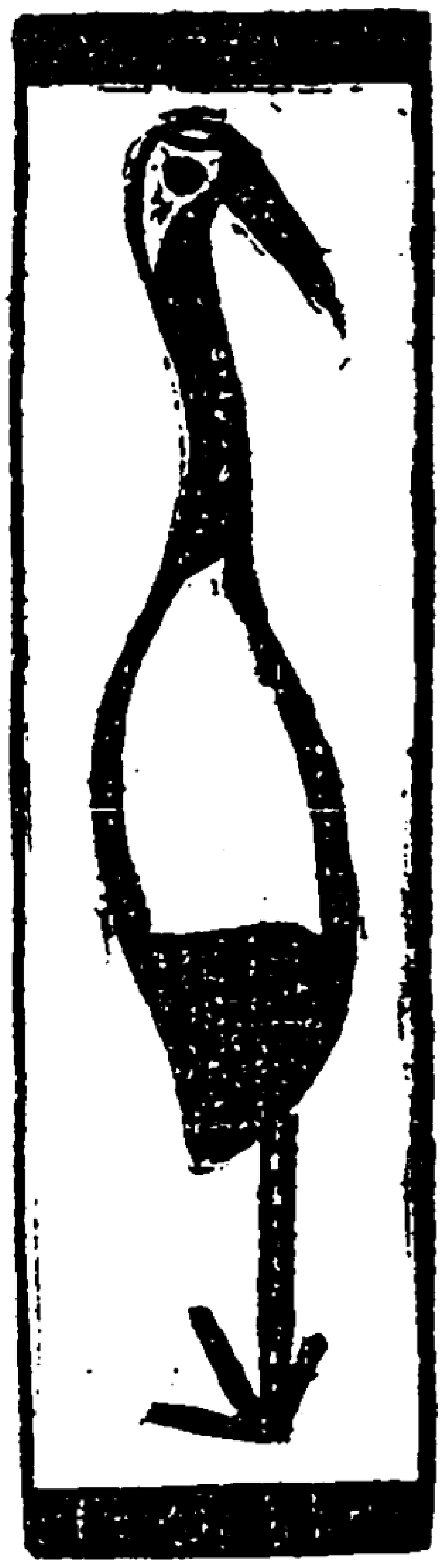
○春の朝

小さき泉

花信四方より來るといふ三月に入つたのに、冷たい雨は此五六日小止みなく降りつゞいてゐる。また床の中で居乍ら半日でも好い、晴れた柔かい春の日光を浴びたいなあと思ひつゝ、ふと寢返り打つた時、外を通る俥の輪にでも反射したのかまた薄暗い雨の窓障子に判然と格子の影が浮き出て、黄色い光がさした。がすうと物の通ると共に影も光も消えて了つて、元の薄暗になつたけれど、あゝお天氣だと身體のどこかで嬉しい心持が、小さな叫びを洩らした。ふと氣がつくと我乍ら可笑しくつて誰も聞いてやしなかつたかと四邊を見廻した時、妹はまだスヤ／＼と能く眠つてゐた。

カタコトゝ誰かゞ勝手のタヽキを踏む音に私もおき出した、硝子戸越しに庭を見ると、薄い塵の積つてた沈丁花の葉の表が、此間からの雨に洗れて氣持いゝ程生々と濃い綠色にかゞやいてゐる、去年十一月頃から小さな蕾を持つてゐた此花の、早く開く時分がきて欲しいなと　毎日だん／＼ふくらんで行くのを樂しみにして居たのに、もう半ばはぱつと開いてきつい泌む樣な香が鼻をつく、日蔭の花は可哀想にまだ青いまゝの蕾がかたい！

妹が大事にして居た福壽草は、手入の惡かつた爲か花は疾くに萎んで了つて、思ひきり丈ののびた葉ばかりが、破れた植木鉢等と一緒に片隅の方に押しやられてある、青磁の鉢が可哀想だ。その前の濕つた土に、葉も花も萎れた油菜が一二本つきさゝれてゐる。一昨日、佛樣のにと云つて買つた菜の花を何といふのと尋ねて婆やに笑はれた、末の妹の仕業であらう。土につき揷しとけたら根がつきますよと、婆やはいつて居たが眞實につくか知ら、何卒してつかしてやりたいものだけれど……。こんな市中に住んで居ては、自然に接する事が少ないから、田の畦に咲いてゐる花の名さへ草の名さへ少しも知らない、私なぞもよく田舍にゐる友達が山へ行くの、野で遊ぶのといつて來る度に羨ましく思ふ。一日でも好い、山や野の近くに住んで見たい！



和歌

與謝野晶子選

○（天賞）　神戸　足立春子

圓やかに積みもあげたるよき埴をつるはし持ちて君の碎きし

○（地賞）　京都　中野ふみ子

美しき君が口よりのたまひぬ蛇つかひせし夢を見しなと

○（人賞）　前橋　みづ枝

紅のをとめの世をばふりすてゝ紫の世にぬるがかなしき

佳作

○　名古屋　細川靜子

神々の誓ひのことばおほらかにかたらせ給ふわが戀人は

○　群馬縣　冷花子

日沒の後の靜けさ悲しげにうすら冷たく這へる夜の色

○　久留米　橋本果芽乃

われ泣けば皆悲しめり喜べば皆笑みてありすべてのものも

○　宮城縣　齋藤靜子

つばくらは香油ぬりたる黑髮の如く育ちぬつやつやとして

○　備中　吉備里子

なつかしき友と二人の語る時あはれに見ゆる夕暮の山

○　陸前　浮草子

ガラスなどくだけて降ると思ふかな花を散らして降る春の雨

○　札幌　俟野幽香里

淸らなる象牙のごときわが胸に戀をきざめる君はたふとし

○　横濱　つきゞさ

誰強く何れうつくし銀盤の首の唇吸ふサロメと我と

○　大阪市　小泉貞子

春の雨艷にふるなり新町に夕霧が泣く涙ならなくに

○　埼玉縣　大郷米子
わづかにもみそら染まり來らすやみにしろき椿をひろひてあれば

○　岡山縣　入江曉花
もゆる火の戀衣をば着たるより君は先づ燒けわれもまた燒く

○　本郷　平塚白百合
夏の夜の噴水てそはめでたけれ玉のしづめる泉のごとく

○　逸名
藁ぶきの家に紫の煙見ゆ白き砂地を歩むくれがた

○　秋田市　野の女
言々に針を含みて物いふと泪なきをば人のをそるゝ

○　紀伊　宇田すが
青玉のさますることのらうたしと梅の實なでぬ皐月の朝に

○　神戸　平櫛民子
悲しきは百千呼ぶとき君が名も強くひゞかぬ身となりしこと

○　愛知縣　中村百合香
たゞひとりめでたくゐますての君の胸をのぞきてゝなく

小鳥かな

○　上毛　福田露子
春淋しきちがひの子の魂の水に浮くよな落椿かな

○　宇都宮　松井澄子
枯草に秋のゆく日の明くさし迷ひて來ぬる赤蜻蛉かな

○　岩手　ひなげし
春のひはわがをとめをば照し居ぬ王者の如く氣高き少女

○　下澁谷　横谷ゆき子
春の繪と云ふに書かまし朧夜の打出の濱も瀬田なる橋も

○　東京　島貞子
あらしの日波たちさわぐ川岸を心ゆくまで泣きて歩まん

○　山口縣　宮原よし子
月いでぬ窓によりたる舞姫の銀のかんざしきらめく時に

○　札幌　白梅
深山なる古寺に咲く櫻花佛のごとし人は見ずとも

○　山形　英子
花咲けば花見ごろもを縫ふときく都の春の戀はしきかな

○　信濃　宮川よし子
渓流の丸木橋をば君渡る手をうちて見む我岸に居て

○　信州　つゆくさ
新らしき紺の匂ひおのゝきてはさみためらふ少女の瞳

○　仙臺　橋本園花
なつかしき家にかへれど二三日淋しき旅のゆめ思ひ出づ

○　山口縣　宮原タカ子
友垣は西と東に嫁ぎけりかたる人なきたび心地する

○　仙臺市　武村とも子
笑みて見し港の船の赤き灯も見て泣く今の我身となりぬ

○　下谷　中澤はる子
あぢきなしこの枯柳芽をふくは君と再び會ふ日なるらん

○　信濃　細田のぶを
夕月はほのに匂へり歸り行く君のみ髪の白きかざしに

○　長野縣　草路
繪をかける筆をやすめて鶯の歌をきゝにし春の野の朝

○　高知　わすれな草
夕ぐれをふる里戀ひて泣く人の肩に散りけりしろき花びら

○　靜岡縣　田中いし子
夢に見し戀の名殘りをせめてもと亦夢に見ん春の朝を

○　靜岡縣　田中ゆりゑ子
君知らず月に向ひて宵々を片戀に泣くさびしき弄を

○　常陸　山口仙子
少女てふ深き誇りとどよめきとさだめ待つ間の胸のたゝかひ

○　美作　水田邦子
待つ身にも待たるゝ身にもあらぬ身の如何でか今宵いねがたきわれ

○　近江　井上千代
常によく習ひごとする君なればその變心をうたがひもする

○　岡山縣　入江曉花
少女子が髪はつれさせ歎くごと廣野の末に淡き火の見ゆ

○　堺市　高橋尚子
夕月のかげさす窓に人戀ひぬ去年も今年もはた一昨年も

○　富山縣　林の子
姉君のよしと云はるゝ春の日の河邊の柳のふくらみてきぬ

○　愛知縣　中村百合香
友禪の袖裂く白き齒は鳴れど心狂はず狂へよと泣く

○　すゝき
我は又われにかなへる我道の寂しきことにかなしまずある

○　京都女師範　森本俊子
庭づらに椿の花の落ることいた〳〵しくものを云ふ君

○　民香
月の夜の磯の松原果てもなく遥き彼方に漁火の見ゆ

○　岩見澤　清川ゆき子
野にいねて光と色の美しき柩をおもふ少女のこゝろ

○　安房　吉田秋子
こゝろよく春の日照れりうらうたかる花のやうなる少女の顔に

○　千葉　伊東佐久ゑ
なつかしき都のかたをながむれば灰色雲のわだかまるかな

○　久留米　紅潮貞子
雨晴れて牡丹の花ぞうちゆらぐ泣きて心の變れるが如

○　小樽　吉成愛子
戀故に罪の限りを犯しつゝ心に思ふキリストの神

○　土佐　森田順子
遠くよせ遠く過ぎゆく風の音いとさびしくて明日を思へる

○　宮城　齋藤すみれ
雪消ゆる梢に赤き紅梅は強き女の誇り思はる

○　宮城　長谷川紫露
春雨の晴れゆく空に佐保姫のうすら衣か霞たなびく

○　足利　飯塚米子
いと猛くおはせる兄の夕ぐれをうた誦む聲のこと人に似る

○　麹町　横山愛子
母となり給ひし友と稚子かこみ淋しさなどを語る夕暮

○　大阪市　しぐれ女

嫁ぐ日を胸に描けば自から針を持つ手の遲々とする哉

○　伊勢　花笑子

いたつきに病む身は悲し春たてど樂しくもなしめしひの如く

○　京都　ほづ枝

あはれなる戀の少女がかみきりし唇の血に似たる椿よ

○　京都　宮原みどり

我が胸にフト忘れ得ぬ悲しみを殘して逝きし春の夕暮

○　近江　鈴蘭

淡藍のスカートを引き寺めぐる英吉利西人を春の風追ふ

○　埼玉　渡邊積翠

それとなく佛人のこと問へば誇り顔して童の語る

○　本郷　かね子

白百合のけだかさはなしさりながら忘れがたなき眼を持てる君

○　奈良縣　上田郁子

草花のこひしさ思ひ窓によるやせし身にきくはる風の音

○　神田　石田美子

かゝわりもなき話より其かみの戀人のことなつかしむわれ

○　周防　重原美女子

落髮の一つ〳〵をあつめつゝ病む子はけふも涙ぐむなり

○　伊豆　渡邊やす子

繪筆染め吐息をもらす我が姉の胸きかまほし紅の花

○　吉備　小田美鳥

琴ひきて君に傳へん我心春風吹けよ東のはてに

○　徳島縣　杉山雪月花

ともすれば吾が身のなかにかなしさをまさんとぞするさびしき秋ぞ

○　宮城縣　沼倉ふゆ子

咲き匂ふ千草の花にまさる哉晴れわたりたる空の星かげ

○　埼玉　高尾

若き日の戀など偲ぶそれに似て青葉がくれに咲く沈丁華

○　中澁谷　佐藤すて子

黄昏の小窓によりて蛙なく聲聞き居れば悲しみの湧く

○　高知市　北村美佐夫

病ませる姉のおん手に京雛の髮の緑か匂ふ夕暮

○　岡山市　石井幸子

春雨のふれる夜みちを若人は歌など唄ひゆきぬふるさと

○　廣島市外　吉田よし子

天地のさびぞわが身にひた迫る旅なる君に文を書く夜

○　失名

懐しき君が歸りを待つ夕風なきに散る白梅の花

○　福井　明ノ星

紫の花咲きながら藤蔓とねじられたるが悲しからずや

○　大阪市　長谷川美津

うち悲し夜の十二時の笛の音君ら乘せたる船出でゆく

○　佐渡　わくら葉子

戀君のめづる浪音けふもまたたゝずみてきく渚邊のわれ

○　廣島縣　芬の花

路の葉の青さを見れば戀しらぬ胸のさびしさ徐ろにわく

○　信濃　高原女

心地よく春雨すなりむら消えの雪も心も解けて行くらし

○　後志國　美夜子

今日もまた人形抱きて微笑みぬ二十の春と云ふもわすれて

○　岡山縣　蘂蘭

限りなき幸てふものを得てしよりまた限りなき寂しさもえぬ

○　龍山　あき

見まほしく文庫開けどいつぞやにやきにし文は影も無きかな

○　小倉市　渡邊よし子

美しきゑみをたゝへし彼の人は今はなき人悲しかる魂

○　山口縣　末富豊子

ひなげしの燃ゆるがごとき紅のその一輪に口づけしかな

○　山城　木の花

さく花はまつまのよろし山鳥の尾の永き日に君をまつ哉

○　伊勢　八重子
おくれ咲く我身は花と等しけれ見る人もなく咲きて散りけり
○　富山　村山咲子
不可思議の長き夢路を辿るごとわがこしかたをかへりみるかな
○　姫路　静子
萌出でし小草の上にもの思ふわが耳により胡蝶さゝやく
○　久留米　楢本果芽乃
かくまでにあふるゝ涙止めらるゝまゝに直に止まる涙
○　加賀　哲
われ今宵は炬燵によりて亡き妹がことゝ思ふなり破関ゆる
○　赤坂　武林朝子
ひとあまき雨する胸の片隅は萌えて狂ほし熱の草咲く
○　伯耆　新田文子
あせし花、梢にありて落ちぬごと色褪る人を思ひけるかな
○　京都　うら町
みだれたるわがこの心解緒の丸め捨てあるそれにも似たり
○　若狭　城子
はら〱と緋桃ちらして頬白は少女心をふるはするかな
○　茨城　浮舟
金色の大蛇まつはる夢さめて見ればあやなく髪の亂れし
○　下総　谷口美野子
若人の夢二が畫きし少女子に似るとしきゝて詳び口われ
○　麹町　牧野はん子
笛の音は何とはなしに悲しかりうら淋しくも別るゝ夕
○　城南　小島鈴枝
わが戀はたる花火のいろどりに似て美しくはかなきものか
○　札幌　静香
まどはせる手にえたへぬ我心一人ぬけ出て一人かなしめるかな
○　越前　菅野つゆ
わが命ながくもがなと病む母のかこち給へば散る山ざくら
○　福島市　吉岡直子

長閑なる春の日向に菫摘む少女の群の見ゆる窓かな
○　福島市　遠藤喜美子
赫々とおこりし炭の消ゆる如さめ行く戀のさびしきかなや
○　福島市　薫紫子
我が髪のほつれに塵のかゝるとき風はわびしきものとしおもふ
○　金澤　目黒美子
紅椿それの模樣の衣をきむ夜のいとかなし君のまさぬが
○　福島市　折笠蔦英子
夏きたる戀の炎はいや燃えて綠の森も燒くおもひする
○　秋田　愛子
春の戀君をおもひてひとり笑む胸ぞはなやぐはた靜かなる
○　逸名女
はなやかに歌舞伎をわれら出でたれど道の雪見て心も冷えぬ
○　茨城縣　鈴木やす子
弟よなぜに笛をば吹かざるや梅が香清き月の夜をば
○　群馬縣　鵜殿斌子
戀人に送らむ文を書きをへし其の一時に淋しさの湧く
○　滋賀縣　市川久子
母上を思ひ出でては美しきやさしき今の母を泣かせぬ
○　群馬　はゝ木
花に似るわかき女の湯あがりを美しと見き水ちかき家
○　函館　藤本島羽子
しめやかに春雨ふりぬ袖かみてはなのをとめが戀になくごと
○　美作　橋本紫
淋しがる眸をうつす庭の面にあやめ咲くなり五月雨の朝
○　王子町　大浪芳江子
紅梅の枝よりたるゝ露うけて君が御もとへ文を送らむ
○　信濃　長谷川末女子
一人の君をまちわる少女ぞといはむやうにも水仙のさく
○　肥前　みどり草
春の日のもゆる戀をばむねに秘め二人はかくて世をば恨まむ

○　本郷　敏子
力なくおとする時の鐘の音汽船の笛とゝもに淋しさ
○　岩代　春子
思ふるにも戀はるゝにてもあらねどもたゞ何となくなつかしむ人
○　淺草　葉都子
あさがほのさかぬあしたと彼の店に君を見ぬ日といづれわびしき
○　牛込區　竹内かすみ
舞あふぎ絲のあでなるを持つ少女くろき瞳に花丸斯のさす
○　群馬縣　阿久津しげ子
戀されてなほ戀しらぬ少女子も二年たてば泣くと歌よむ
○　石川　まさ枝
洗ひ髮肩をこぼるゝ懐しさ昔の絲なるリボンそとそゆ
○　深川　矢澤榮子
あてによき劇場の灯にひとみをば醉されし我役者も戀ひぬ
○　下關市　濃生子
今着さし凾を開けば小さなるもちいのありぬ母のまごころ
○　東京　花澄
針を持て刺すもはた宜し我が胸のけがれぬことを信ぜぬならば
○　大阪市　磯千鳥
少女てふ淋しき我は唯だ神を守りてありて泣き暮すなり
○　仙臺市　妙香
人思ふ心はみだれいたづらに立つ年月のうらめしきかな
○　下關市　美矢永はつ子
いとよわし心のまへに花あまた咲けどもとらで獨りもだゆる
○　大阪市　高本千鶴子
春の雨彌生の文字に一しづくまろうににじみて來るおん文
○　豐後　吉田夕草
戀をする子が泣き明かす逝く春の夜のわりなさに汽笛なりいづ
○　大阪　しら椿
春日山七草の咲く神木をやどり木なりと數へつる兄
○　佐渡　翠玉
北の海孤島に生ひし我少女悲しきものは海と思へり
○　大阪市　大關照榮
こゝろよき卯月よろこぶまかつきのうつゝと夢にほとゝぎす鳴く
○　越後　島の女
わが二十黄金ひらふと信濃より買はれ來りて坑ほりに入る
○　深川　橋本蝶子
くれなゐに老木の桃の花咲きて父の笑顔のめでたくなりぬ
○　下谷　山村よし子
ふと、こゝろくもりきたれば夜もひるもたゞかなしさに泪ぐみぬる
○　大阪　村田讃子
夜の女嘲けるごとくうす笑ふ白き齒おもふすもゝの花よ
○　三重縣　駒越くに子
あわたゞし櫻の花のちりかへば待ちにし人のふみきたること
○　山口縣　いさを
ゆく春の宵をさびしく琴彈けばみだれがちなり遠人のため
○　山口　花ゝ宴
草シつみ川添ひの道上りきて桃さく叔母の家にこし哉
○　本郷　城木美知子
都邊の上野の森の春のくれ人の歩める足袋白く見ゆ
○　牛込　渡邊しのぶ子
あなかなし何んとすべきぞこの心みだれみだれて絲の如かり
○　奈良縣　上田ちか子
春の日に雪光りたる裏山を見つゝすみれをつみしおもひで
○　上總　花野春子
美くしき島を殘して朝霞はれ渡りけり海はろばろに
○　薩摩　中尾しげの
夕かゞみ映りし我のやつれやうかなしみ居ればほとゝぎすなく
○　備中　小見山春
おん傍遠く離れてはなさけど春雨ふれどものおもふわれ
○　長崎市　三根知佐子
袖長き衣もありやとすかされて泪をさむる我れなりしかな

伊豫國　長井蘭子

○

鋭き刄もてこの身をさしね毒矢もて心をゐるは神も許さず

岡山縣　赤木あさし

○

灯をかゝげ待つべき人のある如く淋しきわれの心ときめく

麹町　島葉子

○

うき茄子の水の澄まざる如くにもしみ〴〵ものゝ思ひ得ぬ性

麻布　舟池紅子

○

この幾日地球の果にあるごとく寂しみに住むなほ若けれど

北海道　海姫

○

はつ島田十九の春のうつくしとほめます母のひとみかゞやく

備前　柴田繁子

○

春は来ぬ櫻の花の咲くごとく愛で給ふゆゑこぼるゝ涙

靜岡縣　蒔賀

○

南天に枝わたりする鳥のかげ障子にうつり春あたゝかき

本所　なか子

○

青空を見つめてあれば君の顔ほのかにも見ゆゆく春にして

若狹　長谷川英

○

文字などを何になすべきこの少女美しきことゝ美しと見ぬ

福岡市　市川久子

○

菜の花の續く野末に寺見えて鐘の低くもなりいでしかな

熊本　閑花

○

嬉しくも又恐しくむねをどるかゝることのみなせる少女よ

北海道　小町郁子

○

山ざくらそのちり方となりぬればあさに夕べに思ひみだるゝ

長野縣　鹽澤智子

○

この世にも彼の君のなくなりたらば淋さもなからんさはおもへども

田村靜江

○

しと〳〵と雨ふる春の暗き夜に我が蒼ざめし心を笑ふ

下總　小堀とし子

○

雨晴れてかわきもやらぬ途のべに赤き蚯蚓を見るが悲しき

丹後　浪子

○

梅が香をすりてふくめし玉の筆春を送らんこひしき人に

京都市　佐藤なぎさ

○

黒髪のやうやく丈けにあまる時生みたし母のまゆねひらけぬ

常陸　田村紫色

○

川ぞひの芝生に咲けるつぼすみれつまで踏み行く童もをかし

下野　高村たき子

○

鶯の鳴聲きこゆ春の日に人おもひつゝ衣をたてば

上總　佐瀬秋江子

○

末もろくうつろひゆきし若き日のうれしき夢をうたゝねに見る

長野縣　秋野ゆふかぜ

○

純白の吸取紙に戀人と赤き文字ある春の室かな

東京　白鳥正江

○

淋しげに今日も暮れゆくまちのうへあゝ燕の宙がへりとぶ

群馬縣　新井靜江

○

人気なき奥山寺の鐘つきて君とはゝゑむ春風の中

水の花

○

獨り居て小き衣の針はこぶ新開町の雨の朝かな

秋田縣　那珂はつ子

○

春雨やのきばの梅に鶯の来てなく時に文長く書く

京都　壽賀子

○

美はしき夢見る國に引き入れぬ戀てふものゝくしきわざかな

秋波江

○

青き羽の戀の使のさゝやけば笑ひ初めけり紅梅のはな

靜岡縣　松島靜子

○

つま琴の音のゆかしき高殿に月の影さし香煙なびく

神田　富美子

○

あるまじき罪は犯しぬわが子をも世をもあざむきみひぬあれども

下關市　木本白汀

○

夏くれどなべて冷たしみづからの倚れる柱もぬれたる髪も

むさし　林の雄

○

幼なき日鬼に逐はれて走り得ぬ苦しき夢を見しに似るかな

○
しかすかに心悲しみ戀と云ふ花を抱きて今日もわれ生く
群馬縣　ことり

○
人去りしわが食堂の銀の皿さくらんぼこそいじらしくあれ
群馬縣　福田露子

○
洗濯につかれてしばしやすらへば器の水に梅の花ちる
久留米　野口秀子

○
やはらかき乙女の胸に咲く花のそれにも似たる赤き椿よ
岐阜縣　佐藤初音

○
月見草夕待つ間はわがごとく涙をしつゝ物おもふらむ
堺市　西村みち子

○
春の野の蝴蝶うるはしこひ知りて夜晝さまよふ少女子にて
長野縣　林千代子

○
あめつちに此身置くべきところなき心地するかなことともなけれど
佐藤美代子

○
なつかしき人ならずやと身をおもひ二丁町行く朧夜の月
赤坂　松澤夕なぎ

○
紅うらの衣とく時我額の醒めて泣く日の近きおもはる
山城　紫の花

○
わりなくもかなしさ胸にこみあげてさびしき夜のはてなき涙
奈良　奥内美代子

○
亡き人のうゑし牡丹の花咲て小雨そぼふる夕まぐれかな
敦賀　橋詰春子

○
夜の露か波のしぶきかわが熱き泪が窓の硝子つたへる
靜岡縣　田中ゆりゑ子

○
窓渡る夕日の光見てあればいと堪へ難く戀のおもはる
石川　島崎初子

○
消えむ時瓦斯の光の青き如吾よろこびの亡びてゆく日よ
信濃　世良田優子

○
亂みだれの鏡にうつるわが髪も若きひとゞのおもひ出にせむ
大阪市　杉山かし

○
山口縣　柳良美那子

○
わが胸に抱けば石も熱もちぬけうとや君が心つめたし
宇都宮　松井清子

○
わが髪に草の匂ひの沁む日なりわが心臓の淋しき響
長岡市　佐久目雪子

○
くろ髪に白ばらかざす少女子もうなじはもゆる紅の綠する
信濃　蝶子

○
見ぬ君よそれが手紙にはゝずりてそのうつり香をなつかしむわれ
大阪市　矢尾君子

○
店さきの友禪のきれ絹のえりながめてすぎぬ春はおのれも
高知縣　中岡秋花

○
綠り子の病になやむ樣見つゝ砕ける親の心けふしる
伊賀　中村こま子

○
いとわかき十六の日も偲ばれて君と學びし里などおもふ
豐後　赤木はな

○
君にまねうす暗がりにうつむけば思ふすべてが青の色する
秋田縣　圓子

○
黄昏の柱に脊あて月待てば小暗き庭に蝙蝠の飛ぶ
京都府　竹村楓子

○
何やらん物の芽赤く吹き出し小庭の土に雨細う降る
金澤市　舟木久子

○
病室の街に近きもかなしけれ春雨の日は琴もきこゆる
信濃　藤澤里子

○
さびしきは晩春の日よこのこゝろうたひつくしてやりどころなし
岩手　清子

○
うす紅の衣をまとふ夕ぐれはわが黒髪ようちそよげかし
府下　小原あい子

○
堂にある五百の佛そが中に母に似し顔見んとうかがふ
橫濱市　石川やゑ子

○
黒髪の子と生れたる我なれどそを撫づるべき母のなかりき
尾張　上川壽子

○
つぼみよき梅の小枝を手折り來て日に幾度もかたはらへよる



人事（散文）　編輯局選

○剃刀

大分みね子

唯もう、毎日毎日寝る時計りが待ち遠くつてぐつたりと、少しの搖ぎにも震へて居た細い神經が弛んだ肉の中に卷き込まれてる樣に、感じもなく、疲れ切つた樣な、其癖胸苦しい情ない日計り續く。曇日も續く。

不圖、昨日會ひともないに、友に會ふたら「無性してるのねえ、のびて居てよ！」と、言はれたのを思ひ出して廊下に鏡臺を持ち出した。灰色を帶びた木の葉がぽつとり底重みの有る空氣に堪へられない樣に皆俯向いて、直ぐ横の「ぢんちやら」の花が苦し相に濃い強い息を吐いてる、それが沈み切つた空氣の間を迷ひ乍ら擴がつて行く。

黒味がかつた紅絹の一端を引くとがつたり重い音がした、剃刀が二挺！　母のと姐のである。

生糸一筋張つた樣な刄を見較べて、手の平でぱつぱつと刄を、煽動てた。いつも見る度に、觸つても切れ相な能く刄のたつたので、皮膚の薄い肉のいぢけて居ない、乳房や二の腕をぷつつり切つたらと思ふ……額から濡して剃刀を當てた、滑らかな面の一つぱいから溫味を吸ひ取られて冷ンやりとした。

女の顏の手答へもなう際立つてゆくのが何となく力がない、濃いあらい、ざら／＼した樣な、刄を當てる度に痛相な心地好い音をたてゝ、直ぐ其あとに香ふ樣な青膚の見える男の鬚や頭が剃つて見たい。と、ふと、今眉を落したらと思つた。

――四十男の戀みたいな、しつこい思ひ切りの惡い八月の陽が、木の氣のない地にしがみついて、恨めし相に熱い息を吐いてる廣場を小走りに拔けて、お寺の御門に休息うた母に連れられた少女！

大きな目の罪のない顏に薄つすりお化粧して、額に下た毛が眞黒う高い稚子輪に緋房の簪！　四年前お盆の墓參りの途に見た少女です。着物や帶の模樣は記憶して居ませんが、其眉剃つた幼ない、丁度取りたての花みたいな、ぽつとした顏は其まゝ胸に置かれて未だに忘れません。眉剃つたのが好かつたのか顏が好かつ

たのか知らぬが、七ッ八ッ位の女の子の眉剃つたのは、優しく此上もなう人懐こいものでございます。——

剃り終へて、鏡の我顏は寂しゆうはつきりして居た。音もなく風もなく、庭一つぱいに雲が低う蓋ふて居る。（地賞）

男の髭が剃りたいとのお望みは近き將來に實現されるでせうけれど、乳を切つて見たいなどゝ、あゝいやく。

私が河井さんの家にゐた時でした、髭が延びてると邦子が笑ふので雅樂子君に剃刀を借りようとしたら、錆びて、駄目よといふから、鋏を借りてハギッタことがある、時々皮をはぎりかけてイタカッタ。（許）

○寫　眞

大阪市　小野三枝

「まあようもこんな寫眞が出來たこと、妾もう一生寫眞なんか撮りませんわ……」かういひながらM子ははや自分の顏に墨を塗りかけてゐる。

母上と、私と、M子と一緒に、夜間に撮した寫眞は光線の具合で出來が惡かつた。三人が三人とも不格好で、見られたものではなかつた。自分ながら愛想が盡きて了ふ。

母上は眼を瞑つて、兩手を膝の上に拱んでおかれたまゝ——背景の掛け繪が薄暗くなつてゐた爲に、丁度その朦朧とした中からお大師樣かなんかゞ顯はれて、御利益の有難さを徐かに感謝してゐられるやうにも思へた。

隣つて腰を掛けてゐるM子は今年十六歲——妙齡紅顏の少女であるのに、顏が馬鹿に大きく三十歲位の年格好に見えた。でも顏の色は白かつた。

二人の後ろに立つてゐた私の姿は實際よりももつと瘠せて細長かつた。顏の周圍は、墨でぼかした樣な黑い陰が出來て、その黑い顏の中から二つの眼球が高く突出して異樣に光つてゐる。丁度ニグローが博覽會の一隅に、公衆に見られてゐるかのやう。

田舍からはるぐ大阪見物に來て、親子三人紀念の爲めに撮つた寫眞！　私等は出來上る日を樂しんで待つた甲斐はなかつた。

M子は誰れにも見せぬやう、柳行李の底に堅く秘した。（人賞）

何ぞヤケ火箸で突ッつきやぶらざる。（許）

○一年前は

紀伊　すが子

おひるの休みの時間、二人はいつも散歩した。ビロウドのやうにふわ〱したクローバーの上を、白線のはかまの裾を埋ませながら、別に、しみ〲と話するのでもなかつた。

只思ひ合ふた二人は、いつも歩いた。

何かの花を、一寸行きずりに折つては、おそろひに髪にさしたり、しやれて襟にかざしたりした。

後から行きすぎた連中にいきなり肩をたゝかれて、「乙組の詩人のお揃ひ」、と云はれたり、ポプラーにかくれた二階の窓から、大聲で「ベリー、コントラスト」などと、冷笑的な言葉をかけられて、むやみにうれしがつたものだつた。



朝の濱　澁谷　井上もと

伊勢の泊りの夜だつた。

卒業生百餘人の中で、ある友と二人二夜共一つ床にねた。

友のうす色花模様の下着と、私の眞紅な長じゆばんとは、萠黄うらの夜具の中で、もつれた。

二三日すれば別れねばならん運命に立ちながら、二人は、しんみりと話すのでもなかつた。
「首の眞綿、あつたかすぎはせなくつて」と友は聞いた。
「汽車でよつた〇さんのかほ色‼、ゑひ性の人はかあいさうですね」としづかに云ふ。
「私、明日出發の時、宿屋の女中に梅干をもらつて、おへそへはるのよ、よはないことと請合ひ」
「オホヽヽヽ」
こんな、つまらん話をして、五色美しい夢にいつた目のさめたあくる朝は、絹のやうな銀の雨が地に、そゝいで、枝垂れ柳の葉ずれに、蛇の目傘は、いくつも見えた。
あゝ去年の今頃よ、遠く別れた都田さんよ、かず樣よ、クローバーに染んだ白足袋、あの夜の眞赤なじゆばんよ。
春がきました、春がきました。
どうしませう。
かれはてなばよし、いまだ枯れきらぬ青春時の最終の今の時。

梅干をおへそに貼る……、雷公もこれは御存じあるまいから、あとで喰べて見て、シホツパイ顔をするだらう。(評)

〇かげ

山の女

それはしんとした大寺の廣間へ、日のかげりきつた半窓のどこから洩れるのだかわからない早春の西日である。
かげが――おもしろい――ねえちやんきてごらん―と今まで机の向ふで鉛筆でいたづらがきをしてゐたと思ふ子が急に呼びたてるので、何かと思つて起つて六枚屛風の裏へまはつた。
呼んだのは茂ちやんといふ男の子だ。去年の夏お客にきてから何が氣に入つたのか此お寺の門を一歩も出ず、方丈と寢起しては長い廊下を行つたりきたりして遊んでゐるといふ變り者だけれど、五つといふ年にふさはしい無邪氣な顏をしてゐる。たゞあまり色が白い、それでも腮の出來るあたりにはあざやかな毛細管が浮いてゐる。私は昨日はじめて逢つた時、いつか白菖蒲の挿してある水へインキを注いだら、間もなくその花へ赤い脈ができたことを思ひ出した。ほらそこにかげが――と繰りかへしながら小鳥のやうにふくらんだ手

で、屏風の裏の中ほどを指してゐる。

あゝこれ？ と言つて、そこへ近づき過ぎた私のからだは、今まで茂ちやんが眼をはなさず見てゐた物をふと遮つた。あつと思つて一歩退いた時、寂しい古ぼけた色の、無地の唐紙に再び小さな蝶ほどの大きさに黃色な斑點があらはれた。

おやあと言つた茂ちやんは私に推量の出來ない程度の不思議に打たれて、神秘のうるほひを湛へた目でしばらくじつと見つめてゐたが、やがて蟬かとんぼを抑へるやうな樣子をして自分の手をそこへあてた。

小さな手の甲へ黃色な「あざ」が出來た。

そのうちだんだん小さくなるのに氣がついてもう消える——と言ひながら又二尺ばかり屏風をはなれた。



あら〳〵といふ間にうすくなり小さくなつて全く失くなつてしまつた。

僅に剝げ殘つてゐた金箔を拭ひ去つてしまつたやうな寂しい屏風は、私が四日間借りて寄らなければならない八角の硯の載つてゐる机を圍んだまゝ、複雜な暗い影を引きはじめた。

茂ちやんは重い襖を明けて方丈の間の方へ行つた。

私は玄關の敷臺へ下りて小さな噴水の音を聞きながら、丁度白い梅だけはつきり見える庭と本堂の後ろの杉の木のうらを見てゐた。

この「影」說明せざるところ面白し。（評）

芝居にて　上毛　冷花子

牡丹散つてうち重なりぬ二三片　蕪村
一つぬいで後ろに負ひぬ更衣　芭蕉
夕涼みよくぞ男に生れける　其角

○嫁ぎし友へ

京都府　谷口清香

昨日の午後御なつかしい御手紙を受取りました、テニスコートの後の芝生に横はつて鋭いナイフを淡色の封筒にあてた時、私の胸は故もなう躍き私の手は異樣にふるへました、「開くな!」強い叫びが聞えます、「見ないで置かう」空恐ろしさに目をつぶつて下着の袂へそつと入れました紫インクで書かれた貴女の改名を見ると云ふ事さへもかなしう御座います程に――袂のふりにまぶしい小春の日光をさけて廣い空を見上ぐと其所には白い綿の樣な雲が弱い女に放恣なライフを見せびらかして居りました。いらだたしい氣分に二時間の授業をへて歸宅いたしました、私の心は渦の樣に動きます、親と云ふ者の權利のために一身を賭して嫁つた哀れな女の聲!!!其聲を聞くのは信ある友の勉めである。かうした一瞬のひらめきにつひに開いて見ようと思ひました、薄暮の淡い日ざしをたどる一字一字、讀み終へてホツといきしました。趣味のあはぬ異性の手に處女の純潔と美しい理想をとらへられた貴女のむくろよ!!つひに世にありふれた弱い女にしてしまつた!!!――センチメンタルな女だとあざ笑はれながらも血のない人と心の内で叫んで居なければならなかつたとおつしやいましたわね、むくろばかりと嫁ぎし人も終ひには心までしばられてしまふのだ、もがけばもがく程かなしい運命はますく悲境に落ちて行くのであらう、涙しらぬ少女の純な桃色のハートはさうした現實の世の恐ろしい半面をかいま見て今小さくふるへて居ります「前掛の女となりませう」と思ひきつておつしやつた其御言葉!!!かつてはテニスのチャンとして京大出身の○○樣を見事御敗しなすつた事もあつたに……………はたして幸であらうか不幸であらうか。むつびなれたクラスメーツも一人一人同じ運命に落ちて行つてつひに自分も又其渦に卷きこまれるのでありませう、只一人の親しい友であつた貴女もまぼろしの樣なあこがれを追ひ、夢の樣な事に泣いて居れば事たりる少女の胸を語らんとにはあまりに離れた人で御座いました――早人妻と呼ばるゝ御身で御座いますもの――いづれ又向ふ岸で御目にかゝる事がございせう、さらば、十九にて逝きし君よ!!!私は思ひ出多い校庭に追憶の絲をたぐりつゝ友なき現在に涙ぐむ事でございませう、さらば!!!

型にはひつた文。(評)

○別離

愛知　濱の女

私に赤坊の時分から大そう人懐しがる性質であつたと云ふ、其は家が無人で淋しかつたせいでもあらうが毎日のやうに出入する隣家のばあやや親類の人達を見る毎に、必ず手を出して抱かれるか、背負はれて一廻遊びに行かなければ承知しなかつたと云ふ。

別れる時は何時も大泣して母を困らせる、動物園の虎の樣に障子の細目に開けた中で泣叫ぶのを見かへつて、多くの人は可愛い兒だとよく抱いてくれた、然し忙しい時叔母さんはいつも隱れて過ぎたとの事である

旅行勝の父が家へ歸る時いち早く飛出したのは私で見送る堺際で涙の顔拭いて頂いたのも幼き私である。五つの年可愛がられた叔母が嫁いた時私は、程へても思ひ出では泣き叔母を怨むでは泣き、時には泣瘦せた我身の悲哀を感じて泣いた。何の滑ない十幾年の後。今!!!

別離の哀調は今が絶頂かと思ふまで悲しさを覺え、鳥も音づれぬ淋しい孤島に一人殘されし心地のやるせなさ。

家も割れるばかり大聲に泣いて、何とすかしても駄々をこねた昔なら、泣けば癒やう、面白い事に忘れもされうが、泣くさへ忍音なる此涙!笑にまぎらせる其苦痛!

別れ際に瞳に光れるを眼をつぶつて内へ流し、頰へ傳はるをはすゝり飲むだ涙、そして沈みきつた脳に固つたのが、今かうして溶け落ちるのであらう。

せめては別れの海を眺めよう、汀を歩いて其時の私が忍び度い。春と秋とシーズンは違へ、咲くは菫と露草と異なれど、同じく紫くゆる此岸

に、寄せては返す男波女波を遠く見はらして黒い汽船を見送らう。沁々人なつかしい春の日よ。

限も知れぬ海原を遠く遠くあてもなく眺めて居れば、春風に髪はらはれて挿頭せる草花のほろ〳〵と散る

人待つ花の散らぬうち君よ早う歸りませ。

「早く歸つて頂戴な」浪まんすでに然り、況んやこの君（評）

○乙女

椿

東京　藤田美代子

それは、心境内の花崗石にいこうたとき。

あの紺青の繪で淡く刷いたやうな、空を仰いで「私あの人のことが想はれてなりませんの」と最愛の沮さんは、誇り氣に微笑みなさつた。戀に病む女の唇のやうに紅い〳〵椿の花がポタリと寂しい凋落の音をさせる。



晴れたる朝　陸前　黄川田かよ

小さい可愛い鳥が、くれなゐにふくらみ掛つた彼岸櫻の蕾を啄んでは落す。

小鳥よ。お前は何故、これからスキートな春にも見えんとする稚い者に邪魔をするの!?

未だ世路の響に馴れない、清い女の戀を横合から、あの小鳥が奪つて終ふやうに思はれて悄らしい。

ふつと熱烈なる我戀と逕さんの無邪氣な戀の未來とを比べて見た。淋しい！私の方が唯、何となく淋しいと想はれるんですもの。

「あと三日でお別れですよ美代ちやん」水々しいルイザ巻の先生から恁う仰有られ、強く抱へれたとき、微か乍らも小さなハートは悲愁な想とおのゝきに滿されて居た。「美代ちやん」と親しい呼び方をなさつたのは、この先生許りぢやないけれど、恥しがりの私は先生にどうしても、甘へることが出來なかつた。ベナスの樣なおうしろを見返つて「お姉樣」と小聲でお呼びしたことも幾度か。

友の多くは背いた。お嫁にこそ行かないが四人組と云つておたゆらさんも萩さんもいつしか途中で遇つても唯お世辭を交すだけになつておた。雪の故郷を出て十三年、父母と共に東都にさすらつていくたりかの友　も親しみ合つた。石屋の貞子さん、おきよさんなど皆そのとき限りの親しみであつた。

今更に、驚かれるわが越し方よ。慈しみ深き父母の、み姿はやつれた。華やかな銀座に飽いた、淋しき旅の子は我が夢を永久穩やかに守つて呉れる山の故里が、戀しくなつた。

も少し。（評）

○夢の女樣に

若松　梅津りさ子

野より園に移された紅い花の惱の樣な、行く水に散浮花をお書き遊ばしてより、一ケ年の月日は去つて了ひました。夢の女樣！如何遊ばしたので御座いませう、やつぱり河岸の家の二階から、あの潤ひのある御瞳で、夕の雲の行方など視遣つて、戀ひ惱んでお出で御座いませうか、私が、あなたのお作を拜したのはあれが初めてゞご座いました。あれ以前文壇とは中絶になつておましたので。戀しい會津へ……母樣歸ります！　額伏せて仰せられたあれを拜した時、我が住む里を切に戀ふ君、誰方！？彼方？！此方？御本名を知りたいと、私の心は絕えずあせつて居ました、ある時、かりそめの病を、山の麓の伯母が家に靜養してゐた時、物語りの末偶と思ひ出して、『小川さん姉妹は？』きいてみましたら、芳子樣は若松、大きい姉樣は北の國へ……。秋子さんとお姉樣は先達御歸國。エッそれからく私はなは問ひましたの、お留さんはお腦が弱くてお母樣が案じてお出た、お二階住ひでね……。伯母は母樣から伺つたお話をいろくきかして呉れました。ちや必と然うだ。その刹那私の頭腦へ、昔のあなたのお姿が浮んで參りました、前髮下げて、お辭儀と言葉が丁寧な、小學時代の可憐なお姿が。而していま、紅い花が俯向いてすゝり泣いてる樣な情緖のお作を拜して、無邪氣なあなたが傷々しい苦痛をお覺え遊ばしたのかと思ふと、また別の方か？なんて迷つたりして。けれども然うで御座いました。幾月かの後のある朝、遠くに消えてお姿の謎はしさ。あの同じ日、停車場へ往く時、お姉樣のお宅のある町をわざく通つてみましたら、御門からチラとみえた、お緣の衣桁に、潮色のお召が……獨で領づきました。初めて通つた町なので間違つて了つて、淋しき驛場へ出ましたつけ。停車場の外側のベンチに悄然として汽車を待つて居りましたら、十四五間先へ、眉目秀麗の背の君と、あなたと、廣道を横ぎつて驛路の方へいらつしやいましたのね。あの時、つとベンチを離れて柱に凭つてゐた、白い衣に紅い帶しめた丈の高い女が、おん眼には入らなかつたので御座いませうね。あの後一度もお姿を拜しませんの、晩夏のある夜、巷のどよめきの中で、可愛いお下げ髮の秋子さんをチラとみましたけれど。ほんたうに如何遊ばしたのかお作物拜さして下さいましな何卒。まさか、人妻てふ名のもとに、憧憬れの筆をお捨てになつたのでは御座いませんでせうに。

せん子さんが結婚以來「見るも夢さむるも夢」の聲價を減ずべく、再、筆を執つて詩をつくらぬのは賢いからである。某々の如く、むかしの名に賴りて餘喘を保つ醜くさに倣はんよりは、むしろ默するの賢なるに若かんや。（評）

いたこでじまの
まこものなかで
あやめさくとはしほらしや

○B 様

仙臺市 忍 草

あゝB樣、私は毎日泣いて居ります、あなたの御心もきかして下さい、今夜も月は大きく出てゐます。

B樣……私とあなたと二人、私の室で未來の事などを語り合つた時も、やつぱりこんな月夜でした、月は、月は、かはりません、私もまだ元の室に居ります、だけど〳〵、私等二人は……たがひに合ふ事も出來ない、もちろんお話をする事も出來ませんのね、人はいくら運命の子でも……私は、上京しなきやよかつたでせうか、學び屋に通うても私の心はやつぱりあなたより外に思はなかつたのです、そして、早く歸つてあなたにあひたいと……それぱつかり思うて居つたのです。

我等二人の三年間の戀はやぶれてしまひました、此樣になるなら家人は、なぜ、私等の交際をゆるしてくださつたのでせう、ゆるしてくれなかつたら二人は路邊の人でした、こんなくるしみはなかつたのでせう。

私は、私は……無理でせうか……

いゝえ決して、無理ではありません、私は、失戀になく子となりました、世の人は馬鹿とも、狂人ともいひませう。

私は、いはれてもかまひません、私は、狂人になるやうです、失戀はうつくしい、戀の成功者と云ふ人もあります、だけど、私は、かなしうございます、あゝ、B樣あなたの御心は……

哀音・聞くに忍びず。(評)

○古 物

栃木 花かつら

穿かうか？穿くまいか？何時迄眺めたつて新しくならう筈もなく、裂けた所が直らう筈もない。親の脛を齧れるだけ齧らうといふ位なら、こんな袴は幾つでも出來るのであるけれど今の私にはそんな都合の好い考をする氣にはなれなくなつて終つた、新しいのを下すには豫備の分を作らねばならぬ、それも不經濟と結局は補綴する事になつた、手に持つて透して見ると大きな鈎裂も二つ三つ、厚ぼつたかつた糯子綾も折目が引けて一向價値がなくなつて居る、物にならぬまでにも念を入れて、やつて見ようと同じ色の絹小町を本箱の引出しから搜し出す、都から遙々送つて異れた妹の心盡しを今更ながら嬉しく思ふ、母が小風呂敷へ大事に納つて置いて異れた裁ち殘りの布を好い鹽梅に切つては裏から當て、細かく繚つて行く、かうして心を込めて針を運んで行く中には、やつぱり元のなつかしさが湧いて來る、新調當時穿いた十と幾つかの頃。……若く美しかつた心に好ましい、袴を着けて物好きな數人の友に羨ましがられたは五年の昔思ひ出すさへ嬉しい。けれど今日衰退して居る袴の樣に己が心も斯樣な經路を辿つて古びて來たのではあるまいか。よし古びても敵は生えぬ、忌まはしき傷もつけられぬ。前の淸さは依然として我を守り唯納むる物が增した許りである。つぎは成功した、裂いた所も襞の下に匿れるしひけた所も地が厚いだけに一寸見てはわからぬ、皺を伸し〳〵疊んで行く手には感謝の笑が湛へられる。

良妻なるかな。(評)

○暇のない自分

九州 海 棠

お晝頃までに、仕上け樣と、思うた、二枚重、又豫定通りに、行かず、共衿を、殘した。今日は日曜でごあんすだから、あんまり、かせがないで、お淸さん、どこまでも行つて、遊んで來あんすた。暮の落成式より一晩と早く、休んだ事あごあんすまい、そんなにして居て後で、病んだらどうしあんすだ。と、宿の神さんが自分の身を案じてくれる。

え……どうもありがたう、ほんたう、ネ、少しあそんで來ませうよ、いくら働らいたつて仕方がありませんわネ。とは云ふた、もの〻時間が惜しくつて〳〵、行けば又晩に殘る。どうしたつて、今日は仕上げなくつち

や。手紙もあるし、立人形も、作らいなけや、ならんす、楊子入も箸入もと思へば一時も遊んぢや居られない。あゝどうして自分ばかり、かうも、いそがしいだらう。又次の日曜からは白無垢、其の次は比翼、少しも、自分のをこしらへる暇がない。紺屋の白袴とはよく云つたもの。何んだか樂しみな樣で、心配な氣もする、朝つからそれにばかり、たれて居りや、何も心配がないけども、今の身ぢやそれも出來ぬ。本科の方々は、あなたは專科で入つらしやるから、お暇で好いわネ、と、おつしやる。けど少しも暇がない。毎月の女學世界や文壇は淋しげに、重さなつて居る。自分も何か投稿して見たいと思つても、それだけの修養がないので、及ばぬ一人思ひ。

何時も皆樣のを拜見しては、自分の愚鈍が悲しくなる。本當に皆樣は天才で入らつしやる、皆樣の萬分の一でも筆が走る樣になりたい。いくら考へても殘念でたまらない。何故母樣は私を裁縫科に入れて下すつたらう。こんなにせわしく日を送るも、其のため、あの位、私は師範に入れて下さいつてお願したのに、昔かたぎの母樣で、實に嫌になる。いくら女だからつて、これからは學問がなくつちや。お休みに歸りやお友達に羨ましいほどハイカラお納戸のお袴に、あみ上げのおくつ、おゝしはマカレツトかローマ、何時もバイオリンをキユウ〳〵ならして入らつしやる。あゝ自分もと、たまらなくバイオリン姿が戀しくなる。

あゝ私も皆樣の樣に暇になりたい、あたら二八や二九の年を、あんな樂しみもなく、お針で送つてしまふ悲しさ、學校に居る時は、細目に追はれ早く卒業したら、と遠い〳〵其の日をまつて居た。待つた樂しみ、出て見りや、在學中よりもよけいに仕事がある、こんな事なら、いつまでも〳〵居たかつたと思ふ。同じ世話係して居たよし子樣よりの、手紙にもあつた。いくら女のたしなみとは申し乍らも、裁縫と云へば一口に見下げられる世の中、或る友人などは再び歸らぬ青春時代をバヽア、くさい、お針で日を送るは馬鹿の極よつて申され、實に〳〵悲しくなり申候つて、御手紙拜見した時は、私何だか泪がこぼれて來た、こんな事を繰返し〳〵考へ乍ら宿の神さんの親切を無にして只今もかけつちまつた。やれ安心と、手早くそこいらを片付けて、水桶を持ち乍ら、雪の上にと立つた。七日の月は、うす色で自分をにらんで居る。廣い畑の上はかた雪になつて、月がきら〳〵とうつゝて居る。中村の水車はキユーがたんがたんと、すごい音をさしてまはつて居る。

どうも、お忙しうゴタンスね。（評）

○君さんに逢つて

茨城　紫　色　女

鈴さん今日はねお稻荷樣の裏の藤棚の下で、君さんに逢ひましたのよ。私びつくりしてしまつたわ。だつて未だ紅のリボンにマガレツトで紫紺の袴着けて居らつしやるのだとばかり思つて居りましたのに……重さうな大きな丸髷に結つて、大島式の襟をゴつとぬきえもんにして緞地がかつたお召の着物に意氣なお召の半コートを召してクリーム地に鈴蘭の花模樣の長いマフラーを掛けて居らつしやるのですもの私何處のミセスかと目を丸くして見ましたわ。だつて去年迄は道などで逢ふと、大きな聲であら！はつ子さんしばらくね、テニス熱は如何？私等は相變らず、S先生と戰つて居てよ、なんて、きやつ〳〵さわいだ人が、急にはつ子さんでしたねえ、なんて靜かな御動作、私はにかんでしまつた。去年の春五年生の二學期の終りに嫁いだのですつてHの君は海軍中尉とか隨分マダムぶられましたわ。ヴアニテーで隨分フエマスな方でしたものね。しかし本性をよく知つてる私等にあんなに、おすましなさらなくつてもいいわね？見せて上げたかつたわ。お人が惡いつて？此度はねあの葉書に寄宿舍時代そら四番室の大活劇消燈後おなかがすいたつて、生なお餅を儀式にかぢり初めた處へ、光ちやんが來て二人でダイニングルームに行つて火鉢のほど灰の中に入れて其の上に葉書をさいて燃し初めると舍監の先生が廻つていらつしつて、退舍せよとまでしかられ、おまけに室長の此方まで大に迷惑した事は鈴さんも御存じだつたわね。それを書いて上げる心算よ、なんてアンサーが來るかホヽヽヽだつて昔の事も忘れて只お義理一ぺんの人として扱ふのですもの、にくらしいわ。

この山本節子さんにお目にかゝつたら、あなたが教鞭を執つていらつしやることを話しました、どうか教員氣質になつて、水つぽいなさけない文章を書かぬやうにして下さい。（評）

○京にて

鈴蘭

お風呂の中での女の人の多くが、京言葉を使はないであまり流暢でない東京言葉を使つて居られる、それがわるいとは決してないけど、彼の物靜かな、柳の若芽のやうな柔かい京言葉を、他國の人に侵されるのでなく、京の人自らが無くしかけてゐるのが惜しい……。京言葉の失はれる、といふことはやがて、京といふ美しい色彩の中から、その中でも最も貴重な或る色を除くことになりはすまいか……!?

京女の姿……はどこまでも美しい私は非常に好きです、けども大抵の人のは、つけ姿で如何にも捋ちへ物だ、底の方に嫌味がある、あまりに、しつ濃いので——。も少し淡白りと、なるべく自然的にゆかぬものだらうか。

御化粧自慢の京美人要司村ふく子に答へしめよ。(評)

○友

みやぎ　夕湖

この頃はどうしてかうお天氣がわるいんだらう。毎日毎日灰いろの雲が低うたれて許りゐて詩人ならぬ身の沁々とあきて了つた。空天を仰ぎ

たい、日光をあび度い、土の底迄かわき切る様なかん〳〵と晴れた日が百日も續けばよいと思ふ。



焚火のほとり　山口縣　橋畑かの

「いやだ〳〵ハイカラさんが嫌だ……」

あとから來る男の子等がうたふ、自分の様なものもハイカラと見える

かしらんほんとになんて間がいゝんでせうだ。去年の五月だつたか、いやだいやだハイカラ野郎は嫌だ頭のまん中に榮螺のなんとかゝんて間がいゝでせうと街道を大聲で叫んで來た二十七八の男子の顔が思ひ出せてをかしくなつて來る。

友は根さがりの銀杏返しに結うて居た、派手な格子縞モスリンの羽織に紹入を拔衣紋に着、黑縮緬に葡萄發を赤く刺繍した半襟を格好よく現し、ねずみのやたら縞ラシャの前掛をしてすこぶる粹な姿である。美しい貌に美しいゑみをたゝへた。

私とおない年である。小學校時代には共におてん婆の驍將であつた。都に物學ぶこと二ケ年、年と共にやさしくなり美しくなり艶麗なる花やうやく咲き初めた十七の冬義理のためにさる富家の次男のおもひものとなつたのだ。南は舞子須磨明石、北は石狩天鹽の奥と放浪を好む才子に從つて幾とせかを過した。はからずも其の人は病を得た、こぞの葉月愛人の手をにぎりつゝ血を吐いて死んだ。遙々と遇ひに行つた正妻をば大畜生とのゝしりつゝ、友へは永らく世話になつた死んでも忘れないと云ふたと云ふ。友は必ずしも道德上ほむべき人ではないが幾多の女に接吻をゆるした本能滿足主義の男子を稍眞面目な人たらしめ、其の身一つに愛をうけて清く生を終らしたのは讃辭を呈しても惡い事ではあるまい。多情多恨の佳人といまだ戀らしい戀をしたことのない、またされた事もない武骨な私とが唯笑に物云はせつゝ花のかげだにない荒涼たる山道を步いた。

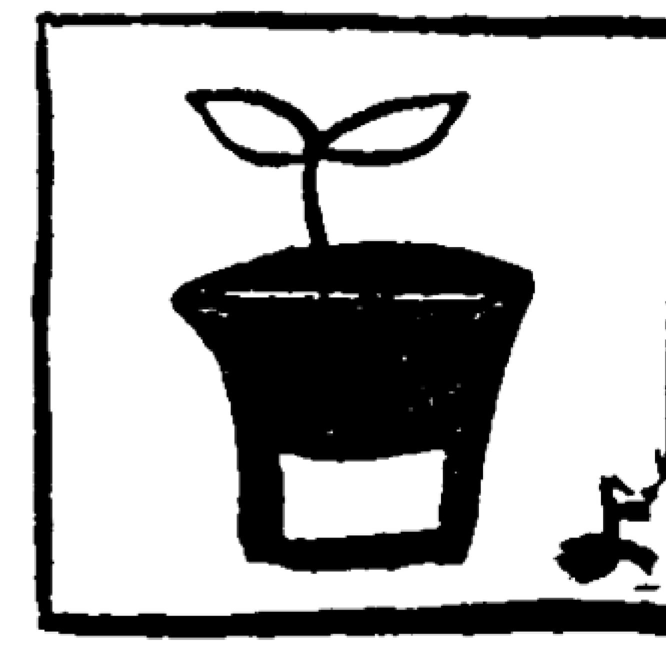
「ねえ冬子さん世の中なんてつまらないわ、早く月日を送つて早く死ぬ人は幸福だと云ふはほんたうね、私沁々と佛(主人)の傍が戀しい」俯向いた目はうるんでゐる。「ほんたうにね仕方がないわ……」。

ほんとにね仕方がないわ位で慰められる女の幸福はいふまでもないが、さし當つて何といつたらよいかは現代ぶる連中にも考へつくまい。(評)

○雨の日

高輪　若葉子

朝起きて見ると、ゆふべからの雨がまだしと〳〵と降つて居る。手早く髮を結ふて、お化粧も濟した處へ、お兄樣が起きて、いらしつた。何うしよう、よそうなんておつしやるのぢやないかしら、何とか伺つて見樣とも思つた。けれども、なまじ云ひ出して、よす樣な事になつても、つまらないと思つて、だまつてると、兄樣の方から「今日は何うするねえ」とおつしやる、「せつかく樂しみにしてたのですもの行きませうよ」、「それぢや帝劇にしようぢやないか、こんな雨の日遠い處まで出かけるといふのもなんだからあ」、とおいひでしたけれども、むりにお願ひして、やはり宮戸座へ行く事にした。雨の中を雷門で、電車を降りて、仲店を歩るく、やはり私の樣な、酔興な人達なのだらう、ぞろ〳〵と人が出てる。丁度梅雨の雨の樣なのが、顔と云はず、體といはず、きりでも吹きかけられる樣で、氣味がわるい、兄樣は木戸へ行つて、おなじみの、〇五郎をおよびになつて、土間の三に座を取つた。コートをぬいで、お兄樣とならんで坐る。私はなんだかうれしい樣な氣持になつて、方々を見まはし、いろんな事を思ふて見る。下町のお芝居はどうしても、古風な處があつていゝ、第一花道があつて、出方の妙袴姿であるいてるのが嬉しい、たゞ、自分のあたりのきたないのと、こんな窮屈な處に坐つてるのだけがいやだ。こんな處は何うしても、帝劇の方がいゝ、けども自分から好で來たものだからと思つて、おとなしくして居る。出方の持つて來たお茶を兄樣に入れて差し上げて、番付をひろげて見る内に、やう〳〵幕が開いた。狂言は柳生實記だつた。この狂言は初めてなので、何だかつまらない、お兄樣に伺つて見ても、知らないとおつしやる。後ろに居る男達が、何かいうてる樣だつた、けれどもよく聞き取れなかつた。中幕の合邦はよく知つてるので、面白く見た。〇五郎がお茶を、換へながら、「お退屈樣、何ぞ御用は……」などとお世辭を云ふていく。番付をあつちへ返し、こつちへ返し、見ても同じ事ばかり、退屈まぎれに又後ろのおはなしに、耳をかたむける。「高麗三郎はなんですねえ羽左に似とりますねえ」、「そうですね、あれは時々帝劇へも出る樣ですなあ」、「そうですか、此間は小文次も此座へ出て居りました」、などゝ俳優の話をしてゐる。



あさみどり

法師

△春の夜。深川、橋本蝶子。連理草の花の散る夜、月さす窓に琴を彈いてをると、兄さんがヰオロンを肩にして入つて來て春雨を合奏しよう、蝶さんといふ。人つかふ時ばかり蝶さんなんてやさしく言ふけど、不斷は蝶こうと呼ぶ」やつぱり。

△彼の人へ。近江井上千代。同情の念が徐々と頭の先から足の爪先まで哀感した。ねお前。お前は私の腕に凭つてじつと砂を見てゐたね。其時にお前は潸々と泣いたね。私がお前を抱きしめたつけね。お前は死にたいつと強く〳〵私の胸に縋つて泣いたつけね。二人は誓つた永久に放れじとね」お前お前つて、お前を賣りに來やしまいし。そして面白いのは私もお前も女であることだ。

△追懷。大分、赤木はな。水仙の花が搖れる、いつか偸み見たB樣の手筥の中の女が思ひ出される。女は黑髮を長く垂れて右手に赤き唇を抑へ、細腰を椅子によせてゐた」といふのは男らしいが、手筥の女は人形だやら繪だやら一向とりとめもない物である。

△お茶の水の思出。本郷、かね子。お茶の水に人殺があつたといふ、バン屋の緣臺でおけいごつこをしてたのを止めて人ごみについて行つた、橋を渡つて鐵管を這上つて土手を下へおりた、多勢の見物がそこいら中から草の葉をむしつて死人に投げるので顏は見えなかつた、長い幾筋の髮が切れて散つてゐた……」凄涼たる一場の光景を描くのにこれだけの筆しか使つてない。本氣になつて書けば息もつけぬ作が出來たらうに。

△初戀。靜岡、北川初子。小學校友達のT樣に逢つた、何となく無常の風にをかされるやうで、夜たうとうラブレターを書いた」無常の風、卽戀風なり。あゝ。一人思案のラブレター、二人仲よき友おもふ、三世の契も妾になく、四の中陰にうらむなし、五生は急度愛人も、六常の風に誘はれん、七世の後は戀人と、八くにやかれぬ二人中、九なく難なくT樣に、十シヤムまでもお共せん」と結んだところ、安つぽい口語詩なんどとちがつて、意味深長、まさに朗吟するに足る。一トツトセ節から、來てるなんて失禮なことは言ふもんぢやない。五生に後生をかけ六常に無常をかけ、八くに燒くをかけ、九に苦を通はせた所大手柄ならずや。けれども只一つ十シヤム迄もお供せんがわからない、じふさんまでもお供せん、丁が爺シヤマになるまで、私や婆しやまになつてもお供するといふ義にや。それとももとをシヤマすなはち坊やの父さんの誤りでもあらうか。

△人と語らんとして。加茂、佐登子。よるべき家はありながら結婚をさけて氣紛れの奉公三昧――同じ病にと母を兄を失つて不如歸の浪子となり、人と相見し、最初から、人の夫として自隔てた、あゝそれも四年の昔」獨斷が先きに立つのでわからぬ文章となつてゐる。

△あづま屋の朝。本所、かすみ。あなたの顏に蟻が這つてますわ」廿五六の夫人がニコリする、あらさう私は兩手で顏をさすつた。ポタリと地におちた物、それは蟻のしがいである」顏面神經がマヒしたのでせう。

△ランプの灯。武藏、紅衣。私は己が爲に超越の人たらんよりもこづ君の爲に善き妻たらん」と右手を人の胸にあづけたまゝ、輕くはゝゑんでうなだれた、あゝきつと結んだ血のやうな唇の下には嗚咽を嚙占る白い齒の有るを人は知らずに滿足の笑を傾けてきゝ入れました」美しき悲哀よ。

△お手玉。若狹、長谷川英。生れて初めてお手玉を取つた。二十二で。この君には幼い時が無かつたんだらうか。

△戀しい男。深川、矢澤英子。中學に通ふ男をやたらに戀しがつてゐるのです。御きれうが美くて、浮氣でおはねで、手ばなしなのだから世話はありません。

△私の名。大坂、竹村義子。結婚の夜寢床の中でよし子つてどう書くかを夫に聞かれた」結婚の夜だけにヤド六のテレかげん想像するに足る。

△芽。麴町、島葉子。夏は洋傘より外持たぬものとして雨がふれば步かないものと考へてゐました。小間物店のショウヰンドーに見た深紅のリボンは卽ちわが髮をかざりわが目に映つた美しい衣はわが身に纏ふものと思つてゐました。わが心に曲げようと思へば竹でもかつらの如く

にせねば止まぬを權利のやうに思つてゐました」すぐれたる文なれど、要するに繼母を得たゝめに今まで柔かだつた心の芽がいたむといふにすぎぬのが惜しい。

△一週間。本所、岸よね。代診が文學好でいろ〳〵雜誌を見せてくれる其人の作も載つてゐたつひ〳〵尊敬心が起つて一週間で病氣の治つたのが殘念だ。代診は色の黒い男であつたといふのがアイニローのやうだ。

△「只一人の西川さんから恨まれたからとて、他の方にまで累を及ぼしては何だか夜雨君の女性觀にかぶれるやうだ」と書かれたには驚いた笑ひ事ではない。人觸るれば人を斬り馬觸るれば馬を斬る、君の刀はそれだと言つた人もあるし、新婚夫婦混成旅團をつくつて押よせるぜと威した人もあつた。

鏖殺江南十萬兵！　おもへば罪であつた

「おれはいかにも男だ、妹が書いてくれといふから書いてやつた、妹は別嬪だ、憚りながらどこやらの寺の娘さんとは少しばかりちがふ」と言つて來た人もある、豎子敎ふべからずと雖、今に於て多少の感なき能はず、

あなたは私共の無學を冷笑してゐらしつたのでせうと强い言葉を以て太田きし子さんに怨まられたことがある、抽象を知らず、具體を知らず、素封家を知らず、似而非を知らず、新聞すら滿足に讀めぬ力で、人生を語り、哲理を口にするのが滑稽でたまらないので或一二の人に冷水を注いだ覺えはある、父に賣られ夫に買はれながら厚顏にも結婚を誇りとするをにくみて、鐵椎一下その夢を碎き去らんとしたこともある。笑殺す山翁醉うて泥の如し、罪多くはいつはりをたゝへし黄金の杯に觸れたる爲のみ。

いたづらに怨みを買ふに過ぎずんば善罵畢竟何爲。

昔は金谿の仲永、生れて五歳よく詩を作る、一人これを奇としやゝ錢幣を以て乞ふ者あるに至る、永の父永と携へて人に環謁し絕えて學ばしめず十二歳にして初めて王安石に謁す、詩すでに見るべからず、後七年また謁す、泯然たる衆人のみ、十で神童、十五で才子、二十すぐれば只の人、豈かつてこれありしのみならんや。されど事こゝに至る、今さらに沈默の毀をおもふ、況んやわが待てる日もやうやく來らんとするをや。

三月盡

偖◎記者曰、以下は四月號卯の花くだちのつゞきなれ、行數の都合上、本號に廻したる分なり。

▲今のお孃さん達は甘い物がお好だらう。醉茗のやうに强迫觀念に囚はれて、すべての木の實草の實を喰べぬ男もあるのに、(アイスクリームを知らぬ人もどこやらには有るさうだけれど)、何ぼ甘いのがいゝといつて然う〳〵飴ばかり嘗めさせてはと思ふ。

私の顏はこの頃蒼いと人がいふ。昔から似而非聖人は多くあをいものである。人に飴を嘗めさせるのが嫌ひなかはりねざめのこながらを好くからだ。でもまた呑んだことは有りません。

水野君の所謂女の雜錄書きの開山は本誌では若杉はま子で（どこからか輸入して來たのだらう）大分猿眞似が流行る。短く切ることが出來るし、造作もなく仕上るせいもあらう。薄つぺらな哲理や貧しい觀察を盛るには丁度手頃な器だからでもある。若杉はま子は女子文壇が生める畸形兒である。あゝした人は二人と現はれまい。それですら結婚と同時にむだ書きを止めて靜まり返つて若い奥さんで納つてゐる。蘇生法師があなたは何故結婚を急ぐ、五年經つてからでもいゝぢやないかと忠告したことを思ひ出すか知らん。

長曾我部菊子は雜錄とは違ふが客觀的寫生文の短いのばかり作るやうだ。色も無ければ艷も無い。葉舟君があゝいふ風に書けと敎へたせいかとも思ふが、あゝ固まつて了つては人間もおしまひだ。太田きし子の近作もあまりといへば光彩が無さすぎる、再び上京することはむづかしいさうだから、文品はどう變るか未來はまだ有るやうだけれどやがて筆を拋つて了ふのぢやなからうか。

醉茗に激賞されたる島本久惠――京のしづかは近ごろ顏が見えぬ、母と唯二人狹き路次の奥に住みてシンガーミシンによりて生活すと傳へらるゝ薄倖の人もことしは二十になつた筈だ、歌ふは今である、作るも今である。新しき曉の星と輝ける望月れい子も願にかけて散文を作らざるは何故か。

と誇るにも及ぶまい、娟娟たる姮娥の月、三五二八盈ちて又缺く、美人兮美人、不知爲暮雨合爲行雲、女はしあはせた。

平原君家、樓臨民家、民家有躄者、盤散行汲、平原君美人居樓上、臨見大笑之、明日躄者至門、請得笑者頭、平原君、乃斬笑躄者美人頭、自造門謝焉、今はわれ誰に請うてか彼の美人の元を得ん。

二月二十三日夜に入る。梅花一二輪、月西に落つ。

各地 誌友評論（七）

一記者

▲名古屋

◎名古屋は京都に亞ぐ大都會で、人情風俗凡てが大阪に近い、それだけ物質的要求の盛んな土地だが、藝術的の方面も亦遊藝とか娛樂とか、凡て實際に近いものが迎へられ、精神的の方面は比較的發達しない。

◎名古屋は美人を産す、女優を産す、女義太夫を産す舞踊の師匠を産す、琴曲三絃の師匠を産す、和歌俳句の類も亦茶の湯生花とひとしなみに見られ、一種の遊藝として見られてゐる。

◎此等の遊藝と、純粹の藝術とは何處か相接する處が無くてはならぬのだが、實際に於ては然うはいつて居ない、根本に於ては、離れ〴〵である、名古屋の文學は容易に進んで來ない。

◎讀書力も薄いやうだ、けれども名古屋が爾く遊藝の土地である事から推して、名古屋では婦女子の幅が利くと云ふことは言へるだらう。實際に行つて見ないから分らぬが、名古屋地方では女の子がもてると云ふことは、誰にも聞いた。其所爲か何うか知らぬが、名古屋では、同じ若い人でも男子の方はさつぱり音沙汰はないが、女子の方が幾許か文學を愛好するものが居るやうにも想像される。

•••

◎原田琴子は名古屋の人、和歌の作家としては三島よし子と共に、今の若い女達に名を知られてゐる、琴子は與謝野夫人の感化を多く受けてゐるだけに、歌の作風が『スバル』の派に似て居る。

◎よし子には情熱の乏しい憾みがある、琴子には主觀の優つた熱つぽい歌がある、烈しい感情も流れてゐる同じ感情を歌ふにも、よし子は感情を抑へて、靜に物象を味はふとする餘裕が見えてゐるが、琴子には物象を味ふよりも、感情其まゝを歌ひ出さうとしてゐる、女としてはきつい表情を持つてゐる。

◎琴子の熱情はさめやすからう、よし子の感情は消えやすからう、孰れも歌人としては猶ほ多大の用意を要するが、外に匹敵するほどの若い女の歌人が居ないの

だから、油斷なく歩調を進めてゆきさへすれば二人とも閨秀歌壇に於ては、一日の長を占めることが出來る。

◎散文を書く人では、毒だみがある、前號に『銀色の魔が誘ひに來る』と云ふ精神病者の自記を發表した人で、以前にも二三の告白文があつた、此人も增刊にばかり顏を出すから、一寸本性の看破に苦しむが、女性とすれば、一個の才物だ。告白文を創作するなどは、甚だよろしからぬことで、創作なら創作とした方が宜いのだ。吾人は必ずしも創作と見ないが、また眞の告白とすれば、たくみすぎてゐるやうにも思ふ。

◎毒だみの文章は、事實をしつかり書くだけでなく、感情を描くこともなかく巧いといふことは、今度の作で分つた、若し此態度で進んだなら、やはり創作の方で腕が揮へるだらう、雜錄だけを書いてゐるには惜しい筆だ。

◎多少のあていいい氣味もないではないが、毒だみほど、確かな文才を持つてゐるなら、外のものも書ける筈だ、何うしても毒だみには、眞の告白文と云ふやうな女性そつくらのものは書けぬらしい。性を沒却した藝術的の香のあるものゝ方が書けさうだ、けれども其方に向つてみると存外藝術的の香が乏しくなつてゆくか何うかと云ふことは、今保證の限りではない。

◎其外に登貴靜子がある、『娘時代』にも出てゐるし外にも折々作物が載つた、まだあまり個性が際立つて來ない。

◎胡蝶といふ名で、以前から折々——忘れた頃にまた文章を寄せる人がある、なげやりな處があつていけない、も少し自分に對する尊敬を持つて貰ひたい、女性らしい點は確にしほらしいと思つた事があるけれど。

◎名古屋の近くだから一宮の佐分富美子に就いて言はう、號は華影。近頃になつて餘り書かなくなつたが、二三年以前は盛んに活動したものだ。

◎此君はまじりつ氣のないお孃樣だ、所謂甘いものを書く方だつたが、文の質よりも、其心持が純だつた、文章は如何にも讀み煩はしく、紙上に發表するまでには、めちやに朱を入れたものだが、それだけ加朱する甲斐はあつた。

◎只、一回『見合の前』を書いたゞけだが、吉田靜枝もすなほな快い文章を書く質だが、まだ一向に世間も分つてゐなければ、書く材料も吾儘な內娘がおしやべりしてゐるやうで實がなかつた、凡てに於てもつとしつかりして欲しいと思つた。

評論

○事務員

編輯局選

牛込　さみだれ

女の道は裁縫を能くして、嫁に行より外にはないと言はれてゐたのが、世の中の進歩に伴ふて漸に婦人の事務員が出來て來た。是は私共の立場より見ても、亦社會一般の見地よりしても、誠に喜ばしい事であつて、今では會社とか銀行とか或は遞信省に鐵道院に、かよわい女の痩腕ながら、幾多の女が雄々しく朝から晩まで働いて居る。女は世の中に役に立たぬとしてあつたのが、突然種々の方面に活動し始めたから、一時世間の注意を引いたのみならず人の噂にも昇りました。此頃では一寸した受付や事務は女に限るとまで定評せられる樣に成つて來たではありませんか、私共の活動の端緒が開けて誠に喜ばしい事であります。然しながら今少し重々しく、社會一般より重要視せらるゝ樣になりたいものではありませんか。婦人の活動が始まつて未だ日が淺い故に、世の重い地位に就いて居る人も尠少でございませうが、私は此女と云ふ範圍では、迚も男子の方と併行して、社會に活動する事は、今後五年や十年では出來ないと思ひます。然し今一歩進んだ程度位までは、心掛け次第で婦人でも出來る樣に考へて居ります。是には幾多の修養もいりませうし、亦多大な經驗も必要な事と思ひます、私共から何んだか中難い事ではございますが、今後は教育の方針も多少異にせなければならない事が來るでしようと思ひます。女子高等師範とか美術學校とか或は職業學校とか申す者が無いではありませんが、是等は誠に僅な物で私は此種の學校否以上の學校が漸に建設せらるゝ事を願つて居ります。生活難の噂の高い今日では、女にも自活する丈の道を講じて置く方が安全と思ひます。よし女が獨立せないまでも、亦良人を持つとしても、社會に出て活動する丈の覺悟が有りましたならば非常に氣強い事と思ひます。良人に中途で死なれて一家は逆境に落入つたとか何とか云ふ新聞を時々見る事が有ります、恁ういふ時は何か手に職業を求める丈の力があつたら、かほ

とまで逆境に落入らないで濟む事が出來樣と思ひます。私は恁ういふ理由の下に、女に自由な空氣を吸はせ、亦自由な活動を與へる事が目下の急務であると思ひます。(地實)

空しい氣焔とは違ひ、根抵を現實に置いた確かな意見である。(評)

○琴うたの本

金澤　幽也子

◎洋野紙をやすつぽいリボンでとぢて、カードなんかをはつたりした帳面をこさへて、喜んで居た自分が、恥しい。今日上等の生紙を二十枚ばかり、紙撚でとぢてした琴歌の本が自分ながら氣持がいゝ。

◎黒繻子のえりかけた着物の、△△屋の娘を、町家のむすめらしいと嬉しかつた。

◎どうせ、すべてを西洋のやうにする事は、出來ないだらうのに、なせ、建つものもたつものも、四角い窓の並んだ洋館なんだらう。

◎白壁つゞきの武士町に、紫矢がすりに白襟、銀丈長のお稚兒まげを、あるかせて見たい。

またくある筈。(評)

○古今の髮の名稱

函館　藤本鳥羽子

我國婦人の髮は古は大抵上下ともさげ髮にしたものです。いつの頃よりか結髮と云ふこと行はれ、從つて其形も種々變化して今は名のみ殘りて實際見ることのなき名稱も多くあります。わけても年若き束髮育の少女方には至つて耳遠いものもありますから御參考までに古今の髮の名を左に記して見ませう。

天神髷。蝶々髷。男髷。女夫髷。唐人髷。島田。綾銀杏。銀杏返。銀杏くづし。をしやぐま。立兵庫。乘兵庫。兩輪。三輪。丸輪。絲巻。櫛巻。桃割。ふくらすゞめ。をたらひ。をちご。をたばこぼん。長船。わらは。割勝山。掛下。かつら下地。さげ下地。さげ髮。先笄。茶筅。後家。牡鴛鴦。牝鴛鴦。三光。奴。別知。特別。はねかけ。ほふばい。片はづし。姫髷。だるま返。眼鏡。忌中島田。丸髷。束髮。あげ巻。エス巻。貴婦人巻。夜會巻。花月巻。臺灣巻。マガレツト。ローマ。ウインナ巻。ルイザ巻。かんざし巻。ひさし髮。

あらまし右の如きものでありませう。

此種の文章も必要です。(評)

○獨身論

横濱市　都鳥

男尊女卑の言葉は必ずしも虚言ではない、男性は獨立しても、左程の困難は感じないとしても、女性が獨立して處世する事は容易ではない、不可能と言つた方が至當であらう、女性は皆内政を掌る器で、謂はゞ補助の格に過ぎぬ。

兩性が兩立して天意を全うすることが可能るであらう歟。否、兩性が合體して始めて人生の眞意に服するのである、良人が妻に誤り、妻が良人に依るのは先天的、造物者が然らしめてゐるのである。

往々、女が獨身を主唱するのを聞く事があるが、それが必然しも成し終へるものであらうか、又そして眞の人生の滿足を感ずるであらうか。

それ等は概ね、厭世か執拗、不具者、少なくとも病身を悲嘆する者であらうか、この他には「女婦になる事の恥辱とか、又は「產を嫌ふ」とか、我儘な思想が發達して遂に邪な持論を醸すやうになつた者もあるであらう、けれど一定の年齡に達した時には、餘程の牢固なる決心が無くば、持論を完うする事は不可能であらうと思ふ。

自負心の強い女性が「自分は最早、充分生活し得らるゝ丈の地位、職業があるから、今更男性に屈伏して、多少にしろ束縛される必要が無い」と言ふものもあらう、良人に服從するのは屈伏の意ではない、又、必要に迫られて結婚す可きものでない、即ち女性の天職である、女性が尤も自覺す可き、誇る可きは何であるかと言へば、貞操、それ以上の者はあるまい。

獨身して貞操の天意を全うする事が能ふ可きか。

貞操論は窮めて說くまでもなく、良人に仕へて忠實なるの意である、であるから、女性は良人に仕へて後、始めて其の職責を果す可き秋なのである。

獨身は一個人であるが、引いては國家の繁殖、興亡にまで累を及ぼす可き者である。

眞しい理由の下に、終身獨身を決行する男氣があるならまだしも、なまじ輕卒な事は全々廢した方が遙に得策であらうと思ふ。

獨身者に限つて、粗暴で、偏執で「女らしい」點に缺けてゐるのが多く見受けられる「男は男らしく」「女は女らしく」の言は、一般に通應される。

獨身論と云ふ題からして既に陳い、筆は達者だが意見は平凡。（評）

○親友

下關市　木本濃生子

同じ學校へ西からと東からと別れ〳〵に通ふのさへ口惜しく或る一週間はSさんが私の家へ泊つて每朝一緒に連れ立つて通ひ或る一週間は私がSさんの家から通ふなど世上によく云ふ親友だの姉妹だのと謂ふけれども私とSさん程の仲はとてもなかつたであらうと思ふ。小學校も既に卒業間近になつた頃、Sさんは九月一日から新學期の開始さるゝ〇〇學校へ一緒に入學して同じ方向に親しく樂しく辿つて行かうと私にも又父にも勸めて下さつたけれども、私の父は色々の事情の爲めにSさんと一緒に進む事を許されなかつた。

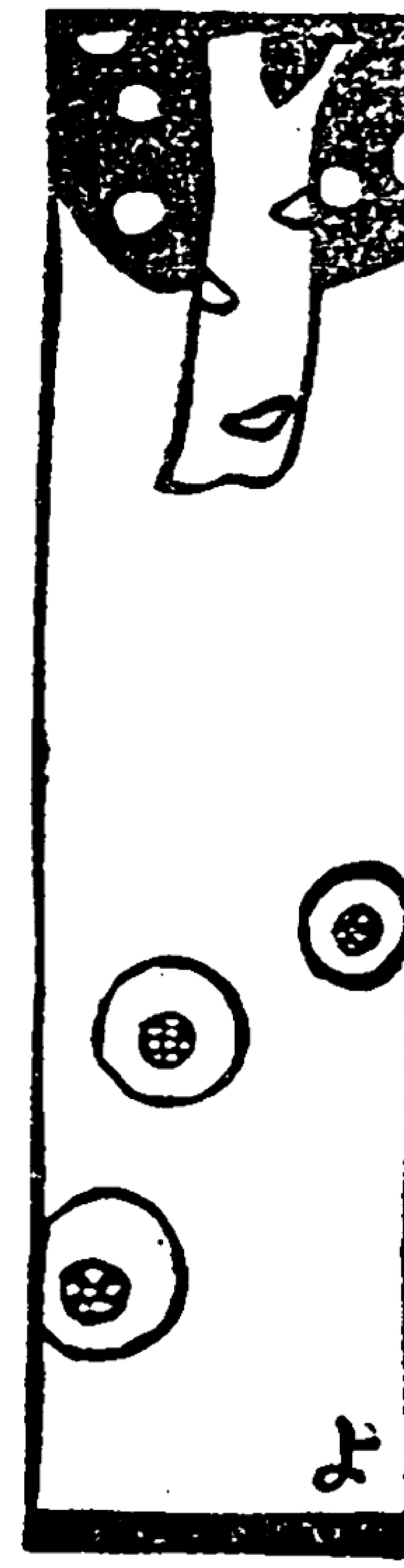
前々から父が知己に勸められてゐた貯金管理局に勤める樣にと父は私を無理に近々の内に出立せる事にした、私はSさんと別れて離れ〴〵に而かも私のみ異鄉に暮すのが何となう悲しくてならない。

此の事をSさんに打ち明け樣かとも思つたけれども却つて離別の悲しさを見るよりは就職の後委しいあらゆる事情を認めて御詫をした方がよからうと思ふので其後安着の通知と一緒に投函した。

今日か明日かと其の快諾の返事を待つたけれども何の便りだにない四月の末であつた又も近況を伺ふた二三日經て一枚の端書が着いた。『試驗準備中にて一切書信の往復は御斷り申します』と只それのみ鉛筆で走り書してあつた。

私は只呆然として其の端書を卷き返し卷き返へし再讀三讀して思はず机に打伏して泣いた。

これ亦人生の一面。（評）



俳句

内藤鳴雪選

花見れば戀し平家の諸公達　○（天賞）　山形縣　伊藤知惠子
君よべばこだま返しや春の山　○（地賞）　群馬縣　新井靜江
鬪取となる子生れて桃の花　○（人賞）　澁谷　横谷ゆき子

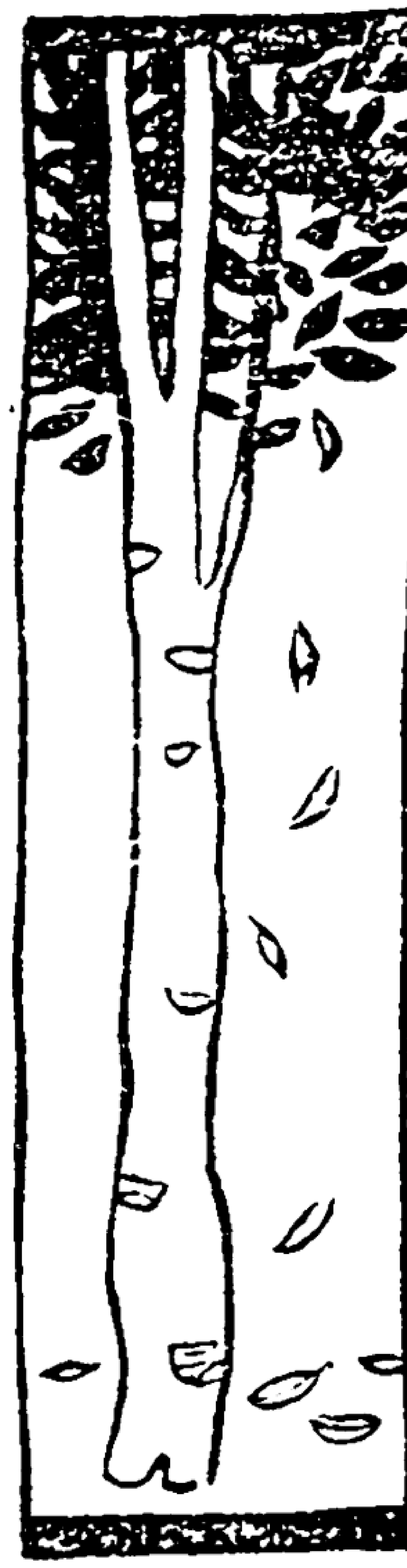
佳作

春雨にをかしき寢物語かな　福岡市　市川久子
湯に入りて鶯きくや小町寺　奈良市　上田ちか子
此町の人皆若し春の風　備前　柴田繁子
春の川一の橋より霞みけり　麹町　牧野銀杏
噴水の玉吹き散るや春嵐　下の關　木本らん子

盤旋する小猫愛らし路傍　丹波　路ノ基
とけ流る雪の雫や草二寸　大阪　村田操子

深山来てこゝにも藤のさかりかな　山口　花の家
長閑さや舟に居眠る渡し守　本郷　城本美知子
春風に小町の眉の匂ひかな　奈良縣　城花子
獨活の香や寺の厨はほの暗き　備中　小見山春
山吹や夢くりかへす朝の窓　長崎市　永井主子
花吹雪御塚にまゐる人を吹く　伊豫　長井薫子
接木して愚かなりける月日かな　岡山縣　柴田鹿子
鐘の音もかすみて春の吉野かな　ずゝき
あぜ道や我が家遠き春の雨　神戸　緑髮子
鶯の聲に晴れ行く小雨哉　福井　明ノ星
黒みたる大佛立てり花の雨　麹町　すま子
若草に染物干せる日和かな　美作　十二紅
我袖にながき入日や花のかげ　美作　葉留
活けんとして山茶花散りぬ膝の上　山口縣　末富豊子
降る雨を見て君春を病み給ふ　山城　木の花
午霞鶏なく里を包みけり　伊勢　花翠子
嫁の荷をのせたる春の渡し哉　京都　はづ枝
老梅や言譯らしく一二輪　埼玉　渡邊積草
行春に病餘の膽の冷えにけり　徳島縣　杉山雪月花
春日なる三笠の山や今も月　札幌　しらうめ
湯上りやもつれ髮とくつげの櫛　山城　菜こ花
猫の子もひな酒宴の末坐して　奈良縣　奥内美代子
五月雨の滴る、小窓の簾かな　伊勢　菅野靜子
菜の花や郷先生の門は是れ　三重縣　さゝんか
雛子一つ盗まれし朝のかすみかな　京都　うら野
雛まつりお酒きげんの妹かな　下總　谷口美野子
雛壇に紅梅かざる餘寒かな　茨城　浮舟
散る櫻袖にかゝるや月晴し　城南　小島鈴枝
並べ干す盆の向ふや笑ふ山　岡山縣　入江鶴花
墓守りの衣干す垣草萠ゆる　福島市　藤芙子
桃咲くや寶の多き山の寺　福島市　遠藤喜美子

見し夢を又も見てけり夜半の春	奈良縣	上田郁子
尼寺や一重ざくらに朝の雨		逸名子
鐘の聲を追ひ行く山路かな	茨城縣	鈴木やす子
雛の間や昔の榮華物語	滋賀縣	市川久子
露深し若草脊負ふ女連	美作	橋本紫
ゆく春の落花集むる乙女かな	王子町	大浪せい子
春の夜や母もいまさぬ姉妹	王子町	大浪露香
一寸の夢笛吹て子や嬉し	栃木縣	加藤梅
こゝろよき朝の化粧や春の雪	淺草	葉都子
春なれやわたどのゝ灯の又過ぎて	牛込	竹内かすみ
船料理柳に灯す小提灯	大阪市	磯千鳥
弛みたる二十五絃や春の風	下關市	美矢永はつ子
春雨の歌うたふ日や窓暗し	大阪市	高本千鶴子
山門や朧月夜にうたよまん	下谷	山村よし子
春雨や衣をしぼる花の下	美作	橋本紫
玉簾相ひく傘をたゝきけり	宮城縣	澁谷常子
春雨の二階の欄に小猫かな	丹後	浪子
白粉の香もあきはてゝ春の雨	府下	白妙女
大木の柳垂れけり角屋敷	常陸	田村紫色
もつれたる絲解く妹や春の宵	下野	高村たき
八重櫻はろゝと落ちぬ雨の日に	上總	佐瀬秋江子
春雨や衣縫ふ嫁が灯の下に	長野縣	秋野ゆふかせ
月の夜や白鳥渡る湖の上	秋田縣	那珂はつ子
來ぬ人を待つ夜の窓や時鳥	京都	蓉賀子
借り馬の脊に櫻散る峠かな	愛知縣	中村百合香
鬢筋揺れのあまき心地や草芳ふ	伊勢	大原つね子
洗盤はす縁先や桃の花	群馬縣	福田露子
魚はねる輪波も見えて春の星	群馬	芝ことり
傘さして漕ぐ川舟やおぼろ月	金澤市	總子
から傘をたゝんで見たり春の雨	久留米	野口秀子
矢がすりのふりの袂や春日傘	大阪市	吉田紫香子
墓地に來て啼く夜もあり時鳥	伊賀	中村こま子
夜をこめて城の手入や時鳥	京都市	中野ふみ子
ほとゝぎす姨捨山は夏もよし	信濃	てふ女
蟹が棲む小磯の小舍や春の雨		小原あい子
東雲の京は五山の若葉哉	西京	大井順子
ふくろ鳴く木の下闇や峰の嵐	神田	町田靜江
懐に枕刀や朧月	横濱市	都鳥
飛白を賣る琉球人や日の永き	横濱市	美都子
野火もえて雉子の聲きく閑居かな	栃木	美和子
つく鐘に櫻散りけり隅田川	神戸市	足立春子
舊友と奇遇を語る花の下	安房	吉田秋子
おぼろ月人を待つ間の小唄かな	足利	設塚米子
鴫立つ羽風に散りぬ山櫻	京都府	竹村楓子
宰相の戯れ彈く琴や朧月	高知	北村美佐夫
歌占に興す局や春の宵	山口縣	金津房子
少女子の散る花惜る小庭哉	長野縣	草路
山遠く柳は高し朧月	上毛	憇花子女史
舟を漕ぐ音のみ近し朧月	上野	荒井よし子
春がすみ夢かうつゝか呉か越か	山口縣	宮原タカ子
摘草や乙女の袖の地に曳きて	愛知縣	瀧本逸子
小羊の夢結ぶ野やすみれ咲く	仙臺市	矢間武子
草餅や嫁のたすきの緋に燃えて	靜岡縣	北川和子
花散るや香爐のけむり紫に	仙臺	藤村京子
御陵の籬に桃の林哉	札幌	白梅
風は北に吹き荒みけり猫の戀	薩摩	相島数子
若草や狂女が戀に泣くあした	靜岡縣	田中ゆりゑ子
浪荒るゝ曉霧や天の川	近江	井上千代
閑暮に倦き戸明けて見れば山笑ふ	愛知縣	中村百合香
遊子默す古城の邊草靑し	京都	森本俊子
春の宵女ばかりの團居かな	安房	吉田秋子
梅咲くや北の都は風寒し	小樽	吉武愛子



初作

編輯局選

○糸買ひに

京都　うら野

春雨がシト〳〵と降つて居ます、私は三味線の絲を買ひに四條の御幸町まで行きます、新らしい傘の渋の淡い香が幽かに〳〵漂ふて來ます中高な町を歩いて居たのが街路擴張のため土をまぜかへされた四條通りへ出ました。

古い〳〵木の看板に「絲各種」と書いたのが半ばぬれて居ます、藍のつくやうな暖簾をくゞつて、

「ごめんやす三味線の絲おくれやす」と云ふと、ワンかぶりの丁稚さんが小さなひきだしを抜いて來ました。

それから一つ買つて門へ出ますと大きな聲で、

「ヨーおいでやす」と今の丁稚さんが申しました、と、どこからとなく、

「春――雨――に」と唄ふ聲がしましたので耳をすましますと、雨が傘にあたる音がこまか〳〵きこえました。

ある小間物店を通つた時、妾の姿か硝子障子にうつりました、四角な大きな頭痛膏をはつた細さ形の白い妾の顔は、いやな程活氣がありませなんだ。

宅へかへつて潜戸をあけると、チンと鈴の音、それに我に歸つて、掌の絲を口にくわへて傘をたゝみました。（天賞）

春雨降る京の町を三味線の絲買ひに行くと云ふだけでも柔かな情緒が動くのに、細かい描寫は人をチャームする力を持つてゐる、初作以上の出來榮がある。（評）

○大間違ひ

東京　和子

三月の試驗休みで從兄姉が二人宿りがけに遊びに來て居た時の出來ごとでございます。あまり家にばかり居て喰べて騒ぐことばかり考へてゐても仕方がないから、裏の森へ景色を寫しに行かうと兄が云つたので、皆大賛成!!! 私と從姉は髪を結つたりしてゐる中に、二人は先に行つて了ひました。それから三十分ばかり後れて行くと向ふの方に黒布を頭から被つてしきりに景色を見てゐる人がございました。私達は其絣がすりの後姿を見て、てつきり兄と思ひ込んで了つたものですから「驚かしてやらなくつて?」「えゝ」と早速相談一決して、ぬき足さし足して近づくなり二人で一緒に「わつ」と背中を押したからたまらない、黒布被つたなり寫眞器と共に前へ倒れました。二人は手を打つて笑ひますと、其中にやうやく起き上つてこちらを向いた其顔は……まあどうしませう?兄だと思つた其人はまつたく見ず知らずの人でした。私達は顔から火の出るやうな思ひをして「まアとんだ事を致しました、どうぞお許し遊ばして」「ほんたうに人違を致しましておけがはございませんでしたか」と兩方から一生懸命になつてあやまりますと、其方は氣弱な調子で「いゝえ何ともありませんよ、人違ひはよくやるものですから」と只笑つてゐらしつた、けれどお氣の毒やらをかしいやらあんなきまりの悪い思ひを致した事は御座いませんでした。そして兄樣達はと見れば、いつの間にか其時の姿をレンズにでも入れたのでせう、彼の方でクス〳〵笑つて居りま

した。でも幸に其方の器械は損じもしませんでしたから宜しうございました。今でも何かの話しのついでには其時のことが持ち出されては物笑ひの種になつてをります。(地賞)

これは大出來〱。(評)

○暖かき午後

小石川　石山ふみ子

ぽか〱と日のあたる縁に脊を向けて、燒藷と蜜柑とを代り番にむさぼり食べた或日の午後であつた、勿論學校の歸りに立ちよつたのだ、氣兼ねして暮す骨休みに、ちよい〱來ては從兄の奇拔な談話を聞き、從姉の奇拔なおでことを見て行くといふのは、私の一月生活の中の一分にはひる。從兄が「試驗はもうすんだのか」「いゝえ未だ一週間あるんですもの、いやになるわ」「何んだ未だすまないのか一體幾月つゞくの、よく身體がつゞくね、女はえらいよ」と初まつた「ずゐ分ね」とそつちのけ蜜柑の袋を口から出して居る從姉に「お姉さんきつとよ」姉は一寸解らず「なにがよ」とそれをかはに入れながら「あらもう忘れてしまつたの」横から「活動かいもう競爭だよ」だつて「あらあずゐ分ね、そんなことぢやないことよ、より以上神聖ですわ」「あーらずゐ分か、いやだことよ、そうぢやないことよ、どこから覺えたんだい、より以上神聖だなんて生意氣になつたねこれだから親が居ないとだめだね、おいうちの光坊も女學校なんてやるまいね」「ほんとに憎らしいたら姉様は」可愛ぢやありませんか、私は女學生音樂すきよ」「ふうむ」私は「兄さんどう感じて」と眞面目に聞いたら、にやりと口をゆるがせて「なんとなく肉の香りがするね」と相變らずにやりと口をゆるがせて居る「まあ」と私は一寸赤くなつた、やがて別れて電車の中でも從兄の言葉が思ひ出されて、ほんとなのかしらと思ひ、又何かの小說にあつたことばを引き出したんぢやないかと思つたり、又ほんとなのかしらと繰り返して居ると、隣に居た三十位の書生ではなし、役人らしくはなしといふ人とつきあつて、身體にぬくみが傳はつた時、思はず身をすくめた。(人賞)

春の空氣、春の心地。(評)

○都にて

靜岡縣　長田ゆきえ

細い絹絲のやうな春の雨のなゝめに降る日の夕方でございます。私はしめやかに注ぐ雨の音のなつかしさに、そと立つておばしまに身をよせました。

すぐ前の廣小路で、十字を描いておる電車のレールは、銀色に光つて、遠くかなたは夕やみの中に消えて居ます。つねならば人通りしげきこのあたりも、今日は三々五々行き合ふばかり。瓔珞をつらねたやうな雨の雫が、物干竿からポタ〱たれて、若芽した柳の絲は煙つて見えます。

ぢつとして居ますと、悲しさが徐々と迫つて、波うつ心臟の血のひゞきが聞えるやうな、意識もなくあつい涙が頰をつたはります。あゝ戀に戀して來し都をば、日ならずして西に去らんとす。あだれ夢にまで見し都をすてゝ……

私は夢見るやうな心地になつて、何時間か立ちつくしました。「雪さんお夕飯ですよ。」と下で呼ぶ小母さんの聲に、はつとして我に返つた時は、街燈チラ〱と夢のやうにまたゝいて、雨に暮れ行く都大路は、空も地も只一色に打ち煙つて居ました。淋しい淋しい、身を引きしめられるやうな日でございます。

純なる少女の感情。(評)

○寮の窓から

福田しづを

「この頃云ひ離される女の自覺つて菊江さんよく解つて?」「さうねえ」

菊江さんは袖口のレースを覗ながら云ひました。湯殿の煙りが淡く渦巻いて、雀が二三羽浪を打つて飛んで行くインチゴーの空に噴き出て居ます。

「何日ぞや自覺ってのは人間の特性で人格の一要素だつて書物で見た樣に覺えて居るわ、だけど、確り私知らないのよ」女の自覺などには一向趣味が無い樣にも、又冷淡と云ふよりも女の自覺なんて嘲る樣にも見えました。そして妾に知って居るかとも問ひません、菊江さんとはこんな話が合はないのだと今更の樣に氣付きました。私自身も何故自分がこんな話を好くのか解りません、又こんな事も考へました、菊江さんとは趣味の合ない點があるのに、人から羨まれます程仲が好いのは不思議……いや／＼菊江さんの心に潜んで居る何物かゞ確り二人の仲を結んで居るのですもの。さめたる樣に楓の紅い若芽を通して廣いグラウンドを眺めました、グラウンドには寮の窓に添ふた並木の外には、木は一本もありません、丁度何とか云ふ本の中にある沙漠の島を思ひ出させます樣に、細い若草がしとやかな空氣を吸ふて燃え立つて居ます、三日の午後の光は金色をして、私等の學園に私等の胸を歡びて流し、亦過ぎし若き思ひ出を、ハートから瞳を通して花に傳る樣に輝いて居ます、何處からか自動車が靜かなエーテルを振はしました、菊江さんは耳を澄ましました、ア、菊江さんの胸を鎭かす自動車が近づきました。

おすましにあらずんば、氣取屋さんか。（評）

○猿まはし

岡山市　桂子淑子

ポカ／＼暖い日の午後であつた。外であまりにぎやかな、たいこの音がするので、二階の障子をあけて見ると、前の空地で、色の黒い目のギラツと光る猿まはしが、赤い袖なしを着た一匹の猿をつれて、今人寄の最中、近所に遊んでゐた子供は、ヤア猿が／＼つて、遊道具なんかはふり出してはしつてゆく。あちらからも、こちらからも集つは／＼、ぞろぞろ／＼、見るまにまるくとりまいてしまつた。

たいこの音に合して、變な足つきをしながら一生懸命をとつてゐる。みんな笑ひながら見てゐる、怒つたやうな顏をしてゐるものは一人もない、いろ／＼な藝をしてゆくうち猿まはしが「吉原通ひの……」何とか言つて、大きな聲でうたひながら白いきれを渡すと、それを、ほゝかむりして、よた／＼よいどれのまねをして歩いてゐるの……見物人は、ドッとはやすほんとにをかしくつて、をかしくつて、あゝもうお腹がいたくなつた。日がよほどかたむいたのか、まぶしくて、仕樣がない。仕方なしに障子をしめる。まだたいこの音はやみさうもない。

○春雨の日

岐阜縣　初音

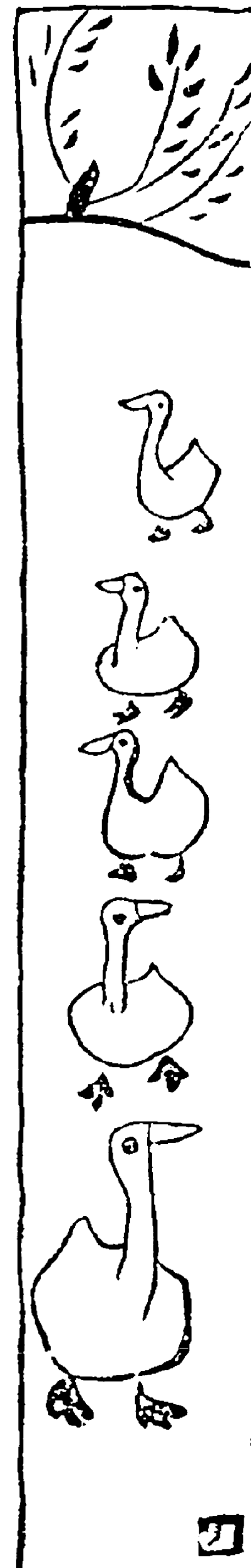
しめやかに春雨の降る日、私は机によつたまゝ身動きもしないでじつとしてゐる、何を考へるのでもなく、たゞ障子を細く明けて、外を無意識に眺めてゐるばかりだ。

細い／＼銀絲のやうな雨にぬれたや、固い椿の葉は、一しほ美しくなつかしい感がする、ポタリ／＼と、葉末から落ちる透明な美しい滴……。私はたまらなくこれがすきなのでいつもあかずに眺める。「水晶のやうに美しいこの滴いつまでもこのまゝにしておいたらどんなにいゝでせう。」と仰つた百合樣……色の白い百合樣の唇は、いつも眞紅の椿の花のやうに美しかつた。幼き時はもゆるやうに赤いこの花が一等すきで、朝早く起きて澤山おちてゐる大きな花を赤い絲で丁寧にさして、首からかけて喜んだのを夢よりも淡く記憶してゐる。

お隣からは床しい琴の音が聞え出した。あれほどすきであつた小督の曲も、二三日は何故かひく氣にもなれない。

初作とは初めて投書する文章を云つたので、試みに作つてみた方は盛んに投書をなさい―選者―

読友くらぶ



○交際

京橋區新宮町二丁目二、高橋德太郎方　木村智惠子

▲一●時●的●は●斷●は●る　讀者の御方様妾は古郷遠くはなれ語らふ友もなく淋しく暮し居るものよ不束者なれど憐れと御思召し末ながく玉章や繪葉書の御交換を望むことよ一時的の御方様はかたく御斷りよ

○朝鮮木浦、谷村様内　島岡みつ子

▲朝●鮮●よ●り●　私は二月から女子文壇の愛讀者となりました皆々様どうぞよろしく御交情をねがひます又御手紙の御交換おたのみ申します

○能登輪島町字風至新町　西緻冶たけ

▲能●登●の●一●隅●よ●り●　親愛なる諸姉様方へ御願ひ申ます妾は能登の果に住む不束な田舎娘ですが何卒親しき御交を御願ひ致します御玉章や繪葉書などを下さいね、もとく〳〵習はぬ筆の悲しさ見苦しう御座いますが乾度御返事は致しますよ妾は姉妹もなく一人法師ですが御情深き御姉様方に永久に御見捨なき御交際を御願ひ致ます

○小樽稻穂町商業學校内　服部嘉鶴子

▲北●見●よ●り●　皆様私は北見國野付牛から當所へ轉宅致しましたどうぞレター御めぐみ下さいませ小樽の愛讀者の皆々様少し御遊びにネ

○兵庫郡伊丹町常盤町神樂岡方　小笠原𦾔子

▲櫻●は●咲●い●て●　世は春とはなりましたが妾寂しいですわ、だつて誰も慰めて下さる方が無いのですもの。只繪葉書の交換が何よりの樂なのよ、それで姉様どうぞこの田舎の少女をあはれんでお情深い御玉章やお寫眞をおめぐみ下さいナ乾度お返事はしてヨ

○大阪市南區鐵谷東ノ丁一八七　鏹山芳子

▲お●寫●眞●　誌友の諸嬢様よ私は永久に誌友の御寫眞を紀念といたしたいのですから何卒どしどし御送附下され妾もみにくいですが多くありますからきつと返礼いたします但し先着二十名限り御好みの品差上ますよ

○北海道後志國磯谷郡昆布町　飛田ふさ子

▲お●な●つ●か●し●き●　本誌諸孝諸嬢よ妾も今度本誌の愛讀者となりましたどうぞ末永くお交り下さいな尙繪ハガキの御交換をのぞみます

○姫路市西二階町土井方　須藤滋子

▲母●一●人●　私は以前から文壇を愛讀しますものですが母一人より便りにするものゝない哀れなもので淋しく暮して居りますから御手紙の御交際や繪葉書の御交換を御願ひ申ます

○男子の方にても厭ひません
栃木縣田沼町下野ヴヰナス
會々員
梅溪　津久井濱子
蘭溪　石川雪子
玉葉　鏹山鶴子
靑蘋　奥澤潤蕊子

▲美●し●い●ま●ど●ゐ●　私達二十餘名の同族並に學友などで樂しい美しいまどゐをつくつて居りま

す。何卒高尚な潔白な御交際を望みます

○ 茨城縣水戸局區内常盤村石川、淺川樣方御内　古田土　靜江子

▲玉章　皆樣妾も今度根崎久子さまの御勸めにより二月號からの讀者となりました妾は毎日久子樣と裁縫學校に通學してをりますのよ玉章や繪はがき古雜誌交換して下さい男子は堅く御斷り致します

○ 新潟縣中蒲原郡早通村字下早通　遊谷すい

▲情に富める　諸姉樣方よ、私を妹と思召御見捨なう御交際を願ひます何卒御玉章を御送り下されませ、この度先着五名へおはづかしながら私、寶の寫眞に返事を添へて早速送りますから懐しの姉上樣方よどうぞよろしく

○ 敦賀町昭區　橋詰春子

▲誌友の皆樣　私事ロ本誌愛讀者の一人で御座ひます以後御交際を御願ひ申ます

○ 淺草區壽町三〇渡邊保太郎方　櫻井八重子

▲誌友の諸姉樣　不束な者なれど永へに御交り下いませ御玉章や繪葉書の御交換を特に願ってよ

○ 秋田縣河邊郡新屋町、藤屋繪葉店内　藤屋文子

▲記者樣　妾今年一月より女子文壇愛讀者の一人となりましたが誌上の皆樣と御交際いたしたう御座います故何卒誌上にて皆樣に御紹介して下さいましかならず繪葉書で御返事差上升

○ 長野縣上伊那郡南向村、殿垣外内　細田草路

▲畫筆にて　野には花笑み山には鳥歌ふ長閑な春となりました。スケッチ帖を秋にして郊外の散歩はどのやうに樂しい事でございませう。私は淋しい片田舍に居て夢路さんの繪に憧憬れて居るものであります。同好の方はどうぞ草畫の繪はがき御送り下さい私もきつと下手ですけれど描いて御送り致します

○ 京都市麩屋町六角上ル、細田誠方　富貴子

▲春來れり　このスヰートな春に人々は嬉々として遊び廻れる今日此頃記者樣初め諸姉樣にはいかゞ、私は此樂しき青春時代をさびしく送りつゝ有ります何卒皆々樣御暇にはレター下さいましね

○ 熊本縣八代郡八代町大串方　よし子

▲十六歳　御なつかしい文壇の姉樣方よ私今年取って十六歳のわからずやですのそしてはじめて投書し樣と思ひ立ちました文壇の愛讀者と成ったのも此の頃からですよどうか御情ぶかい姉樣方以來親しく御みちびき下さいましな、そして永久的にレターの交換御願ひいたしますわ

○ 三重縣一志郡久居町本町二丁目家田旅館内　若林政子

▲移轉　私今度都合で右の處へ轉宿しましたの相變らずお願ひしますわ

○ 仙臺市勾當臺通六番地　後藤春子

▲誠に　御無沙汰いたしました

○ 東京淺草區神吉町三八、矢島くら方　露の玉女

▲淺草より　私は一昨年の冬から愛讀者となつたのですけれど、御交際をお願ひいたすのは、此度が始めてです。愛讀者諸姉樣よ、不束者ながら以後久しく御交際を願ひます。尙は御玉章の御交換をも……

○ 群馬縣多野川郡鬼石町五一〇　小鳥詩社

▲小鳥　私たちは三人よつて「小鳥」と云ふ可愛らしい文藝雜誌を發してをります、皆さまの中に眞面目に文藝を研究しようと思ふ御方は送料と原稿——詩歌句なんでも——を添へて申込なさい、毎月無代で進呈致します、小鳥は十八頁の小雜誌です

○ 山口縣豐浦郡粟野村西之井區　末富豐子

▲誌友の諸姉樣よ　妾は昨年小學校を卒業した計りの不束な者でありますが。唯文壇を友として草深き田舍にあはれな月日を送つて居ります十五、六歳の人と御寫眞や玉章の御交換を願ひます。

○ 名古屋市針屋町、小川寫眞館にて　小川悅子

▲小さい私　寂しき姉上樣方よ小さい私をどうぞお仲間入させて下さいな姉樣方と仲よくしていたゞこうと思ひます

○

京都麩屋町六角上ル
經田誠内　野　菊

▲東都の方に　誌友の姉上樣方お玉章有難う御禮申し上ます何卒此後とも以前にかはらぬ御交際をね東都の御方に特にお願ひ致しますそれから先月私の許へ東京にて蔦の葉として或物をお送り下さいましたのはどなたですか御本名をお明し下さいましお願ひ致します

○

福井明星

▲寫眞　記者樣御手數で御座いませうが一寸御尋ね申し上げます私此年三月に卒業生五六名の女子及び同職員と記念のためうつしました寫眞が御座います一枚しか御座いませんで一度は御送附申しますが後からお返し下さる事はできませんでせうか御伺ひ申します（寫眞版にこしらへました上は、必ずお返し申しますから、急いでお送り下さい、記者）

個人消息

○

浦賀町　鈴木かね子

▲宮田はつね樣島てい子樣北川和子樣仲谷利子樣美しきレター嬉しく拜見致しました御返事を上げねばならぬのですが「わけ」有りて誌上にて御禮申上候

○

雪香

▲和歌山市の都田樣字田樣おなつかしうございます、毎々誌上で御名を拜見してをります、共に同校生です此頃出谷樣おみえなさらないのね、私誰だか御存じでせうが末長くおふるひなさいませかけながらいのりますそれからあちさい樣夕浪樣益々御發展なされたくあちさい樣は野上の方の御方の由私の從姉も野上の者故本名お聞せ下されば知る仲で有らうと思ひます左様ならお知らせ下さいまし

○

麴町區内幸町衆議院倶樂部
東京亭　佐々木春子

▲前橋のみつ枝樣　是非々々御住所御知らせ下さい

○

石川縣能美郡小松町字東町
和泉時子

▲大浪せい子樣北豐島のおすまおなつかしうございます私は北豐島がなつかしうてなりませんレターお惠み下さいませ御返事はかならずいたします

○

千葉縣千葉町本町二丁目
菅野夕波

▲青森の稻花樣、……先日は私の好きな、花の繪葉書御送り下さいまして誠に有難う御座いました、どうして御所を記して下さらなかつたの、私殘念でくくならなかつたわ、次號にはきつと記して頂戴な
猶は特に福島市の御方と御交際を願ひます

○

上毛　渡邊きみ子

▲栃木の根岸はる子さん　御手紙ありがたう失禮ですがあなたはもし異性ではありませんか……たと大變故直接の交際はね……あしからず

○

東京　秋江

▲姫路の赤堀磯菜樣　度々御手紙を差上ますが何とも御返事が御座いませんいつぞやお知らせ下さいました所に御出でなくば何卒現住所をお知らせ下さいまし

○

滋賀縣甲賀郡水口町作坂町
堤あい子

▲大槻よしゑ樣　四月號の當欄にお出しなさいました京都の大槻よしえ樣に御伺ひ申ます貴女のお父樣は茂雄樣とおつしやつて先年當地の税務署におつとめ遊ばした方ではございませんでせうか。もしそうでしたらよしちやんといつて私と同年位の仲よしの環ちやんが入らしつたのです、なつかしい思出と共にいつもく胸に浮びますのは無心に御別した友の上にございますおなつかしさのあまり御尋ね申ます、もしちがつてましたら御許し下さいまし幸にして君ならばどんなに嬉しいでせう下名まで御返事を

○

東京赤坂青山南町五丁目四十八番地、山本方　知代

▲西村千枝子樣は　以前京都府新鮮鶴六條通り大門南川島方に御滯在中の西村千枝子樣只今は鳥取市何町に御出なさいます、度々手紙を出しましたが御手にはいりましたか私は都にをります。大切な娘時代を長々有がたう義妹より美波樣にさし上る繪も出來上りまして、私の手許へ届きました。どうぞ一日も早く御便りを下さいませ皆樣の中に御存じの御方は御知せ下さい相當の御禮を差上ます

○

大分縣玖珠郡野上村
佐藤つゆ草

▲本所のかすみ樣。貴女はもしや吉岡町の森本かすみ姉樣ではありませんか、私末でございますの。間違つたら御免遊ばしてネあたりました

らお便り頂戴

繪葉書

○三重縣桑名殿町　安井文

▲桑名より　誌友のお姉上諸君よどうか各地の名所繪葉書御送り被下度御禮には當桑名名所其他お望みの品にて御禮致します

○千葉縣君津郡湊町　今井千代子

▲妾は先月より　讀者となりましたから何分御交りを願ひます。尚私は非常に繪葉書が好きでありますからどうぞ繪葉書の御交換を願ふ

○滋賀縣滋賀郡膳所町大字中ノ庄町、堀月岩吉方　行枝子

▲近江國より　おなつかしき諸姉君樣方にお願ひ申ます 妾は只淋しき湖水の畔に暮す身なればいと不束者で御座いますけれ共永きレターや繪葉書の御交際をお願ひ申ます

○在東京　天之川

▲大和より　理化學の教師の試驗御受けになる御方及誌友の諸嬢寫眞，繪端書等の交換を願ふ次に淡路の清木樣其後は如何に過して居られますか妾は今休みで大阪に居るのです 誌上迄御住所を御知らせ下さい

○東京府下大森町南原三五一　雄野翠

▲風俗　本誌愛讀の皆樣全國風俗ゑはがきの御交換を願ひます 又御寫眞を御惠み下された方には文藝書籍，雜誌で御返禮致します、ゑはがきはなる可く和歌か俳句を一句づゝ御書き下さいねえ

○北海道後志國昆布局配達區内宮川温泉内　山田いし子

▲未使用繪葉書雜誌小說の御交換を願ひます 私の處に女子文壇第二巻より今月迄の全部ありますから、お望みの方は繪葉書ハンカチーフ等と御交換下さい尚誌友の皆樣の中にてヴァイオリン御不用の方は御ゆづり下さい 繪葉書も外國製のが二百枚程兄から送つて參りましてありますから何卒御交換下さい

○備前長岡局區内富山村岡山　小川方　花子

▲繪はがき狂　諸姉上樣よ私は繪葉書狂なのですよドーゾ御交換を願ひます 又地方新聞の御交換をもね

○東京市日本橋區本石町一ノ八　寺田方　駒形愛子

▲同情厚き姉上樣方　妾は故里遠く此地に遊學して學庭にいそーむ便り少なき者故憐れなる妹と御思召して末長く繪端書玉章の交換を願ひます必ずく御返事を致します

書籍交換

○東京　夕はし

▲皆樣のうちでどなたか「曇日」といふ歌集（長司春湖氏著）お持ちの方がおらつしやいましたらどうぞおゆづり下さいませんか、もしもつておらつしやいます方がおありでしたらどうぞ誌上までお所と御一所にお知らせ下さいまし

○能登國鹿島郡鹿島路　北野恒子

▲皆さんの內で「寄生木」不用の方あらば相當の代價で御讓り下さいませんか私の元には別に何のよき雜誌もありません只だ俳句の資料一冊あるのみ

○宇都宮市伊賀町寺田方　橋本はな

▲どなた樣か若しも「婦人ノート」か「娘時代」かをお持ちなれば二週間程拜借いたしたう御座いますがいかゞでせうか……一寸はがきなりでお知らせ下さいませ

○京都府下伏見稻荷神社境內　竹村楨子

▲誌友のおなつかしき皆樣、どなたか四十四年の十月號……女子文壇……を御讀み濟みになつて御不用でしたら、何卒々々、私へおめぐみ下さいませんか、四十二年の三月號及び四十三年の八月號(いづれも女子文壇)が、私の手元に不用になつて居りますからもし御入用でしたらそれと御交換下さいますれば尙結構でございます、もし十月號をおめぐみ下さるだけでしたら相當の御禮を致します

○石川縣江沼郡小鹽村　三浦松江

▲誌友の皆樣の內に乙女の秘密日記，乳姉妹、金色夜叉何れか御所有の方はおゆづり下さいまし御禮は必ず致します

○下谷區仲徒町二丁目二十七　小鼎方　山田露子

△讀みたい書物（詩姫。肉彈。夢二畫集春の巻●本誌一月號）
▲持ってる書物（相聞。春泥集。さは姫。紅歌集。あけぼの。さくら月。千山萬水。小女の織等）で御交換下さいましな二冊以上御交換下さる御方には妾の寫眞を添へて差上ます

○　奈良縣山邊郡二階堂村備前
上田都子

△讀みたい書物――永井荷風氏の、荷風集、すみだ川、冷笑、追憶小品、紅茶の後、地獄の花、夢の女、アメリカ物語、夜の心、歡樂、スキートホーム（内藤千代子）コブシ（小杉天外）落恨（永井荷風）家なき兒（佛里マロー氏）草あやめ（後藤宙外）別れ路（一葉）其面影（二葉亭）
▲不用のもの。終篇金色夜叉、二十八人集、藤村詩集、論文大觀、新體詩作法、（泡鳴）まめたる歌（金子薫園）外國文學研究法（生田長江）美文作法（花袋）小說作法（花袋）審美要義（文學同志會）野菊（大和田建樹）、星湖集、花紅葉、自然と人生、黄菊白菊、叙情小品、新譯ルビニクニ、西鶴五人女、新婚旅行、（八名家の作集）黒潮、（蘆花）和歌作法（羽衣）世界文豪の片影、小品文範、（松原至文）俳句作法（内藤鳴雪）臨淫文學、西鶴オキミヤゲ、記事文範、美的書翰文等、以上御交換又は御讓り下さいませ

○　岡山縣赤磐郡五城村
新庄

△雪月花書簡、生花早稽古、諸流生花指南、英語のいろは、若き女の手紙、女子消息文のゆきかひ高等天文問答、幾何學問答、微分分積學、誌友の皆々樣御不用なれば御交換下さいまし又交換に及びませねば御讓り下さい

○　周防佐波郡和田村米光
財間濃生子

▲「若き女の手紙」「黒潮」「それから」御入用のお方にお讓りします「女子書簡文」（何様の著にても）御持ち合せのお方は下名まで御知らせ下さい

○　大阪府下泉南郡熊取村七山
本多方　井上ゆり子

△皆様の内に藤村操の煩悶記、夢二畫集、乙女の秘密日記一葉全集等の不用の方がありましたら私の持つてゐる本と御交換願ひます

○　栃木縣足利郡足利町緑町四
一二、近藤賓次方　浦路

△皆様のうちに晶子歌集（あまりよごれてないの）女學講義録の御不用の方がありましたら御ゆづり下さいませんか（歌集）（二冊以上）（講義録全部）御送り下すつた方には御禮として反物差上たく思ひます故御年をおしらせ下さい

○　金澤市上新町九島崎方
大櫛梨花

▲萩の舎集一葉全集、紅葉、浪六の小說等お送り下さいました方に流行の頭飾品を以てお禮申上ます、但し品數に限りがありますから先着二十名の外はお氣の毒ですが其御本を其まゝお返しいたすつもりですから……

○　金澤市上新町二五
加藤はや子

▲所有の書　動物教本、グロープリーダ、東洋史、西洋史、新教育學、化學書、外國地理、同附圖、算術手引草、創世記其他雜誌
▲望みの書　萩の舎集、一葉集、紅葉集、青蘆集其他小說、稽古文藝倶樂部
但二冊以上御送り下されし先着の方にお望みの書の外に束髪用品添へお返し申すべく候

○　府下大森山王
牛園貞子

△本誌六年六號及び増刊娘時代、若き婦人、今の婦人、新文章御持合せの方は御一報下され度し繪葉書にてお禮致します

○　廣島市荒神町一五三
伊東はな子

△昨年七月號の女子文壇（但定期號）御不用の方は本年三月の武俠世界と御交換下さいませ尚一葉全集お持ちの方はお貸し下さい御禮は廣島宮島のゑはがきにて致します前以て御一報なし下さいませ

○　名古屋市中區南桑名町二丁目
鈴木こま子

△皆様のうちに冒險世界昨年四月定期増刊學生評判記とか學校評判記とかいふのを御持ちの方はありませんか御不用の方はどうぞ御ゆづり下さるか他の雜誌と御交換下さいまし

○　山口縣萩裡
宮原よし子

△寄生木、金色夜叉、藤村詩集、この内何れにても御持ちの方は十日ばかり拜貸して下さいませんか御禮として女學世界の古いの「四十二三年頃」のと繪葉書とを必らず差上げます

▲臼杵誌友會　豐後臼杵の誌友吉田夕草子の熱心な發企で二月十三日に臨時誌友會が開かれました、記事は次號に發表す

新刊

○作文講話及文範

芳賀博士　杉谷代水合著

作文の書物は詳しければ、詳しいほど爲になるもので、本書は上巻六百頁下巻八百頁と云ふ大冊だから、此さへ備へて置けば片々たる講義體のものや、文範類や、文法書は一切無くても用は足りる、單に完全したと云ふ許りでなく、講話の方法にも、文範の集め方にも、時代に後れないやう深き用意を持つてゐる、日本と、西洋と支那との作文法の好い處を參酌しそれに著者の創意を加へ、獨立した態度で一意親切に作文の方法を說いてゐる、一見舊式の作文書に似て、熟く讀むと非常に新しい發見がある。下巻の文範の方でも然うだ、敍事抒情や論文は勿論、新聞の雜報や廣告文まで、苟くも文章として參考になるものは、悉く或る分類の下に集めてある。著者の勞力は大したものだ。これからの世の中は文章を作ることを以て直ちに文學的事業のやうに思つては居られない。世間に働かうとするものは男女士農工商の別なく、誰でも彼でも、少しの文章位は解することも出來、書くことも出來なければ世の中に立てない、本書編著の主意が餘程此意味から來てゐるのは、吾人も大に讚美を惜まない所以である、作文の書物と汽車の時間表は舊いものでは役に立たぬ、何うしても新しく出版された者に就いて、新代の智識に後れないやうにせねばなるまい。（定價金二冊三圓、神田冨山房發兌）

○朝霧

太田三郎著

繪の方から云へば浮世繪は最も民衆の眼を娛ますに足るべく、歌の方から云へば數百年不文の生命となつて滅びない俗謠は無名の群衆が作り出したものである。此處に其繪と其歌を合せ、相通ふ心持を現代の新しい人にも感ぜしめようと企てたのは本書であらう。思ひつきは至極好い活字を使はぬこと、色彩を鮮明にしたること、製本を純日本式にしたること、凡ての用意にも申分はない、明治の珍本として殘るべきものであらう、只吾人の慾を云はゞ、俗謠と、繪畫との間の聯想が屢々平坂無味に了り、說明に了り、繪と歌とから受ける感動力が離れ〳〵にならうとすることである、此は無理な注文かも知れぬが否意を得たる珍書の出版を推奬するの餘り、聊か否意の存する處も云ひたくなつたのに過ぎない。上下二巻特製函入（定價金一圓、博文館發兌）

○最新日本少女寶典

小波　笠峰共編

解り易い口語體の文で、少女に必須な各種の學科、技藝、娛樂等に關する百般の事項が、手を取つて導くやうに、委しく親切に書き集めてあるこれだけの事を皆覺え込んだら、學校に於ても世間に於ても、決してヒケを取ることはあるまい。體裁の高尙な綺麗な本だから、裝飾品としても少女達への進物としても適當である。（特價金壹圓貳拾錢、東京神田區南乗物町七誠文館發兌）

○櫻咲く國

紅桃の巻

夢二君の得意の日と題した木版彩畫は、崖の端に泣いてる女も、布を織つてる女も、一本の草花も、皆淋しい悲しい物を言つてるやうで、脫しようとして脫しられない人間の感情が迫つて居る、技巧としては五色の布が眼につきすぎる讀物では恩地君の詩、若々しく、且しつかりしてゐる（定價金二十五錢、洛陽堂發兌）

○日本艶女傳

兒玉花外著

此書の性質は艶と云ふ一字が能く說明してゐる女と生れて艶を缺いてゐるやうな女は、詩人の筆を以て傳するの要を見ない、幸なるかな、我邦には上古より明治の今日に到るまで、艶な女は決して少くない、此書には殆んど百人近くの艶な女を網羅し「花は牡丹、女は艶なるを絕愛して此書を作る」と作者自ら聲言して、一種の散文詩的技巧を自由に演縱して其逸傳を綴り出してゐる、近來快心の著（定價金四十錢、本郷龍岡町淡精堂發兌）

○新譯伊勢物語

太田水穗著

センチメンタルな即興詩人在原業平のアトモスヒアを書いた有名な、伊勢物語を新しい現代の眼で觀て美しく譯してある、殊に巻末には原文が添へてあるから、つまらない解釋本より、どんなに活きた手引になるか知れない。（定價金五十五錢、東京小石川區竹早町七博信堂發行）

○物言はぬ顔

小川未明著

春陽堂の現代文藝叢書の第十編である、同叢書は讀書界一般の需めに適し、毎編版を重ぬること多く、新編出づる毎に喝采を以て迎へられてゐる（定價金二十五錢、日本橋通春陽堂發兌）

雜報

△今年の櫻は例年より、しんぼう強く咲いてゐるやうに思はれた、年によると咲いたかと思ふと散ることもあるが、今年は雨も降り、風も吹いたが、それでも散るのが遲かつた。

△荒川の櫻は年々見に行く人が多くなる、今年などは向島と變るところがない、騷がしさは寧ろ向島以上かも知れぬ。

△杉浦非水氏は自分の書いた表紙畫の展覽會を日比谷公園圖書館で開いた、尙今表紙畫の圖案では氏は確に一家を成してゐる。

△若山牧水氏等青年歌人の一派は『自然』と云ふ文學雜誌を出すさうだ。

△四萬五千噸の大汽船が氷山の爲に破壞沈沒して英國で有名な『評論の評論』主筆ステツド氏も溺死したらしい、外に乘客千餘名死亡した。

△東京に於ける東西兩本願寺の大遠忌は近國近在より多數の參詣者が集つて來た。

△此頃生活難の聲が高い、問題は偶然に起つたが、此問題は決して偶然でない、日本のみならず世界の大問題である、從いて婦人諸君にも少からぬ影響を持つてゐる、若き婦人達にも必ずしもよそごとではない。

△衣服の流行色は一二年來東京では薄色より濃色に傾いて來たが、本年は殊に著しく其傾向が見えて來た、黒ではないが、鼠でも、藍でも、紺でも、凡て濃いのを用ゐるやうになつて來た。

△文壇の思潮は行きつまつた形になつたまゝ現狀維持、少しも動搖がない。

特別懸賞原稿大募集

▲記者の求める第一の原稿は**僞らざる自己の告白**です、今まに此種の原稿を集めて居りますが、何うも噓が多くていけません、例のやう創作なら創作として、別に其方へお出しになればよろしいので、わざと僞つた告白をする必要がありません、誠實の聲！、心内の叫び！、人に訴へんとして訴へることの出來ぬ眞實の聲をお書きなさいそして今一つ次に求めるのは**無邪氣な生活の描寫**です、皆さんの生活が悉く暗黑で、不透明で、矛盾で、苦痛だとは信じることが出來ません。娘時代の無邪氣な生活、花やかな生活、苦痛や煩悶に到着せぬ生活を、有りのまゝに描寫した好い文章がほしいものです。

原稿は凡て二百行以內、一行二十四字詰、ふりがなつき、特別原稿と書くこと

▲懸賞　一等金十圓、二等金七圓、三等金五圓、四等金二圓、五等金壹圓

一等に限り正金呈上

◎番附　何の番附にてもよろし、森羅萬象世間のありとあらゆる何事の見立番附にてもよろし、一等金五圓、二等以下面白く出來たものには幾人にても贈賞す。

◎無名婦人傳　近くは祖母、母、姉、妹乃至女中などより、友人、知人、或は故人ゝとなつた人でも、世間普通の婦人の一生の略傳です、人として生きてゐる以上傳記のないものはありません、無名の婦人の傳記、却つて有名の婦人の傳記よりも、興味と教訓を得ることがあらうと思ひます。

▲一等金七圓　二等　三圓　三等　一圓（原稿は二十四字詰、ふりがなつきのこと、文章の長短は隨意とす）

◉原稿締切五月二十日

五月

むかし、花鎭祭と云ふ祭があつた、花を鎭める祭でせう、四月は何の花も彼の花も一時に咲き出て天地も花に浮かれてゐるかの觀がある。併し瞬く間に花は地に落ちて、山川草木あを〳〵と緑の一色にかはる五月の空となるのです。此時浮かれてゐた花の魂をしづめるお祭などは至極おもしろいことですが、今はそんな祭の名も聞かないやうです、それは兎に角五月と云ふ月は袷に着かへる月で、そゝられるやうな春の心持も去り、心も身も輕くなつたやうに何となく活動の夏を迎へる氣がします。重い帶を輕くし襲ねた着物を減らし、女の姿までがすらりとしてすゞしやかに見えます。氣の早い氷屋は店を張り、苗賣の聲、すだれ賣の聲、金魚賣の聲、かうもりがさはりかへの聲、巷の聲も俄に夏らしくなつて、朝は十一時頃の日光に開け放つた室内も緑の光線に輝き、三時頃の午下りの太陽に睡眠を催します。雨の日は雨の日で若葉の色の美くしさ、自然ほど活動的なものはないとしみじみ感じます。

日曜　五日　十二日　十九日　二十六日

▲注意　本誌は本年度より從來の増刊を廢し、年四回（一月、四月、七月、十月）定期號を特別三百頁の大冊として發行することになりました、なほ左の定價表を詳しく御覽下さい

○本誌投稿及び懸賞規定

▲投稿は凡て女子に限る▲原稿には必ず『女子文壇投稿』の文字を書き添へること▲原稿は凡て女子文壇社宛（未納税は斷じて受付ず）に送ること、▲小説と詩は振假名をつけること▲小説は二十四字詰八十行以内、散文は三十行乃至五十行、初作は三十行以内▲各種類毎に一人一篇限りとす、和歌、俳句も一人一章限りとす、▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、半紙、原稿紙、罫紙に限る▲別に本欄の原稿を認る長さは二十四字詰二百行内外とし總振假名をつけること▲圖畫は毛筆畫にて薄き日本紙に認め大さは二寸に三寸一人一枚限。

◉投稿は毎月十五日到着を以て嚴に締切る

▲小説と散文は　▲天賞金參圓、地賞金壹圓五拾錢、人賞金七拾錢を呈す▲『詩』は天賞金貳圓地賞金七拾錢、人賞金四拾錢▲『和歌』『俳句』『圖畫』『初作』は、天賞金壹圓、地賞金五拾錢、人賞金參拾錢を呈す▲『本欄』は金五圓以下壹圓以上正金にて呈す（但し短きものは此限にあらず）▲賞品發送は作物發表の翌月以後とす定額金壹圓以上の創作當選者には價格相當の物品を贈呈し金壹圓以下は圖書切符にて贈呈す

女子文壇 定價 毎月一日發行

四十五年一月より左の通り改定す

◉特別號一冊金參拾錢　送料貳錢五厘
◉普通號一冊金拾五錢　送料壹錢五厘
◉半年分（特別二冊 普通四冊）前金壹圓九錢　送料拾壹錢
◉壹年分（特別四冊 普通八冊）前金貳圓八錢　送料貳拾貳錢

特別號は一月、四月、七月、十月號なり、其他の月は皆普通號です。
▲從前の定期増刊は無くなりました。

申込注意

注文は總て前金のこと、振替貯金にて拂込の時は必ず雜誌代金の外に登記料金壹錢増しのこと、郵便爲替は中橋和泉町局宛のこと。郵券代用は必ず壹割増のこと最寄書店にて品切の時は直接發行元へ御注文を乞ふ

▼廣告掲載料　申込期限 發行前月十五日

壹等割引　一頁貳拾五圓
貳等割引　一頁貳拾圓
參等割引　一頁拾五圓
半頁拾圓（半頁廿四字三十二行）
一行四拾錢（一行五號活字二十四字詰）

取扱所　博報堂。電報通信社。文明廣告社。弘報堂　其他いづれの取次店にても取扱申候

明治四十五年四月二十五日印刷納本
明治四十五年五月一日第八年第五號發行

不許複製

編輯兼發行人　野口竹次郎
印刷人　松本　　
印刷所　東京図文社

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　女子文壇社　電話京橋六〇七番　振替東京貳七貳九番

特約販賣　東京堂、北隆館、上田屋、至誠堂、東海堂、良明堂、大阪盛文館外